

蒔かぬ種は生えぬ

（出）高山市文化協会会長 小鳥 幸男

当協会が昭和四十四年第一回文芸祭を創設してより四十三年間、その対象を広く飛騨全域に拡大して「飛騨文芸祭」とした昭和五十二年より早や三十五年の月日を閲した。この間常にその成果を「飛騨文芸」の冊子に纏め、広く江湖の鑑賞に資し、文芸の普及に力めて来た。次第にその成果は表れ、この種市を区域とする文芸祭のレベルとしては極めて高いものを示し、見方によつては、県単位で主催される同種の内容より高い位置に在るかと思われた。

そんな経緯を踏まえての今年度の応募作品は突然変異的な内容の飛躍を見ることが出来た。その端的な表れが長編物の応募数の伸びが挙げられる。文芸を測るに必ずしも文字の量を以てする愚は、今さら謂うまでもないが、その質において優に各種文芸賞の境地に在るかと思われれる。

ここに特筆すべきは、高校生以下を対象とする「青竜賞」部門の充実は、将来の高山市の文化を支えて行くべき新しい力が芽生えたに外ならない。

当協会創立以来、常に心して来て、こつこつと蒔き続けた種が、ここに来て慈雨に遭った如く一面に湧き出でた。「蒔かぬ種は生えぬ」の謂を地で行ったことを喜び、更に大きく成長し、来年は更にすばらしい芽生えを期待する。

目次

現代詩	現代詩	小說	隨筆	戲曲	高山市教育委員長賞	俳句	評論	高山市議會議長賞	短歌	小說	高山市長賞	江夏美好賞	小說	現代詩	文芸祭賞
谷口茂雄	山附純一	野口喜代男	橋渡香織	大塚浩一		坂口佳代子	清水比斗詩		和田操	宮本清則		大埜間典子		後藤順	
……	……	……	……	……		……	……		……	……		……		……	
22	20	102	28	177		35	3		10	71		42		16	

現代詩	現代詩	現代詩	小說	青龍賞	俳句	俳句	俳句	短歌	短歌	短歌	青龍大賞	青龍大賞	青龍大賞	俳句	俳句	俳句	短歌	短歌	短歌
小島春菜	日下部友香	黒内香理	井戸千菜美		黒内香理	井戸千菜美	新井天音	錦野史織		熊崎菜穂				小島孝子	小林高子	上田真穂子	稲泉真紀	栃原よ志	田口千津子
……	……	……	……		……	……	……	……		……				……	……	……	……	……	……
27	25	24	170				142			122				6	5	4	13	12	11

第三十六回飛騨文芸祭作品募集要綱	選	俳	俳	俳	短	短
	後	句	句	句	歌	歌
	評					
					
	小	中	上	川	林
	瀬	林	垣	上	
	裕	静	佳	ま	良
	季	花	可	な	孝
	奈			み	
					
					
					
					
224	209	9	8	7	15	14

—— 表紙絵 大門孝藏 ——

高山市議会議長賞 俳句

高山市赤保木町

清水 佳代子

六月は酸性の嘘で固める

梅雨どきの父の猿股どこに干す

無邪気とは蜥蜴の尻尾のことをいふ

感性に筋肉つけたし昼寝する

丹田にちから入れすぎ夏負けす

そこそこの魔法かけられ水中花

こぜはしく蠅も乗り込む高山線

炎天の裏側にゐる狼藉者

飛驒八月ことに真中熱中症

台風の目の中にあて少し暇

高山市昭和町

上 田 眞穂子

夜濯の月に届きし水の音

露天湯に涼しき月を引き寄せり

一族の揃ひ墓参に通る雨

秋霖を耳に捉へつ寝落ちけり

亡き母と語り合ひたし秋桜

兔跳ねる帯を選みし初写真

日脚伸ぶを言ひて相席高山線

雪しんしん孫授りしこんな夜

梅白し啄む鳥も翔つ鳥も

法筵は大地震のこと椿落つ

高山市八軒町

小林高子

左義長の炎粉雪舞ひ上げぬ

誰も居ぬ雛の節句の灯かな

どの家にも春満月の雫かな

菜の花やゆるゆる鐘の渡りゆく

筆洗に残りしまゝの花の色

ヨーグルトの出来滑らかや夏に入る

草茂る中に黒猫潜みをり

旅の宿みな大盛りの夏料理

落葉して朴大木の静かなり

雪囲待つ間の木々の吐息かな

高山市三福寺町

小 泉 孝 子

筆あとの笑みて哀しき良寛忌

ふらここを力まかせに暮れ残る

茎立やいちねんせいを通る径

ひとつ鳴り絶ゆる電話や五月闇

濡れ縁の板目親しき遠郭公

曼珠沙華譲れぬことの揺らぐとき

抜き菜はや蕪のふくらみ持ちてをり

すぐり菜の白き根を切るひとつひとつ

雪を掃く箒目に陽の溜まりをり

みちのくへ寄する一心梅真白

青
竜
賞
俳句

飛騨神岡高等学校

上垣佳可

憂し放課揺る手の大き団扇かな

蝸牛うるはしの人参ります

あひなしに空中ブランコ扇風機

扇風機宇宙人の乗っており

でで虫やノスタルジアの夕間暮

飛騨神岡高等学校

中
林
静しずか
花か

太陽の雫受け止め夏蜜柑

背くらべゴールはまじか麦の秋

向日葵や芯に力を溜め込んで

片恋の線香花火のバトルかな

滝壺や森の命を注ぎ込み

青
竜
賞
俳句

高山西高等学校

小
瀬
裕
季
奈

うぐいすの鳴き声聞いてだんご食う

ゆきだるま短い命大切に

藤の花カエルが集う花の上

雷は寂しさ故に音を出す

戦場に蝶がはばたく春の空

高山市長賞短歌

高山市上川原町

和田操

病室の窓から見ゆる笠ヶ岳の冠雪告げるかつての山男父に

中尉として身に付きしもの染み込みて「気をつけ」と一言父は逝きたり

ドクターより父の終焉聞きをれば死といふものは何とあつけなし

初雪のころ白山神社の祭りころ秋餅のころ父は逝きたり

彼の国で読んでくださいと父の棺にそつと納むる歌集の校正刷りを

敵とした古武士のやうな父逝きて銀杏散り敷く散華のごとく

父の遺骨抱きて帰る村の道新しき校舎の槌音響く

山見ても酒瓶見ても椅子見ても思ひは何でも亡き父へ続く

ティンパニの重々として響くなか父を亡くしてレクイエム聴く

一瞬がこの一瞬がすでに過去砂時計の砂音もなく落つ

下呂市森

田口 千津子

瀬戸川は雨に濁りて鯉見えず三株のきぼうし見下ろして佇つ
奥飛驒の翁編みゆく藁細工節高き手は至福をまとう

機織を体験しつつ吾が手元にじんじん伝う亡母ははの面影

梭ひの糸をシャランシャランと右左箴おさトントンのリズム危うし

久々のグランドゴルフに歓喜する暮れ残る刻の吾の青春

二打に笑い六打に笑う各コースグランドゴルフは臘ろうの月夜

玉打ちていずこへ転ぶか緊張すほどよき位置に心地よき風

臘月グランドゴルフに戯れる老の吾等を和ませくれる

ガラガラとしじまを破る早朝は手押し車の媼おばあが通る

若き娘の車内販売笑顔あり無理言う客にさらりと応う

高山市清見町三日町

橋原 よ志丞

誰彼が臉に浮かぶ敗戦忌永らうる我忝けなきかな

国策に軍歌に心絆ほだされしわが若き日の疎うとましきかな

満州連れ少なくなりしと僧侶の君にこやかに我が畑訪たもい給う

ようやくに生え揃もいたる馬鈴薯をいとおしみつつ土寄せてやる

一振りの追肥のせいか馬鈴薯を掘れば大玉ゴロゴロと出る

薯の跡一畝一畝打ち起こす大気涼しく朝ははかどる

山の上に月影淡き日暮れ道おもむろに猛暑和らぎてゆく

早りに蒔まきし大根生え揃もい幼なき列が雨を浴びいる

病院の窓ゆ見守る夕つ陽がきらめきながら雲にかくるる

黒雲の緑金色に輝やけり見えざる夕日の余光に合掌

高山市大洞町

稲泉真紀

けざやかな帰化植物のにおい持つおとこに逢いし夜のしずけさ

ひとつ百合ひらく気配す しばらくは誰のものでもなきわたくしの肌

けものへん飼いならせずにカフェ・ラテの冷めゆくまでの塑像となりゆく

悪戯な雨はつづきていつまでもひとりよがりな部屋のシエスタ

消えそうな感情線をうつしこむ銀杏はあおくどこまでもあお

やさしさの抗体ならん標本をまもりし窓はなかせておこう

触角にふれたのでしょいかここからは裏側だけの花卉ほどける

正論に説きふせられていつまでも木馬のゆれる時間はつづく

ほら星が夜にのまれてあなたごと孕んでしまうきのうのしおさい

白夜ならこのままふたり淡色の静物画のごとねむる 朝まで

高山西高等学校

林
良
孝

庭の木に僕は昔に登ってたこの木も僕の家族なのかな

笑顔って明るくなれるものだから誰か笑えば誰かも笑う

父と母背中が丸くなったよねありがとうって言えない自分

今の僕正義が何か悩んでるいつになったら分かるのですか

先生は強い器を持っている苦痛に耐えて僕らをしかる

青
竜
賞
短歌

飛騨神岡高等学校

川 上 まなみ

カーテンのふくらむ夏の教室で恋の終わりを話してゐたり

純粹な心を持っていたいから黙ってかじる大根の白

君のため流れる星を見つけては祈ってます「勝ちますように」

太陽の光を浴びて夏の朝心配そうに覗く朝顔

椿咲く短い命美しい我が身のための花でなくとも

水仙は帰らない

岐阜市鏡島西

後 藤 順

過ぎ去る日々を

とても大切に神棚に祈った母が
置き去りにしたのは

ガラス窓から射した光に映えた
玄関先にあった水仙の匂い。

萎れた水仙を放り出した

花瓶は父が母に贈ったものだ。

「父さんはまだかい」

ぼつりと呟く声が十年も続く

父が逝った翌年に倒れた

母のカレンダーはそのままだ

訝しげにぼくを見る。

「今日こそ父さんが買ってくるよ」

水仙をねだる若い母がいる

六畳一間から始まった暮らし

一輪の水仙が彩った豊かさ

息子の名前すら忘れたのに

水仙の香りが脳裏の隅に

仄かに漂っているのか。

残業帰りの駅前

眼に止まった特売の水仙が

親孝行でもしろという

病室の父のうわ言が耳底に

純白の花びらが微かに揺れた

母のおぼつかない声が

幾度も匂いを嗅いだ。

「水仙が届いたのに」

父さんはまだ帰ってこんね」

母は家の中を探し回る

悪ふざけする父が隠れていると
押入れや仏壇の裏まで
歩き疲れた母の枕元に
薄明かりに忍ぶ水仙がいる。

「夜明けまでいてくれたよ」

夢の中で父に逢ったのだろうか
裏木戸に立つ母が

水仙をしっかりと握った手から
滴り落ちるのは

父を見送った潮っぼい水。

母と父との逢瀬をつくる

水仙が今日も窓辺で光を浴びる
命の輝きもいつか闇の中へ

母は父の名を呼び

水やりする

帰らない時を抱きすくめる

母の丸い背中から

水仙の新しい芽が始める。

いもうと

岐阜市鏡島西

後藤

順

とうちゃんは日雇いでたのか
かあちゃんは田んぼの草取りか
塩からい握りめしの昼食
二歳のいもうとを抱くぼくは
小便のにおいをかぐ

秋の夕暮れははやい
ものたちが明日の用意にいそしむ
まだ帰らぬ親をまつ
ぼくの横で眠るいもうとが
うすい影を残して消えた

朝もやがいきものの気配をけす
ひとが生きるためにつくった
ため池が悠然と水をはる
細い光にハヤがおどりする
ひとの眠りはいつから目覚めるのか

ぼくがいもうとを背におぶ
鼻水を首もとにたれても
子守唄を弱々しく歌っても
「にっちゃん にっちゃん」
ことばは温い

ため池に浮かぶいもうと
「およげ およげ」
ぼくが叫ぶほどに沈む
いっばいの水を飲みながら
未決囚のぼくが残る
ぼくがどれだけ死ねば
死ぬあとから

いもうとはついてくるのか

水鳥のように羽ばたけ

五十年はあっさり過ぎた

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

野鳥

高山市国府町

山 附 純 一

朝

巢立ちに失敗したのか

野鳥の雛が地面にいた

鳴くことも無く身じろぎもせずに

「可愛い」の声がして

人が近づき触ろうとしたが

雛は思いがけない頑強さを示し

人は悲鳴を上げ 去っていった

そこは 壁で囲まれた穴のような

無慈悲で無機質な人工の空間

隣接する緑の住処は

飛べない雛にとって遥か彼方

緑の楽園から地獄へ

雛は鳴くことも無く身じろぎもせずに居た

人の気配は無くなった

鳥の声が聞こえてきた

それに呼応して雛が鳴く

雛の前方の藪の上に親鳥が居た

親は鳴く

雛は応える

親鳥は地面に降り

ピョンピョンと跳ねながら

雛へと近づく

親鳥と雛は嘴を数回咬み合わせ

親はくるりと向きを変え進みだした

雛は後について行く

ヒョコヒョコと地面を蹴って

その先にあるのは
親が示した地獄からの脱出口
長く続く階段

階段の前で親鳥は藪の上に去り
雛は階段を上り始める
最初の一段目に挑む
未熟な羽根を激しく振りながら
雛にとっては遥かに見上げる
段差の垂直な壁を駆け上がる
一度 二度 三度と
失敗を繰り返して
ようやく 上りきる
そして 次の段に

親鳥は藪の上に居た

人の気配がした

親鳥は藪から飛び立ち

カラフルな羽根をいっぱい広げ

見るからに無理な飛び方でホバリングする
人はそれに目を留め
去っていった

昼

長く続く階段の半ばに雛は居た
階段の脇にある壁に
頭をもたれかけ 目を閉じ
うづくまり じっとしている
初夏の日差しが降り注ぐ
親鳥はその壁の上に居た

夕刻

階段に雛の姿は無かった
茂みの中に黄色い嘴が見えた
雛は嘴をきりりと閉じ 背を伸ばし
二本の足ですくと立っていた
雛は 緑の住処へ帰った

レンゲツツジとバチリン

高山市江名子町

谷 口 茂 雄

今年もレンゲツツジが満開になった

一人暮らしの隣のおばあちゃんがとても好きな花

「美しいねえ…」

まるで朱色の舞い。

なのに 昨夜の大雨

打たれて 落ちて 飛ばされて

朱色が泥まみれ

台風一過 青空がやけにまぶしい。

福島県の県花はツツジ科のネモトシヤクナゲ

厳寒の冬を生き抜いて咲く可憐な花と聞いた。

津波に呑み込まれてはいないか

放射能に苦しんではいけないか
余震に怯えてはいないか

「世のために役立つ人になれ。」とその教師は語り
続けた。

「今、オレは何を為すべきか」

惑いの淵から立ち上がり

「子らに明日への希望を…」と静かに語って
東北へと旅立って行った。

我が家のレンゲツツジは

七回忌を迎えた父の形見だ。

一人暮らしの隣のおばあちゃんがとても好きな花

横に大きなバチリンの木

枯れそうだが毎年赤紫色の実をつける。

今年はまだ芽吹いていないが

じっくりと生きる力をためているのだろうか。

退職四年目の春

少しぐらいは冒険できると思っていました私

あの大震災から体内に魔物が住みついた。

闇の中で自由を縛りつけ 私を問責する

「オマエハナニモノダ。ソコデナニヲシテイル。
コンナトキニ。」

あの雲は
どこまでゆくんやろ。

[CHALLENGE FOR TOMORROW]

元気を呼び覚ます魔法の呪文だよ。

レンゲツツジのように バチリンのように その

教師のように

新しい言葉を

心に届く言葉を紡げ。

魔物と障害物競走だ。

残されて咲くレンゲツツジの花がいくつか

柔らかく鮮やかな朱色がぼつぼつ

眼にしみる。

地面には朽ちた朱色。

隣のおばあちゃんが空を見上げて

ぼつりとつぶやく。

NOTHINGNESS

飛騨高山高等学校

黒　内　香　理

Can you hear me?

ねえ　名前を呼んで

どうして　私には聞こえない

ずっと思い描いた世界はもうここにはないの
自分で壊したキレイな水晶の化身

割れていくその音に聞き入ってしまうくらい
でもね、その音はあなたまで届かないのでしょ
う？

ニセモノで取り繕われた　仮初のこの部屋で
一体何が見えますか

それは私にも見えますか

誰かのために待ち続けていたつもりだったけれど
私の必要なモノのどのくらいが
同じように私を必要としてくれたの？

もっと　笑ってよ

どうして？　私にも聞こえない

私の名前を知っている人はいませんかでした

小さな光の集合も

箱庭の空

益田清風高等学校

日下部 友香

ここからは届かない
どこからも届かない
それでもと夢見た日は遠く
それゆえに夢見る君は近い

箱庭の空

開けた空と囲われた僕ら
自然な星と不自然な僕ら

囲われた狭い世界で

遠く 高く 広く 無限の

唯一の開けた場所

僕らがすべてを知ることのできない

箱庭の星

空は 星は 月は 太陽は

作られた狭い世界で

僕らの存在がどれほど小さいか

唯一の自然なもの

教え 導き 論し 理解させる

一億四千九百六十万キロ離れた

そこでやつと僕らは気づく

あの壮大な熱量の塊も

小さな僕らが

二十四時間後まで離れゆく

矮小な箱庭で

あの欠けゆく円形でも

果無い奇跡を

一万年先も離れる

偶然と 必然と 運命と 決断と

他でもない 自らの手で
たぐり寄せたことを

僕らがいること

僕がいて 君がいる

きつとこの奇跡に

二度目はない

だから 手を伸ばす

消さないため

失わないため

君はまだ

この手の届く距離に

青 竜 賞 現代詩

満月

益田清風高等学校

小 島 春 菜

真暗闇の中

白く輝く真丸の月

まるで自身が光っているかの様に

それはとても明るく

それはとても美しい

それはとても愛おしい

それはとても

それはとても

それはとても

それはとても

それはとても

それはとても

それはとても

東山魁夷の天生、

幽玄環境へのいざない

高山市石浦町

橘 渡 香 織

(一) 東へ西へ

六月五日深夜。東京八重洲口のハイウェイバス乗り場は、夜行便と中距離最終便の始発ラッシュアワー。ターミナル改修工事中の狭い連絡通路を、乗車待ちの人々が、騒然と往き来している。日中のそれぞれの活動を終えて、遅い夜の旅立ちである。どの顔も倦怠を表し、蛍光灯の陰影に硬く重たげに見えた。

全国各地へ、分刻みで発車する何台ものバスを見送った後、私は予約していた奈良行きに乗り込んだ。ダイヤどおり定刻に動き出した車両は、ほぼ満席。乗客はみな、着席と同時にあわただしく就寝の準備に取りかかる。私もリクライニングシートを倒し、備え付けの毛布をかぶった。

薄暗い車内、前日からの自分のアクセスが、頭の中をよぎる。閉じた臉の裏に地図を思い描き、あらためて軌跡を確かめた。昨夜のちょうど今時は、反対の車線を走るバスに乗り、名古屋から東京を目指していた。

所属する共生科学学会の横浜全国集會に参加するため、発表原

稿を携えての上京。共生科学とは、環境と人間との関わりを科学的に捉え、共存の理想を追求する分野である。

今年、正月早々のサブライズ。大学時代に師事をいただいた恩師から、学会発表の依頼があつた。数年来継続してきた研究をまとめ、自身の共生観念をより確立するためのチャンスである。期待に沿うべく受諾し臨んだ。

ただひとつの問題は、開催日が以前から計画していた奈良への旅とニアミスする。どちらも譲れず考えた末、両方を実現するために、過密なスケジュールとなつた。

二晩のうちに、飛騨から名古屋を経由し、東京を基点にまず横浜へ、次に奈良へ跳ぶ。

飛騨高山を出たのは、四日の最終便。午後七時に自宅を離れた。高速バス二路線と、JRを乗り継ぎ、横浜には翌朝八時到着。終日の学会で、研究論文を発表、加えてシンポジウム、参加者との懇親会と、充実した内容の濃い時を過ごした。その終了が夜八時。そして、ただ今零時を過ぎ、一路東名道を西にUターン。まさに、東奔西走の字の如し。

今回の横浜奈良二都訪問は、短期集中、経費削減、凝縮型旅行で、体力勝負。もともと旅好きな私にとっても、バス車中泊は、初めての体験である。持ち前のタフと楽観的なキャラクターで、実はこの多忙な状況を大いに堪能している。移動と宿泊が同時に叶う、合理的ツアー。揺れるバス泊も旅の趣のうち。

学会発表での手こたえもあり、心は充分充たされていた。シートに横たわり、単調なエンジン音を聞くうち、次第にうつらうつらとまどろんだ。睡魔がゆつくりやってきた。

六日朝七時、バスは、終点奈良駅前に到着。私は浅い眠りから覚め、車窓から外の景色を確かめた。駅ビルに「二〇一〇平城遷都千三百年」の大看板を見る。街は祝賀ムード。

朝日はさんさんと降り注ぎ、好天の様子。バスのステップを降り、あこがれの古都奈良に立つ。産まれて五十年、初めて訪れる地。メモリアルな一日が始まる。

(二) 天生（あもう）の仙人

飛騨河合天生。日本の背骨といわれる、剣山連なる飛騨山脈の北、山また山の奥深く。木の国飛騨、原生の森にある。一年の半分以上を、雪で閉ざされる寒冷の地。

そこには、今も仙人が住む。マイ・サンクチュアリー（聖地）を問われるなら、私は迷わず天生と答える。

速くにしえの時代の風を、肌で感じることでできる空間。私

が仙人と呼ぶ、土地の老人に会うことのできる場所。

仙人は、伝説の末裔。浅黒く日焼けしたその顔は柔和で、優しく弧を描く濃い眉の下にはいつも少年の輝く瞳がある。頬をやや赤く染めて語る飛騨ことばは、ゆつたりと謙虚で、しかし心に常にくっきりと響く。彼の山の話は、聞く人を癒す。

「むかしな。」仙人は天生の語り部。「娘が、谷川に映るまん丸お月様を、すくって飲んだんや。そんとき腹に、ぼぼ（赤ん坊）が授かった。」クロベエという山師の娘の話。

天生伝説は飛鳥の頃より語り継がれている。都からの使者と土地の娘との秘話。月を飲み宿ったとされる落とし児は、のちに飛騨の匠と高名の、都で功をなした止利（トリ）仏師。その生い立ちを伝承する民話である。

クロベエ（九郎兵衛）の名は、仙人の屋号として今に伝わる。

私が初めて天生を訪れたのは、三十数年前。若かりし当時、知り合ったばかりの夫が、高山から故郷の河合までドライブを、と私を誘った。田舎の道は、途中から集落を外れて、うねうねと細く山道となる。国道の証拠の青い三角標識を、疑いたくなるほどの難路。対向車があればすれ違いはおろか、片側は断崖絶壁。はるか眼下には、谷底から大木が鬱蒼と茂る。絶景と絶句。スリルは満点。

カーブミラーは、完全に進行の逆方向を写すバックミラーの状態。究極のヘアピンカーブと傾斜のきつい登り坂が続く。天生という名のとおり、天に昇るような道。遊園地のジェットコースター並みのデートを経験した。

到着した人影のない峠の頂上。麓の里よりずっと早い紅葉のモミジが、降りだした秋雨に寒そうに濡れていた。しばし車をわきに寄せる。ワイパーを止めた車のフロントガラス越しに景色を眺める。ホツと出た吐息は、手に汗握った緊張のドライブから開放された気の緩み。そして圧倒されるくらいに紅葉が、黄葉がもえている山の状況に改めて気付き、次にハッと息を呑む。言葉も失った。

天然キャンパス一面に壮大な芸術作品があった。錦織り成す木々の艶姿。激しくなった雨に光り煌き、広葉樹の極彩色と針葉樹の暗色が、ステンドグラスのように美しい。言語に尽くせない秋の衝撃。色彩のコントラストは、歌うように、踊るように誘惑に満ち、さらに迫るかのように耀きを放っていた。

「ここあたりは、戦後兵隊から帰った親父が、営林に入った山なんだ。」夫が呟いた何気ない言葉。心奪われた秋の風景とともに、不思議に今も記憶に残る。

結婚して、河合の郷に暮らした。都会から嫁いだ私は、田舎の生活に驚き戸惑うことが多かった。さまざまあつて、歳月が経過するうち、仙人を知る。

十年の後、家族の都合で、河合から高山に住まいを移した。天生からやや遠くはなったものの、その分恋しく思う気持ちは深まる。

日常に追われ、時にふと自分に癒しが必要と感じると、足は天生に向かう。自然の懐に自分を置くだけで、知らず知らず心が癒

やかになる。森にとっぷりと没かる。どんなに人が関わりようともがいても術なく、やがては太古からの自然の営みが優先し、あるがままの天然のサイクルを繰り返す場所。ちっばけな我と、偉大な母なる宇宙を感じる場所。

行めば、地球の胎内にやさしく包まれる。

予告なしにふいに私が天生を訪ねても、仙人はいつもそこにいる。まるで、私のバイオリズムと行動がすべて見透かされているかのように。山守として、待っていてくれる。

仙人の、峠から湿原への道先案内。腰に着けたナタが、鞘にかたかたと鳴る。その音は、山神様への、入山の許しを請うため。神様に失礼のないよう、侵入者の存在を示す音をさせて往くのだと。畏怖の念を表わす山師の掟。

谷川を渡る時は、必ず手前の岸で大きく咳払いを。もしかして、川で水浴びをしているかもしれない神様に合図する。山神様は女性だから、いきなり現れて驚かせてはいけない。

仙人はずっと以前、今は亡き私の舅と山で仕事をしたという。私はそこに嫁に入っただけの関係だが、悪意に思いこうして可愛がってくれる。山を行きながら、たくさんの語りを伝えてくれる。奥山に暮らす人々の、自然との素朴な付き合いがいかに素晴らしいのかを、飾らぬ言葉で教えてくれる。

湿原を眺める。物言わぬ山野草の、さえざる鳥の、ひそむ獣の気配を感じる。心の目を閉じて待つ。天生が語りかけるまで、何がしかの応えをくれるまで。時間の峠を外して。

ブナやカツラの古木のように、大地を踏み締め、両手を大きく広げて、高く空を仰ぐ。山の精と同化し、全身全霊に無償の賛美を受ける。自然と共に存在する価値を、五感であじわい、魂で感じ、身体で理解する。

産まれ森から出るとき、素になつてゐる自分に気付く。畏敬と感謝の衣だけをまとつて。

マジカルワンダーワールド。天生は、摩訶不思議な幻想世界。

仙人は、空気のようにずっと静かに傍に添い、私を見つめる。

(三) 山雲 (さんうん)

「この天生を、あの東山魁夷が描いとる。」あるとき、仙人の感嘆の言葉があつた。興味を覚えて、資料を集めた。

時をかけ調べるうち、魁夷の世界に、どんどん埋まつていく自分を感じた。魁夷は絵画とともに多くの随想を遺している。第二次大戦中には、高山市内に疎開をしていた。その後の、河合天生へのスケッチ旅行にも、飛騨との因縁を感じる。

青の巨匠と呼ばれる彼が、なぜ天生を描いたのか。天生の何をどう描いたのか。その心に触れたい、と思うようになった。

奈良唐招提寺、鑑真和上を祀る御影堂の障壁画のうち一題に天生が描かれている。美術図鑑を紐解く。ビデオやDVDの映像を追う。

「山雲」と題するその画。木々を現わす蒼と、山間を立ち昇る

霧の白の色彩。幻想的な森の世界が、そのまま襖に映し出されている。

しかし、映像や写真集ではなく、直にこの目で確かめたい。究めるにつれ、想いはつのるばかりであつた。

障壁画は年に一度の限られた、一般公開にしか拝めない。それは毎年、鑑真和上の命日と前後数日。

唐招提寺開山忌は記して六月六日。資料を探り、温めてきた私の夢の叶う日が来た。まさに本日、神祕のヴェールの向こうにあつた虚像を実感し、本物とする対面の時を迎える。

爽やかな夏の朝。唐招提寺南大門前。開門にはまだ一時間以上あるにもかかわらず、入場待ちの長蛇の行列。百人は居よう。その最後尾に附く。

今、いつもなら列に並ぶと感ずるあの焦りがない。心は沈着、自如平穩である。

深夜のバス旅行。周りの景色も確かめず、寝ている間に、ふりだしからいきなりゴールの奈良にやつて来た。私の心境は、いつものポジションになく、身体のうち離れた部分に存在する。テンプが状況と微妙にずれ、思考が少々特異な客観的マインド状態。晴れ上がった夏空からの、強いはずの陽射しも、あたりに漂うこの土地の霊的な雰囲気と和らぎ、快い。待つ時間が、苦にならない。

門前に掲げられた、古めかしい記念の幟がゆらゆらとそよぐの

を仰ぎ見る。向かいの土産ものの屋の、ガラス戸に貼られた品書きを読む。側溝に吠く黄鶯浦に眺め入る。とんとん後ろに長くなる、行列を振り返り確かめる。

(四) もうひとつの天生

ご開門。

剛健な構えの南大門をくぐる。太い閤を跨いで境内へ。踏み込んだ時、誰もが必ずそこで一瞬立ち止まる。心が弓の矢のように空を飛び、正面の金堂に釘づけになる。平成の大修理を終えたばかりの金堂は光輝燦然の蔓。威風堂々の重厚な盛装で歓迎してくれる。

建造に天平の魔力を感じる。人の手で造り上げた物であるのに、こんなにも純粹に自然の摂理を感じる対象となる。瞬時に、唐招提寺の放つ魔力の虜となってしまった。

金堂に会釈をする。人の波の流れにしたがって、わきの蓮池を廻る。逢いたいものの待つ、伽藍奥、御影堂への参道を足早に進む。

御影堂。靴を脱ぎ、板の間上がる。宸殿の間に集う参詣の人々。香の漂う中、鑑真和尚像の前に、人は心穏やかに手を合わせる。

時代を経てなお、尊び慕われる鑑真。唐から布教のため、十二年の歳月を費やし、不屈の精神で六度目にしてようやく渡航かかった。その時には、失明をしていた。高僧の、苦難を乗り越えた確固の意志と、気高い徳。現代にまで、脈々と受け継がれてい

る深い想い。

敷い座して拝む姿。すべての人の真の魂に付いた、俗な鱗が静かに剥がされていく、そんな瞬間を合掌の無心に見た。

宸殿の間には、濤声（とうせい）と題する大海が、襖画としてひろがっている。見つめてみると、迫力の中に、しだいに周囲の人の気配が消えた。大広間に祈る大衆を、まるで浜にある無数の小石のように見せていた。

魁夷の絵筆の勢いに、水の波紋が起り、うねりが現れる。しおきがあがる。襖の敷居から、海水のしずくが滴り、滲みてきそうな。海原を渡る風が、磯の香りをそよと運んできそうな。潮の声、海の便りが聞こえた。

鑑真が遭難を繰り返し、遂にたどり着いた岸はこんなであったのだろうか。大志をもって出帆した、対岸の唐にも想い馳す青の海。

係員に次の間に進むよう促され、立ち尽くしていたことに気付く。振り向けば、客が広間に、次から次へと寄せる波の如しである。

順路、次の間はいよいよ。山雲。強い、この画への恋慕の気持ちで向かう。十四畳ほどの上段の間の画は、襖と壁のコの字型三面に渡り描かれている。入室は一般の参拝者には許されず、縁から覗く。

山雲を前に、私は思わず山でするように、深く息を吸っていた。突然空間が、限界のない森の世界へと膨脹した。もうひとつの天生が拡がる。私を知るあの深い山の匂いがする。

宸殿の襖にあった海の青にも負けぬ、鬘着と描かれた山の蒼。この蒼、何故懐かしく感じるのか。人間の六十兆個の細胞の中すべて、ミトコンドリアの奥深く。数十億年の連鎖の中でDNAに擦り込まれた、原始からの蒼。苔みの色相、仕舞い込まれていた悠久の記憶が甦る。命の源の蒼としての蒼、故か。

山雲に、ふたたび私は我を忘れ、実像の中に潜む幻想宇宙を遊泳していた。

峰に霧の立つ様子は、魁夷がスケッチ旅行の際、「ここを描け。」と心の声を聞いたという、瞬間の天生の山面（やまも）をそのままに映している。

昂揚の蒼の宇宙に没る私を、さらにこの異次元の陶酔に漂わせたのは、上段の臨床天袋に、唯一の生きものとして描かれた杜鵑（ほととぎす）の姿。亡者の魂を天に運ぶのがその鳥の勤め。たまむかえ。羽音とともに哀愁を帯びた囀りが、その姿から聞こえるような錯覚をおぼえた。雫真の魂を、天にいざなう。

情景の梢が揺らぎ、霧が浮いた。壁面から露風がながれ、静止の中に動きを感じた。

魁夷の心を探りつつ、拝観の順列に従いぐるり縁を渡る。残る黄山曉雲、桂林月宵の画を鑑賞した。お堂を一巡りして、再び宸殿の間に戻り着く。

あらためて見直した湧声に、よみがえった記憶。そうだ。この海の景色を、天生で実感したことがあったのだ。

ちょうど二年前の五月末、若葉萌えの季節に舅は長寿を全うした。私は舅の臨終の床につき添い、最期を看取った。忘れまい、死出際の眼差し。喻えようのない彼の清らかな視線の先に、救いの主への本願を見た。今際の、舅が目で発した念。一途に、「浄土へ。」

舅が息を引き取ったその時、葬儀が落ち着いたら天生にその足跡を感じたい、と不思議な思いにかられていた。

四十九日を済ませ、ひとり天生の山に入った。人けの無い溼原で、湧声のごとく的大海原を体験した。風のそよぎがあたりの草木の葉を動かし、たちまち木々に潮騒を招いた。揺れる草が、海のさざ波になるのを見た。旋風が起き、藪がうねる。私は、森の海にいた。

彼方、舅の精霊が風に乗ってこの翠の尊海（とうとうみ）を渡り、天に召されて逝った。

御影堂を出、唐招提寺を後にした時、私は奈良を訪れた本当の意味を見出した。

魁夷を通じて、天の原理と仏の真理に触れるため、来世の見えないものから呼ばれたのだと確信した。踏むべき道程を踏み、逢うべきものに、今、逢いに来たのだということ。

（五）飛驒に息衝く

緑あって、飛驒に嫁ぎ暮らす。歳月とともに、自ずと滲み込んだ飛驒の風土や人情。

慮る。山また山、山巒のひだひだの飛驒。租庸調にもあたらぬが故の天下の国。都に宝と備するものは、森の民の力。その莫大な資源、匠の技が都へと上る。あつたであろう天下の人の、奥底の計り知れぬさまさまの心情。

魁夷の天生に導かれ、境の世界を学ぶ。現象本質の理法。天の永く久しい法則の入り口から、ほんの少し中を垣間見る許しを得た。

飛驒と奈良がこうして繋がっている。昔も今も。幽静の天生に仙人も魁夷も舅も、私も。

因果応報。人や自然は、繋がりが関わり合い存在する。理があつて存在する。共生の概念。

森羅万象。未知なるものの手が、幽玄の世界に無限の機を立て、すべての生命を織る。

奈良より帰高し一週間後に、天生の山が開いた。訪れて、山に伝える。「もうひとつの天生を、遠い都に見つけた。」と。

不意に針葉の梢から、杜鵑が飛び立った。

伝説のクロベエの娘は生涯独り天生に留まり、その亡骸は望みどおりタムシバ（ニオイコブシ）の根元に葬られたとされる。飛驒の遅い春の日。タムシバの真っ白な花が楚々と開く。女の純情の証が今の世にも息づき、都への偲ぶ想いを籠めて咲き匂っていた。

— 完 —

二〇一〇年秋。「あもうのくろめ」によせて

* 仏教において、認識の対象となる世界を境という。自分という主体において無も含めて認識の万物を「環境」と定義する。

|| 筆者 ||

福田夕咲 詩形による一考察

高山市七日町

坂口 比斗詩

福田夕咲は明治十九年（1886）三月の生まれである。高山町長となる長兄耕作とは十八歳下の末子であった。小柄ながら闊達な少年時代であったらしい。十二歳で斐太中学に入学、その二、三年時に徳川時代の古典を読破したという。長じて明治三十七年（1904）満十八歳で上京し早稲田大学文学部英文科予科に進学する。同期生には北原白秋、若山牧水、土岐善麿など、後の文壇を担う面々がいた。

この年は二月の国交断絶を期に日露戦争が勃発した年である。世情騒然たる折りに上京した彼らの、心境いかなるものがあったであろうか。だがそれも翌三十八年九月に終結するや、その十月には、当時既に詩界に多大な反響を呼び起こしていた、上田敏の訳詩集『海潮音』が出版される。島崎藤村の『若菜集』によって曙を迎えた日本の近代詩が、その『若菜集』よりも多大な影響を受けたであろう『海潮音』の刊行は、正に新時代幕開けの象徴的な出来事であった。夕咲が上京したのは丁度こんな時代であった。また当時詩壇を二分していた薄田泣菫、蒲原有明は、その絶頂期にあった。この年有明は第三詩集『春鳥集』を、翌三十九年には泣菫の代表作となる『白羊宮』が刊行されている。象徴詩の成果

ともされる『有明集』は二年後四十一年の刊である。

夕咲がいつ頃から詩作を始めたかは詳らかではないが、昭和女子大学佐々木満子教授著述の「人見東明と福田夕咲の交友」によれば、処女作は明治四十年一月一日の読売新聞に載った入選作「新巻」であったという。ただしこの作品は『福田夕咲全集』（以後全集と略記）には採録されていない。次いで同年六月十五日発行の『文庫』に「幻」「紅き灯青き灯」「まろき石」の三篇が掲載され、その後同誌に継続して詩を発表した。この三作はいずれも五七調で書かれた作品で、上京して三年、早稲田在学中のことであった。先立つ明治三十八年『海潮音』が出版された年に、夕咲とは同年生まれになる石川啄木が、二十歳までに綴った詩集『あこがれ』を出版している。十代に書かれたとは思えないその作品は、天才と呼ばれるに相応しい内容だが、同時に泣菫有明の濃密な影響を否定できない。当時多くの若き詩人たちは、多かれ少なかれ上田敏の、そして泣菫有明の影響下にないものには無かったのである。

だが夕咲はいささかその立ち位置を異にしていた。当時殊に『海潮音』『有明集』によって示された象徴詩は、詩壇の趨勢であっ

たが、泣菫や有明に影響を受けながらも、美辞麗句難語擬語を逃ねる高踏派、象徴派と言われたそれらの詩風に、疑問を呈する者も少なくなかった。所謂、自然主義の立場を採る人達である。夕咲もその一人であり、東京時代は彼等と行動を共にすることになる。

明治四十年十月、「文庫」関係者を中心とした詩文研究会「黒潮會」が東明宅で開かれ、この会は翌年まで続いたが、夕咲は初回から参加している。一方島村抱月の奨めで「早稲田詩社」が結成されたのは四十年三月であったが、翌年二月三木露風と入れ代わりに、夕咲はこの会にも参加する。同人は東明、加藤介春、相馬御風、野口雨情であった。自然主義を標榜し、ありのままを描こうとする彼らの注目すべき点は、夕咲の初期作品にも見られるように、それまであまり顧みられなかったダークでマイナーな主題に目を向けたことであった。だがこの詩社は一年余りで解消することになる。

翌四十二年五月、東明は介春、夕咲に加え、三宮朽葉、今井白楊の五人で「自由詩社」を設立し、パンフレット「自然と印象」を発行する。二十〜三十頁の非売品であったこの小冊子は、翌年六月の第十一号まで続くが、東明が「文庫」など他誌の仕事に掛け持ちしていた事から、実質的に夕咲が編集に携わることになる。途中からは山村暮鳥等も加わり盛況であったらしい。この自由詩社時代を夕咲は「若き日の思ひ出『偶像破壊』時代」（全集所収）で「私の一生で最も愉快ではつらつとした青春時代」であったと回想している。

自由詩社は東明が牽引役となった口語自由詩研鑽の場であっ

た。「自然と印象」はそのほとんどが口語自由詩で占められている。日本初の口語自由詩集である川路柳紅の「路傍の花」が出版されたのが明治四十三年で、自由詩社の歴史的意義は、四十年代に興隆した口語自由詩運動の一翼を担ったことであろう。

この頃までに夕咲の詩作品には、形式上の変化が認められる。四十年は先にも触れたように、五七調の作品が多い。尤も全集に収録される限りではこの年の作は全十一篇のみであるが、その内の九篇を五七調の作品が占めている。ところが四十一年に入ると、一変して七五調の作品と、五七五と七五七とを繰り返す交互調の作品とが、そのほとんどを占めることになる。五七調作品はこの年わずかに二篇を数えるのみである。更に四十一年の半ば頃から四十四年まで、自由詩社時代と詩集「はるの夢」制作年代とを含む数年は、口語自由詩と七五調の作品が多くを占めている。

明治四〇年……五七調の時代

四一年……七五調と交互調の時代

四二〜四四年……七五調と口語自由詩の時代

この時期明治四十二年には、二つの重要な詩集が出版されている。白秋の『邪宗門』と露風の『魔園』である。白秋は十八年生まれ、露風は二十二年生まれで、夕咲とはほぼ同年代に当たる二人は、早くから頭角を現した詩人であった。この二つの詩集は各々の代表作であり、泣菫有明の次代に位置する象徴的な作品群であるが、ここで一つ着目しなければならないことがある。白秋も露風もその初期作品に共通するのは、五七調の作品が圧倒的に多いことである。そして夕咲も創作数は少ないが全く同様で、早稲田

詩社時代の東明や介春も、概して同じ傾向を示しているのである。「邪宗門」も「魔園」も、共に各々詩集全体を五七調、もしくは五七基調の作品で多くを占められているが、更に「魔園」中の「二十歳までの抒情詩」としてまとめられた一連の作も、ほとんどが五七調。また邪宗門以前に書かれたとされる、白秋の第二詩集「思ひ出」中「おもひで」としてまとめられた一連の作も、その多くが五七調で書かれている。

そもそも日本の詩歌史上五七調で書かれたものは、明治以後を除けば、上代万葉時代の長歌を置いて他にない。中古以降歌謡の世界でも、早歌、今様の昔から現代の演歌歌謡に至るまで、概ね七五調で占められている。短歌（和歌）でさえ、万葉時代に既に長歌の反歌においてすら、本来の五七・五七・七のリズムから、五七五・七七の三句切れリズムに移行している。日本の詩歌が古来いかに七五調に支配されて来たかは、紛うことなき事実である。

一方最も早くに欧州詩を翻訳したとされるのが、江戸末期の中島広足の「やよひのうた」と勝海舟の「思ひやつれし君」であるが、いずれも五七調長歌体で訳されているのは、下敷きとすべき詩形が他に無かったからであろう。明治十八年刊の湯浅半月の手になる長歌体創作詩「十二の石塚」に於いても、自らが断つていくように全く同じ動機であった。鳴外に至っては欧州詩を漢詩で訳す事までしているが、これらの事象はそれまでの日本に、いかに「詩」なるものが存在しなかつたかを物語るものである。おそらく長歌としてではなくて、五七調で初めて創作されたのは、明治十四年刊「小学唱歌集」の、稲垣千穎作詞の「うつくしき」辺りではないかと思われるが、当時はまだ歌謡と詩の区別も寛東無

い時期であった。七五調と五七調の差異も、明瞭には意識されていなかったのではないだろうか。「新体詩抄」が世に問われたのも翌十五年のことであるが、何しろ明治という時代を通じて、後に藤村や夕映などが述懐しているように、新体の詩そのものが半ば白眼視された時代であった。

この頃の重要な出来事は、二十年前後に相次いで讚美歌集が作られたことである。翻訳の必然性から、八六調や八八調など非常套的な数律が多用され、詩想内容と相俟って新鮮な影響を及ぼしたことが甚大であった。

この二十年代に入ると、漸く何人かの詩作者達によって、詩なるものが書かれるようになる。多くは七五調だが長歌ではない五七調の詩も試みられている。そして三十年刊の藤村の「若菜集」巻頭の序を「こころなきうたのしらべは／＼ひとふさのおだうのごとし」と、いわば象徴的に五七調の作品が飾るのである。藤村は全四冊の詩集をほとんど七五調で綴ることになるが、代表作「千曲川旅情のうた」を含め、僅か十数篇しか書かなかつた五七調詩は、若菜集の序を除けば、全て最終「落梅集」に集中する。

三十年代半ばに藤村がその詩筆を推く頃には、泣菫有明によって盛んに詩形の模索が行われ、また讚美歌や海潮音に於いて変格体が用いられたことは、当時の若き詩人たちには様々なヒントを与えたはずである。七五調の普遍的俗謡性、変格調の斬新性、五七調の潜在的緊張感と形而上的表象性。殊に五七調というシンブルな詩形の持つ効果に発見があつたのではないだろうか。象徴派であれ自然主義であれ、輸入概念を咀嚼して呑み込んだ所に、五七調という一つのツールがあつたのである。特に早稲田詩

社の自然主義詩の場合、即物的な表現を求めてダークな主題に傾向を示した事が、歌謡体の七五調を嫌ひ観念的な五七調に拠った要因であったとも言える。顧みれば半月の「十二の石塚」が叙事詩ゆえに長歌体を用いたのも、少なくとも「詩」を意識した所為であつて、明治期詩人たちにとってそうしたことが、五七調詩の開発に繋がったとも言えまいか。尤も「海潮音」の序文など見る限り、当時の詩人たちに果たしてそういう自意識があつたか否かは不明だが、日本の詩歌史を顧みれば、「五七調詩」は明治期詩人たちの発明であると言つても過言ではない。

夕咲はしかし早々に五七調詩を書かなくなる。四十一年以降は七五調俗謡詩が目立つようになり、更に自由詩社時代は、気分詩と呼ばれた口語自由詩が支配的になる。

この頃の夕咲の動向は、四十二年七月に早稲田を卒業後、東明の手を経て読売新聞社に入社し、東明と共に文芸欄を担当するようになる。時に夕咲満二十三歳。一方自由詩社は四十三年に解消し「自然と印象」も終刊するが、同年十月には東明の主唱で雑誌「劇と詩」が創刊される。自由詩社のメンバーに加え、演劇方面では坪内逍遙、島村抱月等が参加。夕咲は創刊当初から詩や随想を寄せている。この「劇と詩」は後に「創造」と改題され、夕咲帰郷後の大正五年六月まで続くことになる。

「自然と印象」の注目すべき点は、口語自由詩であることと、もう一つは気分詩を主調としたことである。この気分詩について夕咲は「自我がひとろに溶け合ふところが即ちムードの世界である。此心境を表出するのが詩歌の任務である云々」と述べて

いる。彼等の標榜した自然主義がいれば溶け合ふて表出したのが、この気分詩という世界ではなかつたか。東明が第一詩集「夜の舞踏」を出版したのは四十四年六月。「予の詩はその折り折りの気分を様々なる調子にて歌ひ出でたるものにて予にとりては懐しき心の音楽なり」と自身が記している。同時期に出版された白秋の第二詩集「思ひ出」と共に、当時詩壇の反響は大きかつたと言われている。

同年九月「早稲田文学」に掲載した論評「古くて新しき味「夜の舞踏」と俗謡詩と」の中で、夕咲は次のように述べている。

云ふ迄もなく吾人の心地は決して在来の俗謡が賣す情味と等しきものではない。現代の吾人が抱く気分情味の自然の要求から本調子二上り乃至三下りの色の調を帯びて来るのである。(中略)北原白秋氏の「思ひ出」その他の俗謡的の詩歌を味つたら詩壇に斯る傾向の生じたものも偶然でなく、現代一部の人の抱く心地が必然的に斯る形に於て現はれて来なければならぬ所以も明らかになるであろう。

翌明治四十五年一月一日、夕咲は唯一詩集となる「春のゆめ」を出版する。時に満二十五歳であつた。「思ひ出」の情調と「夜の舞踏」の気分とを交ぜにして、そのエッセンスを啄みながら独自の世界を表出したとも言ふべき「春のゆめ」は、四十三、四十四年の間、主に自由詩社と「劇と詩」時代に書かれた作品で、全一八篇ほぼ全てが、七五調及び七五基調と口語自由詩で占められる。自由詩社時代に培われた気分詩が、刷毛でそつと撫でたような独自の詩風となつてこの集を特徴付けたとも言えるが、彼自身がその「はしがき」で記すように、それ以前の自然主義時代

の詩は、仔細あつて、割愛したという。

遡る明治四十一年二月の『文庫』誌上で、自然主義標榜者であった東明や夕咲等五名が、その前月に出版された『有明集』の合評を試みている。詩界の大先達に対する失礼を懸念しながらも、各々忌憚らない批評を展開したのであるが、概して象徴派批判であり、奇麗事に過ぎないと浅薄に切り捨てたに過ぎなかった。この時夕咲満二十一歳、年長の東明も二十四五であった。後に有明は「秀才達の面白半分の血祭に挙げられた／＼いわれなき屈辱であり／詩に対して再び笑顔は作れなくなつた」と述懐している。そして夕咲は後年「若き日の思ひ出『偶像破壊』時代」（全集所収）に於いて、

古い枠を外せ、古い形式を破壊せよという新観念は、いきおい当時の老大家に弓を向けるような結果になり、老大家の隠退をうながしたというような非礼を取つたこともある。殊にざんきにたえない次第である。

と、青春期の煩悶や焦燥と共に述懐しているが、夕咲が、仔細あつて、割愛したものとは、正にそうした青臭い産物であり、不完の思想ではなかつたか。それは詩作の上では、口語気分詩への流れと相俟つて、五七調からの乖離と七五調俗謡詩への回帰という形で現れてくることになる。初期詩篇には無い、肩の力の抜けたような自然体の情感が「春のゆめ」には漂っている。

この七五調への回帰は、同時期の白秋や露風にも見受けられる現象である。白秋の第二詩集「思ひ出」は、先行する「邪宗門」に比して、明らかに七五調が全体の基調となつている。また露風

も第四詩集「白き手の獵人」に至つて、それまであまり見られなかつた七五調が登場する。あたかも日本人のDNAに織り込まれた七五の律格が、仮面を破つて現れ出たかのような星である。まして十代半ばで江戸時代の古典を読み漁つた夕咲にしてみれば、それは全く自然な成り行きであつたろうと思われる。この時期に長唄や常磐津を師匠に就いて習つていたとなれば尚更である。事実それを裏付けるかのように、「春のゆめ」出版以後大正三年に帰郷するまでの間、引き続き「劇と詩」に拠つた数年の詩作は、ほとんどが七五調で書かれることになる。

乙骨明夫が「福田夕咲論」（全集所収）で指摘することく、夕咲の詩業は、初期自然主義詩と自然と印象時代の作とによつて評価される可きとは正論ではある。しかしそれらを割愛した、仔細もまた尊重せねばならない。結局この人の本念は、五七調自然主義詩でもなく、口語気分詩でもなく、七五調俗謡詩に一番軸足が在り、一番居心地が良かったのではないだろうか。帰郷後の作品を見てもそう思いたくなるのである。

大正二年八月、夕咲は憲政新聞に移るが、この頃から体調を崩し社とも見解が合わずに、その年の十二月には退社してしまう。そして翌三年（1914）五月二十八歳の春、家の事情もあつて帰郷することになる。よほど悪かつたのか、東明もそのほうが却つて彼にとっては良いだろうと、長年の友を気遣つているほどである。ちなみにこの年、第一次世界大戦が勃発している。

帰郷後の夕咲は兄鶴雲等と文芸誌「ツチグモ」や「クラジシ」歌誌「山百合」を創するが、隨筆や短歌を書きこそすれ、数年の

間ほとんど詩作を絶つてしまい、東京からの東明の誘いにも応じていない。帰郷した年の秋には最初の妻を迎えるが、この結婚は長続きしなかった。だが次第に自分を取り戻していったか、考古学に没頭したり、山刀俱樂部を結成して北ア登山を果したりと、英気を養っていたようである。糟糠の妻となる恒子と再婚したのも、大正六年二月三十歳であった。そして偶然来高した牧水との邂逅を果たしたのが十年九月で、この頃から詩作を再開している。そのほとんどは口語自由詩と七五調に大別されるが、特に古民謡にも触手を伸ばした七五調俗謡詩は、時に艶曲めいて好ましい。だが中にわずかではあるが「道」「虹」などの自制的な五七調の佳作が認められる。四十歳前後の頃である。そして注目すべきは、下って戦後の昭和二十年から没する二十三年までの間に、五七調詩を際立って多く書いている点である。全二十六篇の内約半数は口語自由詩だが、五七調八篇とほぼ三分の一を占める。逆に七五調は三篇と極端に少ない。

願れば藤村が五七調詩を多く書いたのはその晩期であった。白鷺世代になるとその初期に集中するも、白秋も絶頂期を過ぎた三十五歳の頃、五七調の名作「落葉松」を書いている。これらの事象を同一視するのは短絡的に過ぎるとしても、五七調詩の史的意義を、当時の詩人たちにとつての詩的意味と共に考えずには居れないのである。夕咲という詩人は、確かに近代詩醸成期を生きた人であったのである。

夕咲の帰郷後、詩壇は新たな展開をして行く。口語自由詩を確立した一人である高村光太郎が「道程」を出版したのは、夕咲帰

郷直後の大正三年十月であった。そして夕咲とは同年生まれのもう一人の巨星、萩原朝太郎が注目されるようになるのも、ちょうどこの頃である。光太郎は後年述懐する。

私は拉董有明上田敏時代には詩を書く気がしなかった(中略)ところが日本へ帰ってきて白秋鷺風時代の詩を見ると、日本語でも斯ういう表現の自由詩のあることが分かり、詩は結局自分の言葉で書けばいいのだという、以前からひそかに考えていてしかも思い切れなかったことを確信するに至った。

遡る明治四十年、早くから口語自由詩を説いた島村抱月は「詩人」誌上で斯く叫んでいた。

吾人の希望は、いかなる方法に於いてか、極めてダイレクトにストレイトになつて欲しい。細かい感想の、シンボリズムでもナチュラリズムでも可いから、深い印象と強い調子がなくては物足りない。

五七調詩と言うジャンルが口語自由詩を確立する過程で、一つの重要なステップであったとしたならば、夕咲もその具現者の一人ではあったのである。

後記

福田夕咲を論ずるに、自由詩社時代を渉猟するは不可欠であるが、詩形の変化を主題とすることで、紙数の制限に應える形とした。従つて作品の例示も省いた。為に東明や介春に言及する事も出来なかつたが、力不足は否めない。全集未採録の作品もある。ことを考慮すれば一偏説にすぎないが、大方のご教示を仰ぎたい。

参考文献

- 乙骨 明夫 「福田夕咲論」(『福田夕咲全集』所収)
勝又 幸子 「夕咲遺跡巡礼」 同
瀧井 孝作 「福田家の人々」 同
佐々木満子 「人見東明と福田夕咲の交友」
渡辺 和靖 「『宿酔』前後—朝太郎と自然主義」
日夏 之介 「明治大正詩史」
日本近代文学大系 「近代詩集」
同 「近代詩歌論集」
同 「明治大正訳詩集」

八月の七夕

高山市馬場町

大埜間 典子

第一章 ネット少年の夏

俺が家出を決意したのは、夏休みに入る二日前。親友の秀樹との会話まで、苦しく感じたときだった。

「なあ、哲司はこの夏どこ行くんだ？」

教室に入るなり、飛んできた言葉がそれだった。

他の人が聞けば、きつとなんでもない事なんだろう。しかし俺にはこれが「どこに行つたのか詳しくブログに写真付きで載せてな」という辛いものに聞こえてしょうがない。

ブログは、読むのも書くのも好きだ。ネットを使って自分の思うこと感じたことを日記みたいにして公開すると、たくさんの人から反応が返ってきてうれしい。じつは去年、俺のブログがテレビで紹介されて、ちょっとした有名人になつてゐる。

ブログと同じくらい、メールも好きだし、最近ハマッてるピーチクも好きだ。ピーチクは自分のつぶやきたい程度のちよつとした内容を、数行書きこむだけのシンプルなサイト。写真もつけることができ、リアルタイムでつぶやいた内容と合わせて投稿で

きたりもする。

これだけネット上に好きなものがあるのに、なぜ俺は苦しいんだろう。将来は情報関係の仕事に就職したいほど好きなのに、もう今はパソコンの前に座るだけでうんざりする。

「うーん、まだ決めてないや。秀樹はどっか行くの？」

答えを持たない俺は、秀樹に話題を返してしまった。

秀樹は海に行くのだという。この山ばかりの町並みとは真逆の地域で、新鮮な海の幸をたくさん食べるのだそうだ。

「へえ、いいなあそれ！」

俺は素直にそう言つた反面、少し悔しくも思つた。

うちは母ちゃんが仕事人間だから、家族で遠くの旅行なんて、行つたことがない。

でもブログを読んでもくれる人は大勢いるし、俺のつぶやきを楽しみにする人もたくさんいる。今年もまたウソで塗り固めた夏休みを、ブログに載せることになりそう。

そんなの、俺のしたい事じゃなくて。

胸がごちゃごちゃして、むなしくなつて。

頭の中に、家を出てどこかへ一人旅なんて、ムチャクチャな計

画が思い浮かんだのだった。

初めあたりの計画は、容易に想像できた。今いるこのアパートから、荷物を持って出ればいいのだ。

でも家出って、具体的になにをすればいいんだろう。

家出の経験者のブログを読んでみたけど、みんなバラバラで、ある人はずっと恋人の家に、ある人は友達の家を転々と、またある人は、路上で寝泊りしていたなんて書いてあって、正直俺はそこまで追い詰められてもないし、家族や家庭環境を憎んで飛び出したわけではないから、どれも参考にならなかった。

とりあえず、小さい旅行に行く感じでいいのかと押入れからリュックサックを探し出して、それから持っていく物を紙に書き出してみた。

うーん、けっこう荷物になるなあ。やつぱり、やかんは置いていこうかな……。

ちようど腹が減ってきた俺は、やかんを持って台所のガスコンロに置いた。今日は家出で頭がいっぱいだったから、夕飯を買い忘れた。カップメンでいいや。

やかんに水道水をじやーっと入れていると、机の上のケータイがぶよぶよ振動した。母ちゃんからだ。片手で取って通話ボタンを押して、耳に当てた。

「もしもし母ちゃん？」

「あ、哲司ヤッホー。元気してる？」

「うん。何か用？」

「たばことかお酒とか買っとらん？」

「うん、それよりゲーム欲しい。何か用？」

母ちゃんが俺の素行不良を心配するのはいつもの事だ。ごめん母ちゃん、俺今、家出しようとしています。

「哲司さあ、今年の夏どうしようっか」

「え？」

どっか連れてつてくれるの？

「母ちゃんね、緊急で観光地めぐりの大きい仕事が入ったんだわ。ぜひ取材に来てくれって、向こうさんから連絡が来てね、ほら、例の文化遺産のなかなか取材の許可の下りない所あったじゃない、カメラのフラッシュで焼けちゃうからって理由で。でも今回は向こうからお願いに来たのね、たぶん、不景気で観光客が減ったのを気に病んでるみたいでさ。でね、ちよっと帰れないかも、夏休み」

「……うん」

母ちゃんは旅行雑誌の女編集長だ。だから、いつも鬼のように忙しい。

「ごめんね哲司。あつ友達とどこか行きなさいよ、秀樹くんはどこ行くって？」

「海だよ」

「連れてつてもらえるよう頼んでみなさいよ、ね？」

「うん……」

無理だよ。秀樹ん家、兄弟むっちゃ多いもん。言ったら迷惑だよ。……それから何を話したのか、よく覚えていない。母ちゃんは仕事がたくさん入ってうれしみみたいで、それはつまりしゃべっていた気がする。

家出のことは、言わなかった。

無音になった箱みたいなアパートの中で、俺はリュックサックを尻目に部屋で寝転んでいた。

今なにしてるの？

というメールが来て、ようやく目が覚めた。秀樹からだった。窓の外は暗くて、時計を見たら九時だった。涼しくなつたし、コインランドリーで洗濯にでも行こうかな。

ああ、ビーチクのつよやきサイトにちっとも書き込んでなかった。だから秀樹からメールが来たのかも。今なにしてるの、って。

俺は近所に洗濯へ行くところだとメールを打って、送信した。今日はなんだか、つよやいたりする気分じゃなくて。ちよつと遠くを眺めていたい感じだった。

風呂場から汚れ物をかごに詰めて、小銭入れを持ってアパートを出た。ばたん、と閉まった扉の音が、異様に大きく響いた気がした。

コンクリートの階段を下りて、居酒屋が多いほうの明るい道を歩いた。暗い道のが近道だけど、電気を点けずに走っていたチャリと衝突して以来、こつちを通るようになってる。

オレンジの街灯でぼんやりと揺らぐ店先には、まだらに笹が飾られていた。側溝に笹を立てかけて、紐で縛って固定してある。

商店街や飲み屋街は、毎年いつもこんな感じだ。ここは八月七日が本当の七夕だから、その日まで笹を飾るのだ。

たくさん短冊は願いをこめられ、夜風に揺れている。俺には竹をくれる人もなければ、短冊で笹をいっばいにするほど家族もない。母ちゃんと俺の二人だけ。

心でモヤモヤする言葉をつよやこうかと思ったけど、ケータイをアパートに置き忘れたのを思い出して、なにもできなかつた。ただ一言、さびしい、とだけ打ちたかつたのに。

第二章 家出という名の

ケータイの目覚ましに起こされて、俺はインスタントの和食で朝飯をすませ、宿題とか着替えとかゲーム機を詰めこんだ重たいリュックを背負ってアパートを出た。

どこへ行くこうかな。一晚考えたんだけど、どこへも行く場所が思い当たらなかつた。

セミがじゅわじゅわ鳴いている。まぶしい太陽光線が、道路をまっしろに照りつけている。

ポケットのケータイがぶようぶよう鳴った。取り出してチェックしたら、部活の部長からだつた。メールの内容は、どうした遅刻か、だつた。

俺は十日ほど旅に出ますと打って送信した。そしたら、了解旅のレポート期待している、と返信が来た。てっきり怒られるかと思つてたから、真逆で驚いた。

俺は情報部という名の新聞部員だ。テレビでやつてるニュースの中で、いまいちわかりにくい内容をわかりやすく直して学校中に貼るのが役目。テストの時事問題対策ができるからと、校内でもけつこう人気がある。その分ブレッツシャーもあるけど、俺は楽しくやつている。

夏休みのはじめ、そんなに部活の日はなく、今日を飛ばせば次

は一週間後だ。各々興味のある題材で新聞やレポートを作成し、夏休み明けの自由研究の一つとして顧問の先生に提出するのが宿題になっている。

ようするに部長は、宿題だけはしっかりやれよと釘を刺したのだ。うちの部長は怒ると怖いから、レポートは書こうと思う。

でもどこへ行こうかな。むし暑いし、川か山の涼しい場所がいいかな。どこかに泊まるほどお金も持っていないし。ゲーム買うために貯金したいし。

そんなこんな思いながら、ぶらぶらと田んぼのあぜ道を歩いた。小川を見下ろしながら、鉄骨の飛びでた小橋をわたると、橋の下で小学校低学年くらいのチビたちが夜になったら花火をここでしようと話していたので、川の付近での野宿は止めにした。

夜に会ったら気まずいし、警察に通報されたら大変だ。

じゃあ山にしよう。おおざっぱだが目的地が定まった俺の足は、少しだけ速くなった。

途中の駄菓子屋でジュースを買って、軒下のさびたベンチに座って休憩した。無果汁のグレープソーダを飲みながら、どの山に泊まろうかと遠くを眺めていたら、

「あんな所に、短冊が……？」

わりと近くの山の真ん中らへんに、笹が飾ってあった。周りの深い緑に混じって、色とりどりの短冊が手を振るようにはためいている。

その左脇には、平屋ふうの真つ黒な屋根が見えた。なんで黒いのかわからない。瓦の色のせいじゃないみたいだけど、日陰になっ

なにかのお店かなあ。

あんな所に建ってて、もうかるんだろうか。

まだ空は青くて、雨が降る気配はない。遠くで入道雲が山の背文をこえて、ソフトクリームみたいな形してそびえたっている。

そろそろ昼時だ。

案外、すごく美味しいメニューがあるのかもしれない。あの距離なら何かあっても帰ってこられるし。俺はリュックからルーズリーフを引っ張り出して、シャーペンで目的地までの地図を作りながら歩いて行くことにした。

だいたい十分ぐらいかな。そんな甘い計算は大はずれで、じつさいは三十分近くもかかってしまった。

それでも引き返さずに山道を歩いてこれたのは、背中を押すように吹いてくる冷たい風のおかげだった。

しゃらしゃらと夏風にそよぐ葉っぱが頭の上で光をさえぎり、むき出しの地面には木漏れ日が揺れている。道の両側を流れる細い細いせせらぎを目でたどってゆけば、大自然の中にひっそりと建つ、こじんまりした黒いお店が一軒。

ダイダイ色の浴衣みたいな格好した女の子が、髪結い床と書かれた看板の下で、背の高い笹に飾った短冊を見上げていた。時代劇に出てくるような、でも柔らかい感じに頭を結っている。

ずいぶん雰囲気にかたわっているな。従業員の子にあんな髪型させるなんて。

こんなときにケータイが鳴った。

大慌てで木陰に隠れてケータイを確認すると、秀樹からだった。

「もしもーし、哲司?」

耳に当てるなり、少し焦っている秀樹の声がした。後ろから野球部の掛け声が聞こえるあたり、部活の休憩時なのだろう。

「どうした秀樹」

「あのさ、今日お前も部活じゃん?教室から体操服とつてきてくんね?」

「まずい。でもウソついたら学校まで取りに行かなきゃならないしな。」

「ああ、俺いま学校にいないんだわ」

「え?部活休み?」

「そ、そうじゃないけど。体操服がどした?」

「ん、母ちゃんに洗ってもらおうと思って。でもいいや、うん、悪い、切るわ」

「うん、がんばれよ」

「おう」

電話が切れた。

気のせいかな、いつもより声聞きづらかったような。山の中って電波が悪いのか。

秀樹のやつ、俺が部活にいないのを変に思わなかったかな。あいつ妙に鈍いところあるから大丈夫か。

「あれ、お客さん?」

関西なまりの声がかかって、俺はびっくりしてケータイをずぼんのポケットにしまった。

「そないなとこ隠れて。お店入ってくれへんと髪の手結えへんよー」

元気な明るい声。怒られたり変に思われたりはしていないらしい。このまま隠れ続けるのもかっこわるいから、俺はすこすこと木陰から出てきた。

さっきの女の子が、笹の下でここにこしている。

「こ、こんにちは。べつに隠れてたわけじゃないです」

「あらそうなん?急に木の陰に逃げよったさかい、てっきり隠れた思てん。ふふ、あんたいくつ?今日はどないな感じにしたいん?」

どないな感じとは、どんな髪型にしたいのかと訊いているようだ。ここは床屋さんだったのか。看板の髪結い床という意味が、今わかった。

「あ、俺、べつに髪の手をいじりに来たんじゃないんです。ちょっと散歩に」

「散歩で、なんでそない大荷物なん?」

「いや、えっと、その」

「ははーん、家出か?」

ギョツとなった俺に女の子は、にやにやしながら腕を組んだ。

「どっか行くアテ、あるん?」

「あの、えっと、ありません」

「そう、ならちようどええわ。ちようど手伝いが欲しかってん!」

ええ?どういう意味ですか。

「うち来て働きたい。そしたら好きなだけ部屋賃したるわ」

「え、でもバイト募集とか張り紙がないし、従業員がそんな勝手に決めてもいいんですか?」

「うちが店主やで?」

えええ!? 俺とそんなに歳が変わらないのに、もう店持ちなんだ!
だ!

あれ、経営学とか、そういうのは習ったのかな……。

「さ、どないするん? 他にアテがあるんやったらええけど」

「えっと……」

「なーんや男のくせにハッキリせえへんねー。ええからこつち入り!」

女の子はさっさとのれんをくぐって店に入ってしまった。

ど、どうしよう、俺ここで働くつもりなんか無いのに。お腹もすいたし、もう帰りたい。

でも、こんな怪しい俺に気前よく部屋を貸してくれようとしてる人をないがしろにする度胸もなくて。けつきよく、おそろおそろ店に近づいていった。

髪を結うところだつて聞いたから、椅子とかシャワーとか、美容院みたいな場所を想像した。だけどじつさいに店に入ってみると、土間と、一段高くなつて畳がしいてあつて、そこに大きな姿見の鏡と小さな手鏡が置いてあつて、女の子がそのそばに座つていた。

時代劇に出てくる女の人の髪型ばかりのカツラが、鏡の後ろの木戸にずらりと並んでいる。

「いらつしやい。荷物そのへんに置き」

いやいや、こんな怪しいところに全財産を置けないよ。

「あのお、こつち美美容院なんですよ」

「はあ?」

「シャブーとかする場所が、ないように見えるんですけど。そ

ういう匂いもしないし、美容院らしくないっていうか」

「しゃんぶうて、なに?」

大きな目をぱちくりさせて、女の子が聞いてきた。

「シャブーを知らないなんて。でも俺の驚きは、それで終わりじゃなかった。」

女の子の姿が、どの鏡にも映っていなかったのだ。

腰が抜けた状態とは、まさに今の俺だった。

「あれ、もう今度はどないしたんよ、ほんまに落ち着きのない子やねー」

女の子はべつにおそつてくる様子もなく、俺が落ち着くまでずっと待つていてくれた。

「うち、ハナいうねん。あんたは?」

足をくずして、おハナさんは少し目を細めて俺を眺めた。

それがあまりにも人間臭いしぐさだったから、俺の胸をつきやぶりそうだった心臓のこどろは、少しずつおとなしくなつていった。

たぶん、おハナさんがクラスの女子よりも飛びぬけて可愛いかったから、という作用も働いたんだと思う。とにかく俺はおハナさんに対して、恐怖心や嫌悪感がなくなつていった。

「俺は、七川哲司です」

「七川かあ、うちとおなじ姓やね」

一瞬、俺のご先祖様かと思つたけれど、うちの学年に七川は五人もいるし、俺の家系にハナという名前はいなかった気がする。

じゃあ、他人か……。

「そいじゃ哲つちゃん、さつそくやけど井戸でこの子ら洗つたっ

て

おハナさんは膝横に置いていた桃色のふろしきを取って結び目をほどいた。中から黒光りしたうるし塗りの小箱が出てきて、おハナさんの細い手がふたを開けると、ちよつと茶色に汚れたいろんな形のクシが五つ収まっていた。普通の大きさもあれば、歯のみつちり詰まった小さなクシもあり、長さもいろいろ。柄の部分で細くなつて、たぶんこれで髪をすき取るんだと思った。

「わあ、初めて見ます、こんな形の」

「大事な商売道具やで、歯あ折つたりせんといてや」

「そんな大事な物を、俺みたいなのに預けていいんですか？」

「クシまだぎょうさんあんねん。ぜんぶお願いしたいで、試しに洗つてきてー」

試して……。俺の仕事ぶりを確かめたいのか。

でもクシつてやつぱり、職人さんの命だよな。部活で美容院の記事を作るために取材をしたことがあるけど、そこでも道具は命だつて言われた。あのときは、ふーん、ぐらいいしか思わなかつたけど、いざこうして手に取つてみると、すごく緊張する。

これ、いつの時代の物だろう……。気をつけないと、歯どころが柄まで折つてしまふそうだ。

「井戸つて、どこにあるんですか」

「この山の下やで。あ、川では洗わんとつてや。あそこ上流のおつちやんが小便するで嫌やの」

ふいうちで出てきた下ネタに、俺は危うく道具箱を落としそうになった。

今なにしてるの？

と、また秀樹からメールがきた。あいつは学校で直接話す派だから、こんなにひんばんに連絡を取りたがるのはマレだ。

俺のほう心配になつて、メールじゃなくて、電話をかけてみた。「もしもし秀樹？」

「うん俺。なにしてんの？」

「洗い物」

俺は自宅の洗面台に、水を張った桶を入れてクシを浸していた。さつきまで指でこすつて汚れを落とししていたところだ。

井戸は、探したけれど見つからなかつた。川じゃダメつて言われたし、近くに洗う場所も見当たらないし、もう、持つて帰つて洗うほか思いつかなかつた。

「秀樹どした？　なんか声が元気ないけど」

「うん……ちよつと暑さにあつたかも。暑くね？最近」

「そうか？今日けつこう涼しかったよ」

そう答えてから、俺は気がついた。俺は幽霊のおハナさんの山で涼んでいて、秀樹は炎天下のグラウンドで部活していた。普通の学生からしたら、今日は暑い日なのだ。

「哲司どこにいたんだ？」

やつぱり聞かれた。どうしよう、部屋で一日クーラーの下にいた、なんて情けなくて言えないしな。

「山に登つてた」

俺は正直に答えた。

「山？」

「うん、山」

「いつもヒマさえあればケータイとパソコンでいろいろ作ってるお前が？」

「たまにはそういう日もあるんだよ」

電話の向こうの秀樹が、沈黙した。これは、絶対にあやしまれている。

「秀樹こそどうしたんだよ。いつも直接いろいろ話す派じゃないメールなんかして」

「……ブログ、見てないのか？」

「え？俺の？」

「うん……荒れてるぞ、すく」

俺の血の気がさあつと引いた。

ケータイを片手にしたまま急いで自家のパソコンを立ち上げ、ブログを確認した。

そしたら、コメント欄が「死ね」で埋まっていた。よくある事だ。早く消さないと次に見てくれる人が不快な思いをしてしまう。

「教えてくれてサンキューな。すぐ消すからコレ」

俺はブログの管理画面に飛んで、コメントの編集に取りかかった。

「なにこいつ更新とまってんじゃない」「テレビ出たもんな。なんもしなくてもアクセス数かせげるしな」「閲覧者に失礼すぎる」「マジ調子のってる」「死ね」

……コメント欄には、そんな意見が寄せられていた。たぶんこれ、消してもまた書かれる。

そうだ、俺はこんなふうに言われるのが嫌で、今までネットにかじりついてきたんだ。それがだんだん苦痛になってきて、でも

誰かに代わってもらうなんてできなくて、あんなに楽しかったネットから、遠ざかりたいって思うようになったんだ。

「哲司、電話きるわ」

「あ、うん、ありがとな」

俺はケータイを耳から離れた。とにかく、消さないと。ブログが汚れてしまう。

なんか、涙出てきた。

第三章 商売道具

竹のクシは、すっかりやわらかな卵色になった。台所で乾かしている間にネットをチエックして、終わったところに乾いたのを確かめて箱に入れた。

おハナさんが言っていた井戸のある場所は、もう誰かの土地になって、家が建っていた。そこもけっこう古い家だったから、おハナさんは昭和初期か大正の人だと思う。もしかしたら、明治かも。

俺はまた髪結いの道具を持って、おハナさんに渡しに行った。

「あんれー、綺麗にしてくれはってー」

畳で箱を広げたおハナさんは、クシを一つ一つ、うれしそうに手に取って眺めた。

「あんな男やのに手先が器用やねんなあ」

「そんなことは」

「そういや部屋貸す約束やったね。うち店、空けられへんで、勝手にあがつて選んどき」

「なにをですか？」

「部屋やって。この家、部屋数だけはぎょうさんあるさかい、な」

太っ腹すぎるだろ、と俺は思ったけど、おハナさんがクシを丁寧にしまっている姿を見たら、なんにも言えなくなつてしまった。

この人、幽霊だつて自覚がないんだ。いつからここで店をやつてゐるんだろう。

一人、なのかな。さびしくないのかな。

「では、上がらせてもらいます」

「あ、裏口から入つたつてな」

おハナさんが外を指差すから、俺はいつたん店から出て、裏にまわつた。

あつた。青いアジサイの花いっぱい隠れた、小さな勝手口が黒くなつて、下のほうが湿つてくさつてゐる。

さすがに背筋がさむくなつてきた。周りの元気なセミの声に後押しされてなきや逃げてたかもしれない。

取っ手をさがすと、引き戸だつた。指をかけて、少し力をこめて左にひくと、日差しが入って土間らしき空間が見えた。目をこ

らすと、かまどと、まな板が置かれた石の台を発見した。さらに奥には、大きな調理用の机があつた。俺が立っている場所は、台所だつたのだ。

不思議なことに、きれいな台所だつた。クモの巣一つ、はつてない。

「電気電気……ああ、ないのか」

ついクセで電気のスイッチを探してしまった。幽霊が電気代なんて払えるわけないじゃん。

窓はないかな……ああ、あつた。左右の壁に大きな窓が一つずつ。

俺はそれらを全て開け放つてまわつた。

ホコリが舞つた。からみついたツタがちぎれた。

きつと百年近く暗かつた。そこに夏の強い日差しが差しこんで、昼間の明るさに一変した。

土間の奥が一段高くなつてゐる。ここからくつを脱いで上がるらしい。

秘密基地ごっこをしていた頃を思い出して、少しネットでの気分がまぎれた。あのときは木の枝を拾つただけでも楽しかつたな。

もう、あの頃には戻れないだろう。

あ、メールだ。

ポケットから出す前から、相手が誰だかわかつた。

きつと秀樹だ……あ、ちがつた。ケータイ会社からのお知らせメールだつた。

ポケットにしまいこんで、気を取り直してあたりを眺めた。特におもしろそうな物はなんにもない。

「……では、上がります。おじやまします」

俺はくつを脱いで家が上がつた。恐怖心がないわけじゃないけど、きれいな家だし、うちが洋式の狭いアパートだからかな、この先の純和風な生活空間が気になつた。

土間をあがつて左に入ると、ニスを塗つたみたいで黒光りする細い廊下が見えた。両側に、いろんな人からもらったみたいな種類のばらばらのふすまが、閉まつた状態で並んでいた。

この家、見た感じは立派だけど、中はけっこうつきはぎしてるんだな。おハナさんは、独りでここに暮らしているんだろうか。

「だれかいませんかー？」

「おるでー？」

返事をしたのは、表の店側にいるおハナさんだった。あなたがいるのは知ってます。

「ここ、おハナさんだけでですかー？」

「ちがうー。うちの親と、あと二人ー」

「何人いるんですかー？」

「うち入れて五人やー」

「わかりましたー」

ふうん、家族で住んでるのか。え？家族に断りもなしに、俺を泊めるの……？

それはさすがにまずい気がしたので、俺はおそろおそろ一つ一つのふすまを開けて中を確かめた。誰かいるかもしれないから、一声かけておくために。

俺はここに泊まる気はない。だけど、勝手に上がってるし、あいさつくらいしないと日本の古い幽霊は怒るかもしれないから。最近まで生きてたうちの爺ちゃんみたいに。

「部屋決まった？いつも掃除しとるさかい綺麗やろ？」

お店の奥から顔を出した俺に、おハナさんが笑いかけた。カツラの長い髪を四つの束にわけて、手早く結び上げていた手を止めて。

俺はその様子を胸が痛んだけど、正直に、首を横に振った。

「あら、気に入らんかったん？」

「すいません、俺もう帰ります」

「自分ちに？あら良かったやん」

「……あの、おハナさん少しいですか？」

おハナさんが、大きな目をぱちくりさせて頷いた。

「なにー？」

「ふすま、ぜんぶ開けてみました」

「うん」

「だれも、いませんでした。あの俺、考えたんですけど、誰かいるのに好きな部屋を使えとか、そういうのおハナさんだけが判断して言うのっておかしいなって思って、それで思ったんです、おハナさんは、元から一人なんじゃないかって……」

どんどん自信がなくなつて語尾がしぼんでゆく。

おハナさんは無表情になつて、またカツラの髪を結い出した。

「ううん、たしかにうちの両親と、旦那の両親はおつてんで」

「だんなさん!？」

「なんやのん？大声出して」

「結婚してたんですか!？ だってまだ十四歳くらい、ですよね？」

「まあ失礼やね。とつくに二十歳は超えとるわ」

え、大人だったんだ！なんかショック。

おハナさんは上手にまげを作つて、紐のような物とびんつけ袖で、短い後れ毛を片付けていった。

「あなたの言う通りよー。ここにはもう、だーれもおらんねん」

旦那はちつとも帰つてきいへんし、どっちの親も、もうおらん」

おハナさんはかんざしを付ける手を、膝の上に置いてしまった。

飾り、つけないのかな。

「薄情な人やで、ほんま。自分の両親の葬式も出さへんで、ぜーんぶうち押し付けっぱなし。いつんなつたら帰つてくるんやろ」

花のない地味な髪形から目をそらし、おハナさんが笑いかけた。
「悪いなー、こんな言われたって、あんたも困るわな。うん、家に帰ったり。あんたを待つとる大事な人がおんねやろ？」

「……はい。ご迷惑かけて、すいません」

「迷惑やなんて。ひさびさに誰かと話せて楽しかったわ」

それが本当にうれしそうに言ってくれたから、俺は思わず、言葉が口をついて出た。

「あの一！」

「んー？」

「また来ても、いいですか」

「ええよー。いつでもきい」

その言葉だけで、元気がもたらえた気がした。

ブログがテレビに出たって言っても、たくさん紹介されたうちのひとつだった。そこでの最年少者が俺だっただけで、たくさんの人から嫉妬された。みんな有名に、なりたいたいから。

もちろん、普通に俺のブログを気に入ってくれてる人は大勢いる。マイブームだったり、流行の話題だったり、俺の気ままな記事を好きだっけ言ってくれる人はいる。

コメントが荒れないよう細工をすることも考えたけど、そういうのが俺の性に合わないっていうか、自然体な評価を求めてしまっただけ、どうしてもできない。

「また荒れてる……炎上しそう」

パソコンを点けるたびにブログが荒らされていた。俺が消すのおもしろがっているようだ。

ネットしながら夏休みの宿題をやっても、ちっとも集中できない。もういつそブログを閉鎖したくなってきた。

あんなに好きだったのに。今はただ苦痛なだけだ。

でもみんなと繋がっていたいし。いつからこんな事になってしまったんだろう。

もう、眠い。まだ夕方だけど、二回も山登りしたせいで疲れた。

往復一時間はきつい。

シャワー浴びて寝よう……。

誰かに、相談したら楽になれるのかな……。

でも誰に……。

……うとうとした俺を叩き起こしたのは、玄関のチャイムだった。何度もしつこく鳴ってくる。

だれだろ、セールスかな。

自室から出てよろよろと玄関に向かった。白く無感情な鉄の扉のぞき穴に片目を近づけると、日に焼けて鼻のあたまを真っ赤にした秀樹が、なにやら白い大きなビニール袋をかかかってにやっとしていた。

「哲司、うちの母ちゃんから差し入れ。スイカー」

「スイカー!？」

俺はすぐさま扉のチェーンを外し、扉を開けた。丸としたスイカーなんて、一人暮らしの思春期少年じゃカッコ悪くて買いつらからメチャメチャ嬉しい。

「うっわ、ありがとー俺パックに入ったスイカーしか食べてなくてさ」

「おう。入っていい?」

「うん！」

「いっしょに切って食っていい？コレけっこう中身ぐじゅぐじゅになってるから早めに食わないと」

秀樹はくつを蹴るように脱ぎ捨てて、台所までスイカを持って歩いた。

俺は用心のために、玄関のチェーンを掛けなおした。後から台所に入ったら、勝手知ったる秀樹がコップにジュースを注いで飲んでた。

「悪い、もらった」

「うん。それより徒歩で来たの？」

「ちがう。チャリで。前輪でカエルふんじやった」

「マジで？秀樹んちの近所って田んぼだらけだしな」

俺は台所のクーラーをリモコンで点けた。秀樹が暑そうにえりを持ってばたばたやってるから。

「あ、いいってクーラーは。節電だろ？」

「え、でも暑くないか？」

「涼しいぞ？この家」

秀樹がそう言うので、俺はクーラーを消した。たしかに、今はなんだか涼しい。

その後、俺らはしゃべりながら包丁とまな板を取り出して、じゃんけんをして、俺がスイカを押さえる係、秀樹が切る係に決まった。丸っとしたスイカを平らなまな板に置いて、俺は力をこめてそれを押さえた。

「よっしゃ切るぞ！」

秀樹が包丁をスイカに突き刺した。真上から。

「あれ？あれれ？抜けねえ！」

「貸して」

俺は秀樹と役を交代し、ぐりぐりと包丁を抜き取った後、スイカの側面からゆっくり包丁を入れていった。

「哲司は慣れてるな」

「うん。母ちゃんがやらないし」

「そっか。あ、なあ、これプログに上げようぜ。最近こーしんしてないよな、お前」

そう言われて、食べやすいように切り分けてた俺は、手が止まってしまった。秀樹にまでネットの心配をされていたなんて、ショックだった。

「秀樹、俺さ……俺な……」

なかなか言い出せない俺を、秀樹はずっと待っていてくれた。

「俺な、俺、プログ辞めようと思ってるんだ」

「荒らしのこと、気にしてんのか？」

「そうかも……なんか、もう疲れたっていうか、しんどくなってきた」

「そっか……」

秀樹は、なぜか悔しそうな顔で口をとんがらせた。

「俺だったらさ、負けるのいやだから毎日荒らしとケンカしてるかも」

「顔も見えない相手とケンカすんのは、骨が折れるぞ」

「だらうな、それにやり方もわかんないし。だから俺はネットは見るけど、書きこんだりはしないんだ。絶対にケンカになるからさ」

秀樹はへへっと苦笑してみせた。

「やめたいんなら、やめたほうがいいって。俺らまだ子供だし、ブログはお前のシユミじゃん」

「うん」

「シユミで苦しむくらいなら、やめたほうがいいって」

「うん……」

なんだか、妙な感じだった。ネットにうとい秀樹から、そんな言葉をもらうなんて。

「ま、スイカ食って元気出せ！」

そう言っただけで秀樹が俺の背中をバンと叩いた。

「そうだ、俺はブログでお金をもらってるわけじゃない。何をどうしようが俺の勝手だ。閉鎖したって、ああやっぱ子供シユミだからって大目にも見てもらえる。」

今まで書いてきたこと、全部おふざけだっと思われるのは悲しいけれど。

悲しい、けれど。ブログ辞めるのは、悲しいけれど……うう……。

なんだから、まだ決心がついてないのかな、俺。

べつにネットで商売してるわけじゃ、ないのに。

なんにも物なんか、売ってないのに。

「大事な商売道具やで、歯あ折ったりせんといてや」

ふいにおハナさんの言葉が浮かんだ。

なんでこんな俺に、大事な道具を預けたりしたんだろ。俺なんてブログ一つどうしていいか迷ってるのに、なんで自信を持って

なんでも決められるんだろ。

「クシまだぎょうさんあんねん。ぜんぶお願いしたいで、試しに洗ってきて」

あ、ああ！ 俺すこいこと頼まれてたんだった。

「どうした哲司、ポーッとして」

「あ、う、なんでもない。食べよスイカ！」

幽霊のおハナさんにまで相談しようと思ってるなんて。これ以上心配させたくなくて、秀樹に知られたくなかった。今日だって、様子のおかしい俺のことを、家族ぐるみで心配してスイカを持ってきてくれたのだ。

ほんとに、ごめん。

ごめん！

俺、もう夏休みのブログにウソなんか書きたくないよ。でも辞める決心もつかないし。

どうしたらいいんだ。頭いたい！

第四章 一日店子

「こない朝早う来るなんて。なーんもすることあらへんの？」

今朝のおハナさんは、あさがお色の浴衣と、あさがおの形した木の髪飾りをつけていた。水桶からひしゃくで水をすくっては、地面にまいている。

「朝から暇なんてうらやましいわー」

おハナさんはうーんと背伸びして、昨日と同じように、また短冊を見上げた。

あれ……？どの短冊にもなんにも書かれてないぞ。

「おハナさん、これの願ひ事は？」

「これは店に来てくれはったお客さん用や」

「……旦那さんのことは、書かないんですか？」

「書いたらかつこ悪いやん。それにエエお客さんは幸せな店にし
か寄つてこうへんで」

「でも」

「でもない！あんた帰つてきてりなんて書いてある短冊の店に、
客がにこにこして入るか？」

おハナさんはしかめつ面で腕を組み、俺をにらんだ。

「またなんかあつたん？ 氣い抜けた顔して」

「え、えつと……」

「人生気張つてかんと！ 他人に弱み見せたら負けや。不幸自慢
なんてみーんな間に合うとる！あんたも幸せな顔しとかんと、エ
エ客寄つてきいへんで！」

「幸せな顔して……」

それつて、演技つてことじゃないか。プログじゃ顔は見えない
から意味ないし。

「さーて、休憩おわり」

おハナさんは足元に置いていた水桶を持って、ひしゃくで水を
まき始めた。でも幽霊だからか、地面にはいっこうに水の染みが
できない。

「あのお」

「なにー？」

「俺の友達から、スイカもらったんです。二人じゃ食べきれなくて
よかつたらどうぞ」

俺は右手に持っていた白いビニール袋を、おハナさんに渡した。
おハナさんは大きな目をぱちくりさせて、ビニールからスイカ
の切り身の入ったタッパーを取り出した。

「変わった入れ物やねー。透明で綺麗で、柔らかいわ」

「スイカ好きですか？」

「旦那がなー。うちは普通やねん」

あ、そうですか……。

なんかこう、もうちょつと素直にお礼を言われたかつたな。べ
つに俺が買つてきた物じゃないんだけど。

「それで今日はどないしたん？ その真つ赤な入れ物なにー？
ばけつ？」

おハナさんはようやく俺の持つている物へと話題を振つてくれ
た。

「あ、はい。今日はクシを洗うのと、お店のそうじとか、任せて
もらいたくて来ました」

「そないな約束したっけー？」

「覚えてないならいいです……でも、今日は、その、相談に、乗っ
てもらいたくて」

「うん、ええでー。そいじゃあんたの氣い済むまで綺麗にしてつ
てやー」

おハナさんは察したように、元気に笑つて許してくれた。
ほんとにこの人は、大ざつぱなんだか氣配り上手なのかわか
ない。

だけど、俺はこの人からの意見を聞きたくて来たんだ。

おハナさんのクシと俺のプログは、同じくらい価値の高い物な

のだから。

「今なにしてるの？ ピーチクに書き込んでないから心配です」

ケータイが鳴って、ポケットから出して見たら、クラスのピーチク好きな女子からのメールだった。べつに俺に気があるわけじゃなく、身近な人間のつぶやきをチェックするのが好きなだけだ。

俺は今、おそらく百年近く掃除されていないオンボロ廊下を一人休さんみたくに拭いている。掃除中なう、とピーチクに書き込んで、ケータイを閉じた。

そういえば最近チャットにも顔出してなかったな。いつもなら知らない誰かとも、気軽に話せてたのに。今はもう、そんな余裕ないから……。

はあ、掃除なんて大ッ嫌いだったのに。なんでか、これか思いつかなかった。これから俺が話すことで、絶対おハナさん怒るだろうから。今のうちに機嫌を取っておこうと思ったのだ。

それにしても、ざっと見ただけではクモの巣なんてなかったと思ってたのに、いざ細かく天井や角を注視してみたらむっちゃ汚れてて驚いた。

拭く前にぜんぶ窓を全開にして、どの部屋の天井にもハタキをかけて、ほうきでチリを外に履き出して、現在の拭き掃除にいたっている。

だから、もう夕方だ。お昼を食べに一回アパートに戻って、またすぐお店に来て続きをやった。その前におハナさんがご飯よって言って、なにも入ってないお茶碗を出してきたときは戸

惑ったけれど、家で食べるからって言って、持ってかえって洗って返した。

おハナさんはあれからこつちの様子をちっとも見に来ないけど、何してるんだらうか。

ちよっと気になってお店のほうに行ってみたら、おハナさんは大きなタライに、小さな花束を浸けていた。

「おハナさん？」

「これな、さつきお客さんから貰てん。こんなん初めてやで嬉しいわあ」

花束は、季節を無視したいろんな種類の草花で作ってあった。たぶんこれ、おハナさんの好きな花と、お客さんからもらった花束の記憶がこつちやになってるんじゃないかな。

「きれいですね」

俺が言うと、おハナさんは少しさびしげな顔をしたらけど、すぐに笑顔になって頷いた。

その横顔が、妙に気にかかった。時間とか、そういうった感覚がおハナさんにはないのかもしれない。

「そーいや相談がどうか言ううとったね」

「あ、でも、まだクシを洗ってなくて」

「もう遅いで、また気が向いたときでええよ」

「あ、はい。じゃあ、あの、これなんですけど」
ポケットからおそるおそるケータイを出して、ずぼんで少し拭いてからばかりと開いた。ケータイ画面がぼつと光って、おハナ

さんが目を丸くしてのぞきこんできた。

おまけにちようどメールが入ってきて、着信音におハナさんは

さらに目を丸くした。

「今のなんなん？」

「メールが着たんです。あ、メールっていうのは、遠くの相手と手紙のやりとりができるんです。あ、でもこれ紙じゃないですけど」

「遠くの相手の作った文章が読めるん？」

「あっそうです。まさしくそれです」

「うちから旦那に送れる？」

「それは、えっと」

「ふうん、あなたの知り合いにしか送れんの」

おハナさんは理解力がすごかった。

俺はケータイをネットにつないで、本当に見せたいモノを画面に表示させた。季節を思わせるブログパーツに飾られたサイトが、妙によそよそしく目に映った。

「これ、ブログっていうんです……個人が作る新聞みたいなものです」

「これか？ あなたの元氣ない原因は」

おハナさんはブログじゃなくて、俺の目をじっと見ていた。気づくのが遅かった俺は、目が合った瞬間すこくびっくりした。

「当たりやな？」

おハナさんが狐みたく目を細めた。

「これがどないしたん？」

「いろんな人から誹謗中傷されてます……大衆を怒らせるような記事は書いてないんですけど、もう俺が作ってるだけで、毎日ひどくて」

「んなもん無視せえや。その歳で新聞記者サマなんて、そら妬みの対象にもなるわ」

「いえ、ちがうんです。これは記者じゃなくても、だれでも作れるんです。げんに俺は記者じゃないし、これはシュミだから仕事じゃないんです」

「ほんなら尚更、無視せえや。人のシュミに噛み付いとるアホはほっときー」

おハナさんは呆れ顔になってケータイから離れた。

「あなたは人サマ騙したり、侮辱して金儲けしとるわけちゃうろ？」

「はい」

「だったらええやん。なーんも気にすることあらへん。記事作りが楽しいなら続けたらええ」

え、なんで俺が辞めようとしてることわかったの……？

「うちも髪結いの仕事、楽しいで。鼻風にしてくれる芸者さんもおるし、まだまだ辞められへん」

「芸者さんが、ここに？」

「うん、毎日きはるで。そら髪結いなんて贅沢じゃ言う人もおんねんけど、うちは負けへんで」

おハナさんがくるりと回った。藍色の鼻結に飾られた細い足が、ちらりとすそからのぞいた。

「だからあなたも頑張り。へーきな顔しときゃ、そのうちエエ読者サマがついてきはるでな」

「……はい」

「もっと大きい声で！」

「あ、はいっ！」

でもそれって、無理して強がってるだけだと思ふのは、間違いだらうか。なんだかおハナさんを見てると、痛々しくて悲しくなることがある。

旦那さんが帰ってこないこと、きつと当時の近所の人は気づいてたんだと思う。でもおハナさんが元気に笑い飛ばすから、誰もおハナさんの心の中に入れなかったのかもしれない。

って、俺はなにを深く考えているんだ。気持ち悪い。

「で、あなたの相談ってこれだけ？」

「あ、はい」

「でもまだ顔色悪いでー」

え？俺にまだ何かあるのだろうか。

「あなたは真面目で、ほんまは気力の強い子や。趣味で記事を出したり、見ず知らずの女のお使いしたり、店の中を正月みたいにびっかびかにしてくれたり。誠意もあるし、しっかりした子や」

「そ、そうですかね」

「うん、うちが保障する。でな、そんなあんたが気の病む理由は一つだけや」

おハナさんが急に真面目な顔になった。

「あんた、その記事にやましいもん混じっとるんやろ。だから他人の文句が癪に障るんや」

頭から冷水を浴びた心地だった。

そんな俺の顔を見て、おハナさんがやっと笑った。

「嘘でも書いてまっとなんちやう？」

「お、おハナさんのバカ！」

俺は家に向かって駆けだした。ケータイを握りしめて、爆発しそうなモヤモヤを抱えて。

「ちよつとどこ行くの！掃除道具、忘れてんでー！」

おハナさんの声はムカつくから嫌いだ！

第五章 電車に乗り

フテ寝なんて小学生以来だ。

もう誰とも話したくない。

俺のバカ。

窓の外は土砂降りだ。

早く朝にならないかな。

明日になったら、おハナさんになって言って謝ればいいんだ。

……もう、雨の音がうるさくって、なんにも浮かばない。集中できないよ。

俺のバカ。雷がうるさい。なんであんなこと言っちゃったんだろ。本当のことを言われてムカついたのか。ちがう。そんなんじゃない。俺はおハナさんに言っただけだったんだ。

きつと何か、あつたかい言葉。

女々しい。ほんつとに今の自分が嫌いだ！

なにをすねてんだ。俺は本当は何に腹を立ててんだ！

「もうわかんないよ！ なんなんだよもう！」

そばにあったケータイが鳴った。知らないメアドだったから誰かと思ってメールを開けば、寂しい夜をモリアゲますという迷惑メールだった。

「なんだよっ！」

ケータイを思いきり壁に投げつけた。壁にかけていた制服に当たって、床に落下した。

もうなんでこんなタイミングで。わけわかんないよ。

……わかんないと言えば、俺はおハナさんのことを、何も知らないんだって。

髪結いか……うちの田舎でカツラとか売ってたのかな……。

なんでおハナさんは、あんなに気丈なんだろう。どうして表面だけでも幸せに見せようと、がんばってるんだろう。

「なにかにしばらくは……？」

ふと頭に「呪縛霊」の三文字が思い浮かんで、俺はパソコンの前に座って電源を点けた。暗い部屋の中、地元の歴史を載せているサイトをあさりにあさった。

あった！ 大正時代、この町最後の髪結い屋の資料が。白黒写真が数点載っていて、そこには芸者さんの髪を結い上げるりりしいおハナさんの横顔が写っていた。場所もあの山の中腹だって記されている。

「あれ？ 野上花って書いてある……姓は七川だっておハナさん言ってたのに……」

でもこの写真にいる人は、間違いないとおハナさんだ。なんで姓が七川じゃないんだらう。旦那さんのことも記載されてないし。まだ結婚する前なのかな。

ん？ 名前の欄に見覚えのある人がもう一人いる……だれだったっけなあ、この人。

「ああ思い出した！ 秀樹のお婆ちゃんだ！」

この芸者さん、秀樹のお婆ちゃんなんだ！

この人ならおハナさんのことに詳しいかもしれない。生きていたらの話だけでも。

俺は投げたケータイを急いで拾って、すぐに電話をかけた。

「もしもし秀樹？」

「おう、今テレビでおもしろいのやってんぞ」

「わかった後で見る。それで、単刀直入に聞くけど、お前んちのお婆ちゃんって、まだ生きてる？」

「え？ うん」

「そのお婆ちゃんに会わせてほしいんだ。俺がよく行ってる山で、どうしても知りたいことができたんだ」

電話の向こうの秀樹がぼかんとしているのが心配でわかった。

「急な話なのはわかってるよ。時間の都合があるときでいいんだ、お婆ちゃんに会わせてくれ。昔の写真をサイトで見つけたんだ。山で髪結い屋を営業してた女の人と、お前んちのお婆ちゃんがあつてたんだよ。その女の人のこと知りたいんだ」

受話器越しの秀樹が、うーん、とうなった。

「ばーちゃんはうちに居ないよ。電車でもちょっと走らないと」

「日帰りで帰れる場所か？」

「ばーちゃんはやべり方がムッチャおそくなってるからなあ、一泊二日は覚悟だな」

そうか、もうそんなにお年寄りなんだ。大正生まれだもんな。

おハナさんのこと、覚えててくれたらいいんだけど。

「ばーちゃんの家近所はなーんも楽しい場所ないけどさ、気分転換に遊びにいこうぜ」

「え、野球部は？」

「俺も明日と明後日、部活が休みなんだ」

「このときは聞かなかつたけれど、後々その理由を、俺は知ることとなった。」

夏休みだというのに、駅はがらんだつた。

なにかあったのかと駅員さんに尋ねたら、とくにないと返された。いつもどおりだと言われた。

「よ、哲司おはよう」

ホームに秀樹が現れた。よく日に焼けた右ほっぺに、白いガゼがバンソウコウでくつつけてある。

「おはよう秀樹。そのケガ、どうした？」

「へへ、転んだ。いたかつたや」

秀樹はそう言つて笑つたけれど、やつてきた電車に乗りこんだ際に、俺は気づいてしまった。

だれもない電車の窓際の席で、俺はとなりに座っている秀樹に尋ねた。

「それ、サッカーボールの跡に見えるけど」

「……野球ボールじゃなくて、こつちが飛んできた。昨日の部活で」

秀樹は隠すのをやめて、伏し目がちに話した。

「部長とサッカー部のキャプテンが、同じクラスでさ、それで、おんなじ女子を好きになつてんだつてさ。で、今は、その女子を取り合つてケンカしてるみたいでさ……」

「なんでお前がまきこまれてんだ？」

「キャプテンは部長に当てる気だつたんだつてよ。で、球がはず

れてラッキーボーイの俺に当たつたつてわけ」

へへつと、秀樹が笑つた。

「秋にも試合があるのにさ、顧問の先生が怒つて、三日間だけ部活を強引に休みにされちゃつたんだ。女にうつつをぬかすヒマがあるのか！ 頭冷やせ！ つて、チームの俺らまで怒鳴られちゃつてさ……」

「……それは、かなり気まずいな……早く許してもらえといいな」

「おう……」

車窓の景色は、ちつとも変わらないように見えた。時間もぜんぜん、経つてないように感じた。

「哲司も不調っぽいじゃん。まだ元氣ないぞ」

「……うん。俺も、ケンカしちやつたんだ。大事な人だつたのに」
それから、お互いに困つて少しだまつた。

電車がやたらと速く感じた。

「なんかアレだな、青春で落ち込むことばつかなかだな」

「そうだな」

「大人になつたら、これがなつかしい思い出になるんだとさ」

「ふうん……俺は今すぐにも、なかつたことにしたいけど」

電車のアナウンスが鳴つた。もうすぐ秀樹のお婆ちゃんがいる駅につく。

秀樹が窓のほうを向いて、指を差した。

「見えるか？ あれがばーちゃん家」

俺もそつちを眺めてみると、まるで人を嫌うように小高い丘に建つ一軒屋があつた。

「あれれまあ、よく来たわねえ」

「どんなに怖いヤマンバかと思つたら、がたつく玄関を押し開いて現れたのは、小柄で穏やかそうなお婆ちゃんだった。

「な？ 話すのおそいだろ？」

「うん……強敵だ。なんでお婆ちゃんは独りでここに住んでるんだ？」

「ちがう、ヘルバーさんといっしょに住んでるんだ。俺らの町で住みたくななんだって」

「あ、やつぱりガンコ者なんだ……」

その後、やつぱりガンコだったお婆ちゃんは井戸で冷やしているスイカを取ってくるよう俺たちに言い、取ってきたらすぐに切りわけて、俺たちに食べるようすすめた。

俺がどんなに催促しても、コレ食べてからじゃないと話してくれない雰囲気だった。

だから三つくらい急いで食べた。

「お婆ちゃん、若いころは芸者さんだったんですよね。髪結いのおハナさんのこと、覚えていませんか」

「んん？ なんですって？」

「おハナさん、野上花さんです！」

「んん！ 懐かしいわねえ。お花ちゃんとは親友だったのよお」

お婆ちゃんがようやく話したのは、蚊帳に覆われた布団の中だった。川の字になって、お婆ちゃんが右、俺が真ん中、秀樹が左。

「でも駄目よお、七川お花って呼んであげなきゃ」

「じゃあおハナさんは結婚はしてたんですか」

「……あなた、悲しいこと訊くのねえ。お名前はなんていうの？」

「スイカ食べる前に自己紹介はしましたけど。」

「七川哲司です」

「七川……ひよつとして、孝治さんのお孫さん？」

「あ、はい。祖父の名前です。でも祖父は別の人と結婚しています」
天井でぼんやりとオレンジに光る電球の下で、お婆ちゃんの横顔を少し険しくなった。

「お花ちゃんはねえ、関西のほうの、旅一座の座長さんの娘さんでねえ、でも、血は繋がってないのよね、お花ちゃん」

俺は布団の中でひじをついて聞いていた。

「おハナさんは、どうしてこんな遠くにおヨメにきたのか知ってますか」

「そうそう、そうなのよお、お花ちゃんはどこかの川べりで、捨てられてた赤ちゃんだったんですって。それを座長が拾って育ててくれたそうよ」

「あ、あの、俺はおヨメにきた由来を知りたくて」

「まあまあ、焦らないで。お花ちゃんね、座長の奥さんの話なんだけど、奥さんにはいっぱい子供がいてねえ、とてもお花ちゃんを育てる余裕がなかったそうなのよお。でもお花ちゃんって手足が長くて、とっても美人だったのね、だから座長さんが舞台に立たせてあげたくて、そりゃ熱心にお花ちゃんを育てていたの。でも座長さん死んじゃってね、お花ちゃん、居場所がなくて針のむしろだったそうよ。でも一座に捨てられたら生きてけないじゃない？ ほら、あの時代って若い女の子がたった独りで生きてく

は辛かったわけ。だからお花ちゃんは捨てられないように、一座の雑用をぜんぶ引き受けてきたんですって」

お婆ちゃんは、まるでそれを見てきたかのような強い口調に変わっていた。

「髪結いの技も、その当時に身に付けたんだそうよ。ただでさえ下働きで忙しいのに、役者さんの身分もぜんぶお花ちゃんの仕事。奥さんと子供さんは何をしていたのかしら」

お婆ちゃんが咳払いし、一呼吸おいた。

俺も心にくすぶった小さな火を、がんばって消火した。

「ここにお嫁に来ることになったのは、あなたのお爺さんが若いときに、お花ちゃんを連れて帰っちゃったからなの。もう話拐みたいなものだったって、お花ちゃん笑ってたわ。あなたのお爺ちゃんはとつてもお金持ちで、とつても情の深い人だったから、お花ちゃんの境遇を見ていられなくなっちゃったのね」

おお、やるな爺ちゃん。

「でも、祖父がお花さんという名前の人と結婚していたなんて、初耳なんです俺」

「そう……やっぱりねえ……」

お婆ちゃんの悲しげな様子に、俺は不安になった。

「孝治さんは優しいけれど、間違ったことも思い切りやっちゃう人だったわ。お花さんと祝言をあげる当日にね、あ、祝言っていうのは結婚式のことね、それでそれを挙げる前にね、鼻屎にしていた芸者と駆け落ちしちゃったの。逃げたのよ、孝治さんったらお花ちゃんを置いて」

まるで同年代の女の子に共感する、若い女性の雰囲気、お婆

ちゃんは戻っていた。

「その芸者っていうのが、あたしの妹分だ、まさかあんなに孝治さんにへばりついてたなんて。油断したわ。孝治さんもあんな子供みたいな人に手を出さなくてもいいのに」

お婆ちゃんはすっかり熱くなっていた。反対に俺は、心が冷える思いで小さくなっていた。

「お花ちゃんは美人だし、その後から縁談もたくさんあったみたい。でもお花ちゃんは頑面にぜんぶ断っちゃってねえ。旦那が帰ってきたときに自分が持ちじや恥ずかしいからって、意地を張っちゃって……」

お婆ちゃんの声が、ふいに揺らいだ。

「お花ちゃんねえ、五年くらい経ったときだったかしら、死んじゃったの。鏡の前で、ぱたりと倒れててね。あたしが見つけたのよ。とても悲しかったわ。あんなに心が弱ってしまうまで、我慢してたのね」

「あの、まさか死因って……」

あの茶色く汚れたクシって、まさか。

「七夕が過ぎて、少し経った季節だったわねえ……神様も酷いわねえ、叶えてくれたっていいじゃない」

「おハナさんの願い、ですか」

「短冊にはなにも書かない人だったけれど、なんてお願いしたかったのか誰にでもわかったわ」

俺も秀樹も、しんとなくなって聞いていた。

「……お花さんが早く亡くなったからだと思わ、孝治さん、すぐに愛人の芸者を連れて戻ってきたの。まともな心の人なら歓迎

なんてしたくなかったでしょうけど、地主サマの息子さんだから、みんな手を叩いてお祝いしたわ。あたし怒って、芸者を辞めた。その日は三味線なんて弾ける気分じゃなかったのよ。そして今の旦那様と知り合ったの」

となりにいる人はすっかり当時の芸者さんの顔になっていたが、俺と目が合うと、慌てて元のお婆ちゃんに戻った。

「ごめんなさいねえ、孝治さんはあなたのお爺ちゃんだったわね。ごめんなさいねえ」

「いいえ、いいんです。それより、祖父はその後どうしてたんですか」

「たくさん、子供に恵まれたわ。だって相手がとっても若いんですもの。でもねえ子育ても家事もなんにもしない奥サマだったわ。まだお花ちゃんを選んだほうがよっぽど幸せよ」

「あらあら！ごめんなさいねえ、孝治さんはあなたのお爺ちゃんだったわね。ごめんなさいねえ」

悪気はないんだろうけど嫌味に聞こえた。となりの秀樹が手を伸ばしてきて、俺の肩をぼんぼんと叩いた。

「秀樹？」

「ティッシュ取って。一枚」

「うん……はい」

俺が手渡すと、秀樹は一枚を俺に突き渡した。

そう言われて、俺も受け取った。べつに拭くほどの量ではないけれど、秀樹がけっこう純粹に涙をふいていたから、俺ももらい泣きしてしまつてティッシュを目頭に押し付けた。

「ばーちゃん、もう寝てら」

「イヤなこと話してくれたから、疲れたんだ、きつと。悪いことしちやつたな……」

お婆ちゃんの男みたいなイビキの鳴る中、二人でひとしきり悲しみを拭き取った。

秀樹が丸めたティッシュをゴミ箱に投げた。

「これがお前の聞きたかったことか？」

「うん」

「なんでわざわざ、こんなこと聞いたんだ？」

俺もゴミ箱に投げ入れて、答えた。

「……おハナさんのことが、気になるから」

秀樹がきょとんととして、俺の顔をのぞきこんだ。そして手をおでこに当てて、また引つ込めた。

「深くは聞かないよ」

「うん、ありがとう」

「俺も寝るわ。おやすみ」

「うん、おやすみ」

それが本日最後の台詞だった。二人それぞれの枕に、頭をずっしり沈ませる。

フクロウの鳴き声に心を冷まされながら、俺はそつとまぶたを閉じた。

まるで弱っていくような、不思議な眠気におそわれた。

第六章 おハナさん

おハナさんの言っていたことは、全てがウソだった。そうさせていたのは、だれだ。あの人の心を閉ざしてしまったのは、だれだ。

俺は淡かった気持ちをしっかりと固めて、おハナさんに会いにいった。

おハナさんは、短冊の下に立って水をまいていた。

「あの」

俺が声をかけようとしたら、おハナさんはひしゃくを水桶に入れて、後ろにある水の張ったタライをしゃがんで眺めだした。

ああ、この前見た花東が浸けてある。

「ん？だれー？」

おハナさんが俺に気づいて顔をあげた。いじわるで言ってるのではなく、本気で誰だかわからないといったような表情で。

「そ、その花、きれいですね」

「うん、これな、さっきお客さんから貰てん。こんなん初めてやで嬉しいわあ」

あれ、この会話、前にも聞いたことがある。

おハナさんの記憶って、生きてた頃の思い出だけが、ずっとルーブしてるんだ……。

悲しかった。けれど、ここで黙ってしまうのは、もっと悲しいから。思い出してほしくて、必死に言葉をつないだ。

「なにか洗う物とかありませんか」

「え？特に無いで？」

おハナさんが眉を寄せた。

「変なお客さんやねえ、そういうお商売なん？」

「そ、そうじゃありませんけど」

俺にクシを洗う仕事を任せただけ、覚えてないんだ。

「あの、じゃあ、髪を少しだけ、整えてくれませんか」

俺の申し出に、おハナさんは立ち上がって、背伸びして俺の頭髪を眺めた。

「べつに整える必要あらへん思うねんけど。かつこよー決まってるで？」

俺が困惑しているのが、顔に出てしまったらしい。おハナさんは、頷いてくれた。

「わかった。そんな程度の程度やったら、タダでやったるわ。店に入り」

先を歩くおハナさんに続いて、俺は店の敷居をまたいだ。畳の上に座らされて、四方を鏡で囲まれて、俺のこわついた髪を、おハナさんが丁寧にクシですいてゆく。

どの鏡にも、俺しか映っていない。

「んー？クシがむっっちゃ綺麗になっつとる……」

それ俺が洗ったんです。

「もうすぐ、七夕ですね」

「あれ、もうなん？」

「はい。こっちは八月の七日なんです」

「知つとるよ。七月に叶わなんでも八月があるやん思えるで素敵やね」

笑顔で、俺の髪をクシですく。

俺は、ぎゅっと自分の手をにぎりしめた。

「おハナさん」

なにー？と返事がきた。

「俺、おハナさんのこと好きです」

クシが止まった。

「……あんたあ、どっかで見たことあるなあ」

おハナさんは、鏡の中の俺の顔をじつと観察した。そして、はかなく目を伏せた。

「おーきに。でも、ごめんな。うち、旦那がおんねん」

「……その人のこと、愛してますか」

「愛してなかったら、五年も待つとらへん」

おハナさんが再びクシを動かした。

「少し耳元切りそろえたるでな」

俺は返事をして頷いた。

この世におハナさんを縛ってるものは、爺ちゃんだけかと思っ
てたけど、七夕もあつたんだ。いつも毎年、天の川の下で、おハ
ナさんはたった独りで待ってたのかもしれない。

「今年は、願ひ事が叶うといいですね」

またクシが止まって、後ろで微笑む気配がした。

「うん。おおきにな」

その声は明るかったけど、悲しくも聞こえた。でも、おハナさ
んは恨みなんかでここににいるんじゃない。

ここに居るのが、辛くない。

「ああ、思い出したわ」

おハナさんの冷たい指が、俺の顔を上向させた。

「あんた哲っちゃんやろ」

「はい！」

うれしくて、思わず声でかくなつた。

おハナさんが、へへっと照れ笑いだした。胸が痛んで、それでも、
あつたかくなれた。

俺、おハナさんが好きだ。

おハナさんの願ひ、俺が叶えてあげなきゃ。

「今、なにしてるの？」

しばらくネットから離れている間に、俺はいろんな人から心配
されていた。

ピーチクで繋がっているクラスメイトや、ブログを楽しみにし
ている人たち、チャット仲間。ブログには簡単な暑中見舞いの上
げ、他は久々に文字を打つてみたら、予想していたよりも大勢の
人が応えてくれた。

うれしくなって、久しぶりに長時間パソコンの前に座つた。ブ
ログも炎上までにはいたらなかったから、溜まったコメントをキ
レイにした。

もう、ウソなんかつかない。見栄も張らない。正直になにもな
い夏休みだったって書こう。

ケータイが鳴つた。俺は片手でそれを取り、耳に当てながらパ
ソコンをいじつた。

「もしもし母ちゃん？どうしたの？」

「……帰ってもいい？」

すごく疲れた声だった。母ちゃんらしくない。

「いいけど。母ちゃんどうしたの？」

「……取材、夏休みの観光客に向けてパンフレット作ってたんだけど、企画が取り止めになったの」

仕事のことがわからない俺は、こういうときなんて言えばいいのかわからなかった。

「昨日、取材先の文化遺産がひどいラクガキされたのね、消すのも時間かかりそうだからって、宣伝しないでくれて言われたのよ。急ピッチで作ったチラシもパンフもぜんぶ回収よ……」

いつもは、こんなことがあったって母ちゃんはいじけないのに。よっぽど張り切ってたんだな。

「今から帰っていい？あんたの顔見たい」

「うん。待つてるよ」

母ちゃんが電話を切るのを待ってから、俺もケータイを切った。今から帰るなら、夕方に到着するかな。向こうもケータイ持ってるし、なにかあれば連絡するだろう。

またケータイが鳴った。今度は秀樹からだ。

「もしもし秀樹？」

「あ、さ……ちよっと困ってたんだけど」

「どうした？」

「俺ん家のパソコン、見てくんねーかな」

パソコン？ああ、秀樹も動画とか見たりするんだ。持ってた当然か。

まあ、今時だれがいつパソコン初めてもおかしくないな。

「フリーズしたのか？」

「と、とにかく来てほしいんだ。お前にも、謝らなきゃいけないことあるし」

「え？」

「ちよっと前にさ、お前に、プログやめてみろって言ったじゃん……ごめん、アレ」

秀樹がいったい何を言いたいのか、よくわからなかった。

「うん、じゃあ今から行くよ」

俺はとりあえず、秀樹の家に向かうことにした。

秀樹には兄ちゃんが二人、弟が四人いる。そのうちの二人は双子の赤ちゃんと、ベビーベッドの中で火が点いたように泣いている。

家の中は弟たちのオモチャでぐちゃぐちゃ。二階では兄ちゃんの一人がバンドの練習をしているそうで、ベースの音がポウンポウン鳴っている。

「にーちゃん、双子が泣いてっから音下げろよなー！」

そう叫びながら、秀樹が二階に上がっていった。俺はもう少しチビたちと遊んでいたかったけど、秀樹が急かすからしよしよ階段を上った。

秀樹の部屋に入ると、もうパソコンが点いていた。あ、俺のプログが開いてある。

あれ？よく見たらこれ、俺のじゃない。

「そっくりだろ、お前のと」

秀樹が、くもった顔でパソコンの横に立った。プログの型から使ってるプログパーツから、目次の種類や位置まで、ぜんぶ俺の

と同じだ。

「俺、悪気はなかったんだ。お前が楽しそうにブログやってるの知ってから、俺もやってみたくなくて、でも詳しいやり方とかわかんなくて、兄貴たちに聞いても教えてくなくて……」

秀樹のパソコンはやたら傷だらけだった。兄ちゃんのお古なんだろう。

「それで、お前のマネしてみたんだ。あとから自分流に直すつもりだったんだけど、変更の仕方とか、ちっともわかんなくてさ……」

いやいや、独学でここまでするのって逆にすごいよ。

秀樹はマウスを動かして、ブログのコメントに飛んだ。そこには、たった一言「これあいつのマネじゃね？」と書かれていた。

「これも閉鎖するよ。だから消し方、教えてくれ」

「でもブログやりたかったんだろ？」

「おう……野球のこととか、歴史とか、載せてみたかったよ。でもこのままじゃお前のバクリだし、よくわかんないから続ける自信もないし」

コメントじゃなくて、ブログを消したいなんて。直球な秀樹らしい思いつめ方だと思った。

「ずっと黙っててごめんな。言い出せなかつたんだ。お前が怒るかと思って」

「じゃあ、これ閉じてもいいんだな？」

「おう」

「でもブログは続けられるぞ」

俺は秀樹のパソコンの前に立った。

「俺のブログでいっしょにやろうよ。載せたい写真とかあれば俺が代わりに掲載するし」

横で秀樹が、目をばちばちした。

「いいのか？」

「うん。俺たちまだ子供だし、ブログはシユミだし、だろ？ 自由によつていいと思うよ」

俺はさっそくブログを閉じる作業に移った。パスワードが必要だから、秀樹に聞かないと。

「へへっ、哲司ありがと。俺いっぱい書きたいことあるんだ！」

「うん、どんどん書いてくれよ。俺も楽しいしさ」

家に帰ったら自分のブログもいじらないとな。少しケンカっ早い秀樹のために、荒らしが来ないように細工をしよう。

秀樹もパソコンに慣れてきたら、自宅でブログの編集もできるだろうし。一つのサイトを数人で共有するのは珍しいことじゃない。

「あれ？秀樹このパソコンにワクチンソフトって入ってる？」

「え？なんだそれ？」

「こ、これは……苦戦の予感がした……」

母ちゃんから電話があつて、俺は駅まで迎えに行った。

母ちゃんはビールで酔っ払ってて、支えてやらないとアパートまで戻れなかった。ソファに寝転がすと、母ちゃんは赤い顔でテレビのリモコンに手を伸ばした。

「哲司、聞いたよお？親戚の家からお位牌と眼鏡なんか借りてどうすんの。サイトに載せないでよねえ」

「そんなことしないよ。ちょっと用事があつて持つてくんだよ」
俺はテレビを見始めた母ちゃんの横をとおり、玄関から抜け出した。

階段を駆け下りて、居酒屋の多い明るい夜道を走った。

オレンジの街灯でぼんやりと揺らぐ店先には、どこも笹が飾られていた。側溝に笹を立てかけて、紐で縛って固定している。

たくさんの短冊が夏風に揺られて、笹がしゃらしゃらと音をたて、軒先の風鈴が追いかけるように鳴ってゆく。

それら全てをトンネルのように駆け抜けて、田んぼの脇を走り、駄菓子屋さんの前を通って、町中の明かりを下から受けながら山道を登った。たくさんの螢が、辺りを飛んでいる。

おハナさんがいた。笹に七夕の飾りのついた変わったもようの浴衣を着て、のれんに手を伸ばして店じまいしようとしている。

「おハナさん！」

声をかけたら、おハナさんが手を止めて振り向いた。

「掃除道具やろ。裏に置いてんで」

「あ、はい！」

「どないしたん？すつかりエエ顔になって。悩みも解決か？」

うれしそうに笑うおハナさんは、ふと、俺の手にある物を見て表情がなくなった。

「それ……」

言葉の出なくなったおハナさんに、俺は二つとも手渡した。

おハナさんには、これがいっただい誰の物なのかわかるみたいだった。とても大事げに、腕に抱きしめている。

「なんで帰ってきてくれへんかったの……」

おハナさんの伏せた目から、静かに涙が流れた。すこく、悲しげに泣くから、俺はだまって、背を向けて歩きたした。

「おかえり」

その声は、とても暖かかった。

「哲っちゃん」

名前を呼ばれて、俺は背を向けたまま足を止めた。

「ありがとう」

「……はい」

涙が出ないように、目を閉じた。

これでもう、おハナさんをこの世にしばらくのモノは、なくなった。

「じゃあ、さよなら」

この場にいるのが耐えられなくて、俺は逃げるように駆け出して山を降りた。

ところが、山道の入り口に、おハナさんが待っていた。

「これ、どこから持ってきたん？ちゃんと返さんと怒られるで」

おハナさんは呆然とする俺に、はいいと遺品を突き出した。

俺は、手を出すことができなかった。

「あなたも、山を降りませんか」

「気をつけて帰るんやで！」

おハナさんが、気丈に明るく笑った。それがおハナさんの答えだった。

「……」

俺は遺品を受け取ると、

「今まで、ありがとうございました！」

頭を下げてから、振り切るように走った。

背後のおハナさんの気配が、消えたような気がした。

ああ、振り向いたらきつと、おハナさんはいないんだ。

まだ話したいこといっぱいあったのにな。謝りたかったし、たくさんお礼も言いたかったのに。

でも、変わった俺を見てもらえて良かった。俺の想いを、知ってもらえて良かった。

家に帰ると、ベランダで母ちゃんがビールを飲んでた。

黙ってとなりに座りこむと、母ちゃんが空き缶をペこべこと鳴らした。

「何して来たの？」

「お墓参りみたいなこと」

俺は自分の膝に顔をうずめた。

「母ちゃんの父ちゃんて、どんな人だったの」

声が高くて来た。けど、母ちゃんは理由を聞かなかった。

「この町では悪く言われてたわ。情で生きてる人だったから、とにかく女が多くてね」

母ちゃんはベランダの柵に、腕をだらんとたらしした。

「でもね、奥さんを選んで人は、目の見えない芸者さんだったの。いつも男の客からかわれてて、放っておけなかったからって」

母ちゃんを見上げると、目が合った。

「あなたの婆ちゃんは幸せだったのよ。ちゃーんと孫のあんたを抱っこしてから死んじゃったんだから」

俺はまた視界がうるんで、膝に顔を押しつけた。

誰も悪くなかったんだ。爺ちゃんも婆ちゃんも、おハナさんも。ただ少し、爺ちゃんのお人よしが無責任だっただけだ。

母ちゃんがベランダから出て行っても、俺は座ったまま、膝で涙をぬぐっていた。

それから少し経って。すっかり元気になった母ちゃんは、また仕事場に戻っていった。今度なにか困ったことがあったら、俺も仕事を手伝うと言ったら、生意気だと笑われた。

その後すぐに、秀樹に誘われていっしょに海へ行くことになった。秀樹の兄弟と親戚のチビがたくさんいて、みんなで青い海をばしやばしや泳いで、夜は花火して、兄ちゃんたちの楽器を見せてもらったりと、ぎっしりと充実した一週間だった。半分くらいチビの子守りに追われてたような気もするけれど。

そんな本物の思い出は今、夏休みの記念としてブログに刻まれている。

俺は今、新聞部の部長に出された夏休みの課題で、髪結い屋と当時の道具を調べながら記事を作っている。

だれもいなくなつた古びたお店で独り、おハナさんの使っていた仕事道具を眺めては、ひとつひとつ調べている。

そうしていくうちに、ここでのあの人の生き様が、わかってくるような気がした。おハナさんは本当に、この仕事に誇りを持っていたのだと、道具の使い込み具合でわかった。

俺も将来は、情報処理やネットにたずさわる仕事をしたい。まだ具体的にしばれてないけど、これが俺の生きる道だって誇りを持ってやるような大人になりたい。

ふと、鏡の後ろにタッパーを見つけた。いつかの、スイカを差し入れたときの容器だ。中身はなくて、代わりにメモが入って

はげのむらさき

いた。ふたを開けると、ごちそうさま、と書いてあった。
お店の軒下には、風鈴のように一枚の短冊が揺れている。俺が
告白したあの日に、おハナさんに秘密でこっそりと飾っておいた
物だ。

あの人が書きたかった、本当の願い事を書いて。
「大事な人と天の川の下で、また会えますように」

おしまい

空^{から}つぽの幸せ

高山市花里町

宮本清則

今朝も私は、いつもの時間に目覚め、いつものとおり朝食を済ませ、いつものように会社へ行った。いつもと違うのは、今は私は会社を辞めたということ。このあとなんの予定もなかったので、父母の眠る墓地へ行った。

少し長めのマツシユヘア、澄んだ目をしたかわいい子だ。

小学生だろうか？ それとも中学生？ 私はその少年を気にしながら、父母が眠る墓前に花を供え、手を合わせたあと声をかけた。「だれのお墓参り」

少年は私を見ると、ぼう然として何も答えず、しばらく私の顔を見ていた。

「ごめん、びつくりさせたみたいね」

やさしく言って、笑顔でうなずいてみせると、少年は相づちを打つかのように私と同じようにうなずき、

「父^{ちち}さんと母^{はは}さん。それと、森田家のご先祖様」

しっかりとした口調で答えてくれた。

「あなたは、だれのお墓参りですか」

少年も聞いてきた。

「私もお父さんとお母さんよ」

「だけですか。ご先祖様はいないのですか」

「いるに決まってるでしょ」

「だったら、ご先祖様も、だと思えます」

（生意気な子。こんな子どもに、かかわらないほうがいいか）

思って、お参りを済ませ帰ろうとすると、

「お茶、していきませんか」

（何、この子？ 二十八歳の女性をナンパするっていうの。それも墓地で）

「きみ、幾つなの」

「今は十五だけど、もうすぐ十六です」

「中学……じゃなくって高」

「いいえ、社会人です。働いているし」

たしかに話す言葉はしっかりとしているが、仕事をしている社会人には見えない。

生意気で口の達者な子だが、澄んだ目を輝かせ、私の目をしっかりと見据えて話す少年の言葉はうそをついているようには思えなかった。そんな子に、私の気持ちは微妙に動いた。会社も辞め退

屈しのぎもあって、

「いいわよ、少しだけなら付き合つてあげる」

少年の誘いに乗つてあげると、幼さの残る顔を私に向けにっこり笑つた。

「それじゃ、近くにぼくの行きつけのお店があります、そこへ行きましょうか」

(行きつけ……どこまでも生意気女子)

「そのお店は墓地から歩いて二、三分のところにあつた。小さな店だ。入り口の横に置かれてある看板には『喫茶・馬』と書いてある。

私たちがお店に入ると、店のマスターらしき男は「いらつしやい」と野太い声で無愛想に言つた。私たちのほかに二人の客がいたので、私と少年は二人の客から離れた席に座りオレンジジュースを注文した。

私は一瞬店内を見まわし、その動作をすぐにやめた。この店は、この子にとつてあまりよくない店だと分かつたから。

マスターらしき男はジュースを持ってくると、私だけをいぶかしげに見て軽く頭を下げ、ジュースをテーブルに置くと急いで二人の客の方へ行き、競馬の話に夢中になっていた。

「今ジュースを持ってきた人がこのマスターです」と少年が教えてくれたので、「感じ悪い人ね」と私が言うと、少年は私を氣遣うように、「ここ気楽な店なんです」と言つて自分のことを話し出した。

少年の名前は森田拓。三ヵ月前まで祖父母の家から高校へ通つていたが、学校を辞め働くようになってからは、アパートを借り

今は一人で生活していると話してくれた。

「仕事は何をしているの」

「もう少し親しくなつたら話します」

(この子、このあとも私と付き合うつもりでいる……これって喜んでいいの)

一瞬考えた。悪い気はしなかつた。

「きみ、私を幾つだと思つてるの」

「幾つだつていいのです。かわいいから」

(私が、かわいい？ 冗談じゃないわよ)

この子の考えていることがよく分からない。時折、ほおづえを突くしぐさは女の子のようにかわいい。そんな子に、私はかわいと言われ戸惑つた。

「ほくも、あなたの名前を聞いてもいいですか」

「いいわよ。私の名前は池上しん子っていうの」

「へえー、すてきな名前ですね。女優さんみたいな名前ですね」
女心をくすぐる言葉。この子が言うのと素直にうれしかつた。

また両手でほおづえを突いている。小首を右に傾けうれしそうに私の顔を見ている。澄んだ目を向け、まばたきひとつしない。私も彼を見やう。互いの視線が合うと、どちらからともなく目をそらせた。それでもすぐに少年は私の顔を見ている。

「しん子さんは、ぼくのことを拓つて呼んでください」

(しん子さんか……)

こんな子どもにしん子さんと呼ばれて、悪い気がしない自分が氣持悪い。

「拓はどうして私を誘つたの」

「宿命です。だから、もう少しお付き合いをしてもらいます」

勝手に決められても困る。それに、宿命の意味がよく分からない。言葉遣いもよく、しっかりとした子だけれど、何か変。ただのおませな子でもないようだし、うかつなことは言えないと思っただけれど、私も少年のことをもっと知りたいと思ったので、「拓、お付き合いしてあげる」と言ってしまった。

拓と「喫茶・馬」で別れて今日で五日目。携帯の番号も教えておいたのだけれどなんの連絡もない。私も拓の携帯番号は教えてもらっていたが、私から連絡はしなくなかった。それでも拓から見たら私はりっぱな大人、プライドもある。本気でその気になった自分がばかみたい。「ふん」と自分のことを鼻で笑ってやった。職探しでもしようとマンションを出た。ハローワークへ行くつもりだったのに、なぜかまた墓地に来ていた。

父母の眠るお墓を見て不思議に思った。

五日前、墓前に供えた花が生き生きとしている。それに新しい花も足してある。

（たれかが水替えをしている。だれが？）

私の脳裏に浮かんだのは拓だった。あの子がそんなことをするはずがないと思うのだけれど、拓のほかにだれも思い浮かばなかった。

拓の住むアパートは墓地の近くだと聞いていたので探してみたが、それらしき建物は見つからなかった。で、「喫茶・馬」へ行ってみた。

お店の前で大きく深呼吸をして、軽くせき払いをし店に入った。

客はいなかった。マスターは「いらっしやい」と相変わらず無愛想に言う。私は前に来たときと同じ席に座りコーヒーを注文した。マスターはコーヒーを持ってくると、私に断りもなく同じテーブルの前に座り、私の顔をしげしげと見つめ、

「あなた、この間うちの店に来たよな。今日は一人なのか」

「一人だけ」

「そうか」

気色の悪い男。ヘアスタイルのせいかも。ヘアスタイルなんてもんじゃやない、寝癖くらい直して店に出てほしい。それに言葉遣いも悪い。

「あなた拓のこれか」

マスターは言って、小指を立てた。むかついたので顔をならんでやると、マスターは「そうか」と、さりとて目を見をそらす。話のテンポがうまくかみ合わない。

拓の名前が出たので聞いた。

「拓のことよく知ってるの」

「ああ、月に四、五回は店に来てくれるから、名前ぐらいは知ってるさ」

どうして拓のような子がこんな店に。拓と来たときにはよく見なかったけれど、店内は相当ひどい。タバコのヤニで汚れた壁には、女性の裸の写真や馬の写真が画びょうやセロテープで無造作にはりつけてある。掃除もしていないのだから、窓の棧にはほこりが山のようになっている。そんな店に私は一人で来ている。自分の行動に自信が持てなくなってきた。

私の仕事を聞かれたが、無職とは言いたくなかったので黙って

顔をそむけた。マスターはそんな私の態度にも「そうか」と言う。なんの意味の、そうか、なのか分からないけれど、マスターの気だるい言いまわしが、なんだかやさしい言葉に聞こえる。

私が黙っているとマスターは、腕を組み私側のテーブルの前後をいつまでも見つめていたので、私はマスターの顔を拓がするよう、片方だけほおづえを突いて上目づかいで見つめてやると、

「女の顔久しぶりに間近で見ると、牝馬はいつも見ているが」
言って、マスターは照れ笑いをしていた。

牝馬と一緒に思っていたけれど、今は怒る気にもならない。

言葉遣いも見た目も悪いが、話していると嫌いだっただ要素が一つ一つ消えていく。馬好きの、ぐうたら。それだけのやつ。そう思うとお店の感じもこんなものかなと思えてくる。

マスターの顔は、やさしくジャツジしてあげてもほめられた顔じゃないけれど、どことなく哀愁ただよう顔をよしとした。寝癖ヘアもよく見れば、この男には似合っている気がしてきた。

勝手なことを考えながらひとしきりマスターと話をした。その間、店には一人の客も来なかったが、マスターは気にもしていない。拓の言うとおり「喫茶・馬」は気楽な店だった。

会社を辞めて二週間が経った。

一般産業ロボットの設計を主な仕事とする滑川エンジニアリング株式会社には、私は二年前に事務員として入社した。田頭聡史はその会社の三年先輩で、仕事もよくできイケメン。当然そんな彼のことを意識するが、田頭聡史には恋人がいた。二年先輩の今川聖子だ。だから私にとっての彼は、あくまでもあこがれの上司に

過ぎない。

彼が結婚をすると分かったとき、軽いショックはあったけれど、結婚相手を聞いて軽いショックではおさまらなかった。

田頭聡史の結婚相手は、滑川社長の長女滑川早苗だった。二人の結婚は前から決められていたことらしい。

(今川聖子は……彼女はどうなるの?)

私の心配することではないけれど、彼女のことを気になった。そして二人の態度に私はだれも信じられなくなった。

「田頭さん、おめでとう。次期社長ね」

「ありがとう。きみも岡谷君とは近々なんだろう」

「ええ、来年あたりって彼は言ってるの」

「よかったじゃないか。でも、たまには会ってくれるんだろ」

「当然よ。いつでも電話して」

「しーっ、声大きい。だれか来た……」

田頭聡史と今川聖子の会話だ。

盗み聞きをしたのではない。聞こえてしまったのだ。

岡谷君は田頭と同じ企画部の田頭の後輩。その岡谷君と私の後輩横山佳代とはラブラブの関係だったはず。どうなってるの。

会社のだれひとり信じられなくなって私は会社を辞めた。今も考えるだけで身震いがする。私もそんな社員の仲間だったのかと思ふと悲しくなる。

「寝よ」

今日も一日を、何をするでもなしに、ごろごろしているだけで終わらせた。

雨は降っていなかったけれど、どんよりと曇った空は私の行動をよらせる。働きたい気持ちも意欲もわいてこない。

毎月無料で配布される地域生活情報誌があったので、ペラペラとめくってみた。大半が広告宣伝のうすっぱらな冊子だが、読者コーナーは結構面白い。読者からの投稿記事が載せられているのだが、言いたいことを自由に書いて、投稿者のストレス発散の場になっている。他人の不満は自分への慰めにもなっていて、このコーナーだけはよく読む。その中に、気になる投稿文を見つけた。「ぼくの彼女は五歳年上の、とってもかわいい人です。でも、ぼくのことを好きだと言っておきながら、ぼくが電話をしても出てくれません。これって振られたってことでしょか。だれか教えてください」

【豊明市・Mさん】

「拓？ そんなわけないか。でも、拓かも」

何回もその投稿文を読み返した。

年上、かわいい人、森田のM。これだけを見ると、拓が投稿をしたように思えたが、五歳年上と書いてある。拓は私の年齢なんて知らないはず。第一、私と拓は五歳違いなんかじゃない。それに、拓を好きだなんて言った覚えもない。

結局、拓ではないと結論づけたのだけれど、そのとき無性に拓に会いたくなって、私は投稿気分ですべて電話をしてしまった。

「こちらは……です。おかけに……電源が……電波……こちらは……です。おかけに……」

同じ言葉の繰り返し。拓の携帯にはつながらなかった。

電話なんてしなければよかった。

私は不安になると、お墓参りをする癖がある。そして今日も私は、墓地に来ている。

駐車場にパトカーが止まっていた。二人の警官が私に近づき、中学生ぐらいの子を見なかつたかと言つてその子の詳細を言う。身長百五十五㎝、百六十㎝、髪は長め、紺色の服を着た、そんな子を見なかつたかと聞いてきた。「男の子ですか」と確認すると、「女の子かもしれませんのでも言えません」と言う。

拓を思い浮かべた。私の身長は百六十㎝。拓は私より少し小さい女の子のような男の子。拓を捜しているように思えた。

「あのー、何があつたんですか」

「ひつたくりです。目撃者の証言から、中学生ぐらいの子ともだということとは分かつているのですが、男なのか女なのかは分かつていません。あなたも気をつけてください」

警官はパトカーに戻つて行つた。私はパトカーが動くまでじーっとしていた。

拓がひつたくりなんてするはずがない。でも、もし拓だったら不安な気持ちで拓のご先祖様のお墓の前に来て、その不安はますます大きくなつた。

森田家のお墓の線香が消えかけていたのだ。消えかけているということは、拓が来ていたことになる。辺りを見まわしてみたら拓の姿はない。

墓地の南側と西側はし字形につながつて雑木林で囲まれている。私の幼いころは、その雑木林は北側にもあつて、墓地をUの字に囲うかのように立ち並んでいたことを思い出した。当時のこの辺りは民家も少なく雑木林や田畑ばかりのさみしい場所だった。こ

こ数年の間に、土地改良で道路ができ民家も増えた。今は北側の雑木林はなくなり広い道路が通っている。東側の道路は昔のままだ。

私は雑木林の方へ行ってみた。そこに犯人が潜んでいると思っただけではないけれど、気になった。

雑木林の中からザワザワと音が聞こえる。音の聞こえた方向に恐る恐る目をやった。

(ん……だれかいる。雑木林の中にだれかが。ひったくり犯?)

怖くなって逃げようとしたとき、「しん子さん」と私の名を呼ばれた。振り向くと雑木林の中から拓が出て来た。

(怪しい。やはり拓がひったくり犯。雑木林の中で隠れていたに違いない)

「しん子さん、携帯が壊れて連絡できなかつたんです」

そんなことはどうだっていい、とにかく警官に見つかってはいけない。

「拓、アパート近くなんですよ。拓のアパートへ行ってから話さあ、早く」

せかす私を不思議そうに見ながら拓は、辺りをキョロキョロ見まわし、人のいないことを確認するとまた雑木林の中へ入って行くようにした。

「拓、どこへ行くの、アパートへ行くのよ」

「ぼくのアパート、この雑木林の中にあるんです。ぼくについて来て」

(雑木林の中に、アパート?)

不安な気持ちで拓のあとについて雑木林の中へ入って行くと、

金網が張ってある場所に来た。拓はその金網の一部分をドアのように開ける。明らかにあとから取り付けられたドアだ。金網をぬけると広場に出た。その広さは三百坪はあるだろうか。広場の周りも金網で囲ってある。その広場の片隅に平屋の家があった。拓はその家に近づいて行く。ずいぶん古い家のようなだが造りのしつかりとした大きな家だ。

「しん子さんだけに本当のことを言おうかなあ。とにかく中に入れて」

古い家をリフォームしたのだろう、外見以上に家の中はきれいになっている。リフォームをしていない部屋もあったが、その部屋は風情のある部屋だ。部屋数もたくさんあるみたいだ。

「すこい家に住んでるのね。家賃高いんでしょ」

「その心配はありません。ぼくの家ですから。ご先祖様からもらった家です。さっき本当のことを言うつてばく言いましたよね。しん子さんだけに言うことですから絶対にだれにも話さないでくださいね」

拓は神妙な顔で私に言っただけで話してくれた。

拓は二歳のときに父、七歳のときに母を亡くしている。祖父母も拓が一歳のときに、飛行機事故で亡くなった。父の記憶はまったくないが、母の記憶はたくさんあると言った。そんな拓を、豊明に住む母方の祖父母が、わが子のように育ててくれた。

「高校を出たら独り立ちをするのよ」

祖母が拓に言い聞かせていた言葉だ。しかし拓は高校を辞めてしまった。

拓は二歳のときに父、七歳のときに母を亡くしている。祖父母も拓が一歳のときに、飛行機事故で亡くなった。父の記憶はまったくないが、母の記憶はたくさんあると言った。そんな拓を、豊明に住む母方の祖父母が、わが子のように育ててくれた。

「高校を出たら独り立ちをするのよ」

祖母が拓に言い聞かせていた言葉だ。しかし拓は高校を辞めてしまった。

「この家と土地は、ご先祖様、父さん、母さんが、拓のために残してくれたのよ、悪いことに使ってはダメよ」

拓が高校を辞めると言った日、この大きな家と周りの雑木林は、拓の物であることを祖母は拓に教えた。

「ただし決して他人に、この家と土地のことは、むやみに口にしてはいけませんよ。自分はアパートに住んでいると言っておけばいい。分かったわね」

祖母が拓に、そう言い聞かせる気持ちに私にも分かる気がする。拓にとっては、ばく大な財産、それに群がる人間を警戒してのことだろう。雑木林だけでも数千坪はあるだろう。ましてや今、この辺りは土地改良で、いずれこの場所も開発されるだろう。

「だからアパートだって言ったの」

「ええ、しん子さんとはまだそんなに親しくなかったし」

「今もまだそんなに親しくないとと思うけど」

「でも、しん子さんだったら話してもいいと思いました」

「どうして」

「ばくの本能です。ばくにとつて自然なことなんです」

何を言っているのか理解できない。

「しん子さん、古い部屋があったでしょ、あの部屋は母さんとの思い出がたくさんあるんです。だからジーバは、そのままにしておいてくれたのだと思います」

(ジーバ……?)

だれのことかと聞くと、祖父のことだと言う。祖母のことは、パーマと呼んでいると言った。なんとなく分かる気がする。

「この家、隠れ家みたいでいいと思いませんか」

そうよ、私の目的はさっきの警官のことを聞きたかったのだ。でも、なんと行って聞いたらいい。ひつたくりをしたの、なんて聞けない。とりあえず私は拓の生活費のことを聞いてみた。

「拓、生活費はどうしているの」

「仕事のことですか。教えてもいいけど、しん子さんも教えてくださいなね」

「うん、教える。私は無職。汗水流すの嫌いな」

私はわざと遊び人のように言った。これも私の作戦。ひつたくりをするくらいの子なら、当然仕事なんて嫌いな子だと思おう。だから、同じ仲間意識を持って話してくれると思った。

「しん子さん、それはダメです。人は働くようにできています、ばくは思います。働かなくては人は生きてはいけません。遊ぶ悪いことさえしなければ、どんな仕事でもかまわないのです。遊ぶばかりいると、悪いことを考えるようになるんですよ。働くということは人としての使命なんですから」

(説教……。子どもが大人に説教をするー)
しかし拓の顔は真剣だった。私のことを本当に心配しているようだ。

「拓、今言ったこと、拓の本心」

「こんな基本的なことに、本心も何もありません」

拓のきぜんとした態度を見て、この子はひつたくりなんてしてないかと確信できた。

拓がひつたくり犯ではないかと心配していたことや、警官に聞かれたことを拓に話すと、ケラケラと笑いながら私の仕事のこと

を心配していた。

「私のことはいいから、拓の仕事を教えてよ」

拓は首をかしげ、私の顔をしばらく見ていた。

「どうしたの、さっき教えるっていったでしょ」

「ぼくの事は、ニセの修行僧なんです」

本当にわけの分からないことばかり言う子だ。

「しん子さん、托鉢^{たくはつ}って知っていますよね。ぼくは托鉢をして、

心ある方の施しをいただきながら生活をしています」

修行僧も托鉢も知っている。けれどニセが気になる。

「拓、ニセって、うそにもつながると思わない」

「今はニセでいいのです。いずれ本物のお坊様になるつもりですから」

私には理解しがたい話だけれど、拓の澄んだ目で、やさしく見つめられて言われると、何も言えなくなってしまう。ただ、この子が心配でならなかった。別に私が心配することではないのかもしれないけれど、心配になる子だ。そんな思いもあって、心にもないことを口にしてしまった。

「分かった。拓、私も一緒に修行僧になる。ニセ修行僧なら私もなれるでしょ」

「ええー、無理です。女のしん子さんにはできません」

「なる。私もニセ修行僧になる」

拓を心配するということもあつたけれど、拓のあまりにも現実離れをした話を、この目で確かめてみたかつたし、そうしてあげなければならぬ気がした。

拓はダメだと言い続けるが、私は修行僧になると言い続けた。

「しん子さんは大人のくせに、わがままなんですな」

「大人はみんな、わがままなの」

拓は少し考えていたが、強引な私のわがままを、しぶしぶ許してくれた。

「それじゃ、二日後の朝三時に、ぼくの家に来てください」

（三時が……朝？）

朝だと言うのだから朝なんだろう。約束をして帰ることにした。玄関を出て、さっき来た雑木林の方へ行こうとすると、

「待って、さっき来た道は秘密の道です。この道は人に知られては困るんです。雑木林の出入りには細心の注意をしてください。それと、使うことはないと思いますけど、門のある出入り口も教えておきます。しん子さん、こっちへ来て」

拓について行くと、家の南側に車も通れるほどの広い道が雑木林の中にあつた。

長い。本当に長い道だ。道はさんだ雑木林の両側には鉄さくがしてある。この鉄さくは広場の金網につながっていた。雑木林が松の木に変わると、りっぱな門が見えてきた。ということは、今私が歩いて来た道は、拓の家の中にある道を歩いて来たということ……。

拓の話聞きながら想像してみる。広い宅地があつて、その宅地の周りを金網で囲い、囲みである金網を雑木林がまた囲み、拓の家から雑木林を出るための道があつて？ 頭が痛くなってきた。拓のことを生意気な子だと思っていたが、よく話してみればそうでもなかった。むしろ素直な子だ。あいさつもはっきりとでき、

明るい笑顔でいじけたところがまったくない。おそらく厳しく疑ウタガハシられた子なんだろう。そうでなければ、あんな言葉遣いや明るい笑顔はできない。少々とんちんかんなことは言うけれど、性格はいい子だ。

私は自分の性格が大嫌い。おせっかいで、それでいて心配性。両親が亡くなってさらに心配性はひどくなった。

こんな私でも、恋愛だっしてきたし、結婚を求められたことだつてある。結婚に踏み切れなかったのは、極度の心配性症候群(自分でつけた病名)のせいだ。私が思う幸せには、いつも不安が伴う。

拓のことだつて一人になると、なんとかしてあげたい気持ちとかかわらないほうがいいという気持ち表裏一体となつて私を悩ます。

修行僧になる、なんて言つてしまつたけれど、本当に拓のことを心配して言つたのだろうかと思ふ。その場かぎりの、単なる偽善者に過ぎない。

現に今、修行僧なんてしたくないと思つている。

(修行僧なんてやつぱりやめよう。拓の家へ行かなければいいのだから)

思つて、

(ダメダメ、約束は約束。子どもに、うそなんてつけない。拓のこと心配だし)

思い直した。

二日後、車で墓地まで行くと拓は墓地の前で待っていてくれた。

車を墓地の駐車場の片隅に止め、雑木林に入った。雑木林の中を歩いて行く拓の後ろ姿を見てふと思ふ。十五歳のかわいい少年と、二十八歳にもなる女が、懐中電灯を点け雑木林の中へ入つて行く。だれが見ても不振人物。

どうしてまだ夜も明けない三時でなければならなかつたのだろうか。まだ真夜中といつてもおかしくない暗さ。そのことを拓に聞くと、

「ぼくも今思つていました。こんな時間に来てもらうことはなかつたつて」

三時に待ち合わせたことには何も意味はなかつた。

家の中は一部屋だけが、ぼわつと明るかつた。ほかの部屋の電気は点けていない。そのぼわつと明るい部屋に入つて私はあ然とした。

部屋の真ん中に座卓を置き、その上に置かれたランプのあかりがゆらゆら揺れている。拓の持つていた懐中電灯を消すと、ランプのあかりだけになつて、なんとも言えない不可思議な世界へ来たような気がした。

「托鉢の準備をするにはまだ早いですね」

拓は言う、コーヒを入れて持つてきた。私はランプの置かれた座卓の前に座り、ランプのあかりを見ていた。

まだ暗い朝に起きて、拓の家に来たことは無意味ではなかつた。ゆらゆら揺れるランプのあかりの中で、拓のかわい笑顔を見ながら飲むコーヒ。穏やかな気持ちになれた。

外が少し明るくなると、拓はせわしなく動き出し、隣の部屋から大きなふろしき包みを持つてきた。

「白衣、じゅばん、法衣、頭陀袋、さい銭箱……。これだけあればいいか」

ふつつ独り言を言いながら、ふるしきの中の物を出すと、今度はすげ笠と地下足袋（たご）を持ってきた。

（こんな衣装をどうして持っているのだろう）

聞いてはいけないことのように思え、聞かなかった。

「しん子さん、ぼーっとしていないで、これ着てみて」

修行僧になるなんて、やつぱり言わなきやよかった。こんな衣装は着たくない。かといつて、今更やめるなんて言えない。私が躊躇（ちゅうちゆ）している、

「ほくも着ますから、順番を見ながら着てみてください」

拓は私がいるのに気にもとめずトランクス一枚になると、じゅばんを着てその上に白衣を着てみせた。

「はい、しん子さんも同じように着て」

拓の言うとおりにするしかなかった。

「服の上からでいい」

「服は脱いでください。下着は着けたままでかまいませんから」
（当たり前よ。下着なんか脱ぐわけがない）

拓は平然として言うが、私はイライラしてきた。

「拓、服、脱ぐんだけど」

「はい、脱いでください」

この子は何も分かっていない。私が服を脱ごうとしているのに、すました顔で私の前に立っている。

「拓、服を脱ぐって言うてるの」

大きな声で言っていると、

「あつ、こめんなさい。つい立を持ってきます」

やつとで気づいたようで、隣の部屋からつい立ではなく敷布を持ってきた。

拓は敷布の両端を持ち、自分の顔が隠れる位置まで上げ両腕を広げた。こんなものを広げてみても透けて見えているのに、私を隠したつもりでいる。

「見ないでよ。絶対に見るな」

強く言うと拓は、目をつむり必死で敷布を広げていた。

私が白衣を着ると、下は拓の運動用のジャージをはけと言った。何かの間に合わせなんだとすぐに分かった。

拓はまたさつきと同じように敷布を広げ私を隠した。目はしっかりと閉じていた。

「スカートは脱いでください」

（そんなことは分かっている。子どもじゃあるまいし）

私は完全に拓のペースにはまっていた。

「ジャージをはいたら、その上に脚絆（かばん）を巻きます。ぼくのまねをして巻いてください」

拓がするように、その脚絆とやらをジャージの上に巻いた。私が巻き終えると拓は、しばらく私を見ていた。

「うーん、ジャージの上に脚絆はおかしいか。しん子さん、ジャージはやめにします。脚絆をほどいてジャージを脱いでください。

素足に脚絆を巻き直してもらえますか」

やはり、ジャージは間に合わせだった。

「何よー、はかせたり脱がせたり、もうー」

私はおつつ言いなながらジャージを脱ぎ脚絆を巻いた。

拓を見ると、ばかんとして、私の行動を見ていたので、

「こら、見るな」

怒ってやると、慌てて敷布を広げた。

最後に法衣を着て、なんとかニセ修行僧のできあがりだった。

「しん子さん、すごくかっこいい。女性の修行僧ってよく初めて見ます。かわいくてかっこいい修行僧です」

かわいいは余分だが、私も早く自分の姿を見たかった。

そんな私の気持ちを察したのか拓は、隣の部屋へ私を連れて行き、母親が使っていたという古い鏡台の前に私を立たせた。

「どう、かっこいいでしょ」

拓が言う。

私も素直にそう思った。

初めての托鉢。髪をアップにして束ねた。玄関で地下足袋を履き、十五㎝四方のさい銭箱を首から掛け、渡されたすげ笠を持った。拓はリュックも背負っていた。

雑木林を出て少しの間、拓と一緒に何もしないで歩いた。

「それじゃ、ここからお互い両側に分かれましょう。しんさんは、ぼくより少し後ろで、ぼくを見ながら歩いてください。今日は家の前には立たなくてもいいですから」

拓が言ってくれてはっとした。実際に歩いてみて、他人の家の前に立つことはとっても勇気のあること。私は反対側で拓の様子を見て歩いた。

一軒目の家の前で拓はお経を唱え出した。

(どこでお経を習ったんだろ、)

拓がお経を唱えても、家からはだれも出て来ない。窓には人影らしきものは見えているのに。拓はお経をやめ、次の家へと歩く。二軒目の家でも、同じようにお経を唱える。玄関のドアが開いた。よかった、と思う間もなく拓の姿を見た家の人はドアを閉めてしまった。拓は閉められたドアに頭を下げ次の家へ。何回も何回も同じことを繰り返し拓は歩いて行く。私も黙ってついて歩いた。数件の家で施しがあった。拓に施されているのに、私に施されたような気持ちになつてうれしかった。

拓は今、何を思い、何を考えているのだろうか。私は早くこの托鉢が終わればいいと思っている。それは口に出しては言わないけれど、托鉢なんて私のすることではない。

私の前に小さな女の子が来て立ち止まった。私は驚いて少し顔を上げた。女の子の少し後ろに女性が立っていた。母親だとすぐに分かった。

「はい、お坊様」と女の子は言つて、さい銭箱の中へお金を入れ手を合わせている。後ろの女性も手を合わせていた。ありがとうと言いかけて、言葉を飲んだ。拓に、施しがあつても何も言つてはいけなと言われていたことを思い出したから。私は頭を下げ合掌をした。女の子はうれしそうな顔をして女性のもとへ戻って行く。私はその女性にも合掌をした。二人がしてくれた合掌の、二倍も三倍も長く合掌をしていた。それでもまだ足りないような気がした。

二人の後ろ姿を見ながら、何もしていない私だけれど、なんだかつてもいいことをしたような気持ちになり、(この親子が幸せになれますように)と、真剣に二人の幸せを祈った。

公園の前に来ると拓は休憩をすと言った。緊張の連続で疲れ
ていることも忘れていたが、「しん子さん、疲れたでしょ」と言
う拓の言葉で初めて疲れを感じた。拓はリュックの中から菓子バ
ンと缶コーヒーを出して私にくれた。普通の菓子パン、普通の缶
コーヒーなのに、なんだかとっても高価な物に思えた。

「ここで引き返します」

拓が言ったので、帰りは私も家の前に立ってみようと思っただ
れど、思っただけで何もできなかった。

法衣を普段着に着替え、テーブルの部屋で今日の施しを出し
合った。拓には千五十円の施しがあった。

「しん子さんにも施しがあったんでしょ」

拓に言われて、女の子の施しを思い出した。

「あるある、あったのよ。ただ、ぼさーつとしてただけなのに」

女の子が施してくれたお金を手にした。ちり紙に包まれていた
ので開いてみる。

(えっ、キャンデー一つ……)

拓はそのキャンデーを見ると、

「すごいですね。ぼくまだキャンデーなんて施されたことは一度
もありません」

拓は言いながら、キャンデーを盆にのせ、お金は封筒に入れた。
「仏様に報告に行きます。しん子さんも一緒に来て」

テーブルの部屋を出て、廊下を右に行くと八畳の部屋があった。
部屋には大きな仏壇のほかには何もなかった。

キャンデーと封筒に入れたお金を仏壇に供えようと、拓は合掌を

して何やらモニョモニョ言い、仏壇の下の引き戸を開け、重箱に
よく似た箱を出すと、そこへ封筒を入れ再び仏壇の下へ箱を納め
た。

「しん子さん、これで今日の修行は終わり。テーブルの部屋へ戻
ります」

拓はキャンデーを手にしてテーブルの部屋へ戻って行く。私が
部屋に入ると拓は台所へ行った。しばらくすると、半分にしたキャ
ンデーを小さな皿にのせ持ってきた。

「しん子さん、いただきますようか」

キャンデーを口に含み目をつむる拓を見て、さっき、ちり紙を
開いて、(なあーんだ、あめか)と思っていた自分を恥じ、慌て
て半分のカンデーを口に運んだ。キャンデーを口に含み目をつ
むっていると、親子の姿が脳裏に浮かび、初めて人の幸せを祈っ
た自分を思い出した。あのとき私は、無条件でこの親子が幸せに
なつてほしいと思つていたはず。

「人の心コロコロ知っていますか。人の心はいつもコロコロ
と変わるんです。善い心になつたり悪い心になつたり」

拓は独り言のように言った。
(人の心コロコロか)

拓の言うとおりだ。私の心はいつも自分勝手にコロコロと変わ
る。

少し反省をして、拓に明日も托鉢に行くのかと聞くと、
「明日の托鉢はお休み。ぼくはまだニセ修行僧だから、毎日なん
てできません。托鉢は一日おきに決めています。遊びたいし。し
ん子さんは、明日も托鉢に行きたいですか」

拓は明日も托鉢に行きたいですか

行きたいですか、と聞かれて、行きたいと答えられない私？

「明日はしん子さんと水族館へ行きたい。いいと思いませんか」

拓の言葉で決定。私は、明日は托鉢に行きたくない。

「私も水族館へ行きたい。行こうか」

「はい、若い二人です、おおいに青春を楽しみましょう」

「若い二人？ 若い一人だと思うけど……まあ、いつか、まだ若いつもりだし」

遊ぶ話はいつも簡単に決まる。水族館へ行くことが決まると、話は水族館のことばかりで、今日の托鉢の話はどこかへいつてしまった。

約束の時間が過ぎても拓は来ない。

（携帯早く買えばいいのに、電話もできない）

拓の家まで行けばいいのだけれど、今日の私はとっておきの、お気に入りの洋服を着ていたので雑木林には入りたくなかった。いくら待っても拓は来なかつたので、仕方なく家まで行ってみることにした。

洋服を気にしながら金網のところまで来たのに、秘密の出入り口が見つからない。

（たしかこの辺だったはず）

右往左往していると、いやな音と同時に背に悪寒が走った。お気に入りの洋服が木の枝に引っ掛かって、スカートのすそが少し破れた。

（拓のばかー。あんたのせいだからね。もうー）

私は泣きたくなかった。

木の枝に引っ掛けた洋服をはずそうとすると、少しずつ服が裂けていく。すそに気をとられているとほかの箇所を引っ掛けてしまう。もうダメ、この枝を折るしかない。私は枝を持っておもいきり引っ張った。枝は簡単に取ることができた。というか、枝はそこに置かれていたもので、枝を取ると秘密の出入り口が見えた。おそらく拓が、秘密の出入り口をほかのだけに見つかからないようにと置いたのだろう。

イライラしながら拓の家に行く拓はまだ寝ていた。

（こいつ、ほんとむかつく）

私は大声で拓を起こした。

「こらー、拓、何時だと思ってるの、起きろー」

「はあー、はあー」

「何を寝ぼけているの」

「はあー」

拓の息遣いが、おかしい。

「しん子さん、熱が、はあー、あるみたい」

拓の顔に手を当ててみる。すごい熱だ。

「拓、すぐ病院へ行こ」

「いやです。病院は……」

「ダメよ、病院へ行かなきゃ。薬は、薬は飲んだの。飲んでないのね。体温計はどこ、ないの。やっぱり病院へ行かなきゃダメ」

「いやです。はあー、病院は、絶対に、いやです」

なん回言っても病院を拒否する。仕方がないので冷蔵庫の水で氷水を作りタオルで冷やしてあげることにした。なん回もタオルを取り替え冷やし続けた。洗面器の氷水がすぐにぬるくなるほど

拓の熱は高かった。

「しん子さん、はあー、ごめんなさい。水族館」

「黙って。水族館なんていい、黙って寝ろ。病院へ行かないやつは黙って寝ていろ」

私は強く言つて掛け布団をもう一まい掛けてやり、二本のタオルで交互に冷やし続けた。それでもすぐにタオルはあつたかくなる。

段ボールの中にナイロン袋があつたことを思い出し、その袋に水を入れて拓の額に当てた。袋を持つたまましばらくの間、ずーっとそうしていた。

さつきまで、はあーはあー言つていた声が消え、寝息が小さく聞こえる。

(少しは楽になったのかも)

私は拓からそつと離れ、洗面器の氷水を作り直し、額のタオルを冷たいタオルに取り替え、拓の家を出た。

秘密の出入り口から「喫茶・馬」へと急いだ。

マスターに薬屋がないかと聞くと、「店を出てすぐ左に曲がった二軒目だ……」と教えてくれた。マスターはまだ何か話したいみたいだけれど、私は「今度ね」と言つて急いで店を出た。

薬屋で拓の容体を言うと、座薬も持つていくといひと言われた。

家に戻つて、「拓」と小さく呼んでみたが返事はなかつた。体温計をわきに入れると、「うーん」と言つたが起きる気配はない。

ピッピッピッの音で体温計を取り見てみると、四十度近い熱があつた。私は慌てて座薬を出し、布団をはぐつて拓を横向きにした。

「拓ごめん」

パジャマと一緒に下着を一気に脱がせた。

「あー、しん子さん」

拓の口からかぼそい声もれた。私は有無も言わず一気にお尻へ座薬を入れ、下着とパジャマをもとに戻した。

ことの成り行きが分かつたのか拓は、横を向いたまま目をつぶり、されるがままにしていた。

……………

「しん子さん、ぼくの布団で寝たら」

拓の声で気づくと、私は拓の横で寝ていた。

熱が下がったのか拓の顔は元氣そうだ。体温計で計つてみると三十七度に下がつていたのでひとまず安心できた。

外はもうほとんど陽が沈みかけていた。熱は下がつたけれど心配だったので、今日は泊まつていくことを勝手に決め拓に言うと、「ぼくの部屋で寝てください」と、うれしそうに目をほそめていた。

拓に言われなくても、そのつもりだった。

夕食はおかゆを作つてあげ、私も一緒に食べた。

その夜、拓が寝つくまで眠らないでいると、拓は眠れないのか私に話しかけてくる。

「しん子さん、今日ぼくのお尻見たでしょ」

「見たよ。恥ずかしかった」

「うーん、うれしかった」

「うれしかったの。女の人にお尻見られたんだよ」
「うん、しん子さんでよかった。ほかの女の人だったら、ぼく絶

対にいやだったと思う。恥ずかしいし」

「私には恥ずかしくないの。私も女よ。女じゃないってこと」

「そうじゃないけど、しん子さんでよかったんです」

拓の言うことは理解できないことが多いけれど、本当にうれしかったみたいだ。

翌朝はお昼近くまで寝ていた。それでも拓よりかは早く起きて遅い朝食の準備をし、拓を起こした。

「体温を計ってみて」

拓に体温計を渡し、私はテーブルの部屋に朝食を運んだ。

「熱、下がったみたい。三十六度」

「よかったじゃない」

熱は下がったけれど、今日の托鉢は休ませることにして、私は拓の家で掃除をしたり、食料品を買に行ったりして一日を過ごした。

いつもはなんでもしてくれる拓なのに、今日の拓は少し違った。明らかに私に甘えている。テレビを見ながら時々私を見て、目を閉じ何かを思い浮かべているかのような素振りをする。そんな拓もまた、かわいいと思った。

昼はおかゆだったので夕食はハンバーグと目玉焼き。レタスもたっぷり盛り付け、トマトで色づけをし、レタスの上にマヨネーズで、おめでとう、と書いてあげた。

「どうしてばくの誕生日を知ってるの」

私は、拓が元気になったことに対して、おめでとう、と書いただけ。今日が拓の誕生日だったとは知らなかった。

「十六歳かあー、若いね。おめでとう」

拓は「ありがとう」と言って、いつものポーズで首をかしげ、うれしそうに私の顔を見ていた。いつまでも見ているので、

「ほら、たくさん食べて早く大人になれ」

ふざけて言うよ、

「しん子さんもたくさん食べて、本当の大人になって」

拓に言い返された。

「私はもうりっぱな大人よ」

私も言い返すと、

「あの一、大人は破れた服は着ないと思います。下着が……うすく透けて見えています」

拓は自分のお尻に手をあて、「ここ」と教えてくれた。

スカートのすそが破れていたことは知っていたが、お尻の部分が破れていたことには気づかなかった。おそらく雑木林で破れたのだろう。それに昨夜は服を着たまま寝てしまった。

「いつ気づいたの」

「起きてすぐに。大人なのに、無頓着むとんちやうな人だなあーって思っていました」

なんにも分かかっていない拓。でも、拓のせいで破れたとは言わなかった。

「針と糸ある」

「ありません。ホチキスではダメですか」

「ホチキス？ ばっかあじやないの……。まあ、いっか、もうこの服着る気もないし」

「なんでもいいから貸して」

拓はホチキスを持ってくると、「留めてあげる」と言つて私の後ろへまわつた。

「自分でするからいい」

断ると、

「いちいちスカート脱がなくてもいいでしょ。ぼくはしん子さんみたいにお尻は見ませんから大丈夫」

拓は勝手に、カチ、カチとスカートの破れを留めていた。私もおせっかい焼きだけれど、拓も相当だ。

拓の熱も下がつたことだし、今日は帰ることにした。

すっかり熱も下がり、体力がもどつてくると拓は、今日の托鉢は名古屋へ行こうと言つた。名古屋へなんて行きたくないかつたけれど、これも拓の実態を知るためだと自分に言い聞かせ、私の車で名古屋に向かつた。

名古屋に着いて、名駅の近くにある有料パーキングに車を止めると、私たちはどこに立つかで言い合いになつた。拓は地下鉄のはいり口にと言う。私は人の少ないところがよかつたのだけれど、それでは名古屋に來た意味がないということで、地下鉄のはいり口に立つことになつてしまつた。

（そんなところに立つてもいいのだろうか？ 許可書はいらないのだろうか？）

考えながら、私は車から出た途端、頭の中が真っ白になつてしまつた。駅前の状況を想像してしまつたから。

今、私が立っている場所まで、どのようにして來たのかも分か

らなかつた。激しく脈打つ心臓の鼓動を意識できるよになつて、初めて地下鉄のはいり口に立っているのだと意識できた。

すげ笠を前方にずらし、できる限り顔が見えないようにした。拓からは、背筋を伸ばして立つように言われていたが、そんな余裕はなかつた。ただひたすら自分の足元だけを見ていた。

時間だけが過ぎていく。

拓、と呼びなくなつたそのとき、「ごころうさま」と拓の方から声が聞こえてきた。

騒音や雑音は聞こえていたはずなのに、そのとき初めて音というものを聞いた気がした。

頭を静止したまま横目で拓の方を見やつた。一人の女性が拓に合掌をしていた。拓は深々とその女性に頭を下げ、再び背筋を伸ばし微動だにしない。小さな拓が、とっても大きく見える。

.....

時間の過ぎる中、いつのまにか私の心臓の鼓動はいつもどおりのリズムをきざんでいた。背筋を伸ばすと、すげ笠の下から道行く人の姿が見える。はつきりと見えた。

私たちのことを見ていく人は意外に少ない。チラッと見て、無視するかのように通り過ぎる人が大半だ。私は見られているのではなく、見ているのだと思うと、道行く人の声のはつきりと聞こえてきた。

「これ、托鉢っていうんでしょ、おさい銭やつたらいいことあるかなあー」

「やめときなよ、インチキかもしれないよ」

「そうよ。いいことなんてないって」

「マック食べたほうがいいよ」

女子高生三人が話しながら通り過ぎた。

「ママ、あの人だれ」

小さな男の子が母親に聞いている。

「見ないの、どういふ人か分からないから」

「怖い人なの」

「そうそう」

「私たちは怖い人？」

「今日帰りに、『ボン・ヌフ』に寄っていかない」

「セサミブレッドでしょ」

「違う違う。私はチェリーデニッシュ」

「それもいいね」

女性二人の会話。

（いいなあー、私も食べたくなってきた）

立ち続けていると、私と拓に施しがあった。施してくれたのは女子高生。言葉はなかったが、笑顔がすてきな子だった。さっきの高校生と比べ、なんら変わらないこの高校生が特別の子に見える。

人の数は施しには関係のないものだということがよく分かった。施しなんて、ほとんどしてくれない人ばかりだ。

身体を動かしているわけではないのに疲れを感じる。私は拓に

近づき、「拓、少し休みたい」と言うと、拓はその場を離れ車に戻してくれた。

車に着くころには、私の疲れはピークに達していた。そんな私に気づいた拓は、

「しん子さん、帰ろ」

ぼつりと言った。

テーブルの部屋でこの前のように施しを出し合った。私には二人の施しがあり、拓には三人の施しがあった。私と拓二人合わせて、たったの五百円。

「……」

黙っていると、私の気持ちを見過かしたかのように、

「しん子さん、五人も人の真心が集まりました」

拓はお金の合計金額を言わず、施してくださいだった人の数を言っていて喜んでいて。そして、この真心がたくさん集まると、だれもが幸せになれると言う。本気でそんなことを考えているのだろうか。

拓はこのお金も仏様に報告をして、箱の中へ納めていた。その姿を見て私はどうしても聞きたくなくなった。

「この施されたお金、いつ使うの」

「このお金は使いません。これまでの施しと合わせると百十一人になります。でも、まだまだ真心が足りません」

「ここでも、金額ではなく人数を言っている。」

「拓は施して生活をしているんですよ」

「ぼくが使う施しは、ご先祖様からの施しなんです。この家や土地、そして賃貸マンション、みんなご先祖様からの施しなんです」

(マ、マンシオン。本当だろうか)

すぐにはできなかったもので、私なりに考え、聞いてみた。「夢なんですよ、マンシオンのオーナーになることが」

拓は大きくため息をつき首を横に振った。

「マンシオンの管理は、今はジーバがしているけど、そんなマンシオンなんてどうだっていいのです。ぼくの夢は世界平和なんです」

(世界平和……この子、頭、大丈夫?)

世界平和なんて、こんな子どもが本気で考えることではない。

第一そんな夢、叶うわけがない。

「世界のことなんて政治家にまかせたら」

「ダメです。政治家にはまかせておけません。いつときの平和や幸せはできて、みんなの心が貧しくては、本当の幸せや平和は続かないのです。世界のみんなが、思いやりの真心を持てるようになったとき、初めて幸せな平和が実現するのです。だから自分の身近なところから真心集めの托鉢をしているんです。世界平和は、真心と思いやりがなかったら実現はしないのです」

拓が言うとなんだか本当に実現できるみたいにな気がなるが、だれが考えても無理なものは無理。それでも聞いた。

「その夢はいつ実現できるの」

「そうですねー、早ければ千年、おそくとも三千年後には実現できると思います」

私のついていける話ではなかったので、

「三千年は無理かもしれないけど、千年は生きたいな。拓の夢を確認したいから」

しらじらしく言ってしまった。

「それは無理です。人間の寿命は長く生きて百歳前後です。でも、しん子さんの目で世界平和を確認することはちゃんとできます」

どうしたらできるのかと聞きたかったけれど、聞かなかった。どうせまた、わけの分からないことを言うだけ。

「……」

「また千年後に、この地球に生まれればいいことです」

拓は真剣な顔をして言う。

(どうしてそんなことを本気になって言えるんだらう)

思っ、私はとんでもない子とかかわってしまったことに気づいた。

拓のお付き合いは疲れる。マンシオンに帰ってベッドに寝ころび、しばらくの間ぼーっとしていた。

時間が経つにつれて、なんだかむなしくなってきた。

拓はマンシオンのオーナー。土地も家もあって生活の心配なんて何もない。それに拓は私なんかより確実にしつかりと生きている。拓の心配よりも自分のことのほうが心配になってきた。

その気もないのに修行僧になるなんて言ってみただけ、とても私の世界ではない。ただ、拓の実態を見てみたかっただけのこと。でも、拓と一緒にした二回の托鉢は無駄ではなかった。人への合掌はいいと思った。これまで人に合掌なんてしたことなかった。

合掌をしてみ、手と手を合わせる事が、こんなにやさしい気持ちになれるものだと知らなかった。そのことには、拓に

ありがたいと言いたい。

托鉢の意味なんて私にはよく分からないけれど、拓はりっぱだ
と思う。たとえニセ修行僧であっても、私には辛^{ツラ}かった托鉢を統
括している。それも、叶わぬ夢に向かつて。

夢かあ。私の夢は、平凡だけれど、やさしい男性を見つけて
結婚をし、男女ひとりずつの子どもを産み、その子どもをりっぱ
な大人に成長させ、その子どもにも愛されるおばあちゃんになつて、
いづれ死んで行く……？

こんなの夢とは言わないか。拓の世界平和のほうが、よっぽど
夢らしくていい。叶うことはないけれど。

私の夢は、年々一つ一つ消えていった。これが本当のこと。だ
から今の私は、せめて拓のように、家や、多少の財産があればそ
れでいい。

そう思うと、私は拓のことを、ほんの少し嫉妬した。

三千年をかけた夢かあ。拓は不思議な子だ。私には無理。明
日拓に話そう、修行僧をやめるって。

翌日、修行僧をやめたいと言うと、あまり見せたことのないう
つろな目をして、

「しん子さんには修行僧は無理だと思っていました。でも心配し
ないで、仕事はばくがなんとかしますから」

なんとかしてくれなくてもいい。私は拓とのかかわりを、今日
で終わりにするつもりだ。拓が心配してくれる気持ちはうれし
けれど、本当に終わりにしたかった。そんな私の胸の内を知らな
い拓は、

「しん子さんは、事務はできますか」

事務は私の本業、当然できる。けれどできるとは言わなかった。
「事務が無理なら……電話の応対……は、ないか……」
(何をさせようとしているのだ?)

ほおづえを突きテーブルを見つめている拓。何か思いついたの
か、にこっとして、

「しん子さん、給料の八万円は安いですか」

「八万じゃ、マンション代を払っておしまいよ。仕事は自分で探
すからいいわよ」

私は必死で断った。今ここで、はっきりと言っておかなければ
ならない。子どもだからといって、同情なんてしてはいけない。

「だったら、寮へ入ってください。電気、ガス、水道、そのほか
すべて無料、三食付きです。それでもダメですか」

そんな会社があるはずがない。子どもの考えることだ。

「いい加減なこと言わないの」

「いい加減ではありません。多くの家の留守番をしてほしいので
す。母さんの部屋を寮として使ってください」

拓の考えていることが分からない。母さんの部屋を寮として使
えということ、私にこの家で住めということ。そんなありえな
いことを真剣に言う拓。やっぱり心配になる子だ。祖父母も実際
にいますかどうかも分からない。もちろん、いてくれれば、それ
はそれでいい、けれど私は拓と一緒にいられない。

(どうしたらいい……ほっといたらいい……私には関係ない……
関係ない……でも……さみしいのかもしれない……まだ子ども
……私が拓だったら……だれかにいてほしい……いてほしい……)

いてほしいに決まってる……でも、もう拓の言いなりにはならぬ
い)

拓の濁んだ瞳が、私の視界に入った。

「拓、雇って」

無意識に言ってしまった。勝手に言葉が出た。だれかに、言わ
されたかのように。

(私って、アホ?)

当座の生活必需品を拓の家を持ってきた。母親との思い出の部
屋へ入ってみる。六畳の部屋だ。この部屋にも座卓があって、そ
の上にランプが置いてある。古いたんすもあった。拓はこのたん
すに衣類を入れていいと言ったので、そうした。

拓の母親を想像してみたが何も思い浮かばない。拓のうれしそ
うな顔が浮かぶだけ。

今日から拓と生活。おかしなことになってしまった。

拓は一日おきに托鉢に行った。私は家で掃除洗濯。これって主
婦じゃない。拓にいいように使われているだけの私。それでも、
いやだと思わない自分が、いやになる。

拓は托鉢から帰って来ると、今日一日のできごとを私に話して
聞かせる。それがうれしくてたまらないようだ。

十六歳にもなる少年が、こんなことがうれしいのかと思っ
てしまふ。いや、十六歳の少年ではない。それはまるで、五、六歳の
子どものようにはしゃいで話す。

托鉢に行かない日は、いつも家について本を読んでいる。

「仏教入門」「道元」「宇宙の真理」「魂の世界」「密教の教え」「禪
の心」……。

読みたくもないし、読んだことのない本ばかり。

それでも本を読んでいるときの拓は、りっぱな大人に見えてく
るから不思議だ。

森田拓。やはり普通の子ではない。

テーブルの部屋で話しているときだった。拓がおかしなことを
口走った。

「しん子さん、ばく絶対にしん子さんを幸せにするからね。しん
子さんの幸せは何」

何を言ってるのか理解できないまま、いつものことかと軽く
言った。

「大きな家に住んで、お金があつて、拓のようなやさしい男と結
婚ができれば幸せかな」

拓は目をつむり、首を横に振った。

「そんなことを考えていては、幸せにはなれません。ばくが本当
の幸せを教えてください」

「はいはい、なんでも教えてください」
軽く流した。

「幸せ袋って知っていますか」

「何、それ」

「幸せになりたいと願う心のことです。簡単に言えば心のことな
んだけど、その心に袋があると思ってください。袋の大きさは人
によって違います。たくさん入る袋もあれば、少ししか入らない

袋もあります。またどの袋にも入る限度があります。なんでも限度はありますよね」

また何か難しいことを言い出した。

「幸せ過ぎると、その袋はいつばいになって破けてしまうのです。だから幸せは、欲張ってはいけません」

「破けるのが心配だったら、丈夫な袋にしたらいいいじゃない」

聞きたくない振りをして、拓はおかまいなしに話してくる。

「そういう問題ではありません。幸せ袋は心でできています。心は傷つきやすいのです」

(私を幾つだと思っているの、経験豊かな私を)

「心が傷つきやすいことは、拓より、よく知ってるよ。たくさん傷ついてきたからね。幸せ袋はデリケートだって言いたいのじゃ」

「しん子さんすこい、よく分かりましたね」

(ほめてくれなくてもいい。いろいろと経験すれば、だれだって分かること)

拓には言わなかったけれど、言いそうになった。

「しん子さん、幸せ袋は空っぽがいいのです。そして、少しの幸せに気づくことなんです」

たしかにそうだと思う。けれど拓の話は疲れる。もう少し簡単に言ってほしい。私は拓みたいに頭がよくない。

「はい、それではここで、もう一度聞き直します。しん子さんの幸せはなんですか」

「やさしい夫と、家かなあー。お金もほしいし。それとおー」
私が言っている途中で、「はあー」と拓にため息をつかれてし

まった。

「しん子さんには、幸せになることよりも、不幸せにならないことを教えておきます」

拓は私の耳元で声をひそめて話す。

「どうして、内緒で話すの」

「合言葉。今は分からなくてもきつと分かるから。本当の幸せは、いつも安心していられること。不安な幸せなんてありません」

言って、すずしい目をして笑っていた。

なんでもいいけど、合言葉なんて久しぶりに聞く言葉だ。久しぶりも何も、使ったこともない。

叶うことのない世界平和を夢見て、拓は休むことなく一日おきの托鉢を続けている。

でも今日は拓と一緒に、私にとっては久しぶりの栄に來ている。拓は私に、「あそこではね……。あの店でね……。ここはね

……」と、母さんと來たときの思い出話してくれる。おそらく、五六歳のころの話だろうと思うけれど、そんなことを覚えていたことに驚く。

(お母さんが大好きだったんだらうなあー)

拓に合わせ、私も母と一緒に来たことを思い出しながら栄の街を歩いた。

拓がほしがっていたスニーカーを買ったあと、栄に來たときには必ず寄る、「フレンドハウス」というお店に入った。お目当ては、ふわつとした口当たりが絶品の、チキンオムライス。拓は一口食べると、

「おいしい。しん子さんは、すごいお店を知っているんですね」
拓の笑顔が大きくふくらんで、食べモード全開。おいしいを言ったあとは、拓は黙々と食べ続けていた。

（こんな子が、どうして拓鉢なんてしなければならないの？）

思うと、物悲しい気持ちになった。拓鉢が、悪いことでもないのに……。

（こちら、こんなときに、つまらないことを考えるな。チキンオムライスが泣くよ）

つまらない思いを払拭^{はら拭}。私は慌てて大好きなチキンオムライスにスプーンをやった。

食事を終え、「フレンドハウス」を出たときだった。

「池ちゃん、久しぶり」

田頭聡史と出くわしてしまった。

「あら……」

田頭の名前も呼びなくなかったので、あら、で済ませた。

「池ちゃん少しやせたね」

今は上司でもない、なれなれしく池ちゃんなんて呼んでほしくない。

田頭の横には女性がいた。私をいやな目で見ている。奥さんではなさそうだ。相愛わず女好き。こんな男に、いつときでも好意を寄せた自分が情けない。

田頭が横の女性に何やら話すと、女性はその場を少し離れ、田頭が私に寄って来た。

私の耳元で、こそこそと言った。

「まだ独り。携帯番号教えておくから電話してよ」

私は完全にキレタ。

「悪いけど、結婚したの。こちらが彼」

拓を紹介してしまった。

田頭は拓に気づいていなかったらしく辺りを見まわし、

「彼って、どこに」

田頭が言うと、拓が私の前に出て来た。

「わたしが、しん子の夫です」

（拓……）

「子どもと、結婚？ 冗談だろう」

田頭が驚いて言うと、

「わたし、子どもではありません。失礼なことを言わないでください。人を見た目で判断してもらっては困ります」

百六十回にもみたくない拓が、自分よりもはるかに大きい男に、堂々とした態度で言った。

だれが見ても、拓が大人に見えるはずがない。しかし、拓の落ち着いた態度に、田頭は動揺していた。

「きみ、いや、あなた、は、いく、いや、お幾つ、で、すか」

「わたしに年を聞く理由はなんですか。しん子の夫に見えないとでも言うのですか」

田頭は、拓の見かけと話す言葉のギャップに困惑している。

「あつ、い、や」

「しん子は、わたしのかわいい妻です。あなたにもおー、奥さんがある」

拓は、たんたんと言って、女性の方へ手を差し向けると、

「……」

田頭は私を見て、「チッ」と舌打ちをして女性と一緒にその場を去った。

二人が去ったあと拓を見ると、こわばった顔で、大きく肩で息を吐いていた。

「拓、ごめんね」

「あー、怖かった。だけど、どうしてあんなこと言えたんだろう」
本当に怖かったんだと思う。それでも拓は、私を必死で守ろうとしてくれた。私は何回も拓に謝った。

.....

拓と一緒に暮らして一ヵ月が過ぎ、拓がいい加減な気持ちで托鉢をしているのではないということがよく分かった。

拓が本当にお坊様になりたいのであれば、そのことを考えてあげればいいのだ。どこかのお寺に入門してもいい。宗教関係の学校へ行くのもいい。どんな方法だってあるはず。私だって、いつまでもこんな生活を続けてはいられない。

私はそのことを拓に話した。すると意外にも、拓はさみしそうな願をした。

「拓はお坊様になりたくないの」

「なりたくないかなりたくないということではありません。母さんの夢なんです。しん子さんも、ぼくがお坊様になったらいいなって思っているんですよ」

「今はそう思っているかもしれない」

「それが宿命なんです。母さんは約束を守ってくれたんです」

（宿命？ 拓と私は何かでつながっているともいうの）

初めて拓と出会ったときも、拓は私に宿命だと言っていた。

「拓と私の宿命ってなんなの」

「今日までの一ヵ月余りのことです。宿命とは、きけられない運命のことなんです。ぼくにってはうれいしい宿命だったけど、しん子さんは、ぼくとの出会いの宿命をどう思っていますか」

どう思っているかと言われても、宿命だなんて考えてもいないし思ってもいない。私は両親がいない拓が心配で、余計なおせっかいをしているだけ。

「しん子さん、ぼくはお坊様になるから心配しなくてもいいです」

言ったあと拓は、何をためらっているのか黙ってしまった。

「.....」

「どうしたの」

拓に聞くと、おずおずと小さな声で言った。

「今夜だけ、しん子さんの部屋で.....一緒に寝てもいいですか」

十六歳の少年に、一緒に寝たいと言われて、はいどうぞというわけにはいかない。拓が熱を出したとき、一緒にの部屋で寝てあげたことはあるが、そのときと今は話が違う。

「拓、ふざけないで。何を考えているの」

私が大きな声を出すと、肩をすぼめ一言も言葉を出さず自分の部屋に行ってしまった。これまでになかった拓の態度だ。その態度が気になった。断ったことが、悪いことでもしたような気がした。

心配になって拓の部屋へ行ってみると、拓はもう布団の中に入っていた。小さな布団のふくらみを見て、声をかけずにはいられない衝動にかられた。

「拓、私の部屋に来たかったら来てもいいよ」

何気なくさらっと言い、自分の部屋に戻った。

拓は来ないと思ったから、布団を私に近づけて敷いておいた。敷いておきながら、心配になった。

（来ないでよ、来ないでくれ。お願い、来ないで）

思いは通じなかった。来ないと思っていたのに、拓は私の部屋に来た。

「ごめんなさい。わがままを言っただけ」

拓はそろそろと、敷いてある布団に入った。布団に入ってから、私に背を向け黙っている。

（どうして今日に限って、一緒に寝たいなんて言ったんだろう。何かあったんだろうか）

長い沈黙が続き、私はいたたまれず、「こっち向いたら」と言っただけ。それでも、こちらを向こうとしないので、拓の背に問いかけた。

「拓、本物のお坊様になるんでしょ」

「うん」

「お坊様になったら、髪の毛は剃るの」

「お寺で得度受戒をしたら、剃るつもり」

「何、得度受戒って」

「本当の修行のはじまり。仏様に帰依することだよ」

そんなことまで知っていたのか。本気で考えていたのだ。

（拓のことを真剣に考えてあげなければならぬ）

私も本気で思った。

「しん子さん、手をつないでもいいですか」

突然、小さな声で言う。

私はごく自然に「いいよ」と言っていた。

手を握ってやると、拓はこちらを向き、うすく笑ってすぐに目を閉じた。母さんのことを聞こうと思ったけれど、拓の顔を見たらずせなくなった。

明日、聞けばいいこと。

翌朝、拓は布団の中にいなかった。呼んでも返事がない。仏間にも、テールの部屋にも行って見たが拓はいない。八畳の部屋へ行って見た。托鉢に出るときはいつもこの部屋で法衣に着替える。その法衣がない。頭陀袋も、すげ笠も、リュックもなかった。玄關へ行って見た。地下足袋もなかった。ランプの置いてある座卓の前に座って、初めて拓の置き手紙に気づいた。

しん子さん、ぼく本物のお坊様になります。福井には、ぼくを待つての方がいます。その方とところへ行きます。心配しないでください。しん子さんとの一カ月余りの生活は、ぼくにとって最高の幸せでした。初めてしん子さんと出会った日、母さんが約束を守ってくれたんだと思いました。だからぼくも、母さんとの約束を果たすために、お坊様になります。門のカギと家のカギはしん子さんにあげます。この八万円は一カ月の給料です。それから、イケメンにはだまされなくてください。仕事もちゃんとしてね。最後になってしまったけど、ぼくのわがままを許してもらえて、とってもうれしかった。いつまでもずーっと一緒に、しん子

さんと寝ていたかった。このまま、時間が終わらなければいいと思っていた。たくさん書きたいことはあるけど、さみしくなるの
とおしまい。

拓

拓の置き手紙を読みながら私は泣いてしまった。

「ばか、拓のばかー。カギなんていらぬ。給料なんていらぬ。なんで黙って出て行つたの。私はなんだったのよ」

私は拓になんにもしてあげられなかったことを悔やんだ。

「りっぱなお坊さんになれ。りっぱなお坊さんにならなかつたら、イクメンにもだまされてやるし、仕事もしないから」

拓の置き手紙に、そんな言葉をあびせた。泣きながら自分の部屋に戻り、このあとのことを考えた。そして、おかしなことに気づいた。門のカギや家のカギを私が持っているということ。拓はなぜカギを私にあげると言つたんだろう。お金だつてもらうわけにはいかない。このカギとお金は、だれに返せばいいの。まだ近くに拓がいるかもしれない。

外に出ようと急いで玄関に行くと、玄関先に女性が立っていた。驚く間もなかつた。

「文子、本当に帰つて来たのね。文子、文子」

その女性は私に抱きつき泣き出した。何がなんだか分からない状況で、私はその女性をささえていたが、頭の中はパニック状態だった。

「良子、その人から離れなさい。文子ではないよ」

外から男性が来て言う、女性は私から離れた。それでも私の顔を見ている。

男性もいたことにさらに驚いて、全身が震え倒れそうになった。

「驚かせてすみませんでした。佐山浩二と言います」

「あなたが拓のお母さんですね。私は拓の祖母、佐山良子です」

一瞬考え、慌てて言葉を返した。

「あつ、池上です。池上しん子と言います。拓とは……」

「ええ、拓から聞いています。池上さんでしたね。部屋へ行きましょう」

良子さんは落ち着いた口調で言い、私は言われるままにした。

二人とも、部屋に入つてからも私の顔ばかり見ている。良子さんがお茶を持ってきて、一息ついたところで浩二さんが話し出した。

「二昨日、拓がわたしの家に来ましてね、母さんに会つてほしいと言つて帰つたんです」

「あの一、母さん、というの……」

「あなたのほかに、だれがいるのですか。あなたを見て、拓が言つていたことは本当だつたと、やつと分かりました」

意味がよく分からない。分からないまま私がうなずいていると浩二さんの携帯が鳴った。慌てた様子で応答し携帯を切ると、

「池上さん、わたしは帰りますが、良子から拓の話聞いてやつてください」

浩二さんは出て行った。

良子さんは、お茶を注ぎながら話してくる。私のことを聞いてくるのかと思つていたら、私のことは何も聞かず拓のことばかり話す。

良子さんは、私と拓が出会つた日の、拓のことを話してくれた。

拓は私と出会った日、「母さんが帰って来た」と言って、二人のところへ来たという。そして「ジーバもパーマも、自分の間ぼくの家には来ないで」と言って帰ったそうだ。二人はそんな拓がふびんでならなかった。亡くなった母さんが帰って来るわけがないからだ。それでも拓の気持ちを大切に、「拓の好きなようにすればいい」と、拓のことをそっとしておいた。拓はその間、鉢鉢の合間に二人の家に寄っては、私のことをあれこれと話して帰ったという。たとえそれが拓の妄想話であっても、拓の笑顔を見られることが何よりだと思つて、二人は拓を見守っていた。そして一昨日、「母さんに会ってほしい」と言つて、今日の日、拓の家に来てくれと言つて帰つて行つたと話してくれた。

なぜ私が拓のお母さんなのかと良子さんに聞くと、

「背丈といい、しぐさといい、本当に文子みたいです。池上さん、これを見てください」

良子さんが見せてくれたものは、定期入れに入れた写真だった。「えっ、これ、私……。どうして私の写真を」

「この写真は娘の文子、拓の母親です。池上さんとよく似ているでしょ」

私とそっくりな写真を見せ、良子さんはほほ笑んだ。「拓は母親との約束を守つたんです。私たちは信じられなかったけれど、拓は信じていたのです」

良子さんはそう言つて、拓と母親の最後の別れを、話してくれた。

「母さん、本当に帰って来るの」

「ええ、本当に帰って来るよ。拓がみんなの幸せを願える、いい子になつたらね」

「母さんが帰って来るんだつたら、ぼく、みんなの幸せを願つて、いい子になる」

「願うといつても拓には分からないから、母さんいいことを教えてあげる。それはね、あいさつ、笑顔、返事をちゃんとすることなの。そうすると、拓の周りの人たちが幸せな気持ちになれるのよ。もちろん拓も、よかつたなあーって思えるのよ」

「……」

「そのために拓はお坊様になるの。拓がりっぱなお坊様になってくれることが、母さんの夢なの。世界のみんなを幸せにしてあげて。約束してくれる」

「うん」

「拓、かわいい」

「ぼくも、母さん、かわいい」

母さんは拓を引き寄せると、拓の耳元でささやいた。

「……」

「何、それ」

「母さんが帰つて来たら、母さんに言う、合い言葉よ」

「？ うん」

良子さんは泣きながら、そのときの二人の会話を話してくれた。私も泣かすには聞けなかつた。ただ、かわいいが、なんのことなのか分からなかつたので良子さんに聞くと、拓と母親との間で

は、かわいいは、(好き)という意味だと教えてくれた。なぜそのなのかは、良子さんも知らないと言った。

拓と母親だけの言葉。なんだかとも、すてきなことのよう
に思えた。

最後に母さんが、拓の耳元でささやいたことも、良子さんは何を言ったのかは知らないと言う。私は、(あのことだ)とすぐに分かった。

良子さんはそれから、拓の父方の祖父はお坊様だったことや、お寺は福井県にあることなどを話してくれた。そのお寺は、いずれ拓が引き継ぐお寺だと言った。拓がお寺の子だったと知って、拓という子の本質が、なんとなく分かる気がする。

拓の気持ちを私が、もつと分かってあげていればよかったという話もあった。

「拓は、お母さん子でした。いつもお母さんのおっぱいに触れて寝る子でした。甘えん坊は大きくなっても変わりませんでした。おっぱいに触れられないと分かると、お母さんの手を握って寝ていました。お母さんが亡くなる数日前まで、ずーっとそうでした」
もつと拓のお母さんをしてあげたらよかったのだけれど、私は
気づけなかった。

拓が熱を出したときのこと聞いてみた。

「拓、病院の嫌いな子でしたか」

「あら、よくご存じね。さすがに拓のお母さん。よく熱を出す子でしたから、座薬は欠かせませんでした。病院はいやだいやだと
言って、お母さんを困らせていました」

ふふふ……笑ってしまった。

浩二さんが戻って来て、拓のことは福井の親せきによく頼んで
おいたと知らされ、少し安心できた。

家のカギを預かっていることを思い出し、カギを返そうとする
と、浩二さんは良子さんと顔を見合わせ、互いに黙ってうなずき
合っていたが、「ちよっと、待っていてもらえますか」と、二人
は神妙な顔をして部屋を出て行った。

数分して戻って来ると、浩二さんは信じられないことを口にし
た。

「そのカギは、あなたが持っていてください。拓が言っていました。
『あの家は母さんにあげるんだ』って。あの家とは、この家のこ
とです。母さんとは、あなたのことです。だからあなたが持って
いてください。あなたの、物なんですから」

あかの他人に家を与える者がどこにいるというのだ。それに拓
がそんなことを言っていたなんて考えられない。何回も断ったが
カギは受け取ってもらえなかった。拓が給料としてくれた八万の
お金も、同じように受け取ってはもらえなかった。

二人は、家やお金のことよりも私のことをもつと知りたいみた
いで、いろいろと聞いてくる。うれしそうに顔をして聞くので、
ついつい私もいろんなことを話してしまった。

あまりにも親しく話してくるので、(この二人との出会いも、
拓の言う宿命なんだろうか)と、ふと思った。宿命なんて信じて
もない私なのに……。

その日は、お互いが電話の番号を教え、後日またこの家で会う
ことを約束した。

こんな夢のようなことが本当であっていいのだろうか。拓と出会ってからの毎日が、すでに夢のような、ありえないことばかりだったような気がする。

夢、夢よ。これは本当の夢。夢ならさめてと、何回もほおをつねってみた。夢ではない事実をほおが感ずる。それでも私は、信じていることができなかった。なんの縁もない私に、だれが家などくれるというのだ。映画や小説じゃあるまいし。

ベッドに寝ころび目を閉じた。考えたくないのに、私のお粗末な脳細胞が活動する。

(ほしかつたんでしょ、家を。幸運だったのよ。そう思えばいいのよ。くれると言うのだから、もらえばいいのよ。道理にかなったこと)

わたしが、私にささやく。

(そうよね)

私は、わたしに答えた。

浩二さんから電話が入ったのは二週間過ぎのこと。

登記簿の件で話したいことがあるから、拓の家に来てくれというものだった。

いつでも行ける私だったけれど、すぐに行きますとも言えずとりあえず、十日後にしてくれと言っておいた。三日後でも、五日後でも、いつでもよかったのけれど。

夢ではない事実が着々と動いているのだと知って、うれしさよりも不安のほうが大きくなった。それは当然のことだと思ふ。家や土地を、くれる、もらうという話で済むわけがない。くれると

いうのであれば、くれる理由があるはず。私には、もらう理由がない。

(どうして、こんな話になってしまったんだろう)

私は考えた。そして思い当てることがあった。

以前に拓は、私を絶対に幸せにすると言ってくれたことがある。あのとき拓に、私の幸せは何かと聞かれて私は言った。

大きな家に住んで、お金があつて、拓のようなやさしい男と結婚できたら幸せだ。でも、私は本気で言つたわけではない、そんなことが幸せだなんて思つてもいない。

私の幸せは、私の幸せ……？ 私の幸せって、何……？ (しあわせ)

これまで何度も口にしてきた言葉。私は真剣に考えたことがあつたのだろうか。

幼稚園のお楽しみ会、タヌキさんの役だった私は、お姫様の役になれたら、どんなに幸せだったか。小学校の運動会、華子ちゃんよりもほんの少し速く走れたら、私は幸せだった。だって私と華子ちゃんはいつも、運動会ではどんじりを競い合つていたから。中学になって、自分専用の携帯が持てたら、ほかに何もなくても幸せだった。高校になると、隣のクラスの神崎覚君とデートができたなら、これ以上の幸せはないと思つてた。それこそ、死んでもいいと思つてた。死ななくてよかつたけれど。ほかにも幸せだと思ふことは、たくさんあつた。

私の願つた幸せは、ほとんど叶うことはなかった。それでも(私は不幸せだ)なんて思つたことは一度もない。時が、過ぎてしまえば、のことだけけれど。

幸せなんてそんなもの……なんだろうか。

母が中学二年の春、がんで亡くなった。そしてその五年後、父も同じ病気で亡くなっている。そのときの悲しみは、今でも忘れてはいない。忘れようとしているのに。

社会人になってからの親孝行もできず、私の花嫁姿も、両親に見せてやることもできない。私ほど不幸せな者はいないと、そのときは思った。それでも今は、そんなことで不幸せだなんて言えないことくらい分かっている。そんなことを言ったら、きつと、拓に笑われる。

でも、両親の存在は大きい。年齢を重ねることに思う。

一人っ子の私は学校から帰ると、「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼んで、母の「お帰り」の声を聞いたあと、ゆつくりと「ただいま」と言っていた。つまり、「お母ちゃん、お母ちゃん……」「お帰り」……「ただいま」ということ。それは、母がいることの確認で、ただいまは、どうでもよかつた。

母の「お帰り」の声を聞くと、安心して友だちの家に遊びに行けたし、宿題もすることができた。母の音が聞けない日は不安になって、母の姿を見るまで何もせず、ずーっと家にいた。テレビを見ていても、うわのそらで見ている。大げさに言えば、このまま母とは二度と会えないのではと思うこともあった。私にとっての母は、それほど大きくて大切な存在だった。もちろん、幼いころのこと。

母ほどではなかつたが、父もそれは同じ。父は無口な人だったけど、私の性格をよく知っていた。私の喜怒哀楽を、「どんな日も、どんなこともある」の言葉で、いつもまーるくおさめてくれ

た。言葉は少なくても、父の思いやりは十分感じていたし、いてくれるだけで安心できた。母が亡くなってからは、父に対するその気持ちはより一層大きなものになっていた。

母は父のことを、「我が家の、安心の要^{ポイント}」と言っていた。要がなんのことだかそのときは分からなかつた。けれど両親といると私はいつも安心で、幸せを感じずにはいられなかつた。幾つかの幸せがあつたけど、父母が与えてくれる安心に勝る幸せはなかつた気がする。裕福な家庭ではなかつたけれど、私は幸せいっぱいだった。

私は幸せだった。そう、私は幸せだったのよ。

今、私がほしいものは、父母の愛、安心。

安心、それは幸せ。

(あんしん……)

あのとき拓は教えてくれた。幸せになることよりも、不幸せにならないことを。不幸せにならないということは、幸せ。その幸せは、毎日が安心していられることだと拓は言っていた。

合い言葉……拓が教えてくれた合い言葉だ。

そのことに気づくと、「しん子さん、分かつたでしょ」と、拓の声が聞こえたような気がした。私は迷わず、「うん、そうする」と声に出して言った。

私の不安は、ずーっと消え、「おばかな、しん子」と、母の声もかすかに聞こえた気がした。父だったら今、なんと言っただろう。おそらく、「分かれればいい」、だと思ふ。

幸せを考えながら、二十八歳にもなって、まだ子どもだった自分に気づいて笑ってしまった。拓は私よりも、ずっと大人だった。

こんな私を拓は、たとえ一ヵ月とはいえ、母親として見てくれたのかと思うと恥ずかしくなる。拓のお母さんにも、申しわけない気がしてきた。できるものなら、拓のお母さんには、せめて最後に拓の言葉を聞かせてやりたかった。本当の母さんではないけれど、私に向かつて、

「母さん、りっぱなお坊様になります。安心して」と。

これも今になって思うこと。

翌日、お墓参りに行った。

今日のお墓参りはいつもとは違う。不安になったから来ているのではない。私のうれしい気持ちを、父母に伝えたかった。

「お父ちゃん、お母ちゃん、私との縁をありがとう。わずかな時の、親子関係だったかもしれないけど、今、私は思うの。それは宿命だったんだと。わずかな時であっても、すてきな宿命だったし、幸せな宿命だった。そのことを拓という子が教えてくれたのよ。もう、悲しいなんて思わないからね。この先、どんな宿命、運命が待っているか知らないけど、私は大丈夫。結婚もするからね。できれば？」

お墓の前で、おもいつきり子どもになって父母に語りかけた。

森田家のお墓にもお参りをし、一言だけ言わせていただいた。

「拓との出会いを、ありがとうございました」

言い終えると、突然墓地に一陣の風が吹いた。私は慌てることなく風に身をゆだねた。

この風は、拓のお母さんが吹かせたものだと感じたから。

(子を思う、母の愛)

私の母も、拓のお母さんと同じだったのだと思うと、涙をおさえることができなかった。

拓との出会いは、もしかしたら、「私のため」もあったのかもしれない。なぜなら、拓のお母さんは、私と拓の出会いを知っていたのだから。

数日後、浩二さんへ電話をし、拓の家のことをはっきりと断つた。すると、住むだけでもいいからあの家を使ってくれと言われた。もちろんそれも断つた。

浩二さんや良子さんの気持ちはうれしかったけれど、私は拓が教えてくれた幸せを選んだ。そのことは二人には言わなかった。私の気持ちを分かってくれた浩二さんは、

「あなたは、本当に拓の母さんでした。私も良子も、あなたと初めて会った日、あなたを見て、娘の文字が帰って来たのだと、良子だけではなく、わたしも思っていました。文字が帰って来るわけがないと分かっている、文字なんだと、内心では思っていたのです。神仏のおはからいで、娘を池上さんとしてこの世に還してくださったのではと、勝手なことまで考えていました。私たちも拓と同じでした。あなたを文字だと思いたかったのです。家に帰ってからも、あなたを娘だと思い続けました。だから、娘の物(家)を娘に返すのは当然だという気持ちで、あの家をもらっていたできたのです。悪く思わないでください。池上さんのおかげで、拓は安心して仏門に入ってくれました。福井の親せきからの連絡もありました。心からお礼を申し上げます。良子も同じ気持ちです」

丁重にお礼を言われた。

お礼を言われるようなことなんて何もしていない。お礼を言うのは私のほうだ。

信じることに、思いやることに、親孝行。みんな拓が教えてくれた。拓は私の、幸せに対する不安を知っていたのだから。もちろん拓のお母さんも。

「空っぽの幸せ袋には、不幸せは入らないよ」

この合い言葉は、私の一生の宝。

拓、りっぱなお坊様になってね。私は今、とつても幸せよ。合
い言葉を、ありがとう。

了

祖母とプリン

下呂市萩原町野上

野口 喜代男

久し振りの故郷は都会の騒音や慌ただしさとは程遠い落ち着いた霧囲気に満ちていた。昭和四十二年の大晦日、小諸市は穏やかな冬晴れであった。

今年の長野は珍しく雪の無い暖かな冬を迎えていて、雲一つない冬空には高校時代まで毎日見慣れていた浅間山が冠雪した全容を見せている。

東京の出版社に勤めている青山智ちかは、寝たきりになったという祖母を見舞うつもりで一年ぶりに小諸へ帰ってきた。

早稲田の文学部を卒業後就職した彼はまだ独身の二十七歳である。

小諸駅を出ると母の家にも寄らず、真っすぐに駅に近い祖母の家を目指した。

駅前を左に行くときすぐ鉄道の踏切がある。その正面のだから坂を下った所に小諸城址公園の正門が見える。五百余年の歴史を持つ小諸城の城門である。

江戸時代小諸は牧野氏一万五千石の城下町で北国街道の宿場町でもあった。小諸城址は千曲川に面した断崖上にあつて、今は島崎藤村の「千曲川旅情の歌」の歌碑で有名な「懐古園」になっている。

祖母の家遠山家はその左の千曲川に向かう道をもう少し下った所である。

久しぶりに訪れる家は穏やかな師走の陽光の中で静かな佇まいを見せていた。伯父伯母に挨拶してからと、玄關で声を掛けたが人の気配はなかった。止むを得ず家の裏手へ回り、少年の頃から隠居と呼んでいる古い小さな別棟に向かった。ここには小さいながら居間に客間と仏間、そして台所に便所と、浴室こそないものの一通りは揃っている。

「おばあちゃん……………」

声を掛けて開けようとしたが鍵が掛かっているらしく一向に開かない。

母から聞いている話では、歩行が出来なくなった祖母は毎日隠居の床の中ばかりで過ごしているという。家の横に回ると見覚えのある小さな縁側が見えた。

障子に手を掛けるとここは簡単に開いた。祖母は次の間に寝ている筈である。

「おばあちゃん、智だよ！」

わざと少しおどけた声で呼んでから障子を開けた。入っていくとその部屋は異臭が漂っていた。

卒寿過ぎの祖母は壁際に敷かれた布団の上で白髪頭をのぞかせ、小さくなって横たわっていた。

想像はしていたものの、それを遙かに越えた祖母の寝姿と、思ひもしなかった室内の雰囲気、一瞬胸を突かれるような思いで立ち疎んでしまった。

彼が幾つになってもどんな時でも、優しく温かい笑顔で迎えてくれたあの祖母は、今、見る影もなく変わり果てた老いの姿になつて床にふせっていた。

去年の正月に訪れた時には、背中が大分曲がってはいたものの、まだ相応に元気だった筈である。

彼が近付くと一瞬薄目を開けたが、しつかり見ようとしなかった。そして一言も話さず固く口を閉じ、横を向いたまま再び目を閉じた。短く切り揃えた白髪の髪が痛々しく、細い鼻筋が尖つたように見えている。

顔は瘦せて青白く身体全体も瘦せ細っていることを伺わせるのに十分な様子であった。

それは《老いさらばえた》という形容がそのまま当てはまる姿であった。

誰か入って来たのが分かっている、全く顔を上げないその様子は、まるで人間不信に落ち入った人が、例え何人といえども決して心を開くまいとして身構えている頑なな姿勢そのものであった。

去年の暮れに立ち寄った時の祖母とはまるで別人のような変わり様であった。

祖母は正に別人になつていたのである。

それはこの一年程会っていない間の、あんなに可愛がつてくれた孫の自分にさえ感情を表さないほどの大きな変化であった。

智は立ったまま胸を突かれたような思いでそんな祖母の姿を見下ろしていた。

「おばあちゃん僕だよ、智だよ。分かる？」

土産にと持ってきた包みを枕元に置きながら努めて明るく声を掛けた。

しかし一旦目を閉じてしまった老女は、頑なに口はおろか目も開こうとはしなかった。布団の横には空の茶わんと箸の載つた小さなお膳があった。どうやら昼の食事をした跡らしい。歩くことは不可能でも上体を起こして自分で食事をすることは出来るのであろう。そんな佻しい祖母の毎日の姿を思い浮かべ、胸のつぶれるような思いであった。

智は枕元に座り込んで、東京駅の名店街で買って来た老舗のプリンの包みを開いた。

プリンは祖母の大好物でいつも祖母への土産はこれと決めていたのである。

ガサガサという音に祖母は薄目を開け音の方をそっと見ているらしい気配である。「おばあちゃん、東京のプリンだよ。これ大好きだったでしょ。食べるよね？」

智が二度、三度優しく話掛けていると、うす目を開けた祖母は少し間を置いてから小さくうなずいた。

手早く一つを開けスプーンを添えて差し出すと、祖母は意外なほど素早く起き上がって容器に手を延ばしてきた。

彼は祖母の背中の下へ手を入れて優しく体を起こしてやった。その手に薄く小さくなってしまった背中と、ごっこごととした肋骨がはつきりと感じられたのは智には大きな衝撃であった。

「おばあちゃん……………何時の間にこんなになっちゃったの？何があったの？こんなに小さくなっちゃうなんて……………」

祖母の背後で思わず涙ぐんだ。

心が張り裂けそうでずきずきする痛みさえ感じていた。

もはや部屋の異臭など一切気にならなくなり、祖母への痛ましさを胸が張り裂けそうな思いであった——

余程美味しかったのか空腹だったのか、九十歳を過ぎた祖母は一個のプリンをかき込むようにして瞬く間に食べ終わってしまった。空の容器とスプーンを戻すとまだ欲しそうに残りを見る祖母を見たが、一度に二つは良くないと思い包みを仕舞った。

そんな祖母の姿がまた彼の心の痛みを誘い、居た堪らないような強い思いの渦の中に追い込まれていた。

食べ終わった姿勢のまま、じっと彼を見つめていた祖母がや々と分かったというような口調で言った。

「やっぱり智だよね、来てくれただけか」

「そうだよ、智だよ。たまにしか来られなくてごめんね」

「うん、はーるかぶりだな、忙しいんかい」

「はーるかぶり」とは久し振りという意味である。彼は祖母の長

野井の響きを懐かしく嬉しく聴いた。

「正月は会社もお休みなんだよ」

「そうだね。ゆっくりできるんかい？」

「うん、そうするよ」

祖母の顔に少し笑みが浮かんだと思った。

「ばあちゃん、お昼、食べたんだろうね？」

……………

「食べなかったの？」

祖母の気持ちを和らげようとして言った。

「……………ほんのちよっこし食べただよ」

でも布団の横の食器にご飯は殆ど残ってはいなかった。

「少しかけなの？……………」

「うん、ほんのちよっこし……………」

「美味しかったかい、おばあちゃん」

……………

部屋に入ってから短い時間の観察だったが、祖母は足が弱って立ち居振る舞いが不自由なだけで、病気になるようなには感じられなかった。

しかし直観的ではあるが会話のやりとりからこれまでの祖母とは何か違うものがあるのを感じていた。

「もしかすると……………」

彼は今、心の中にふくれ上がってくる思いを打ち消しに掛かっていた。それは、もしかすると祖母は呆け老人になっているのではないかという疑念であった。

その思いはこの部屋に入って声を掛けた時から始まっていた。

「誰だつて寝入っていたところを急に入ってきて声を掛けられたらこうなるだろうな」

祖母が心を病んでいるなどとは思いたくなかったからそんな疑いを抱いた自分を責めている智であった。それに話は筋道があっているからと彼は努めて安心しようとしていた。

祖母はまだ幼児のようにプリンの包みを物欲しそうに眺めていたが、ようやく諦めたのか再び布団に横になってしまった。

「それで、ばあちゃんはどの頃どんな風に暮らしているの」

「……………この頃かい……………」

智の言葉に祖母は重い口を開いた。

そしてぼそぼそと話し始めた――

二

祖母のいる部屋は別棟の隠居所である。

遠山家の老人は代々高齢を迎えて若い夫婦に家を譲ると、この隠居所に入って余生を送るのが習わしであった。

まだ足腰がしっかりしている間の食事は家族と一緒にするが、足が不自由になると隠居まで運ばれていた。

大分前に祖父を亡くした祖母もその後から隠居に移って一人で住んでいる。

彼女は母方の祖母で名は「さき」といった。

祖母は「私の名前は『螢の光』の『幸』とばかり歌うなり」の「幸」なんだよ」と、いつも自慢げに話していた。「さき」とは「幸」の古い言い方である。

彼は生まれて以来この祖母にはずいぶん可愛がって貰って育つたのである。

智と弟は幼くして父を亡くしていた。祖母はそんな二人の孫を可愛がってくれた。

特に智は初孫であったから祖母は尚更可愛かったのかもしれない。それに彼は生まれ付き体が弱かったこともあって、溺愛にも近い可愛がりようであったという。

彼もまたこの祖母が大好きであった。

暇さえあればすぐ近くの祖母の家に入り浸りの状態になり、食事は勿論、夜は祖母の布団で昔話を聞きながら寝たのである。

祖母は近くの町の旧家に生まれ、十六歳で祖父に嫁いできた。働き者で物知りだった彼女は、傍を離れない彼に仕事の合間をみては昔話や動植物の名前、断片的な歴史の話や戦争のことなどを話してくれたのである。

今でも彼はその幾つかを懐かしい祖母の声や仕種とともに思い出すのである。時としては髪油の匂いも思い出すことがあった。

成人し、離れて暮らすようになってからも彼が尋ねると大喜びで迎えてくれた。

智は高齢になった祖母の隠居生活が心配で就職してからは暇を見ては訪れていた。

しかし仕事が増しくなると年に一度くらいしか帰られない年が続いていた。

今年も盆にはおばあちゃんの顔が見られなかったなあと思つていたある日、母が電話で長々と祖母の話をした。

日頃は丈夫な人であったが、高齢になったせいか次第に足や腰

が弱って床につくようになり、足が不自由になると用便も一人では行けなくなってしまうという話である。

しかし、まだ差し迫った状態でないと言う母の言葉に、済まないとは思いつつもつい今日になってしまった帰省であった。

祖母は教師をしている長男夫婦と一緒に暮らしているが、二人とも多忙な勤めで日中は隠居所で一人になってしまおうという。

伯父遠山仁はもう六十三歳で小諸市内の私立短大の教授である。伯母^母は市内の高校の教師で五十八歳、定年退職目前である。

足腰が不自由で一人では歩けない祖母は、しぶしぶお襦袢をしているらしいが昼間は替えてやる者はいない現状だという。母が電話で話したことを思い出すと堪え切れなくなって、年末ぎりぎりに帰って来たのである。

床に就くようになってからの祖母の昼食は、一杯のご飯と漬物に梅干し、消化の良くて腐敗の心配のない佃煮程度のおかずが多いらしいと、母は祖母に聞いたことを話した。

伯母は決してけちではないが、年寄にはこの程度が体にも良いと考えてのことだろうと彼は思いながら聞いていた。

確かに高齢者は仕事をするわけではないから多くのカロリーは必要としない。しかし、生命と活力を維持していくためにはそれなりの栄養が必要であると彼は思っていた。毎日お決まりの食事では食欲も無くなり体も衰え、生きようとする意欲さえも無くなってしまわないかと思っていた。

それに食べたいと思う物もある筈である。

人間にはその人の好みというものがある。たまには刺身が食べたいとか寿司や天麩羅が食べたいなどと思うのが人の常である。

まして他に何の楽しみもない寝たきりの年寄の楽しみは食べることであり、それが大きな楽しみの一つでもあろう。

母の電話の内容や話し方からすると伯母のやり方は、曲げて受け取れば必要最小限の食事しか与えない冷酷な仕打ちと受け取れないこともなかった。

お襦袢も朝交換すると夕方まで交換無しだという。祖母の局所の辺りはひどく爛れてしまい、床擦れもあって可哀相だと、母は涙声で声を詰まらせながら話した。

その上、お襦袢は簡単には外せないようにゴム製のカバーが被せられ、幾重にも結ばれているとも話した。つまりかねた母が換えてやろうと試みたことからの話なのであろう。

おとなしい母が言葉を荒げたのは隠居所の出入口が外から施錠され（勝手に開けないでください）と書いてあるという状況を話した時であった。

それでも母は親子であるから度々隠居を訪れてこまごまとした世話をしているらしいが、長男夫婦はその事を全く気付いていないようだと言っていた。

その電話の終りに今言ったことは私の思い過しかも知れないけれどと、兄夫婦を庇うような一言を付け加えた優しい母の気持ちには分かったが、余りにも酷い話に返事も忘れ茫然として聞いていたのであった。

彼は今、あの時の母の電話の後で込み上げてきた怒りの数々を思い出していた。

「確かに教師の仕事は多忙を極めるものであろう。しかし義母のために少しの時間を割くことは当然であろうし、決して不可能な

ことではあるまい。体を清潔にし、洗濯した下着を着せながら会話を交わし、次の日の食事を相談する。暖かい昼食は無理だし暑い季節は食中毒が心配だから大変だが、せめて義母の希望を聞いて食べたいものを作ってやるくらいのことは二人の心が通い合っていたら決して不可能ではあるまい。それが出来ないから祖母がこんな状態になってしまったのだ。

夫婦とも教師なのに、自分の親にそんな酷い仕打ちをしていて何が教育者か。第一人間として許されることじゃない。

祖母の横顔を見つめながら彼の怒りは次第にエスカレートしていった。でもその怒りは次第に母にも向けられていき、やがて心の中のつぶやきに変わっていった。

「大体ね、お母さんは近くに居るんだから、何でもつとおばあちゃんを見にいってやらないの。あんたは実の娘だろう！」

彼は感情の高ぶるままに、済まないとは思いつつも次々と母への強い言葉を思い浮かべていたのである。

三

気が付くと祖母の手が彼の方に伸びていた。

「ばあちゃん、何か用なの？」

「……………あんな、智……………」

「うんうん、何でも言つてこいよ……………」

「……………あの、もう一つ、もう一つ食べたいだけだな……………」

皺くちゃの祖母の顔には幼子のようなはにかみの表情が浮かんでいた。

年を取った祖母である自分が孫におねだりするのが恥ずかしいのか、それとも二つも食べることを恥じらっているのか分からないが、とにかく祖母は消え入らんばかりに恥ずかしくている様子であった。

智はそんな祖母の様子を目の辺りにして、一旦は膨らんでいた怒りや疑いの全てが少しは薄れた思いで、微笑ましく嬉しい気持ちを一杯味わっていた。

そして、今日、小諾に帰ってきて良かったとしみじみ思っていた。しかし、これまでの祖母と何かどこが違うという思いは、尚も彼の中で点滅を繰り返していたのである。

そして、今の祖母の姿を六十近くになった母の今後と重ねてみている自分に気が付いていたのも確かであった。

それは、人には誰でも必ず訪れる老いと、そしてその先に待っているものへの思いでもあった。

—— かつて祖母は何時もおやつを準備して待っていた。

「お帰り！智、早かったな。おやつ、あるだよ、食べな」

「わあ嬉しいな。今日は何？おばあちゃん」

「今日はかりん糖だよ。旨いだでお食べ！」

「うん、食べる食べる！」

それは日本が太平洋戦争に突入した頃のことである。

日本中に戦時体制の気運が高まり、商店に並ぶ品物は極端に数を減らしていった時代であった。

でもその初めの頃はまだ菓子屋もあったが現金収入が極端に限られていた農家のこと、どのようにして買ったものか、祖母は何時でも家にやって来る彼に何か必ず菓子を用意して待っていたの

である。

しかし次第に菓子屋がなくなり祖母のおやつは手作りのものへと変わっていった。

以前から養蚕の盛んな小諸の農家には年に三回春蚕と秋蚕、そして晩秋蚕という忙しい時期があった。しかし夏は梅雨のため養蚕は行なわれていなかった。

養蚕は遠山家の唯一の現金収入源であり、祖母達は大切な蚕をお蚕様と呼んでいた。

大勢の人達が桑摘みや一日数回の給桑、蚕の床替えに忙しそうに働いていた。春と秋は田植稲刈とも重なるから実に多忙であった。

数段に区切られた蚕棚から蚕の竹籠を引き出し桑の葉を与える。と蚕達は一齐に食べ始める。蚕室を埋め尽くした幾棚もの蚕達の桑を食べる音がサワサワサワサワと聞こえていた情景を何かの機会に思い出すことがある。

蚕に触れるとひんやりとして冷たかった。やがて大きくなると繭を作らせる上蔭器に移し替える。黄色く透き通った体の蚕が器具の隙間に入って糸を吐き、綺麗な俵型の繭を作り終えると繭取りである。

これで一回の養蚕を終えるが凡そ二カ月もの長い間の作業なのである。

こうしたことの年三回の繰り返しは養蚕農家の仕事である。

でも、毎回の養蚕作業の最後には常に使った器具の手入れと整理片付けが待っている。

そんな多忙な時期には祖母が作る蓬団子や押し寿司、秋蚕の頃

には彼岸も兼ねた「おはぎ」、そして「げんまいパンのほやほや」という大きな売り声で、自転車で売りに来る玄米パンも時々おやつとして出された。

みんなで輪になって食べる季節毎のおやつは本当に美味しかった。

そうした多忙な養蚕の仕事で一人で中心になって切り盛りしていた明治生まれの祖母は、中々のしっかり者だったのである。しかし、やがて終戦を迎えると、遠山家が所有していた田畑の大部分は農地改革により強制的に小作農家の物になってしまった。そして戦後、化学繊維業が発達すると絹織物の需要は次第に減っていき、養蚕業も下火になっていった。

遠山家の生活は一変したのである。

収入の道を閉ざされ、既に祖父を亡くしていた祖母は大変な苦勞をして二人の子どもを育てたと思われる。

智がまだ幼かった頃の祖母は、六十代半ばであった。

今ならばまだ若い年女なのにその頃の智には随分と年寄に見えた。確か丸髷姿も見た記憶があるが、それは親戚の婚礼か何かのお祝いがあった時だったかもしれない。でもそんな祖母の綺麗な着物が智には嬉しくて、はしゃぎ回っていたように思う。

しかし今彼の前にいるのは、布団に横たわり見る影もなく極端に小さくなってしまった祖母である。そして成人した孫の前で微かなはにかみを見せている祖母の姿であった。

その姿からは彼の思い出に残っている往年の懐かしい面影は、そのかけすらも見当らなかった。

そんな祖母が急にいじらしく思えてきて堪え切れなくなり、土

産の包みを整える振りをして背けた智の頬を、幾筋もの涙が満り落ちていった。

あんなに食べたいと言っているのに駄目と言うのが忍びなくて、もう一つぐらいは構わないだろうと思った。

声が変わっているのを悟られないようにプリンを包みをゆつくり開け、何度も咳払いをしてから一つを取り出して蓋を開けた。

「じゃもう一つ食べようよ、おばあちゃん！美味しいよ。さあ、食べて！」

祖母はいそいそと体を起こし、骨張った両手で上体を支えようとしていた。智はさつきと同じように祖母の背中に手を添えて、抱き起こしてやると、一口分のプリンをスプーンですくった。

「僕が食べさせて上げるからね。アーン」

「済まねえことだね……………」

祖母はかつて小さかった頃の智のように、大きく口を開け素直にプリンを待っている。

彼は生まれて始めて祖母の口に菓子を運んでやった。

大きく成人した孫から好物のプリンを無心に食べさせて貰っている祖母の顔が、彼のすぐ近くにあった。

それは想像もしなかった彼の大好きな祖母の老いの果ての姿であった。

食べさせて貰ったプリンを楽しんでいるような口の周りは深い皺が刻まれ、顔や首の皮膚にも多くの皺や染みがあった。

すっかり年を取ってしまった顔は、これまで彼の思い出の中で何時も微笑んでいる懐かしい顔ではなかった。

袖の先に見えている彼女の手には顔と同じ多くの染みがあり、

色白だった皮膚はどす黒く変色して骨が浮き出していた。口を開けた時に見えた歯は少なくなっていて、まばらなその残りは欠けたり、茶色に変色しているのが痛々しかった。

恐らく祖母の身体全体も同じように変化しているのに違いない。智はゆつくりスプーンを選びながら、すっかり無口になっていた。

祖母は如何にも旨そうに、音を立ててプリンをお仕舞いまで残さずに食べた。

「うんまいな、智、ありがとう」

食べ終えて満足気に信州説りで礼を言いながら、手拭で拭いている口の辺りは無数の皺に囲まれて小さくしぼんでいた——

四

「ばあちゃん、何で一人暮らしを始めたの。伯母さん達と一緒に母屋に住めば面倒も看てもらえるのに」

「私はな、じいちゃんが亡くなつてからはな、なあんだか、張り合いが抜けたようになつちまったがね……………」

祖母は大分不明瞭になつた発音でゆつくりしゃべり始めた。

「……………」そんなで隠居に入つただよ。初めの間は何もかも自分で出来ただけで、それがこんなことにな！この一年前から急に動かん体になつちまっただね。悲しいことだね。お便所へもな、

一人では全く駄目だでな。……………仕方なしに嫁がして呉れるお襦袢で我慢しとるだよ……………それがな昼間は朝付けたら夕方しか替えて貰えんだでな……………それが本当に辛いよ」

祖母は急に泣き声になって、訴えるように話すのであった。

「そして、ご飯もな、食べたいものがあつても、年寄にはそんなもの毒やといつて食べさせて呉れんだし……おかずをもう少しだけ欲しいといつても、そんなに食べると体に良くないと言つて食べさせてくれんたいね。私、今まで何にも悪いことなんかしてこなかつたにな……」

祖母は、懐から皺くちやの手拭を取り出し何度も目を拭いながら話を続けた。

祖母の話は事実かも知れないし、淋しい年寄の少しの事実や思い込みを誇張した僻み話や愚痴話かもしれない。年寄は同情を得ようとして作り話をするかもしれない。

あるいは伯父伯母達が善かれと思つてしていることが、祖母には通じていないだけなのかも知れない。

しかし、目の前の祖母は心から悲しみ嘆いている。智は祖母の訴えを信じない訳にはいかなかつた。

祖母は若くして嫁いできて以来、家族のため家のためにと休むこともなく懸命に働き続けてきた人である。

高齢になつて自分で動くことも出来なくなつた祖母を悲しませることは、何としても避けなければならぬと彼は思った。

少しでも安穩で満ち足りた日々を過ごせるように努力するのが家族の為すべきことであろう。本人も家族もみんなが少しづつ我慢してそうした状況を創りださねばならない。

今まで懸命に家族の為に働き続けてきて、卒寿を過ぎた人への報いが、これでは余りにも惨めすぎるではないか。

彼には慰める言葉もなく、再び沸き上がってくる悲しみや嘆き

などが入り交じつた激しい怒りを覚えていた。

現在の社会は全ての人が恵まれ、相応に豊かな生活をしているはずである。

その社会作りに働いた人にこんな悲しみを味わわせる話があつてよい筈はないと、祖母の嘆きを聞きながら怒り続けていた。

この家の長男、つまり祖母の息子の仁は、彼にとつては伯父である。

伯父夫婦には子供がない。

そのせいか小さい頃から伯父伯母には随分可愛がられてきた。智もまたそんな伯父夫婦が大好きであつた。

その伯父が自分の妻のしていることに何も言わないでいるのかと思うと不思議に思え、伯父に対しても無性に腹が立っていた。

自分の生みの母ではないか、妻が出来なかつたら何で自分でやらないのか！

この家の伯母にも勿論であるが、伯母よりむしろ伯父に対しての方が余計に腹が立っていた。

入り口に掛けてある鍵のことは、伯母達が勤めに出ている間の用心の為であろうと理解できた。

それにお機嫌も換えてやる人がいない以上昼間の交換は出来なから、祖母には可哀相だが止むを得まい。

しかし食事についての伯母のやり方は全く理解できないことであつた。

これから後何十年も生きられる人ではない。先の短い年寄の頼みである。

せめておかずくらいは、本人が食べたいと言うものを出して

やったらどうだろう——

あれこれ考えていると祖母の声が出た。

「あのな、智はなあ、今ここに閉じ込められてしまったみたいになってるだよ。家の嫁はな、朝、出掛ける時玄関に鍵を掛けて行きよるだ。あの鍵を掛ける音がな、もう厭でなあ！それに、あれじや仲良しの人が来てくれても、入ることもできんてなあ。考えていると何だか無性に悲しくなってるだよ……」

祖母は泣きながら話した。

母の電話の通りの話であった。

祖母が助けてくれと言っているのだと智は思った。

母から聞いていたし、さつき実際に経験したから分かっていたことであつたが、祖母の気持ちを考えて玄関まで確かめに行き見た振りをして戻つた。

「ほんとだ。鍵が掛かっているね……でも、昼間、ばあちゃん一人だろう。誰か悪い奴が入ってくるわけないって、伯母ちゃん、思つたんじやないかな！……」

「……………」

「近頃は物騒なんだよ。東京じや家を留守にする時はどこでもしつかり鍵をかけてるよ。もちろん僕も朝晩必ず鍵を掛けているよ」

「ふーん、そうか！物騒なのか……………」

祖母の声の調子が少し変わつてきた。

そして顔を拭うと手拭を懐に仕舞つた。

でも、気が付くと祖母はまた手拭を顔に当てて泣いている。

「おばあちゃん、泣かないで！我慢してね」

てやりながら、彼も一緒に泣いた——

「私はなあ、もうずいぶん年を取つただし、何も欲しいものはないだよ。ただなあ、この家で毎日を安心して過ごし、静かに終わりたいだけだよ……………」

この祖母の声は彼の心に痛切なまでに強く身にしみて響いた。祖母の声には切実で精一杯の気持ちが込められていると感じていた。

そして今聞いた言葉の中に安心立命という切なる祖母の願いを聞いたと思つた。

それはどのようにして死ぬかではなく、どのようにして最後まで人間らしく生き抜くかという切実な願いのだと感じていた。智は居た堪らなかつた。

「おばあちゃん、御免な。こんなことになつてしまつて。僕が何とかするからな……………」

その時ほど強く祖母を引き取りたいと思つたことはこれまでになかつた。

彼は祖母の背中を懸命に撫でさすりながらある決意を固めようとしていた。

「祖母と一緒に暮らせたらどんなに幸せなことだろうか。それがこれまでの祖母の愛情に対するせめてもの恩返しにもなることだし。何とかして「さき」の名前に相応しい幸せな日々を送らせてやりたいな。大好きなおばあちゃんだもん……」

智はそんなことを真剣に考えながら祖母の傍らで長い時を過ごしていた——

「……………だからさ、おばあちゃんをこの家に引き取ってやりたいんだよ。あのままじや、おばあちゃん死んじまうよ。どうせ母さんは独り暮らしなんだし、二人は実の親子じゃないか。頼むよ母さん！そうしてやって！」

つい今し方、祖母の隠居所から帰ってきた智は、挨拶もそこそこ母に祖母の面倒を見るようにと口早に話していた。

一人で淋しく寝ている祖母の姿を見てきただけに思い詰めた気持ちに駆られていたが、母の事情も分かっている彼にはある程度のためらいもあった。

中学校の教師であった父は智と正の兄弟が五歳と三歳の秋に死んだ。

青山孝あきやま たかしといい、享年三十七歳であった。

父は幼少の頃から体が弱かったらしい。病名は当時難病と言われた結核であった。

その年、日本は終戦を迎えた。

彼も弟も父親の味とはどんなものか全く知らないで過ごしてきた。友達が父親と遊んでもらっているのを見て、見なかつた振りをして弟の手を引き、走ってその場を離れた淋しい思い出は何度もあった。

そんな時、何で分かるのか祖母は必ず何時もよりもずっと二人に優しくしてくれた。

しかし兄弟よりもっと淋しくて辛かつたのは母であつたということが、当時の彼にはまだ全く分かつていなかった。

母は薄といひ六十歳、旧姓は遠山で伯父仁の妹である。

その時、母は三十三歳の若さであつた。

父が亡くなつた後二人を育てるために、終戦直後の混乱の時代を職種を選ぶこともなく一生懸命に働き続けた母であつたが、二人の自立後は一人暮らしの生活を続けていた。

三十歳を目前にする年令になつた智は、今の自分よりも六歳ほど年上の年令で夫を亡くし、幼い子供達二人を育ててくれた母の苦勞が少しは分かるようになっていた。

学費の全てを奨学金とアルバイトに頼っていた大学時代の智に、母が手紙に忍ばせて呉れた札の一枚は、今も彼の財布の中にお守りとして大切に仕舞われている。

母の今の収入といえば、僅かな年金とパートの給料、それに二人の息子からの少しの仕送りだけである。

一人暮らしは気楽だよとよく言っているし、十分ではなくともそんなに不自由をしている様子はなかつた。

しかし近頃よく足や腰が痛いところばすのを聞く度、自分達が掛けた苦勞のせいだと思ひ、弟とも話し合つてそろそろ母との同居を考えなければならぬ頃だと思つていた矢先の祖母のことであつた。

そんな母に寡たきりになつている祖母を引き取つて介護を頼むのは非常に難しいことだとは分かつてはいた——

彼がまくしたてるように話すのを黙つて聞いていた母は、やがてぼつりと言つた。

「……………そりや、難しいことだね」

やはりそうかと思つたが、少し意外でもあつた。内心では母

なら何とか分かってくれると信じていたからである。難しい話ではあるが一応は賛成してくれるはずだと思つての提案であつた。小さい頃からばあちゃん子で、実の娘である母が焼き餅を焼くくらい懐いていた彼の大好きな祖母を思う心は、母なら必ず分かつてくれると信じていたから言つた考えであつた。

しかし、母には母の思ひがあつた。

「うん、そうだね。でもな。お姉さんも忙しい中をやつてくださるんだから、余り強いことは言えないだよ。お前はお姉さん達のしていることを全部見ないで一方的に決め付けているだけだ、実際のところはどうかだろうかいね。それに、こういうことは、みんながそれぞれ少しずつ我慢し合わないとなね」

「……………」

方法は何か見つかる。いや、見つけて祖母を安心させてやらねばならないと簡単に考えていた彼であつた。それだけに今の母の言葉は意外であつた。

自分の考えの甘さを今更ながら思い知らされながらも、なぜ？と問い詰める彼の視線をわざと逸らした母が言つた。

「お前はおばあちゃんを引き取るなんて言うけど、そんなことをしたら兄さんやお姉さんの立場はどうなると思う？世間の人は兄さん夫婦のことを鬼みたいにするんだらうて。それにはあちやんだって兄さん達をどう思うだらうね……………」

「世間の人の言うことなんか構うもんか」

彼は叫ぶように言つた。

「他人の言うことが大切か、おばあちゃんが大切か、考えるまでもないだらう」

母にはもつと言いたかつた。いかに仕事が忙しいとはいへ、足腰も立たなくなつた年寄の祖母を一人閉じこめておいて、食事らしい食事も与えず、お襦袢も一日二、三度しか換えず、その上鍵まで掛けてあるなんて幾ら何でも酷すぎるやり方である。

「伯父さんも母さんも、母親の悲しみや嘆きを何と思つて暮らしているのか！」

彼は心の底から怒りを覚えていた。

そして、近くにいて事情が分かっているのに何もしてやらない母に怒りの矛先を向けていた。

「それにな、私も……………」

例え引き取つたとしても、介護と仕事の両立には体に自信がないというのである。母の言っていることも智には分からないことではなかつた。

本来なら六十になつた母親に、一人暮らしをさせている自分にも責任がある年になつて居るのは十分認識している智であつた。母には申し訳ないと思つていた。

仮に母が介護を引き受けたとしても、今の母の体では共倒れの恐れは十分考えられた。

彼が兼ねてから気に掛けていた祖母や母の老後の生活の心配が現実となつて、智と周りの人達の前に突然現われて来たのである。

彼は以前、出版社の同期の友人から、今のことと似たような話を聞いたことがあつた。

その彼は東京で家族と暮らしているが、叔父叔母と父が年老いた母の面倒をめぐつて押し付け合ひをしているというのである。

彼の父は三人兄弟の長男である。

叔父叔母は長男が看るのが当然だというし、長男は家族が多いし家がマンションだから、一戸建に住む次男に看ると言い、次男は妹は女同士だから適任だとみんなで責任を押し付け合っているというのである。

それが実に厭で見苦しいという彼の悩みや怒りの話であった。孫の彼は、子供達にたらい回しの扱われているおばあちゃん可哀相だと、しんみりとした声で話したのであった。

そして、今の日本にはこうした場合の問題がどこにもあるようだととも話した。

その時は全くよそ事として聞いていたが、それが今、自分の目の前のこととして起こっているのであった。

友人の話は年寄の面倒の押し付け合いであり、智が直面している祖母の介護とは少し様子は異なるが、本質的には高齢になった親達の介護の問題につながる事だと思つた。

悩む子と母は互いの気持ちを通じ合わない重く暗い鬱朗気のまま大晦日の夜を迎えた。

そして長い沈黙の後、母が独り言のように話し出した。

「昔はな、子供はみんな親のすることを見ながら育つた。沢山の家族の中で、一緒に暮らしている年老いた祖父母を大切にする親達の姿を目の当りに見ながら育つたもんだ。そんな様子を目にしてきた子供達は、大きくなると自然と親達のようにするのが当たり前になっていったんだらうて……………」私らの頃はみんなそうだと思うだよ。今の人は年寄と一緒に暮らさないから、そうしたお手本の親の姿を見ないで育つた者が多くなつたんだらうな……………」

智は母の話聞いていて感ずるものが幾つかあった。

自分もそんな一人だと思つていた。——その夜、彼は隠居

所に一人淋しく寝ている祖母のことを思い、まんじりともせず除夜の鐘を聞いていた。「一番良い方法は？どうすればいいんだ？」

彼の中で、そのことだけがぐるぐると回り続けていた。

「このままでは祖母が可哀相だから他に方法を見つけないとダメな。何かないか？……………」簡単なのは僕が面倒を見ることだけだと、引き取つたって誰が昼間の面倒を看るのか。結局は同じことじゃないか……………」

あれこれと思い悩んでいる内、昨年会社の主力部門になつてい

る週刊誌のキャンペーン（戦後の日本社会の変容）を思い出した。

「戦前の日本社会には、終戦後まで家督財産は長子が相続し次代の戸主になる（家）の制度があつた。

戸主には戸主権と家督、財産相続権があり家族を統括扶養していく義務があつたが、こうした家の考え方や家族制度は廃止された。

そして戦後の社会の変化や進歩は人々の生活や考え方を大きく変えていき、老後の生き方や介護にも様々な意識の変革があつた。

以前の日本社会は複数の家族が同居したり多くの子供がいて、高齢者の介護などは大きな社会問題となることはなかつた。

しかし家族制度の廃止は夫婦単位の核家族化が進んだこととあ

いまって、様々な問題が表面化してきたという内容の一部である。キャンペーンには智も企画部から選抜されチームの一員として関わっていた。

あのキャンペーンで意図したことが、正に今ここで直面して

いることなんだなと思ひ当った。

確かその内容の関連記事には、独居高齢者の増加も取り上げられていた。

思い出すと・寝たきりになっても介護する家族が近くに居ない・病院への通院困難・買物に行けない・低収入などなどの問題点が項目として取り上げられ、智も実際に独居高齢者宅で取材した時の記憶が生々しく蘇ってきていた。

「そうか！今になって思えばおばあちゃんも、昼間だけという一時的な時間帯ではあの取材の時の独居高齢者のようになるんだなあ！おばあちゃんの引き取りもさつきは良いと思っただが……… やっぱり駄目か！例え引き取ったとしても足腰が弱くなった母さんには大変な仕事を押しつけるんだな。……… そうだ！老人ホームなんかどうだろう。うーん、でも淋しがり屋さんが大勢の他人の中で我慢できるかな？それに第一おばあちゃんが可哀相だしな。……… 無理だな！とすると……… うーん……… やっぱり、伯父さん達に会って相談してみるか！」

結局、自分で結論が出せなかった智は考えの甘さを認めざるを得なくなっていた。

六

新年の朝を迎え、母の心尽くしの雑煮もそこそこ早速伯父の家に新年の挨拶に出掛けていった。

「お智、来たか。ます上がりなさい」

屠蘇のせいか上機嫌の伯父は相変わらずの優しさ満面の顔で迎

えてくれた。

珍しく和服姿の伯母も応接間に入ってきて

「あらあら、智さんじゃないの。明けましてお目出度う。あなた、今年こそお嫁さんを貰うのよ。誰か良い人いないの」

彼女は挨拶は手短かにして智の苦手な結婚の勧めの説教を始めた。この伯母は会えば必ずこの調子で結婚の勧めを始める。

今の彼の周辺に心当たりの女性はいないこともなかったが、伯母達に恋人ですなどと紹介できるにはまだ自信がなかった。

「はあ……… はい、まだその………」

「いるの？いないの？何だったら私が教え子を紹介しても良いわよ」

「でも………」

彼が返答に困っていると、

「どうだ。仕事はうまくいっているか」

伯父の助け船に救われて、しばらくの間、伯父と二人で世間話が続いた。

やがて伯母が酒やおせち料理を運んできて三人で新年らしい一時が始まった。

しばらくすると伯父の方から、まるで智の気持ちがかかっていったように、祖母の話を切り出した。

「俺もな、智。随分悩んでいるんだよ。お前もこんな話がかかる年になったんだからな、まあ、聞いてくれ」

酒好きの伯父が杯を伏せて話を始めた。

「おふくろはなあ、もう九十二歳になった。丈夫な人だったが最近では年とともに足腰が駄目になってな、可哀相に寝たきりに

なつてしまった。病氣は無いようだが、自分で動けないから全てが家内の仕事になる。これが中々大変だ。家内も良くやってくれているが、完全という訳にはいかん。なあ、お前。そうだろう？」
「フフフ……………」

伯母は事も無げに軽い笑いで答えた。

「ああして寝ていても案外体は汚れるからね。出来るだけ清潔に拭いてやるんだが、これが大変な大仕事でな。夫婦二人がかりでないといけないんだ」

「お湯の準備はあなたの専門よね」

「そうなんだ。お湯を沸かし運んで容器に入れるのは俺の仕事なんだよ、ハハハ……………」

伯父も笑って話したが、これまでずっとそんな介護をしていたことが分かると、さっきまでの勝手な思い込みが申し訳なくてお詫びと感謝の気持ちに変わっていった。

「でも、体を拭いてやるのも、着物を着せ替えてやるのも家内なんだがね。これは大変なんだ。重労働なんだよね、君には……………」

彼は伯母に話を向けた。

「そうなのよ、これはね。誰かがやらねばならないことなの。でも、やってみると自分で言うのも何ですけど中々大変なことなのよ。お母さん、ああ見えていてもあの体を持ち上げるのは結構腰にこたえるのよ……………」
「動めの関係で昼間は居ないし帰りも遅いことが多くて、お母さんには本当に申し訳ないけど智さんも見た通りの状態が精一杯なの。本当に申し訳なくてね、お母さんには何時も謝っているのよ……………」

伯母の話がしんみりした口調に変わった。

「でもお母さん、すぐ忘れてしまつて……………お昼ご飯まだだがね、なんておっしゃるの。私が準備しておいたお昼を食べていらつしやるのに、すっかり忘れていらつしやるみたいなことがよくあるのよ」

「それにね。こんな場でお話することじゃないんですけど、昼間付けて頂くお襦袢だつてね、お母さん、お厭なのはわかつてますし、私だつてお可哀相だと思つただけど……………他に方法がないからね、仕方ないのよね」

伯母は少し声を詰まらせていた。

「それで、夕方帰つてきたらなるべく早く換えて上げて、主人の帰りを待つてお湯を運び、きれいに拭いて上げるの。それに、玄関の鍵のこともね。昼間は私連いでしよう。もし、留守に危険な人がどんな目的で侵入しないとも限らないから、玄関は鍵を掛けるより仕方ないものね。でも、お母さんは友達も入れないからつて淋しそうなんだけど……………」

「そうなんだよ。俺も辛くてな……………」

そんな伯母を庇うように伯父が言った。

「偉そうな言い方だけど結局私が悪者になつて強引に鍵を掛けちゃつたのよ……………」

伯父の言葉で気分を変えたように、伯母は明るくあつさりと話している。ちやきちやきの江戸っ子を自認する伯母の話よりは、何時聞いても明快そのもの、さっぱりしていて嫌味など全く感じられない。有りのままそのままとつた口調である。

「そうだったのか！結局はこの伯父と伯母がおばあちゃんを守つ

てくれていたんだな。そうだったんだな！でも……………？」

彼の小さな疑問がまたまた膨らんで来た。

「今の伯母の話は事実だろう。しかし、この一年の間には伯母が話にくいことも何度かあっただろう。動いている伯母に食事や排泄の世話は心身両面で大きな負担になったことだろうし、そんなことで心の通い合わない日々も何度かあったことは想像できるな。それに祖母は祖母で嫁に世話を掛ける遠慮と、長い間に生じてくる幾つかの口に出せない不平不満に、次第に心を固く閉ざしていったんじゃないかな……………」

彼は二人の話を聞きながら考えていた。

「でも、伯母が話せない事実があつても不思議はないな。二人とも人間なんだからな。考えたくないけど、もしも何にもなかつたとすれば、泣いて訴えたおばあちゃんの話はどこから出てきたかということになるな。……………しかし、今思ったことは絶対に口にしないことだな。伯母さんとおばあちゃんの二人と、そして伯父さんのためにも、な！」

智がそんな自問自答をしていた時、

「それであ、智」

伯父がしみじみと話し掛けた。

「おふくろだけだな。あんな状態になつてからずいぶん変わつてしまつたよ。昔はあんなんじゃないよ。とても物分かりの良い人だつたのになあ。今じや俺達が善かれと思つてやることでも素直に受け取つてくれないこともあつてな。家内も時々困つてゐるよ。でも、年寄のことだから俺達の方で折れてゐるんだがな……………」

「そうなんですか。伯父さんも伯母さんも大変なんだね。少しも知らなくて失礼なこと言つたかも知れない。ごめんさい」

彼は心から済まないと思つてゐた。言つたかどうか覚えていないが、思つたのは事実であつた。

「お前の言うことは何とも思わないよ。俺達とお前の間のことだ。遠慮なんてするな」

「そうよ、智さん、これからもよろしくお願いしますわよ」

「はい、すみません」

その言葉でほつとしたかのように、三人は伯母の入れたお茶に手を延ばした。

「……………こんな愚痴話ばかりじゃ駄目だな。何か良い方法はないもんかなあ」

「そんなものないと思うわよ。こうしたことはね、周りのみんなが少しずつ我慢しないと駄目なのよ」

「我慢していつたつて……………俺達ずいぶん我慢してきたじやないか」

「もつと我慢しないと駄目だと思うわ」

「おふくろにこれ以上の我慢は可哀相だよ。もう今のところが限界だと思ふ……………」

「それはそうね！私にしばらく考えさせてね。あなた、いいでしょう？」

二人の会話の中で、伯母は何か考えるところがあるのかきつぱりとした口調で言つた。

「そうか。俺も考えてみるが、お前もよろしく頼むよ。さあ、今日は元旦だ。この話はこれくらいにして、また明日考えようや。」

どうだ智少し飲むか。飲めるんだらう？」
「ええ……でも、大分頂きましたから」
「そうか！智の奴、もう飯にしてくれだ」と
五時過ぎの元日は晴れていたが、短い冬の日は夕暮を迎えていた

七

二日の朝、久し振りに朝寝を楽しんだ智は十時頃になつてようやく起きた。

母は食事の支度をして待っていた。

「昨日は大変だった？疲れは取れたかいね」

「うん、大丈夫だよ。うわー、こりや旨そうだな、母さん！」
彼は久し振りの母の朝食に手を延ばした。

「それ、私が漬けた野沢菜だよ」

「うーん、感激だな。うんまいな……」

智も思わず長野弁になつていた。

「ほれ！そっちはな、蜂の子だよ」

「うん、子供の頃、よく食べたね、旨い！」

「その味噌汁、信州味噌だよ。どうかいね」

「うんうん分かるよ。懐かしいな！この味」

一年振りに帰った息子に一つひとつ説明する母は心から嬉しそうであった。

母と子の二人だけの朝食は、離れて暮す二人にとって久し振りに心が触れ合う一時でもあった。

昼を過ぎた頃、智は母を誘つて氏神様へ初詣に出掛けた。母と肩を並べて歩くのも一年振りである。

智は母が少し小さくなつたように思いながら、母の歩調に合わせて参道をゆつくり歩いていった

お参りの後、買物に行くという母と別れて伯父の家に向かった。「お昼の後、母と初詣に行つてきました」

「そう、それは良かった。お母さん喜んでいらつしやつたでしょう。たまには親孝行しなさいよ。私なんかそんな話、羨ましいわ……」

伯母に明るく迎えられると、伯父が炬燵の上に積まれた年賀状を見ていた。

「おお、来たな。見てくれ、出さなかつたところからこんなに来ている。返事を書くのが大変だぞ。ハッハッハ……」

伯父の声を聞いていると何だか心が落ち着くのが不思議だった。やはり大好きな伯父の姿や声の中に、無意識に父の面影を求めているのかもしれない。

しばらくして年賀状を片付けた伯父が話し出した。

「昨日はよく話したね。お前が帰ってから、二人でよく話し合つたんだがね。家内が言うには、退職を一年早めてこの三月末で辞めようって言うんだよ。こんなことを続けていちゃ第一おふくろが可哀相だから、来年の定年退職をすこし早めて辞めようって言い出したんだよ」

「えっ、伯母さん、辞めるんですか？」

智は驚いて言った。

「そうなの。前から思つてはいたのよ。でも昨日遂に決断したっ

て訳よ。だって一年の計は元旦にありつて言うでしょ、ウフフフ」
盆で運んできた酒肴を炬燵の上に並べながら伯母は相変わらず
の口調で言った。

「えー？だって、もう少しで定年なのにな？」

智は思いもしなかった意外な話の展開に驚いて、二人の顔を交
互に見つめていた。

退職を一年早めるのは、勿論祖母の介護のためであることはす
ぐに分かった。

「はあ……そうなんですか。おばあちゃんは安心するだろうけ
ど、伯母さんは、それでいいの。まだまだ学校でやりたいことが
あるんじゃないませんか」

彼は努めて平静さを装って答えた。

「ありがとう！智さん、優しいのね。でも、私は大丈夫よ。心配
しないでね。もう決めてしまったことなんでですからね！私だって
教師ですから、お機嫌をしたお母さんをたった一人にしておい
て、私だけが授業をしても、生徒達に自信を持って正対する
ことはできないと思うのよ。思いやりとか人に優しくなんて、と
てもとても生徒達にお説教できないって思ったの。だから、三月
で辞めてね、お母さんとの時間を大切にしようって思ったの。何
も心配のない、安心した毎日を通して頂こうと思ったのよね
……………お母さんにはね、一年も我慢して頂いたの。ようし！
今度は私が我慢する番だって、そう思った結論なのよ」

決断の理由を語る伯母の声は、さすがに何時もの口調と違って
淋しさがあつたことに智は心を打たれる思いであつた。

「でもこの考えはつい昨日出たばかりだからあまり確実性はな

いんだよ。それにこれとは関係なしに智への話があるんだがな
……………これは、また、後の日の話にしようかな？」

「そうよあなた、何もかも一緒というのは良くないわ。あなたの
何時もの悪いくせよ」

この言葉に伯父は笑っていた。

智は二人の話の終わりの言葉に、何か引つ掛かるものがあつた
が、心は救われたような温かい思いに充たされていた。

「さすが伯父さん伯母さんだ。おばあちゃんのこととはしつかり考
えていてくれたんだな。おばあちゃん！安心してね。もうしばら
くの間に我慢すれば伯母さんが一日中家にいるようになるそうだか
らね」

余りにも意外な二人の決断に戸惑いを感じながら、家族という
ものの本当の愛情に触れた思いで胸が一杯になっていた。

小諾に帰省してからついさつきまで続いていた重苦しい悩みが、
一筋の明るい光を受けて軽くなったように思い、思わず炬燵の上
の杯に手を伸ばしていた。

そして心の中で「昨日ではあんなにいきりたつていたくせに、
この変わり様だったら一体何だ！現金な奴だ」などと思つて苦笑し
ていたのであつた。

八

昭和四十三年、三月も半ば近くとなつて、東京はあちこちの桜
が満開になり、爛漫の春を迎えていた。

入社して六年目、智は二十八歳になつた。爽やかな容姿の知性

派で思いやりのある好青年である。

そんな彼に友人は多かつたが、無口な性格のせいか意外にもこれまで恋人と呼べる女性はいなかつた。

ところが、今年になって智に二つの変化があつた。

春季社内人事で同期五人中、三人に内示があつたが、彼は編集企画課係長の内示を受けていたのである。

係長は課の中を細分化した一つの部署の長である。社内の役職としては一番下であるが、今後の智の下には数人の部下がいて、彼はその上司になるのである。

「そうか、俺ももう少しで三十のおじんだもんな。有り難くお受けするか、係長殿！」

彼はその内示を受けることにしたのである。

そしてもう一つの変化は大学の後輩の女性から好意を寄せられていることである。

最初は会社の昼食時のことであつた。

仕事の都合で同僚の誘いに乗れなかつた彼が一人で食事に出掛けようとしていた時、声を掛けてきたのが彼女であつた。

「青山さんお昼どうなさいいます？私今朝お弁当二つも作っちゃつたの。お口に合わないかも知れないけど、もし宜しければお食べになりませんか？これなんですけど……………」

「うわあ、美味しそうだな！いいのかな」

「どうぞ……………食べて頂けたら嬉しいわ」

それはとても手の込んだ弁当で、彩りが美しい上に味付けも美味しかつた。

「馳走様。とっても美味しかつたよ。君はとても家庭的な人な

んだね。こんな弁当を毎日作ってもらえる人は幸せだな？」無口な彼にしては大変な誉めようであつた。

結局その日は会社で二人だけで食べる最初のお昼になったのである。

彼女からはそれからも何度となくお弁当を買つたり、手作りのケーキやネクタイなどをプレゼントされることが多くなつていった。

始めの間は余り気にしなかつたが、度重なることさすがに純感な彼も彼女が自分に好意を寄せていてくれることに気が付き、お礼代わりにコーヒーに誘つたり、時には食事を共にする二人だけの時を持つようになった。

そして今年になって、二人は互いに恋人として意識し合うようになっていたのである。

それは去年の秋頃からのことであつた。

去年の春入社し彼と同じ企画部に入つてきた彼女は松山美子まつやまみこといい東京生まれである。控え目だが優しくて愛らしい容姿の美子は今年二十四歳である。

これまででは怪しい一人暮らしの生活を別に何とも思わなかつた彼だが、帰りの電車の中で、無意識の内に「只今」と声を掛けられる生活の変化を考えている自分に気が付くようになっていた。その対象は松山美子であつた。

彼女の出現は彼に何か人生の転機を予感させていたのである。満開だった桜が葉桜に変わってきたある日、久し振りに母から長い電話があつた。

食事はしっかりと摂っているかと、戸縮まりや火の用心はちゃ

んとしているかとか、何時もの息子を思う母親の心配や確かめめやり取りが続いた後、これが本題だったというような口調で話し出した。

「お姉さんね、やはり退職を一年早められるらしいよ。大分悩まれたようだけどね、やっと決心されたみたいだよ。この間おばあちゃんに会いに行ったら隠居所でお姉さんと二人が仲良く話していた。おばあちゃんも明るい顔で笑っていたから安心しただよ。お前もその内に来てやってね。おばあちゃん、きつと大喜びするだよ。それにね、お姉さん、私と一緒に住まないかって言いなさるだよ。そうすりや私も隠居所でお母さんと住めるしね。パートはそのまま続けていても、たまにはお母さんの昼間の介護、お姉さんと交替も出来るだしね。そして少しはお姉さんに休んで頂くこともできるだし……………お姉さん、なかなか考えたもんだな！お母さんも考えて見ようかな……………今ん所、足も腰も少し調子が良いんだよ。そうそう、それにどうもね、兄さん達、お前を青山家の跡取りに、考えているんじゃないかかね……………何だかそんな気がするだよ。でもね、例えそうだったって、お母さんには別に異存はないんだけどね……………」

母が何だか浮き浮きした声で話しているのが彼には少し気になつていた。

「そうか……………みんな小諸で懸命に生きてるんだな。だけど困難なことでも何でも相談したり話し合おうって、大切なことなんだな。家族って大切なもんだな……………」

母の電話を聞きながら智は思った。

「ふーんそうなんだ！よかったね、母さん。これでおばあちゃん、

安心して過ごせるね。その……………跡取りなんてのはまた別の話でしょう。とにかくよかった。安心したよ。僕もこれからは何でもしつかり考えて進もうと思ってるんだ。それにね、母さんに相談したいことができたんだけど……………また盆に帰った時にね！母さん、小諸はまだまだ寒いんだらう？体、大事にしてよ。じゃね……………」

智は明るい声で電話を切った。

翌朝、出勤する電車の中で小諸の春の空や懐かしい懐古園、見慣れた千曲川の流れを思い浮べ、智の心は仄々した明るいものが満ち溢れていた。

そして、東京に戻る朝、隠居所ですつと握り続けていた祖母の手と、撫でていた背中感触を思い出しながら、

「おばあちゃん、智はたった三日間だけの心配だったけど、おばあちゃんは一年もずっと我慢してきたんだね。でも、もう安心だよ。よかったね」

心の中の祖母に呼び掛けている

智は今年の盆には松山美子を誘って、あのプリンを祖母への土産として彼女に持たせようと考えていた。

そして朝の内の暑くならない間に馴れ親しんできた懐古園や、蛭を取って貰った千曲川に祖母を連れて行き、三人で一緒に木陰に入ってゆっくりした一時を過ごしたいと思うのであった。

終

ゆりかご

~ Lily's Cage ~

斐太高等学校

熊 崎 菜 穂

いつかの夢の話をしよう。

——天空色の水底。

零れ落ちた。ひとしずく、遠く碧く透き徹る記憶。

忘れ忘れられる、ぼくらのこと。

序章 微睡ムヒトノ四阿

それがいつのことだったのか、あの庭は何処にあつたのか、彼女や彼が誰だったのか。

一切をぼくが忘れてしまう日は、そう遠くはないだろう。

「ふうん、忘れちゃうんだ。……え？ 別にいいわよ、忘れたって忘れてみせて頂戴よ。できるものなら」

なんて、彼女は笑うのだろうか。

彼女が紡ぐ言葉など、ぼくは露も信じてはいなかったけれど。

ぼくがあの庭を燃やし尽くしたことに変わりはないのだ。

「あら、女々しい。今更後悔？ それとも自責かしら？ ……でもしょうがないわね。なにしろ、わたしの大事な庭を火の海にし

てくれたんだから。死にたくなるくらい自分を苛んだって、おかしくはないわよね」

そこまでは云ってない。

回想の中でも彼女は饒舌で毒舌だった。

そして、嘘つきだった。

ぼくは黙ったまま、四角い窓の外を見遣る。

空の色は淡藍が六、オレンジが三と少し、淡く黄金色が透き

徹ったような割合をしていた。

あの庭では見ることのなかった色だ。あそこの天は、結局最後まで碧かったからな。

碧でない色を——

——彼女は知っていたのだろうか。

あるいは物語の結末を、ぼくの決断を。

愛する庭を、ああやって、何度も何度も失ってきたのだろうか。だったらぼくは、はじまりから既に、彼女に許されていたのか？

碧い光がひらひらと舞いこんでくる、白い四阿で。ひざに本を広げたまま微睡んでいた。ぼく。

隣で退屈そうに弾き石やビー玉を転がしていた妹。

あいつがとうとう睡魔に負け、こてんともたれかかかってきたおかげで、ぼくは目を醒ました。

途端、酸っぱい香りがかすかに鼻をついた。怪訝に思っただけで、くすんだページの上に檸檬が載せられていた。まだ青い。いさな実だった。

耳をくすぐる、くすぐる、という息遣い。

目の前にひとり、ぼくと同じ歳くらいの少女。

「リライよ」

開口一番、彼女は自分の名を告げた。よく透る声で、唄うように。「此処はわたしの籠の庭。——ようこそ、わたしと同じ瞳の色の男の子」

白百合が咲いた藍地の浴衣に淡浅葱の帯を締めた、美しい黒髪の少女だった。

やや吊り目の気がある翠の瞳が、いたすらっぽく煌めいていたことを思いだす。

あまねく彼女の手のうちだったと云うのならば。

あの時彼女はなにを思って、笑っていたのだろう。

ぼくの妹は、どうやら迷子になるのが趣味らしい。

いや、正確には迷子のフリをすること、か。

結局いつも迷子になるのは、あいつのそばにいる人間——つまりはぼくなのだ。

「ゆすらと遊んであげてるのよ。ねえ、玉梓」

彼女はにやにやして云うけれど、ぼく「で」の間違いではないかと思う。

まあ。

楽しんでいないと言えば嘘になるけれど。

「どうしたの、ゆーにい」

「なんでもないよ」

妹は首を傾げていたが、ぱつとまた前を向いて、機嫌良く足音を響かせた。

淡鈍の石の小道では、透かし模様刺繍のような木洩れ陽が踊っている。ぼくの手を引く妹は、そこを左へ右へと曲がってみたり、途中で引き返してみたりする。

「やつぱり、こつち」は、妹の口癖だ。

歩いていくうち、今まで来たことのない界限へとたどり着いた。

いかめしいローマ風の建物の看板に朝顔が花を咲かせていたり、水の気配のする井戸の釣瓶に野菜が巻きついていたりする。なんだか奇天烈なところだ。

いずれもひとの面影はほとんど残っておらず、ノスタルジイよりも違和感と真新しさが先に立つ。

ぼくが風景を楽しんでいると、ふと、妹が足を止めてぼくを見上げた。にこ、と笑って握っていた手を放し、たたたと駆けていく。「こら。玉祥、」

呼びとめたからか、そうではないのか、妹はとある建物の前で急停止した。

流行らない喫茶店か骨董屋といった趣で、磨り硝子のついた扉の把手が鈍い光を放っている。

「なにがあるんだ、こら」

尋ねてみても、妹は微笑むばかりで答えない。ぼくに扉を開かせると、今度はぼくの後ろからちよこちよこついでくる。

こうやっていつもぼくが迷わされるんだぞ、とぼくはため息をついてみせた。妹はただ微笑む。

中は画廊のようになっていて、けして広くはないものの、閑散としているためか奇妙な空虚感があった。

通りがあった勘定台にある帳簿も黄みを帯びてくすんでいた。既に切つてあるチケットには、この画廊の名前か、展示品の作者の名前か、「M」と「R」のモノグラムが刻まれている。

くいきい、と妹が急かすようにぼくの着物の裾を引いた。

「薄暗いから気をつける」と釘を刺して、ぼくは再び歩きたした。燈はなく、歪な形の天窓から陽光がぼつかりと差しこむだけだが、なんとか壁の絵画は鑑賞できる。

飾られているのは彼女の庭一带を描いた風景画だ。水彩画もあれば油絵もあり、どうやらスタイルにはこだわらない画家だったらしい。

「いや……こだわったのはこの『庭』だけ、ということか」

ぼつり、ぼくはつおやいた。

ゆつくりと歩を進め、ぼくは画廊の端、光が届かない場所に碧い色を見つめる。ひっそりと飾られていたのは、拍子抜けするほど単純な天の絵だった。

なんとなく哀れに思い、ぼくはそれを壁から外し、看板のように勘定台に立てかけてやった。

満足して画廊を出ると、

「あ、」

と妹が息を呑む。

ぼくも呆気にとられて目の前の光景に沈黙した。

画廊を中心に広がる、碧い花溜まり。

幾つもの小花が集まって咲き乱れ、気持ちよさげにそよいでいた。

「勿忘草」

妹のささやきに、ぼくは頷いてみせた。

その花卉は庭の天と——あの絵画と同じ色をしていた。

2 瑪瑙ノ猫ノ水路ヲ流ルル

彼女の庭には、いつもささやき声が鳴っている。

風と戯れる木々や草花の音色はもちろん、庭を縦横無尽に駆け走る水路の流れは絶えることがない。

彼女はいつも錆びた青銅の如雨露を手に、水路から直接水を汲んでは縁に降らせていた。

「水源は何処にあるの」

ぼくが尋ねると彼女はたとと動きをとめ、考えるような素振りを見せた。けれど首を振って、にやと笑う。

「忘れちゃった。ゆすら、きみが探して来て頂戴」

その笑顔は絶対に嘘だ。

彼女は興味を失くしたようにふいと顔を背けると、再び水遣りに動しはじめた。

やれやれ、ぼくは後ろにいる妹のほうを向いた。水路の脇にしゃがみこんで、なにかがあるのか、深く覗きこんでいる。

「落ちるぞ、玉梓」

「きゃ」

ちいさな悲鳴と共に水路から飛び退き、妹は目を白黒させてぼくを見た。

「溺れたら大変だろ」

ため息混じりにつぶやいて、立ち上がるのに手を貸してやる。

妹は「うん」と神妙な顔をしていた。

「この水源、一緒に探しに行くか」

妹はこくりと頷いて、「リリイは？」と訊いた。

「水遣りに忙しいんだってさ」

ぼくと妹は彼女と別れ、水路に沿って歩いていく。あてもないことだし、今日も妹に先導を任せた。

天は澄明な碧を映し、浮かべた白い光球からは燦々と雫が降りそそぐ。影は夜鷹の翼のように黒くなり、大樹の陰では光の魚が

ちらちらと泳いでいる。

ぼくの髪は琥珀だからまだいいけれど、彼女と同じ黒髪の妹には少しきついだらう。帽子を被せてくれればよかったな。

妹はぼくの心中など露も知らず、嫌々結びにした帯をひよこひよこさせながら進んでいく。金魚と水玉模様のその浴衣は確かに涼しげだったものの、やはり額には汗の粒が浮いていた。

「休憩するか」

「うん。する」

尋ねると、素直に頷く。ちょうど浅い流れの水路に行き合ったので、草履を脱がせ水に浸す。妹は嬉しそうに水面を蹴りはじめた。碎け散った水晶のような水は石畳を黒く染め、陽光に照らされてすぐに見えなくなる。

ちいさく息をつき、ぼくは少し離れた木陰で目を閉じた。ぴたり、妹の騒がせる水の音が止んだ。

怪訝に思い目を開けてみる。見ると、妹が先刻よりも大きく身を乗りだしているのできょっとした。すぐさま浅い場所だと思っただして気を鎮める。

「玉梓」

呼びかけると、妹はくるりと振り返った。手に飾り気のない麦

わら帽子を持っている。陽に焼けた広いつばから、ぼたぼた雫が

したたっていた。

「流れてきた」

それだけ云って、ぼくに手渡す。ぼくは軽く振って水を飛ばし、妹の頭に被せてやった。

「冷えているし、ちょうどいいだろう」

無造作に載せられたそれを注意深く被り直すと、妹はぼくを見上げ首を傾げた。褒めてやったら、はにかむように笑った。

その後もぼくと妹は水源を探して歩き回ったが、彼女の庭の広

さを再確認するばかりでなんの進展もなかった。

そろそろ帰ろうか、いや帰れるのだろうか、とぼくが思いはじめた時、妹は足をとめた。

視線が一点に集中している。

それをたどってゆき、ぼくは古びた水車小屋を見つけた。

もう使われていないらしく、せらせらと静かに水は流れてくる。

「水源が近いのかも知れない」

ぼくはつぶやくが、妹は黙ったまま答えない。瞬きもしていなかった。

不思議に思ってもう一度目を凝らす。視線がぶつかった。成程、小屋の前に灰猫が一匹佇んでいるのだった。

妹に手を引かれ近づいてみる。淡い青を帯びた毛並み、ぴかぴか光る、瑪瑙のように黄と青褐が渦を巻いた瞳。美しくも何処か作り物めいた猫だった。

猫は妹を見上げ、にやあ、と一度だけ啼いた。

妹はちよつと困ったようにぼくを見る。ぼくは、猫のびんと尖った耳がしきりに動いていることに気づいていたので、

「おまえの頭に載っているものを、返して欲しがっているんだ」

と教えてやった。妹はぱつと顔を輝かせ、猫と同じ視線の高さまでしゃがんだ。先刻と同じく、異なる角度から入念にチェックしつつ被せてやる。

ぼくを振り返った表情は自慢げだったが、その時には猫はもう何処かへ駆けだしていた。

わずかに開いた小屋の扉をすり抜け、奥へと姿を晦ませます。

ギイと軋む扉を開いて、ぼくは納得した。

妻が帽子は開け放した窓近く、畳けたセピア写真の中の少年に。

そして写真立てに寄り添うように、瑪瑙の目をもつ石膏の猫がすましていた。

3 木菟図書館

暇を持て余したぼくは、白い四阿でうたた寝をしていた。

木々のさざめき、水路の流れ、彼女の足音、妹の弾き石が鳴り合う音……即興の接続曲のように、耳を透り抜けていく。

「起きなさい莫迦」

如雨露の水をぶっかけられた。

「……」

「あら」

髪から雫をしたらせながら睨み見ると、彼女は片方の眉を上げ上げた。

「文句があるならききましょう？ 労働に動しむわたしを余所に、こんなところでしたま寝てたら風邪をひくと思っただけだ」

頭から水をかぶった場合も同じだと思ふ。

しかし彼女は余裕たっぷりに微笑んで、ぼくの反論などこともなげにはねつけそうだ。睨み合いの最中、彼女は妹が気を利かせて持ってきてくれたタオルをぼくから奪い取る。そしてなにを思ったのか、ガシガシと乱暴に拭き取られた。

痛い。

でもまあ、楽しそうだから、いいか。

「そう云えば、」

「なにかしら」

「ぼくが前に読んでいた本、何処に遣ったっけ」

正直に暇だと云うのも嫌なので、遠回しに尋ねてみる。

「暇なら暇と云いなさいよ」

それをいとも簡単に見破るのが彼女なのだけだ。

彼女は唇に手を当て、もつともらしく考えこむような仕草をした。そしてにやと、いつものように口角を上げ、一枚の音盤を貸してくれた。

「音盤はあるの」

「せっかちなね。そのうえ見当違いだわ。——それは借り物だもの。届け先になら、あるかもしれないけれど、ね」

要するにおつかいに行つて来い、とのことらしい。

彼女の口遊む道順を覚えて、ぼくは足を踏み出した。妹も後ろからついてくる。

「今日は迷わされないぞ」と云つたら、ちいさく笑い、なんのことかさつぱり、と云うような、とぼけた顔をしてみせた。

やれやれと首を振り、ぼくは彼女の言葉を頭の中で反響する。

——虚の空いた百日紅の木を通り過ぎて、ちいさな太鼓橋を渡る、しばらくしたら啄木鳥が姿を見せるから、音盤を示しなさい。

……だったっけ。

その建物は、木菟図書館というらしい。ぼくが読んでいた本も其処にあるのだそうだ。

「ゆーにい、」

あの本の内容はどんなものだったか思いだしていたぼくは、妹の声にはつと我に返つた。淡い葉陰の中で光るふたつの目が、ぼくを見下ろしていた。

「これを返しに来ました」

頭上の啄木鳥は音盤を確認すると、こくりと、やけにはつきり頷いて飛び立った。

取り残され、所在なげに立ち尽くすぼくと妹は、こーんこーんと四分音符がふたつ森の空気に沁み渡つてゆくのをきいた。

ひらひらと舞い降りてくる黒い羽根の向こうから陽光が目を射抜き、ぼくは目を細める。臉を持ちあげた時、木々の中に潜む常磐緑の屋根が見えた。

くすんだクリム色の壁面には蔦が絡みつき、建物は殆ど森と同化している。木菟のステンドグラスがついている扉を見つけ、目的の場所だということが分かった。

「これが図書館」

ほうとため息をつき、ぼくは妹の手を引いて扉の向こうへ足を踏み入れた。

採光を計算してあるらしく、意外にも館内は明るかった。日に焼けた床は市松模様で、処々に植物の彫刻が刻まれている。

くいくい、と着物の裾を引つ張られた。既にどこからか絵本を持つてきた妹が、なにか言いたげにぼくを見上げていた。

「ああ……ほら、其処に椅子がある。読んでおいで」

唇を尖らせ、妹は不服そうだったが、

「ぼくは音盤を探してくる。……後でちゃんと読んでやるから」

慌てて約束してやると、波々といった風に駆けていった。

妹を残して本の森へ、埃と色褪せた紙の匂いをかきわけながら進む。否、彷徨う。

なにもかもが、自己主張しない、捨てて色であるかのように落ちついた色調。おまけに本棚は高さも使われている木材もばらばら沈黙する、深奥の大樹たちみだ。

足音だけが高く、響き渡る。

方向感覚を狂わされながらも、ぼくはやつと開けた場所にたどり着いた。

その上に載っている蓄音機のためだけのものなのか、そこではちいさめのテーブルが一台、光を浴びている。

ぼくは脳に抱えた音盤をセットし、針を落とす。

流れだすのは、スローテンポのピアノ・ジャズ。

ひとり、どこか懐かしいピアノの音色を楽しんで、ぼくは踵を返した。きっと妹が待ちくたびれているだろう。

——その時、誰かの視線を感じた。

とっさに身構えたが、其処にいたのは年端もいかなない少年だった。大きな変な帽子に隠れて表情はよく読み取れない。

「きみは、」

ぼくがまごついているとくるりと背を向け走りだす。本の森を迷いなくすすむ。すぐにぼくを引き離した。

ぼくは引き寄せられるように、ちいさな足音をたどってゆく。とうとう、妹のいるエントランス近くまで来てしまった。

妹は横に絵本を積み上げ、夢中になって読みふけている。

「玉梓。今、誰か来なかった」

歩み寄り、さして期待せずに尋ねてみると、妹はきよとんとしてぼくを見た。

「麦わら帽子の？」

「そう」

「ゆーにいい、誰か分からなかったの」

「さっぱり」

「そっか」

妹の声は囁きのようにちいさかった。残念そうにもきこえる。

妹は、藍地に百合という、なんだか既視感を覚える装丁の本を横の山から取りだすと、

「館長さんがね、これをリリイに、って」

「ふうん」

「ゆーにいいが読んでもいいけれど、読まないほうがいいかもしれないよ」

「それはおまえの意見？」

妹はあいまいに微笑んだ。

「どちらにしろ、リリイは読まないと思うけど」

「うん」

妹がくすりと頷く。彼女は日々水遣りに忙しいのだ。

積んであった本の中から教冊を選ばせてから、それを嬉しそうに抱える妹と手ぶらのぼくは図書館を後にした。

「音盤は、どうだった」

「まあまあ。今度はぼくもなにか借りようかな」

適当に受け答えしていると、ふと、鳥が飛び立つ時の羽撃きが

きこえた。

おや、と思つて振り返ると、ステンドグラスの木莖が消えている。そして、雑音混じりのピアノ・ジャズが窓から漏れてきた。

断章 橄欖石ノ月夜

「ねえ、ほら見て。月光がこんなに透き徹つてる。まるで橄欖石を透かしたようよ！ こんなに美しい夜はいつ以来かしら？」

彼女の声は弾んでいた。

「乾度、緑桜の色が映えるわ。天が碧く戻らないうちに、一緒に見に行きましょうか。ああそれに、星をいくらか壩に集めて、月の聲は夜気に冷やしておかなくちゃ」

おもてなし用にね、と笑う表情も、いつものように意地悪そうではなかった。

ほんとうに、嬉しそう。

「あなたはそうじゃないの」

「だって、」

そこまで云つて、ただ唇を失らせた。彼女に口で勝てるはずがないので、あきらめる。

彼女は変わらず笑っていた。

「そうね。あなたが望んだ結末にはならないかもしれない。けれど彼は此処に来て、此処を出てゆくのだ」

この——籠庭。彼女の庭。

黙っているのに耐えきれず、わたしは声をあげた。

「彼は、何処に行けるのかな」

「さあね」

「……」

「何処であろうと、わたしとあなたは行けないわ」

唄うようにつぶやく彼女の声。

「行きたくても、行けない。……それでもあなたは彼のそばにいたいのかね？」

ひとと見つめられながら、強く頷く。彼女はそれを見留めると、ふわり、やさしく笑った。夢のように、綺麗な笑顔だった。

「じゃあ。思い出たくさん、作るのよ」

わたしの髪を撫でて、翠の瞳を月光にキラキラさせながら、彼女はくるりと一回転。夜霧が弾けて一緒に踊った。

「ねえ。——つて、どう」

「……？」

唐突な問い掛けにわたしが首を傾げていると、

「お兄さんの名前。……忘れちゃ駄目よ」

彼女の柔しげな声が夜天に吸いこまれる。

そうして、天は白んでいく。

4 旅鳥ト花譜

とまり木、と呼ばれる大樹がある。

その名の通り、鳥がとまるための枝をありったけ伸ばした枯木のことだ。一切の葉を散らし、無数の虚を穿たれたその木は、庭の一角にシンとそびえている。

それでも、と云うべきか、やはり、と云うべきか、ぼくは枝に

とまる鳥の姿を見たことがない。

まあ、あの木に似合う鳥は獨ひとりくらいだろう。

「そんなことはないわ」

けれど、彼女はびしやりと否定する。拗ねたように唇を尖らせて、「きみの目が節穴なのよ。……わたしと同じ色なのに、どうしてかしら」

なんて首を傾げる。

関係ないだろう。……思っても云わないけれど。

結局、「行つてらっしゃいよ。目の穴に丁度いい部品が見つかるかも知れないわ」と、妹共々四阿よあを追い出された。

いつもと同じようで、同じじゃないのは妹の手に藤籠フスロがぶら下がっていること。

彼女が「彼に」と云つて持たせてくれたのだ。確かに、ティーセットとコンペイトウの小壺が入った藤籠の中にカップは三人分ある。

「彼って、」

「行けば分かるわ」

歩きたすと、背中を向けて小石を蹴っていた妹が声をあげる。

「ゆーにいい、ゆーにいい」

「今行くよ、」

何度も何度も名を呼ばれ、ぼくはやれやれと首を振った。妹がぼくを振り返って、笑顔を見せる。上機嫌だ。

「重くなったら云うんだぞ」

「え」

「その藤籠……リリイ、今日は随分気分がいいから」

「美味しいよ」

「へえ。どんな味だった、」

尋ねてみると、妹は少し考えて、そつと微笑んだ。

「忘れられない味」

それは楽しみだ、とぼくは答える。

浅く細い水路に沿って歩いていくと、視界はぐんと開かれ、目に入るものが減る。

雑器ざきを揺らす風が乾いてゆき、慎ましげに咲く蕪うの姿もいつのまにやら消えた。

もう少し先だと思っていたら、あつという間にとまり木までたどり着いている。

「相変わらず、」

奇妙な木だな、とぼくはひとりごちた。

天を覆い尽くさんとばかりに拡がる枝は細く、がらんどうの幹はそうでなくても穴だらけ。いつ倒れてもおかしくないように見えるのに、不思議と危うさは感じない。

大樹の骸骨、という題名の彫刻。そんな感じだ。

そしてやはり、鳥は一羽としていない。

「お茶にするか」

「うん」

すぐさま頷いた妹と木の脇に座り、ティーセットとコンペイトウの小壺を藤籠から取り出す。ポットの中身は冷えた檸檬水だった。

やや酸味が強い気はするものの、コンペイトウの控えめな甘さがほどよい爽やかさを残してくれる。妹はコンペイトウを檸檬水レモン水に浮かべて楽しんでた。

ぼくは幹に身を預け、黒い枝に遮られた向こうの天を仰いだ。ぎしり、という音に一瞬ひやりとするが、それきりとまり木は沈黙する。

本でも持つてくれればよかった。思いつつ顔を落とすと、急激に眠気が襲ってくる。そのまま意識を沈めそうになっていたぼくを引き戻したのは、いつかと同じく妹だった。

……まったく、幸せそうに寝ている。

これじゃあ、ぼくまで眠るわけにはいかない。

「彼女もおまえも、ぼくの睡眠を邪魔してくれよな……」

愚痴っぽくつぶやいたぼくは、くすり、とちいさな空気の揺れを感じた。彼女のそれと似ていて、どきりとする。

「ああ、すまない」

唐突に目の前に現れたのは、小紋染めの着物姿の青年だった。

深い、底の見えない海の瞳が揺るぎなくぼくを見据えている。

「仲の良いところを、見たものだから」

淡々と云う彼の表情は変化に乏しく、さっきの笑い声は幻聴かと思わずにはいられたかった。

「あなたは、」

「シギ。彼女の古い知音だ」

「彼女の。……それじゃあ、あなたが「彼」なんですね」

「話が見えないが、おそらくそうなのだろう」

彼は頷いた。ぼくがカップとコンペイトウを数粒、一緒にソーサーに載せて差し出すと、礼を云って受け取った。

「彼女に用事ですか」

「おれは旅鳥だ。だから各処から伝言を預かっているんだよ。そ

れに、そろそろ回収しなければならぬものもあるのですね」

「回収、」

「そう。……この本を見たことがあるだろう」

彼が革の鞆を開いてぼくに見せたのは、一冊の本。

夜藍に百合。見慣れた菱丁の本だった。

「何故、あなたがそれを」

「おまえが見たものとは違う。この本は同じ菱丁のものがほかに千と二あるから、紛らわしくはあるが。読んでみたことはあるか」

「いいえ」

答えると、彼は本をぼくに渡してくれた。肩に寄りかかっている妹に気を配りつつ、ぼくはページを捲る。

水彩で僅かに色をつけた樹木や、草花の挿絵がまず目を惹いた。

その横には名前と日付。下には流れるような筆致でなにやら綴られているが、字が崩れていて簡単には読めそうにない。

「これは、花譜ですか」

「この名答」

彼は短く賞賛した。ぼくは嬉しくもなんともないまま、首を傾げる。

「だけど、」

「ああ。それは咲く順の花譜じゃあない。枯れる順の花譜だ」

彼は淡々とつぶやき、けれどすぐに「いや、」と撤回した。

「この庭で枯れた順、と云ったほうが正しいか」

騒くような声だった。

とまり木の枝の編み目を抜けてゆく風が、耳元を騒がして会話の邪魔をする。

嘲嗤ちょうしついでいるようにもきこえる、嫌な風だ。

「だとしたら、嗤わらわれているのはわたしね」

涼やかな声がりと鳴って、姿を現したのは彼女だった。吹き荒ぶ風に黒髪を揺らし、いつもの如雨露ごとくの代わりに藍色の本を
持つている。

彼女は声が出ないばかりを余所に、彼に向き直った。

「お元氣そうでなにより、シギ。……空沖そらうきのほうは、相変わらず
かしら」

彼は特に表情を変えることもなく、彼女と言葉を交わす。

「飽きもせず灯台の守を続けている」

「彼の海もまた、変わりはない？」

「この庭と同じように」

「それは重畳」

彼女はゆるりと微笑んだ。

「一生其処そこにいなさいと伝えておいて頂戴」

「了解した」

彼は頷き、当然の流れのように彼女から本を受け取った。

「確かに。ではまた、リリイ」

「宜しくお願ねがい」

すべきことはすべて終わった、とばかりに、彼はさっさとぼく
らの前から姿を消す。

あまりに淡泊な彼女に戸惑いながらも、ぼくはその背に声をか
けた。

「……あの本を書いたのは、もしかしてリリイ、きみ？」

「そうよ」

「この庭で枯れた植物を」

「ええ」

「なんのために、」

彼女はうつすら笑みを浮かべ、「忘れないために」と答えた。

「近頃はさっさと書けと急かされるから、困っているのだけとね」

口ではそう云うものの、やけに淋さみしそうな響きが宿った声だっ
た。

気になりつつも、ぼくはまだ眠そうな妹を背中におよって、彼
女の横に並んで帰る。

風はきりきりと鳴り、雲は、今にも泣きそうだった。

水路の流れがきこえてきた時は、なんだかほつとした。

「リリイ」

「なあに」

「あそこはほんとうに、きみの庭の一部なのか」

「さあね。忘れたわ」

「……きみの庭は広すぎるよ」

「だから忘れちゃったのかしらね」

彼女はちいさく笑った。

「わたしのほうこそ、忘れられてるわ」

「そうかな」

「え、」

「あの木はまだ、しぶとく立っていたじゃないか」

彼女に告げ、ぼくはなんの気なしに振り返った。

そして、息を呑む。

風の向こうから、天を衝く大樹に鳴く、鳥たちの囁ささりがきこえる。

「リリイ、」

思いのほか語尾が震えてしまった。彼女はぱつと顔を輝かせ、途端にいきいきと、意地悪そうに口角をあげると、

「節穴」

と、ぼくの目を覗きこむ。

彼女はもう一度だけ振り向いたが、満足そうにすぐ前を向いた。いつもより嬉しそうな——ほっとしたような顔をしていた。

5 匣ノ鍵八籠ノ鍵

このところ、ぼくはとにかく眠い。

四阿しやうあの長椅子に座ると、いつのまにかうつらうつらと舟を漕いでいる。その度に水をぶっかけられていたら、とうとう「改名しなさいよ。」「うつら」に「なんて云われる始末だ。」

妹は妹で、なんだか心配そうな顔をしてぼくを見るので、情けないと思ったら、

「散歩に行くか」

此処こゝにはどのみち風邪をひいてしまいそうだし、目覚ましのついでに妹と遊んでやろう。

ぼくは軽い気持ちで云ったのだが、妹は目をきらきらさせて喜んだ。ぼくの手をぐいぐいと引っ張って、

「行く、ゆーにい」

「何処に」

「何処か、探しに」

頬がゆるむ。いつもの妹だ。

彼女は大仰に肩をすくめ、「見つかるといいわね」と云い残すと、早々に水遣りに消えた。

天あまは相変わらずあの花のように碧い、けれど透き徹とほつた硝子びやうし。

太陽は生けられた一輪花。

風は、ひらひらと舞う花びらのような陽差しを待ち伏せては、気まぐれにたゆたっていた。

びよこびよここと機嫌良く跳ねて進んでいく妹の後について、ぼくは半ばあきらめた気持ちで歩いた。

瑞々しい緑の中で縹あざや古代紫、珊瑚色さんごいろや琥珀色くわくぱくいろの鞠まりのような花をつける紫陽花あざふらぎの道をあつさり逸れて、背の低い植物が両脇を彩る小道に入る。

ふと、林檎に似た香りがしたので振り返ると、カモミールが白い花をつけていた。霞のように煙って咲くタイムの姿もある。香草類かぐらふぐさを集めた場処ばやしなのだろうか。

そう思うと、花をつけていない植物もそれらしく見えてくるから不思議だった。

「ゆーにい」

妹の声に視線を少し上げ、ぼくははたはたと目を瞬いた。小道の先は開けていて、馬蹄ばていの形に反った緑門きよかどが待っている。

鉢物のそれは大半が蔓つた薔薇ばらに覆い尽くされていた。意匠いしやうを凝らしたせつかくの装飾も陽を見ないでおり、吊り下げられた看板の文字も読めない。

まあ……看板があるっていうことは、薔薇園ばらぞんか、そうでなくてもなにかあるんだろうな。

カップ咲きの薔薇の植えこみが迷路の如く続いているのが見え

る。奥までは見通せないが、多分かなり広いのだろう。

はぐれないよう、ぼくは妹の手をしっかりと掴んでから、足を踏み入れた。

薔薇は目にやさしい真珠白パールホワイトをしていて、仄かに甘い香りが鼻を抜けてゆく。静かな風が吹いていた。

「水の音がきこえるね」

ふと、妹がつぶやいた。

「ほんとうだ」

耳を澄ますと、かすかに耳の奥で鳴る。くすくす、誰かが笑っているようにもきこえた。

「この庭は、何処どこにいても水の音がきこえる」

「そうだな」

「あの日も、水の音がきこえてきてね。わたしは流れを探しに行ったの。空の青を映しながら、水面は銀の色にキラキラ光っていて、」

「ふうん」

「魚がね、まるで空を泳いでいるようだった。星の光をいっぱいに纏めた真昼の空を」

珍しく妹は饒舌じょうぜつだった。

この庭の水源を探しに行った、あの日のことだろうか。

けれど、此処こゝの水路に魚は泳いでいないはずなのに。

「それでわたしは、手を伸ばしたんだけれど——、」

ふつり、と。つぶやく声が唐突に、途切れた。

ちいさな手の感触とともに。

余韻すらも、すべてが拭い去られていた。

「……玉梓」

名前を呼んでも、なにも変わらない。

これがぼくの声かと驚くような、頼りない息が漏れただけだった。

唇を引き結び、ぼくはほとんどん歩を進めた。薔薇の迷路を右へ曲がり、左へ曲がり、行き止まれば引き返す。

真珠白パールホワイトだった薔薇の色はめくるめく石榴石や紫水晶、黄玉の色へ、変わっていった。

次第に早足、駆け足になったが、息を切らせれば辺りに充ちる甘い香りにくらくらしてくる。

息を整えるためしばらく立ち止まっていると、耳の奥で水の音がした。せせらぎの涼やかな音色じやない。水に全身浸かった時にきく、すべてを遠ざけくぐもらせる音。曖昧で、そのくせ張りつめたあの不思議な音だ。

ばしゃん。

水面を突き破る音がしてそれはきこえなくなったが、まだ耳のそばで水沫みづうめがぶかぶかと浮いている。くすぐったいような煩わしいような、奇妙な感覚。

「いったい、」

なんだって云うんだ。ぼやくつつ再び歩きだしてすぐにたどり着いたのは、高い塔とその前にある広場だった。

白い石でできた噴水が中央に陣取り、幾条もの水を噴き上げて

いる。水は重力に引かれて水盤に零れ、飛沫は陽に明るく煌めいた。そして、水盤の縁に腰かけ写生に没頭する少年がひとり。

夏物の学生服に麦わら帽子を被っていて、ぼくよりひとつふた

つ幼いように見える。

つ幼いように見える。

つ幼いように見える。

少年はつと顔を上げたが、ひさしの陰になって口元からしか表情が窺えない。それがそつと、笑みの形をつくつた。

「待ちくたびれたよ」

ふつと一瞬にして姿が消える。傍らの面材道具も一緒に。

先刻の妹と同じように。

「瑪瑙の猫——」

澄明な声。おかげで今度はすぐ姿を見つけることができた。少年は石造りの塔の入り口に立っている。

「彼はいつたいなにを、誰を待っていたのか」

声が消える。ぼくは気づいた時にはもう追いかけていた。

塔の扉をくぐる。エントランスの奥に見える階段は、螺旋を描きながら上へ上へと登っていた。

「木菟の図書館——」

歪な形の窓からは青白い光が差しこんでいる。少年は光の中、濃い鉛色の手摺に手をかけていた。

「——面影の在処。千と二の記録書……いや、記憶書もまた、其処に残されている」

声は何処となく物憂げにきこえた。

ぼくは勢いをつけて階段を登りはじめる。途中途中に置いてあるジャムや菓の空き瓶、傘立てや木桶といったもので、水の入るものなら例外なく蓋が生けてあった。もしゆっくり登るなら目に面白いだらうが、今は邪魔でしょうがない。

「海からの旅鳥——」

声がかから降ってきた。

「彼の来訪は報せた。残された時間の限界について」

息が切れるぼくとは逆に、少年の声は淡々として、透き徹って響いた。零れてくる言葉を持ち上げつつ、ぼくはただ前を向いて行く。

「ちいさな妹——」

窓辺に佇む少年の声がかすかにやわらかくなる。

「——あの子が誰を想って此処にいたのか」

少年は窓辺を離れた。少年によって遮られていた光線がぼくの目を射抜く。

再び臉を持ちあげた時には、螺旋の終点でぼくを見下ろしていた。

「そして、翠の瞳の主——」

少年はくすりと微笑った。

「——彼女については、ぼくが語ることはできないな」

「何故」

ぼくは最上階へ足を踏み入れる。螺旋の行き着く先にあったのは、ただ、果てない天だった。

ぼくは少年の姿を探し、辺りを見回す。仕切のない部屋は一面ガラス張り、薄い遮光カーテンがひらひらと風にはためいていた。

タイルの床には濾過された水色の光が充ちている。こんなにも天に近づいたというのに、まるで人工の白砂を敷き詰めた水底のようだった。

「天空色の水底、か」

ぼくは窓辺に寄り、何気なく外に目を遣る。

そして、声を失った。

かざした手のひらまで透き徹ってしましそうな、碧い碧い天の向こう。其処で天を包んでいたのは、白娘の格子。

右の窓からも、左の窓からも、後ろの窓からも、同じように見える。

彼女の庭、すべて。

白銀格子の籠の中。

ばちん。

ぼくにつきまとい、ぼんやりと漂っていた水沫が、あつげなく弾けた。

「勿忘草が咲く理由も、分かっただろう」

声をきいて振り向くと、少年は腰掛けていた藤椅子から立ち上がった。麦わら帽子を取って微笑み、ぼくを見据える。

「思い出した？」

琥珀の髪と、翠の瞳。

ぼくと同じ顔をした少年は。

「思い出した」

ぼくは答える。ぼくは静かに頷くと、

「それじゃあ、もう行くよ。ぼくはただの面影だからね」

「何処に行くの」

「何処にでも。ああ、でもその前にこれを渡しておかないと」

ぼくは思い出したようにつぶやくと、ぼくに小匣をひとつ手渡した。

側面は磨り硝子になっていて、奥で揺らめく碧い光が見える。

「鍵は、」

「鍵は要らない。しいて云うのなら、鍵はその中だよ」

まだあとけない顔つきの少年は、不似合いな微笑と知った風な言葉を残して、かき消えた。

はたしてそのころあんな少年だったのだろうか、とやや疑問に思いつながら——ぼくは小匣の留め具に手を伸ばした。

蓋を開けて、目に飛びこんでくる光は。

天と同じ色のちいさな種火。

「匣の鍵は、籠の鍵」

りんと透る、咽うような声が鳴って、

きいきいきりきり。擦れ合う錆びた金属の音が重なる。

そしてすべては、碧く燃えた。

6 碧イ焰

「身体を離れて彷徨っている魂が扉を開けるの」

彼女の声はひどく淡々としていて、なんの感情も読み取れなかった。

「最初は「あざみ」。次は「銀木犀」。今でも美しい花を咲かせてくれている。「終」は一度枯れてしまっただけで、やっと前と同じように咲くようになったのよ。「蓮花」と「ミズキ」は、少し前に芽をだしたわ」

囁き声に、ほんの少し愛おしそうな響きが混じったのは気のせいだろうか。

けれど思っただけで何も無いうちに、冷たい色がひたひたと沁みこんでゆく。

「英」に「白詰」、「かずら」、「スグリ」、「雛菊」……枯れたきりの子を数えたら、キリがないけれど」

次に芽がでるのはいつのことかしらね、と。
風の音のようなため息をひとつついて、彼女はかすかに笑ったように見えた。

「きみはきちんと思ひだせたようね、「ゆすら」。枯れずに済みそうで、なによりだわ」

「ぼくは……」

「ああ、そうねごめんなさい。きみの名前は——だっけ」

彼女は笑っている。

意地悪そうでも、可笑しそうでも、いたずらっぽくもない、仮面のような笑顔だった。

「もう、なんて情けない顔をしてるの。もっと喜ばなさい。きみのように、すべての迷子が帰り道を思ひだせるわけではないのだから。きみは、稀少なひとりなのよ」

「……玉梓は、」

「玉梓」は特例よ。もう二度と咲かない代わりに、枯れないことを選んだの」

「じゃあ、あの子は」

ぼくの妹じゃあ、なかったのか。

そんなことを訊けるほど、未練がないわけがなかった。

彼女は、「たまにね、いるのよ。そういう子が」と遠くに目を遣ってつぶやいた。

弾けて庭中に散らばった碧い焔は、冴え冴えと燃え続けている。空は勿忘草の碧色。

草木は明るい孔雀青。

花々もまた濃淡の違いこそあれど、幻のように碧かった。

風に舞っているのは、火の粉か花卉か。

すべてが。碧い。

「リリイ」

「なあに」

「この庭は……きみの庭は、どうなるの」

「訊くのが遅いわよ莫迦」

睨まれた。彼女はやれやれといった風に肩を竦めると、

「見れば分かるじゃない。燃えているでしょう」

「だから、」

「そして灰になって消えるのよ」

ぼくを責める言葉を、教え諭すような声で、云いしかせるように。彼女は云う。

「きみのせいなのよ。わたしの籠に迷いこんだきみが帰るには、それを壊さなくちゃいけないんだもの。跡形もなく、きみの心から消してしまわなくちゃ。」

この籠の扉を開けるのはわたしじゃない。いつも、迷い子自身。帰り道を思ひだせた子も、思ひだせなかった子も、最後には此処を出てゆくの」

「此処を壊すことで、」

「そう」

彼女は軽く頷いて、ほら、とぼくを指さした。

「もうすぐ時間ね」

「……え、」

指の先が透けていた。着物の袖も一緒に、淡青たんせいの光の粒子を端から零しながら。

「怖い？」

「いや。……ぼくが消えても、「ゆすら」は残るんだろう」

「ええ」

「この庭のすべてを、きみが守っていくんだらう」

「だって、わたしの庭だもの」

彼女は晴れやかに笑っていた。

「いつか何処かの誰か、その手で、倦むほどに寝させてきたけれど、それでも、わたしが忘れない限り、何度繰り返しても、また。此処が、此処に在るように」

「ゆすら」という呼び名は、そのためのものなのだろうか。

千と二もあるという、記憶書——あの藍色の本も。

ひとえに、忘れないための。

「だって、なんのために続けてきたと思ってるの？」

「笑みがこみ上げる。それは屹度、強がりだ。」

「それは、覚えて、いるためだらう。リリイ」

「……さあね」

彼女はきょとんとして、目をばちばち瞬くと、ふいにそつぽを向いた。

碧い焔を映す翠の瞳。ゆらゆら揺れる光は、どんな感情を映しているのだらう。

目の前が霞んでよく見えない。それに、手足の感触がないのに立っているのは不思議な気分だった。

ああ、早く。声が出なくなる前に、言っておかなくちゃいけない

いことがある。

「きみのことは忘れちゃうかもしれないわ、「ゆすら」。迷っているのはきみなのに「玉梓」のせいにするし、水源の場処も分からなかったし。それに、いつも寝てばかりで、わたしのお喋りにろくに付き合ってくれなかったもの」

「リリイ」

笑いを噛み殺しながら、ぼくは彼女の名前を呼んだ。

それもまた、ほんとうの名前ではないのかもしれないけれど。

彼女はぼくを見て、首を傾げる。

きみのことを、ぼくは忘れないでいられるかな。

「また、いつか」

彼女が驚いたような顔をする。やがて、きゅつと結んだ唇をほどき、翠の瞳でぼくを見据えた。

「——ええ。彼方の星が輝くころに」

なんて、永い。まあこれも、夢から醒めるぼくに向けた、彼女

なりの挨拶なのだらう。

「さようなら、ゆすら」

彼女はぼくに背を向けて歩きます。

饒舌なうえ毒舌で、ちよつと意地悪で、いたずら好きで、誰よりやさしいことを嘘と強がりて隠し続けた、

ひどく不器用な庭の主。

ぼくと同じ瞳の色の女の子。

碧い景色に呑みこまれてゆく。

「……」

ふいに、右手に感覚が戻った。

誰かがぼくの手を引いているのだ。

ちいさな手。目が見えなくても誰何の必要はない。

……やっぱり、おまえは道を知っていたんだな。

そう、声を届けられたのかどうかは分からない。

それでもあいつは、くすりと、いたずらを見つかった子どもの

ように、悪びれもせず、笑って。

とんとん、とぼくの手の甲を軽く小突く。別れのあいさつか、

背中を押す代わりか、あるいは両方だったのか。

尋ねることはしないけれど。

——またな、玉梓。

「はいばい、ゆーにい」

零れ落ちたひとしずくが、ちいさな声を響かせた。

終章 昏ルル陽ニ泣イタキミハ

——光。

惹かれるように、導かれ。

薄闇うすぐらみの向こうに綺麗な少女の横顔を見ていた。

ぼくが忘れた夢の終わり。

「永い夢だっただろう。忘れても無理はないさ」

ぼくが目を醒ましたときいてやって来た友人の日説ひせつは、しみじみと感じ入るように云った。

窓からは淡青とオレンジが交差しつつか差しこんでくるが、耳に

入るのは激しい雨音。慌てた雨雲は、空を十分に覆い尽くせてい

ないようだ。

「永い、って。どのくらい」

「二年ちよい」

目を丸くするぼくを前に、日説はにやと唇を歪める。銀縁眼鏡

は相変わずだが、確かに背丈も雰囲気も随分大人びていた。賢

く反骨精神旺盛だった少年の面影は、今切れ長の目の奥でキラキラ光っている。

「どうして」

訊くと、今度は日説が目を剥いた。ずれた眼鏡のブリッジを押

し上げて、

「おまえ、覚えてないのか」

「いや。まったくというわけじゃないけれど、どうにも曖昧で」

「しょうがないやつ」

日説はやれやれと肩を練めたが、どうにも楽しそうだった。

彼が云うところによると、ぼくは約二年前の夏、川で溺れたせいでこんな状態になったらしい。

卵の中の雛鳥がそうするように、ぼくは記憶の殻をこつこつと

突く。それははりはりと剥がれ落ち、少しずつ、光が見えてくる。

「覚えてるか？ ちいさな女の子を助けようとして早瀬に飛びこ

んだんだ。……金魚の浴衣で、帯が蝶々結びの」

「黒い髪の女の子」

「そうそう」

「あの子は、どうなったの」

日説は一瞬口ごもったが、意を決したように口を開いた。ぼく

が睨みつけるように強く見つめていたせいかもしれない。

「あの子もしばらくはおまえと同じ状態だった。けど、眠りはじめて聞かないうちに、もう……」

「そうか」

名前すら知らない子なのに、ひどく胸がきりきりするのはどうしてだろう。

黙りこくってしまったぼくを見かねたのか、不意に、日詠が明るく声を出した。

「それにしてもおまえ、痩せたなあ。体力を戻すのも一苦労じゃないか」

「ああ……」

「散歩に行こう」

「え、」

「久々に外の空気を吸うといい」

「でも、雨が」

日詠は口角を吊り上げ、窓の外を指さす。

空の割合は一群青が一、紅緋が二、オレンジが六と少し、そして水滴となって透き徹ってゆく黄金。

雨音の代わりに、蟬時雨。

「先刻のは夕立だよ。涼しくなって気持ちいいだろう」

日詠の口車に乗せられ、ついでに車椅子にも乗せられるがままたまぼくは白い病院を出た。入り口のところまで雨宿りをしていたらしい灰猫は、ぼくを見留めると寄って来てにやあと鳴いた。

メノウという名のぼくの猫。

久しぶりとも会えて嬉しいともその目は云っていない。ただ、

分かっていたように、当たり前のように、ぼくの膝に跳び乗ってまるくなった。

メノウの耳の後ろを掻いてやりながら、ぼくは二年前と変わらない景色と変わった景色を見比べる。日詠と同様この身体にも時間は流れていたはずなのに、骨の浮いた腕といい、ため息をつきたくなるほど頼りない。

……でもまあ、いいか。

懐かしいと思える景色が、此処には確かに在る。

夏の夕立の後の、透明な水の中にいるような陽差し。葉に花卉にちいさな粒を載せている草木。せつせと張り直されている蜘蛛の巣。

一帯がたそがれの光に瞬くさまは、風が揺らしてゆく、弦のないう楽器のようで。

知らず知らずのうちに震えているぼくの心のかなにも、また。

「見ろよ。あそこにも花が咲いている」

河川敷をゆく途中、ふと、日詠が声をあげる。彼が云っているのは、緑が密集した土手のほうに群れ咲く、赤みのオレンジの花。夕陽の色と同じだった。

近くで見たいと伝えると、日詠は素直に車輪をそちらに向けてくれた。

「百合……？」

竿に濡れた、つばみの感じや先の反った花卉が似ている。

ぼくのつぶやきに、日詠は頷いてみせた。

「そう、ユリ科の花だよ。藪萱草と云うんだ」

「ふうん」

「別名は確か……忘れ草、だったか」

「忘れ草、」

口に出してみる。胸の奥がなんだかむずかゆい。

違う、と思う。

何故か。

「やっぱり、百合は白いほうが好きだ。ぼくは」

「へえ」

自分でも理由が思いつかないことを口走り、日読に聞き流される。

そして足取りは自然と、帰り道を辿りだして――

空の色に占める群青の割合が増えてきた。淡い黄金は足下の影と戯れるセピア色に変わっている。

「おれの二年間を、話してやる」

よく透る声が、ぼくの耳朶を打った。

首を回して振り返ると、彼は眩しそうに目を細め、陽の沈むところを見ていた。

「だから、いつか思い出せたら、おまえの夢の話もきかせてくれよ」

……ぼくの見た夢を。

思い出せる日が来るのだろうか。

右手に残っていたぬくもりの理由や、薄闇色に霞む面影の少女。忘れようとしなければ、いつか。

明日か明後日か、一年後、十年後、彼方の星が輝くころか。

「おれは、待つのが得意なんだ」

眼鏡の奥の瞳を煌めかせつつ、日読が快活に笑う。ぼくの心の内を読んだかのように。

それにつられ、ぼくもちいさく笑って頷いた。

そっちがその気なら、せいぜい待つてもらおうでしょう。

鴉の鳴き声。ぐずぐずしていた夕暮れは、今やとぼくらを追い越してゆく。空では弓のようになう月が夜を待っていた。

見る夢々を忘れながら、これからもぼくは目醒めるだろう。

明日も、明後日も、一年後、十年後、彼方の星が輝くころにも。

そうして、いつかを夢見ることを繰り返して。

「あなたは冷たい」

飛驒高山高等学校

錦 野 史 織
 新 井 天 音
 井 戸 千 菜 美
 黒 内 香 理

あまりの寒さに目を覚ました。と言いたい所だが、物理的には目を覚ますことが出来ずにいる。

寒さによって覚醒しつつある意識の中で、必死に目を開こうとしたのだが、無意識の防衛能力によって阻まれているのだ。そこで、逆いきつく目を瞑ってみると、目の内側というよりは瞼の境界部分にあたるところに変な違和感を感じる。

そっと手を瞼に当ててみた。

冷たい

瞼の上を感じた冷たいもの、それは水だった。どうもその氷によって、僕の上下の瞼が貼り付いていたようだ。

水は手の体温によって徐々に溶け、今度こそ完全に目を開く。

言葉を失った

眼前を覆うそれに僕の頭は瞬間、現実である事を否定しようとしたが、微かに覗く紛れもない僕の部屋の内装から現実感を拭えないでいる。

落ち着こう。落ち着くんだ自分。そんな事では、昨日帰ってき

た妹に笑われてしまう――

そう、妹だ。

昨日、全寮制の学校に通っていた妹が夏休みを利用して帰ってきた。因みに僕は学校へは通っていないが、今は関係ないので置いておこう。注目すべきなのは、休暇の名称である。

「夏休み」なのだ。

決して「冬休み」ではない。ましてや、赤道を跨いだ反対側に学校がある訳でもない。よって、今の季節にこの寒さはあり得ないのだ。

しかし、その事実は、僕の視界を奪う「それ」と痺れるような寒さによって、現実であると知らしめている。

非現実的でありながら、紛れもない現実の光景。「それ」とは

ガツン。

という音が耳を突いた。と同時に、薄っすらと光が差し込む。内開きのドアを壊した音だとすぐに分かった。

「……っちゃん。坊ちゃん」

多分執事のクラウスの声。だと思ふ。

「ジェイド！返事をして頂戴。ジェイド！」

これは、間違いない母上の声だ。とても心配しているようなの

で軽く手を振ってみる。どうやらあちらにも僕の姿が見えたらしい。

「ああ、坊や。すぐに助けますから、安心して下さいね」

その言葉と同時に、パジャマと水の音がした。見るに入り口でメイドらしき者が、タライからお湯でもかけているのだろうか？大量の湯気によって扉の向こう側が見えなくなる。しかし、「それ」に目立った変化は無かった。

この調子では、僕が此処から出られるようになるまでにはかなりの時間が掛かりそうだ。

と他人事のように考えてはいるが、僕の置かれた状況が、かなり深刻であることは間違いないだろう。

屋敷の一室に設けられた僕の部屋はかなり大きい方だと思ふというか、この屋敷からして相当の広さを誇っているのだから、一般的にみなくても確実に広すぎる、広さと言えよう。

その広い一室のベッドを除く全てが「氷」によって覆われているのだ。真正銘の水漬けの状態である。氷はあまりの厚さのため幽かに凍っているが、空気が殆ど含まれていない高密度の水であることが容易に見て取れた。とても砕けそうに無いのだ。

そして、何より

「ハックション！」

寒い

この寒さはさすがに辛い。パジャマも布団も夏用に完全に切り替わっていて、かなりの薄手になっている。それに加えて、当然だが朝食もまだ食べていない。寒さが直に腹に響いてくる。

一体全体、どうしてこんな状況に僕が置かれているのかのとい

う疑問も、無い訳でもないが、温かい朝食に有り付くためにも、今は此処から一秒でも速く抜け出したい。

申し訳ないが、母上達が先ほどから動かしんでいる熱湯作戦では、半日以上は掛かると思う。いや、下手をしたら一日がかりの作業になるかもしれない。さすがに一日中この極寒の室内に居たんで命の危険を感じずにはいられないだろう。

体もこの寒さによって完全に覚醒したし、早速行動を起こすことにしよう。方法は一つ。

唯一無事であろうベッドの下を突き破る。というこの状況下では必然、考えられる作戦だ。

早速作戦に移ろう。まずは、かじかんだ手でマットを横に立てる。そのとき一瞬肌が氷に触れ背筋が凍る思いをした。以後気を付けることにしよう。続いて、ベッドの下板を一枚ずつ剥がしていき四角く切り込みの入れられたカーペットを剥ぎ取る。

というのも、この脱出方法は父上に叱られ、部屋に閉じ込められたときの抜け穴として普段から活用していたのである。わざわざベッドの下に抜け穴を作ったのは、この下が丁度、招待客の待合室を兼ねた部屋になって普段は使われる事が殆どないからである。

わざとベッドの下にこの抜け穴を作っておいて本当によかった。この抜け穴が見つかるのは忍びないが、背に腹は変えられない。ということで一気に床板を剥いだ。

「なっ——」

床を剥いだところに待ち構えていたのは

「父上！」

本来ならば、一枚床板を剥いだただけでは下の階が見えるはずがない。にも拘らず、すぐに一階の床が見えたことにも驚いたが、その脇のソファアに何食わぬ顔で父上が座っている。

「…」

「あつと。おはようございます。今日はとても寒いですね。」

二階から頭だけを出し、いつもと変わらないあいさつをしたが、父は微動だにしない。沈黙に耐えかね、僕は渋々一階へ飛び降り、父の横に立つ

「おはようございます。ジェイド・ランチェスター君」

「えっ！失礼しました。気付かなくて。そのっ」

上から覗いたときは、見えなかったが父の向側のソファアに三十代前半程の男性の座っていた。

「構わん。さっさと着替えて来い」

「は、はい！」

そう言われて、僕は裸足のまま廊下へを飛び出した。

「うわー、今日の父上機嫌悪いな。やつぱり説教されるのかなー」とため息を吐く。もう息が白くなるはなかった。

着替えて簡易な朝食を手早く済ませ、父と先ほどの客人が待っているという客間へと急いだ。その間、母上を含めた誰も今朝の事について触れる事はなかった。

訊かれたとしても何も答えられない訳で、結果としては良かったんだが、あれだけ大騒ぎをしておいていつも通りに接しられると逆に違和感を覚る。

気にし過ぎかな？

半ば走るようにして客間へと急いだので、ドアの前で呼吸を整え、ドアを叩こうとする——

「いい加減にしろ！」

「ひっ」

室内から父の怒鳴り声が響く。殆ど反射的に姿勢を正した。続いて聞こえてきたのは、客の男性の声だった。

「——ニクス皇帝の意向でもあるのですよ」

父上とは対照的な喋り方だった。よくは聞き取れなかったが、何か重要な話だろうか。

それなら、僕は入らないほうがいいんじゃないか？

「勝手にすればいい」

迷っていると、父が立ち上がった気配がした。僕は間一髪のところまで横に移動し、勢い良く開かれたドアに激突するという事態を免れたが、出てきた父に物凄い形相で睨まれた。

「遅いぞ」

「すいません。あの、どうかしたんですか？」

「何でもない。早く入れ」

そう言うと、父は自分の書斎の方へ行くようだ。僕は声音ほど怒っているようではない父に首を傾げながらその背中を見送った。

「失礼します」

「やあ。ナニい迫力のお父上だね」
そう言つて、父上を怒らせたであろう人は僕にソファアに座るように促した。

「まずは、自己紹介だね。私は、レオンハルト・ラグラジュとい
います。普段は、帝都ウィクスの北に位置するダクスという町で

小さな施設をやっているんです」

よろしく。と手を差し出される。

「よろしくお願ひします。あの、ジエイドです。僕に何か御用ですか？名前はご存知だったみたいですけど」

軽く握手を交わし、先ほどフルネームで呼ばれた事を思い出し勘繰るように尋ねた。

「そう、君に用事があつてね」

そう言つてラグラジュさんは、僕が来る前に用意されたであろう紅茶を一口飲んで話し始める。

「さつきは只の施設としか言わなかつたけど、本当は普通の施設とは違う少し特殊な役割を持っているんだ」

「役割、ですか？」

「うん。このヴィアトニクス帝国の皇帝カート・ル・ヴィアトニクス様が直々にお願ひされたとしても大事な役割があるんだよ」

皇帝直々の依頼つて、相当すごい事何じゃないか。実はこの人かなりお偉いさん？

「はは。僕は本当に正真正銘、ただの施設の管理人だよ。因みに皇帝云々は指口令がしかれているから、言ひふらさないで下さいね」

「ええ！言つたらダメじゃないですか。あー、聞くんじゃないか」

「大丈夫ですつて。君が口外しなければバレないですから」

そんな、適当過ぎやしませんか？皇帝もいったい何を考えてこんな人に頼み事なんて、全部この人の嘘なんじゃないだろうか？とまで思えてしまう。

「おーい。話し続けてもいいですか？」

「あつはい、すいません。お願ひします」

「はいはい。それで、そのお願ひの内容とというのが、何らかの理由がある子供を保護する。というところは一般の施設となら変わりないのですが、その子供というのが特殊でして。普通とは異なる、少し特殊な力を持った子供たちを保護するための施設なのです」

「特殊」という言葉に少し反応してしまった。彼もそれに気付いたようである。

「他とは異なる力。もう、お解かりですよ。貴方も持っているのでしょう。力を」

僕はラグラジュと名乗つたこの男を、身構えるように見つめる。暫しの沈黙が流れ、男が口を開く。

「ジエイド君。落ち着いてくださいよ」

そう言つて男はティーカップを持ち上げると、傾けそのままの動作で完全に引つ繰り返した。

「！」

しかし、入っているはずの紅茶は一滴も零れない。

「気付いていないんですか。うーん？かなり重症のようですね」

そう言つて、驚いている僕にカップの中身を見せる。

「寒いんですよ。とても」

カップの中身は、凍っていた。今朝、嫌というほど見た、氷だ。

「そんな。何で？」

「だから落ち着きなさいと言つていてしょう？ 私はてっきり、わざとやっているのかと思ひましたよ」

彼はカップを元の皿の上に戻し、懐から紫色をした掣型の水晶

を取り出した。そして軽く身を乗り出して、水晶を持つ手と逆の手を僕の頭に置く。

「あの。何を？」

「黙って。マナは分かれますか？」

「マナ？」

「目を瞑りなさい」

彼に言われた通りに目を閉じる。それを確認すると、不思議な詞を呟き出した。

「視えるのは世界の大きいなる流れ。生命の深遠の先。過ぎ行くは力の波長を。森羅万象を司る叡智の全て。それがマナ。

貴方の命です。それを感じなさい、自身の存在を確かなものへ、出来るはずです」

彼が言い終わると同時に、水晶の光が閉じていたはずの視界に染みてくる。まるで違う世界に飲まれるように――

手足が痺れるような感覚がはつきりとしてきて、体の中心が不安定に揺れていて、まるで自分が存在しないような、それでいて全ての感覚が敏感にマナという存在を感じている。

「これが『マナ』？」

「ええ、そうです。貴方を構成するモノ。物質を構成させるモノ。そして世界を創造するモノ、それが『マナ』です」

僕は、ゆっくりと目を開ける。テーブルの上には液体の紅茶がカップを満たしている。

「落ち着きましたか？」

「はい。これが他とは異なる力か？」

「そうです。この力を私たちは古来から『魔法』と呼んでいます」

「えっ！これが魔法ですか？なんだかイメージが」

僕の中の魔法のイメージはほうきに乗った魔女や怪しい呪文を唱えているといった感じで、こんなにも簡単に使えてしまうとは到底思えない。

「言い方はそれぞれですが。魔法と統一しても良いと思いますよ。しかし、今、君が行った魔法はとても不安定で危険です。本来、私達が魔法として使用する力とは決定的に違います。

魔法に呪文が必要なのはきちんと意味があるんです。君の魔法の力の源。即ちマナは自身の命を使っています」

「えー！それって、大丈夫なんですか」

命を使うってことは、寿命とか？生命力が減るってことなんじゃ！

「ええ。だから危険といったでしょ。今は只単に溢れるマナを使用した程度で済んでいます、今後命に関わる使い方をしないと

も言い切れません。

だから、君に会いに来たのです。私の役目はそういった特殊な子供を集めただけではありません。子供たちに安全な魔法の使い方を教育する事が本来の目的なのです。ですから子供たちは施設の事を『学び舎』なんて呼んでいます」

「魔法は使っても大丈夫なんですか？」

「きちんとした教育を受ければ。今は自身のマナを使った方法ですが、学び舎では自然、物質に宿るマナを活用する事で魔法を使えるようにする訓練を受けます。それに、学び舎はダクスの町の中でも特にリベトロ山の近くにあり豊富なマナを得る事が出

来るんです」

リベトロ山とはヴィアトニクスの北側の国境にあり強国ダブリスの侵略を防いできた活火山だ。

「一緒に来てもらえますか？」

施設に行くという事は、この家から出てくという事だ。正直僕はこの家から殆ど出た事がない。学校に行く変わりに父上が用意した優秀な家庭教師が勉強を見ていたので、妹以外で同じ年頃の子供と遊んだ事もないのだ。

「こんな事は言いたくなかったんですが、君に拒否権は無いですよ。拒むなら皇帝の名前をお借りして強制的に連れて行きます。

それになにより、今日の事でも分かったのではないですか？その力でもしご家族と一緒にいるときに発動したら、想像できるでしょう。氷漬ですよ？ 大切な家族をそんな危険に晒したいのですか」

そんなことは出来ない。
僕が正しくこの力を使えない為に、皆が傷つくなんて。僕は此処にいてはダメなんだ。

「行きます。連れて行ってください」
ラグラジュさんはフツと笑い

「分かりました。では行きませうか」

「え、もうですか。家族と話したりとかはダメなんですかね」
「残念ですがそうなります。施設に行くからには数年は、もしかしたら十年以上経ってもこの家に帰ってこれるかは分かりません。

私が乗ってきた馬車を外に待たせてあります」

何となくは分かっていたが、やっぱり僕のこの力は普通の人に

とって害でしかない皆に会えないのは辛いけど、家族を危険な目に合わす方が嫌だ。

僕は自嘲気味に笑った。

まるで一生の別れみたいで：

でもなぜか

「何でだろう？ この力の所為でこんなになっているのに、こんな力、無ければ良かった、とは全く思わない。思えない」

そして、この感情は不思議と嫌じゃない。

「では、行きませう。気が変わらないうちに」

「あー、でも本当に良いんですか。何も言わなくても」

さすがに黙って出て行くのは不味いのではないか？ 誘拐と間違われるとか。

「それは心配ありません。君のお父上にはきちんと話は付けてあります。

ま、納得しているかどうか知りませんが、先ほど怒鳴られたのはこの話をしたからなんです。いや本当に怖かったですから」

そう言ってラグラジュさんは肩を窄めた。

それから僕等はまるで夜逃げ気分ですぐ玄関へ向かった。しかし、不思議な事に正面に出るまで使用人に全く出会わなかった。さすがにこれはおかしいだろう。もしかしたら父上が手を回してくれたのかも知れない。

実はちょっとだけ、偶然妹に会えるかなあ、何て考えていたから軽く落ち込んだ。

「そう暗い顔しないで下さいよ。人数はまだ少ないですが、君と

同じように力を持ったお友達がダクスで待っていると思えば中々良い気分じゃないですか」

なんて暢気な事を言われたが、これまで一度も友達成るものを持たなかった自分にとって、それも不安要素の一つである事は違いない。

「はあー」

そんなこんなで、無事誰とも会わず玄關にたどり着いてしまった。

「さあ、さっさと乗ってください。行くと言ったのはご自分なんですからな」

「分かっていますよ」

背中を突かれたて渋々馬車の台に足を掛けたとき

「ジェイド！」

「父上！何故此処に」

そこに立っていたのは紛れも無い父上その人だった。

「これを持って行け。饑別だ」

渡されたのは革張りの立派な手帳。

「ランチエスター殿！」

「只の手帳だ。何も書いていない。それぐらいはいいだろう」

ラグジュアさんは、それでも不満そうに父上に小言を言っている。僕は初めて貰った手帳がうれしくて、まだ何も書かれていないのに、何度もページを弾いた。

「ありがとうございます。大切にします」

そうして僕は、ダクスにある施設「学び舎」へと立った。

そうして、旅立ったことはいいのだが。

数日、何十時間に渡って、あらかじめ用意されていた馬車に乗っている。

馬車には乗ったことがあるものの、ここまで長時間に及んで揺られることはなかった。そのせいで、気疲れも含めて心身共に疲労しているのだった。

「今日はこの辺りで野宿しましょうか」

「はあ、そうですね……」

まず、この辺りが何処なのか分からない。いつまで野宿が続くのだろうか。

「まだダクスにも入っていないですよ」

「え、そうなんですか？」

さらっと言ったレオンハルトの言葉に思わず目を刺く。

「ここ二、三日馬車を乗り続けたにも関わらず、まだダクスにも入っていないとは。」

「ええ。後、半日程度でダクスに入りますけどね。時間が時間ですし、この辺りは野生動物が多くて移動中に襲われる心配がありますし」

そ、それは、止まっているここが一番危ないのでは？

思ったことが顔にでたのか、レオンハルトは軽やかに笑った。

「あ、それは大丈夫ですよ。薪を燃やしますし、警護がいるので」

「はあ、そうですね……」

そんな人、いたっけ。少なくとも、レオンハルトと馬の手綱を握っている従者二人しかみたことないけれど。まあ、いるんだろう。どこかに。

無理矢理納得することにした。

「あのー、ちょっとこの辺り見てきていいですか？」

いつもは屋敷の中にいたために、外の空気が新鮮に感じる。日が沈んだ森の中、というのも初めてだった。従者たち二人は、夕食の準備に忙しそうだった。時間はかかるだろうし、多少、見回ることぐらいはしていいだろうと思ひ、そばにいたレオンハルトに尋ねる。

「いいですけど、遠くには行かないでください。危ないですから」
分かりました、と返事を返し、灯りの入った灯籠（カンテラ）をつり上げて、近くの草むらを回る。

初めての場所を回るのはとても新鮮だと思ふ。よく分からない虫や草花が生い茂って、知らないことがたくさんあった。

屋敷にいたときに、使用人に屋敷の近くで「蝶」と呼ばれる羽のついた虫や「蜘蛛」と呼ばれる六本足の虫を見せてもらったことがある。あと、この地域には珍しくもない、よく見る「蠅」も見たことがある。

だが、森は違った。全く知りもしない、見たこともない生き物達がたくさんいた。外の世界が広いことを実感した。

特に珍しかったのが、花だった。屋敷の図鑑でしか見たことがないような、珍しい紫と青色の花が咲いていた。この花はとても珍しく、貴族たちが高値で取り引きしていると、父上から訊いたことがある。父上は花には興味がないようだったが、母上は滅多にない紫と青の色の花は高貴の象徴だと昔言っていた気がする。

この花を母上にプレゼントしたら喜んでくれるだろうか。母上の笑顔思い出し、クスリと笑う。なんだか、とても屋敷にいた頃

が懐かしい気がした。まだ、旅だつて数日しかたつていないにも関わらず、遠い昔のことのように思える。やはり、家族に挨拶はしておきたかった。父上には挨拶をして、手帳をもらったけれど。そういえば、この手帳には意味があるのだろうか。どのページも真っ白で何も書いていない。もらったときは初めてのプレゼントだったので、とても嬉しくてそれどころではなかったけれど。何度見ても、変わらなく真っ白な手帳。父上は、この手帳に、何を託したのだろうか。何を伝えたかったのだろうか。

身一つと、唯一の持ち物である、この手帳。この中にある、マナと魔法とやらには、何の関係があるのだろうか。

「知らないことはっかりだ」

自分の中の魔法なんて、今の今になるまで知らなかった。数日前の、あの朝のレオンハルトの話を訊いて初めて知ったのだから。冷たい透き通つた、氷。部屋全体が吹雪に見舞われたように凍りついて冷えていた。それも、一夜にして部屋そのものが、だ。そんなことが、あり得るのだろうか。

と、いつの間にか思考して草むらを歩いていた。そろそろ戻つた方がいいだろう。遠くにいきすぎると迷つて戻れなくなるかもしれない。

足をクルリと転換させ、歩いてきた道を戻ろうとする、そのときだった。

そばの木陰から、ガサリと音がする。そこまで大きな音でもないし、大きい何かがあるとは思えないような草むらや木々が周りに広がっている。

警戒しながらも、音がした方の草むらに足を向けて、草むらの

中をゆつくりと覗く。すると、小動物が草むらの中で寝そべっていた。その小動物は、特に怪我をしている様子はなく、ゆつたり寝ていたようだった。無防備にも、仰向けで鼻をヒクヒクさせていた。

「ビックリさせるなつて」

少々驚いていた自分がいることに苦笑しつつ、独り言のようにつぶやく。

辺りを見回り十分に楽しんだので、小走りになって戻ろうと、前を向き直ったときだった。

「……え」

グルグルウウ、と威嚇するようにのどを鳴らす、大きな四つ足の動物が一匹。それは、明らかに自分をねらっていて、ジリジリと距離を詰めていた。まるで、飢えた肉食獣が、獲物を追いつめるように、一歩一歩、距離を縮めてくる。

知らず知らずのうちに、ジェイドも一歩一歩、獣が近づいた分、下がらる。それが気に入らないのか、よけいに威嚇する声をより低くより大きくし、大股でジェイドに迫る。

——この辺りは野生動物が多くて移動中に襲われる心配がありません。

レオンハルトは休憩を取るときにそんなようなことを言っていた。野生動物が多い、と。もちろん、移動しなければおそれない、なんてことはないだろうけれど。

——薪を燃やしますし、警護がいますから。

今この場所には、警護などいない。ましてや、ジェイドが手に持っているカンテラは頼りない蠟の炎。薪などの暖かな炎ですら

ない。

どうするべきだろうか、この状況。なんてこの場合に考えるべきではないのだろうけれど、どうするべきかなんて考えたことがないわけだから、何を今すべきか分からない。逃げるべきなのだろうけど、この辺りのことを何も知らない自分では非力すぎる。走って逃げたとしても、獣の方が速く走れ、捕まるだけだ。

レオンハルトも、従者も、ここにはいない。

と、そこまで考えてから、レオンハルトの声と草むらをかき分けるような音がする。

「ジェイド君？夕食ができましたよ」

この状況で、返事をすればいいのだろうか。無理に獣を刺激しておそれなければいいんだけど、と考えたそのときだった。

何を思ったのか、獣は一気に距離を詰め、襲いかかってくる。前足を上に振り上げて、鋭く上がった爪で、ジェイドを切り裂こうと巨体を伸ばす。

「——う、わっ！」

「ジェイド君?!」

勢いにつられ、一歩下がると木の根元によつかり、足を引っかける。後ろに倒れたジェイドなどお構いなしに、その刃はジェイドの身を掠めようとした。危ないっと思いと、とっさに手で顔を隠す。が、その瞬間は一向に訪れない。

恐る恐る、顔を上げてみれば、果然と状況を確認するレオンハルトの姿と、全身が凍り付いて振り上げたままの獣の姿だった。

「大丈夫ですか」

大方落ち着いたレオンハルトが、未だ座り込んでいるジェイド

に声をかける。その言葉は身を案じていても、驚きを隠せていない様子だった。

「本当に、ビックリしましたよ。肝が冷えました。だから、速くまでに行かないように声をかけたでしょう？」

福息混じりに、攻めるような口調であることは仕方ないだろう。ジェイドも予想外の結果だったのだから。

見ているなかったジェイドでも、あの瞬間に何が起こったのか予想ができた。レオンハルトはやれやれといった様子で言った。

「君に刃が突き刺さるその前の瞬間に、どこからともなく、大熊が凍りついたのですよ。まるで、君の身を案じるように、一瞬で大熊が凍ったんです」

まだジェイド自身は自分の中にある、魔法やマナを使いこなすことはできない。それどころか、未だに信じられない。

「あの芸当が今現在のジェイド君にできるとは思いません。本来、魔法は暴走することはあっても、独りで身をを守ろうとするように働くものではありません。それなのに、ジェイド君の中にあるマナは暴走していない。むしろ、ジェイド君の身を守ったと解釈できる。もしも、ジェイド君の魔法が……」

ぶつぶつとつぶやくレオンハルトは、深刻な顔をしている。どうやら、今のことはよほどのあり得ないことだったらしい。

「あの、よく分からないんですけど……」

そろそろと手を挙げて、レオンハルトに説明を求める。魔法について、マナについて、ジェイドは詳しいことは何一つ知らない。屋敷を出る前に、レオンハルトがちょっと説明した程度の知識しか持ち合わせていない。

「……それも、そうですね。では、夕食を食べながら説明しましょう」
「はい」

ジェイドは立ち上がって埃を払うと、従者たちが待つ場所まで、レオンハルトについていった。その間、レオンハルトは終始無言で、険しい顔をしていた。

陶器製の器に、じっくり煮込まれた野菜と、雑穀が今日の夕食だった。

「……まず、ジェイド君の魔法の属性は、『水結』です。『水結』はその名の通り、水の魔法。君は、『水結』を司る魔法使いなのですよ」

『水結』という言葉に、先程のことと数日前のことを思い出す。「そして、これはあり得ないことですが、君の魔法は君の身を守るように働くように思えます。ある日突然、魔法が発動することなんてありませんからね。もしあったとしたら、それは魔力の暴走です。」

ただ、君の場合は別です。君の魔法は誰一人傷つけていない。よく思い出してください。数日前のあの日、あの水は、どんな様子でしたか？」

数日前。あの日。
部屋全体が分厚い氷の壁に覆われていて、それも、自分の部屋の周りだけが、寒さに見舞われていた。

「そうです。君の居た部屋だけが、凍り付いて、凍てついていた。まるで、君を隔離するように。その水は君を閉じこめただけで、誰一人傷つけていない。」

あの氷の壁は、何の意味があったと思いますか。君だけを、囲んでいた、あの氷の壁の意味です」

「え、と……」

「たぶん、あの氷は君を守るための物だったんだと思いますよ。君が迫害されることをおそれて、君の中の『氷結』の魔法が防衛本能を起したのではないのでしょうか。あの透明で凍てつく氷の壁は、ちょっとやそつとで壊せるような代物ではありませんからね」

そこで、レオンハルトは一息つく。肩をすくめて、器に盛ってある暖かな野菜煮込みを食べて微笑む。

「だから、君の家族は誰一人けがをしなかった。もしも、君の魔力が暴走していたら、屋敷は氷まみれて、屋敷内に居た者達は凍死をしてましたよ。」

大抵、魔力があふれ出せば、必ずといっていいほど、暴走します。相当魔法について詳しいなら止められないこともないですけど、何らかの被害は最低限、あるはずですよ」

君は幸運ですね、とレオンハルトは言った。

もしも、あの時、家族を巻き込んでしまっていたら、どうなっていたら。父上は相当怒るだろう。怒るところでは済まないだろうけれど。

「君の司る『氷結』は例外中の例外、まして何か、その辺りの魔法とは違うでしょうね。さらに、君の魔力は鮮麗されています。魔力は不安定ですが、何というか、真つ直ぐで、暴走するような要素がないんですよ。魔力のブレがないんです。まるで、何年間も魔力のブレを修正したように、波長が整っている。普通では、あり得ないことです。」

君の魔法の腕は、磨けば上がるところまで上がるでしょう。覚

えることさえ覚えてしまえば、立派な魔法使いになることができます。マナも、自分でコントロールし管理することも可能でしょう」

レオンハルトは続ける。

「ただし、まずはどうして君の魔力だけが、ここまで君に順応なのか、調べなくてはけません。」

大抵、マナは人の時を食らうのです。時とはその人の時間。ようするに、生命の残量を根こそぎ奪うのです」

最初に言ったはずですよ、とレオンハルト。

——マナは自身の命を使う。

「そう。魔力と引き替えに生命を食らう——即ち、吸い取ってしまふのですよ。まるで魔法使いの命を糧にするかのように。」

マナはどんな生き物やどんな物にでもあります。ただ、他から吸い出すよりも、自身の命を糧に使った方が早い。だから、魔力やマナは命を吸い上げ、強力な魔法を生むんです」

だから、魔法使いは貴重で短命なのですよ、とレオンハルトが言った言葉に響が止まる。思わず、器ごと落としそうだった。

「しかし、君の場合は根本を覆すように、普通の魔法使いとは違う。」

まず、君の魔法である、『氷結』の魔力は君自身を守るために働く。その力は自然からのマナを詐取し、君自身に被害が及ばないように働く。つまり、君は唯一、『魔法使い』という枠には収まらない存在なのですよ。君の司る『氷結』は過去から現在に至るまでの異例なのですよ」

ここまでいいですよ、と彼は訊く。

「全然良くないですよ……。よく分かりませんよ……」

話が長すぎて、内容が飛びすぎて、全くよく分からない。ただ、この「水結」が僕を助けてくれたことならばよく分かった。

「それが分かれば十分です。ただ、魔力云々の前に、君自身が危険です」

「……はあ」

言っていることがよく分からないから、生返事になってしまふのは仕方がないことだと思ふ。

レオンハルトはそんなことは気にもしないで、ポケットから淡い蒼色の水晶のついた銀のチェーンを取り出した。その水晶は、煌めくように光っていて、何か、電磁波のような物を感じる。

「これはマナ石です。何があっても、この石を肌に離さず持っている、と約束してください。これは、君の命に関わることです。

もしも、君に何かあったら、私が君のお父様に殺されてしまうよ」

レオンハルトさんはその水晶を銀のチェーンごと僕の手のひらに押しつけ、握らせた。

その言葉の前半は真剣そのものだったが、後半はおどけて肩をすくめた。その様子に思わず、笑みがこぼれる。

「では、もう寝なさい。明日からはダグスには入ります。数日経てば、学び舎に着くことでしょう」

数日後、彼のいうとおり、僕ら従者を含めた四人は学び舎へと到着した。

ついて早々、レオンハルトは言った

「君には入学手続きがありますが、君のお父様がその辺は済ませ

てくださいましからぬ。君はここでみっちり魔法を学んでください。後、今日の夕方に、君をある場所に連れて行くつもりですから、君もそのつもりで。午前中は学び舎の校舎を見学するつもりでしょう。では、後ほど」

これを午前中で見て回れ、と？

何とも大きな校舎が三つ、目の前にそびえ立っていた。右から、寮、学び舎本校（魔法についての知識等の学習所）、実習場の三つだ。

寮はその名の通り、寝泊まり等。学び舎本校は魔法についての知識や扱い方について学んだり、各魔法のレベルにおいての学習ができる。実習場は実際の自然の中で、どのように魔法が生かせるかを体験できる実習そのもの——だそうだ。

午前中だけで、すべて回るのはさすがに無理だと思えます。と意見を云ったとしても、きつと聞き入れてもらえないだろう。自分でどこを回るべきか、考えるしかないだろうな。

とりあえず、荷物はないけれど、寮に行っておきたい。入学に對する準備などは何一つしていないし、急なことだったので、体が休まらない。ここで休憩することもいいだろうと思う。

「……広い」

大理石の壁と天然石のタイル式の床。豪華にもほどがある。レオンハルトさん曰く、「小さな施設」らしい。どの辺りが小さいのだろう。十分な広さと大きさを誇っていると思うのだが。

「あれ、君が新しい新入生？」

入り口の壁と床に圧倒され立ち止まって僕に、ここにきて初めて声をかけてくれたのは、ブラチナゴルドの髪に薄緑色の目を

した、同じくらしいの少年だった。

「ふん、ジェイドね。オレは、リークテイラ。リークでいいよ」
リークテイラ、もといリークはすでに三年ここにいらっしゃるらしい。

三年前のある日突然、体が熱くて高熱を出したらしい。夕方になって日が落ち涼しくなつたときに、何処からともなく家が真っ赤な炎に包まれ、数時間で焼け落ちたという。家族は皆助かったけど、家はひどい有様だったらしい。

そんなときに、各地から魔法が暴走する者達を集められていたという。リークは二も二もなくその話に飛びつき、魔法の扱い方を学んでいるという。

「この奴らは全員良い奴さ。みんながみんな、ほかに迷惑をかけるないように向上しようとしてるんだ。人それぞれ事情はあるしさ。ジェイドも分らないことがあつたらオレに聞けよ？」

屈託のない笑みで笑うリークは心強いと思つた。何とも云えない兄貴肌がびつたりしている。

「よろしく頼むよ、リーク」

僕はリークにこの学び舎について訊いたり、色々について聞いた。

リークは、まずはとばかりに学び舎で人が集まっているところを回る。速くなれるよ、と云わんばかりの気遣いをありがたく感じた。

「俺はシエイル。よろしくな」

「あたしはティセラよ」

「セルシエラね。宜しく」

「俺はアーディンだ」

「僕はリアだよ」

「私はネルティ」

「オレはクリティアーン」

などと一度のたくさんの顔と名前を聞いた。頭に放り込むことが多すぎて、分らない。そうリークに云つたら、リークは「少しづつ慣れればいいさ。みんな、新しい仲間を歓迎してるんだぜ」と笑つた。

リークは午後も案内すると意気込んでいたけれど、夕方になると何処からか、レオンハルトの従者が僕を呼びにきた。リークは不思議がつて、従者相手にかみつこうとしていた。どうやら、従者との折り合は悪いようだった。

「ジェイド、気をつけろよ。騎士と従者は信用できねえからな」

何処からその偏見がくるのかは分からなかつたが、分かつたと一言返し、迎えにきた従者について行く。

従者の話では、滅多にはいることができない、マナがあふれた洞窟にはいるそうだと。どうにも、確かめることがあるとかないとか

マナ、と聞いて思わず、首にかけて服に隠れているマナ水晶のお守りに触れる。少しだけ落ち着いたような気がした。

「マナについては前に話しました。その時に君はマナに触れ、今も君はマナ水晶をお守りとして持っています。ですが、今から行く洞穴はマナそのものだと思つてください。下手なことをすればマナに飲み込まれますから、気をつけてください」

彼は物騒なことをちよろつと云うと、実習場の敷地内にある一番端の盛り上がった洞穴に足を向けた。近くまで来るとよく分か

るが、ひんやりとした空気が周りを包んでいる。何かが流れ込んでくるかのように、力の波動を感じた。

敷地内といわれた割にはその洞窟はなかなか遠い位置にあった。ひんやりとした薄暗い通路をラグラジュの後ろについて歩く響く二つの足音。反響するその音は命の数を数えているように不気味で、何か得体の知れない不安と焦燥感に苛まれた。呼吸もままならなくなり、背中にじっとりとした嫌な汗をかいた。

「ジェイド君、落ち着いて。無理に息を吸おうとせず、一回息を大きく吐いて下さい。」

そう言うラグラジュも青白い顔で腫の焦点が定まっているのか怪しい表情だ。

「ここはどこなんですか？」

「洞窟の中です。向こうに光が見えるでしょう。あそこが……」次の瞬間、青い光が僕らを襲った。別に高画質な映画を3Dで見ているわけではなく、現実的に襲われた。

「ラ、ラグラジュさん、あっ。」

彼の後姿を頼りにこの広い洞窟を来たのにここで別れ別れになってしまった。指先がピリピリする。

「どうして？何があったんだ……？」

どうせ一本道だったし、何とかなるだろう。そう思って引き返そうとした刹那、頭のとっぺんから衝撃が走った。遠のく意識。完全に意識が吹き消える前、ラグラジュの姿が見えた。

「本当にどうしようもない坊やだね。何もするな、気をつけろと

あれほど念を押したのに。」

すみれ色の視界。なのに目は開けられない。紫のフィルターの先にはなぜか妹がいるような気がした。何年も会わない間に顔を忘れてしまったのか首から上が全く見えないのにも関わらずその人影を妹と識別できたのはなぜだろう。揺れる意識。深く深く落ちた先は……

「……ジェイド……！」

はっとして飛び起きる。そこは氷漬けのベッドでも、数日寝た寝袋の中でもなく、白いシーツの中だった。

「ジェイド！心配したんだぜ。ずっと寝やがって。」

窓の外は暗く、月明かりに照らされたリークの顔は僕をまっすぐ見つめていた。

「マ、ごめん……。もしかしてずっと君が見てくれたのか？」

リークは当たり前だろ、と笑うと歯を見せてニッと笑った。

「ここはもともと二人部屋だからな。今まで俺が一人で使わせてもらってたけど、今日からお前がルームメイトだ。改めてよろしくな。」

差し出された手に自分のそれを握らせるとリークは強くぶんと振った。

「ありがとうリーク。何もかも全部君のおかげだ。」

「何言ってるんだよ。言っただろ、俺たちは友達だぜ？」

見るとその部屋にベッドは一つしかない。リークが僕をずっと見てくれ、その間、休めてないことは僕にも分かった。それなのに彼はそんな様子を微塵も感じさせず、僕の面倒を見てくれた。

申し訳なさと感謝で心がいっぱいになる。ああ、そうか。僕がこれまでの人生で見落としてきた大きなものはこの腰かさなのだろう。

速い一つなく友達だと断言してくれたリーク。危うく泣き姿まで見られてしまうところだった。

「そういえば、ジェイド、夕飯食ってないなら、腹減っただろ？これ、食えよ。」

差し出されたハンカチを開くと中に包まれていたのはロールパンだった。

「たまたま、ぐうと腹の虫が鳴いた。」

「どうやらお前の腹の虫のほう为正直者みたいだぞ。」

今度は僕もつられて笑い、そのパンをありがたくいただくことにした。

リークにももらったそのパンは今までのどのパンよりおいしかった。パンを頬張る僕をチラッと見ると言いにくそうにリークはしゃべり始めた。

「今日さ、お前についてた奴、いるだろ？管理人の。あの人にさ、言われたんだ。お前は瘦れて寝ちまったから俺の部屋に寝かせてやる。面倒見てくれるって。」

「そういえば、ラグラジュさんと洞窟に行ったんだっけ。どうなったんだらうあの後。」

「でもおかしいと思ったんだ。あの人……あいつは、管理人だからって、でも、やつぱり……。」

「リーク？何かあったの？」

「ジェイド！この大人を信じちゃだめなんだ!! いい人そうに見

えるかもしれないけど、だめだ、だめなんだ。あいつは……。」

「え……?」

「教えてくれ。何があったのか。あいつに何をやられたのか。また非道な言葉で脅されたりしたのか!」

「……また?」

「どういうことだ……?」

「顔色が変わる僕にリークは満足そうに頷いた。」

「やつぱりあいつは黒だったな。」

「リークは目を伏せると悲しそうに呟いた。」

「話してくれ。お前の話を。」

リークに迫られて僕は話した。自分の屋敷を出、ラグラジュにつれられ旅した数日間。それから今日行った不気味な洞窟のこと。「あの洞窟に行ったのか? あそこは危険だと言われているんだ。マナのたまり場だって。ここにいるみんな近づこうとしない。誰だって自分の大切なものを傷つけないでいこうとしない。誰も、ここで三年間かけて学んだとしても、この有様だ。」

「リークは肩をすくめて見せた。」

「テイセラなんか十年ほどここにいらしいぜ。赤ん坊の頃、母親に捨てられたとか。噂だけだな。」

「今日会ったばかりの彼らを思い浮かべる。テイセラはたしか、黒髪の女の子だったっけ?」

僕は自分自身を思った。自分のことさえ分からない、「氷結」が自分にとって何なのか、それさえも。

「ジェイドはここに来たばっかりだし、しばらくはゆっくりした

「らいいさ。朝礼での儀式は俺が変わってやるから。」

「え、何？朝礼での儀式？」

「オウム返しにきくとリークはこっくり頷いて「実習場ってあったら？あそここの奥にあるんだよ。そういう場所が。毎日朝礼で、自分の力をその碑に向かってぶつけりゃいいのさ。」

俺はそれに何の意味があるのか理解できないけど、と付け足しながらクローゼットをガサガサと探し、シーツを取り出した。

「とりあえず、今日は遅いし、寝るか。あ、それとお前、荷物はどうしたんだ？」

不思議がるリークに、ラグラジユが家族とあいさつするのは禁止だからと言われたことを話し、何も荷物を持ってきてないことを告げる。するとリークは怪訝そうに

「何だそれ。おかしいだろ。俺なんかもう一生帰れないかもしれないってわんわん泣きながら父ちゃん、母ちゃん、仲悪かった姉ちゃんともハグして別れてきたぜ？」

「本当に!？」

「それに家族にあいさつしたら駄目なんてまず変だな。正気の人人はそんなこと言わないだろ。しかもネルティなんか週一で故郷と連絡取ってるぜ？一番チビだからかもしれないけど。」

ラグラジユは嘘をついていた？どうして？何のために？

「大丈夫か？気にすんな。手紙くらいなら俺のに紛れさせてやるから安心しろって。」

「あ、ありがとうリーク。ところでさ、ずっと気になってたんだけど、寮と校舎の入り口は東側だろうか？女のに実習棟だけが入り口が南を向いていた。どうしてなんだ？」

校舎見学をしていた時、実習棟だけが入り口を見つけられなかったから。そう問うとリークは眠たそうに目をこすり、

「え、ああ。気にしたことなかったな。何でなんだ？まあ、今日は休め。俺もちょっと疲れたし。もし何かあったら起こせよ。」

「ありがとうリーク。おやすみ。」

しかし僕はしばらく寝ることができずにいた。南に入り口があるということは順当に考えて実習棟の奥は北を指すだろう。朝礼での儀式があると言っていた。つまりその儀式は、その碑は北に位置しているのだろうか。北といえば強国ダブリスの……

しかしでもそんなわかりやすいことをするだろうか？

急に不安を覚えてただひとつの荷物、父上からもらった手帳をにぎりしめた。

そのまま眠りに落ちたのだろうか。手帳を握りしめて僕は眠ってしまった。

「なんじゃこりゃー!？」

「どうしたジエイド!？」

「学び舎二日目は僕の絶叫から始まった。」

「リーク、大変だ。見てくれこれを。ああ、どうしよう!」

手の中にあるのは父上からの贈り物、唯一一つの持ち物。黒い皮の表紙の手帳のはずだった。

「落ち着け、何だこれは。手帳？すまん、俺は頭が悪いらしい。」

最初から説明してくれないか。」

リークは覚めない目で頭の上に大量のクエスチョンマークを並べていた。

「ああ、これは家を出てくる時に父上にもらった手帳なんだ。黒くて無地だったはずなのに……」

その手帳は赤い表紙に変わっていた。しかも何やら怪しげな模様まで浮かび上がっていた。

「何か書いてあるみたいだけど……。読めないなあ。ジエイド、読めるか？」

僕はゆっくり首を横に振るとその手帳をリークに差し出す。リークは文句ひとつ言わずにそれを受け取った。

「はあ？何だよこの文字は。う……ういくす？違うな、ここは濁るのか。これはAの発音だよな。ういくくに、ヴィクアニ？すまん、読めねえわ。」

無茶な頼みをしたのにも関わらず、役に立てなかったとしよげるリーク。

「僕のほうこそ朝から騒いでごめんよ。いろいろな迷惑かけちゃったし……。しかもまだ始業までたっぷり時間がある……」

リークは大きなあくびをしながら平気、と呟いた。

「とりあえず着替えたな。寝巻きは当分俺のを使えばいいし。それから学び舎では制服という制服はないんだけど、こんなようなのをみんなでそろえて着てるから……。こっちのほうにあつたんだがな。お、これこれ。」

それはまるで教会の神父が纏うような服。違う点といえばその色は青色と紫色を混ぜ合わせたような、そんな色だった。

「朝食まで時間あるな……。校舎でも案内するか。場所とか分らないだろうから授業とかも俺と一緒にいろよ。」

何気ない気遣いがとても嬉しかった。

「僕、実は図書室に行きたいんだ。」

わがままを言って案内された図書室は早朝にも関わらず、すでに先客がいた。

「あら、リークじゃない。今日は早いのね。」

「おはようティセラ。お前こそこんな朝はやくに相変わらず熱心だな。」

そこにいたのはティセラだった。昨日は編みこんでいた黒髪を結わずに流している。

「図書室は基本的に開いてるから、自由に使っていいぞ。借りる時の手続きはあっち。資料もおいてあるから、勉強もできるぞ。」

その台詞にティセラは肩をすくめてみせる。

「えーと……ジエイド君だったかしら？ 改めましてティセラよ。あ、そのマナ石……」

ティセラは僕が首からかけていたマナ石に気が付いたようだった。

「どうしたの、それ。」

「あ、これはラグラジュさんが身に付けておけて。えーと……」

ティセラは顔をラグラジュという単語に反応すると憤怒の口調で語りだした。

「ラグラジュ!?何でアイツ……。ジエイド君、体はだるくないかしら？何か変わったことは？ああ、もうあの人、管理人やめて私の前から消えてよ!!」

どうやらリークだけがこの学び舎の大人を毛嫌いしているわけではなさそうだった。

「マナ石はね、確かに自分でコントロールできない部分のマナを上手くせき止めてくれるわ。でもその力は人体と必ずしも相性がいいわけじゃないのよ。逆に消耗してマナ石に命を吸い取られてしまうことだって考えられる。」

「おい、テイセラ。それは本当か!?」

「ええ、だからマナ石によってコントロールできていたように見えた力は、実は命ごと吸い取られていたケースもあるの。ジェイド君、心臓とマナ石を近づけるのは危険だわ。ちよつと貸してちょうだい。」

テイセラは僕の首からマナ石をはずすとじつくりと観察を始めた。

「不思議。全然、融合も反発もしてないわ。どういうことなの？」

ジェイド君、どこか具合は悪くない? この石をはずしたら体が軽くなったとか、そういうのもないかしら?」

「ない、ないよ。大丈夫。…あ、あのさ、関係ないかもしれないんだけど気になったことがあって…。」

僕はあの手帳をテイセラに見せた。

「これ、父上にもらった手帳なんだけど、もらった時は黒くて、模様も何もなかったんだ。」

テイセラは手帳を受け取り、リークと同じ反応をした。

「あら、何か書いてあるわ。ウィクス? 違うわね、いえ、もしかしてこの発音の仕方は…。」

ふつぷつと何かを呟いた後、はっと思い出したように叫んだ。

「リーク! カウンターの上にある本、持ってきて! それからそっちに置いてある資料も!」

「はいよ。これか?」

頷くテイセラに手渡された本は、言語についてかかれていた。ちよつと手帳に書かれていた文字と似たような。それからリークが探してきた資料は家紋や貴族の分家などについて書かれている。「ウィクスの旧字、これは…。聞いたことないわね。でもこれに照らし合わせて読むとウィ아트ニクス、そう読めるわ。」

ウィ아트ニクス。耳にした事のあるその響き。

「おい! ウィ아트ニクスついたらこの国の名前じゃないか!? どういうことなんだ!」

慌てるリークの声にテイセラの落ち着いた涼しげな声。対照的な二人。しかし誰よりも僕が一番混乱していたに違いない。

何なんだ。父上にもらったこの手帳は何を僕に訴えているのか。「この資料を見れば分かるわ。貴族の分家ならなおのこと、家紋がないわけがないもの。」

家紋? 家紋の話なら昔、記憶もおぼろげな小さい頃父上に聞いた気がする。うちの家紋は紫色の花をモチーフにした…

「アジサイ。アジアイよ。ほら、このページ見て。この手帳の表紙の模様と比べてみると…。」

そのページには現在の皇帝、カートよりも高位を表す家系が記されていた。

「ち、違う、だって僕の姓はランチェスターだ。」

確かに普通よりも少しばかり裕福な家庭だったかもしれない。でも、そんな皇帝より高位の家紋? 貴族? ありえない。

「参考までにあなたの属性を聞いてもいいかしら?」

そういえばここに来る道中でそんなような話をラグラジュとし

たかもしれない……。

「えっと確か……。氷結とかって聞いた。」

「ええ、思ったとおりよ。ほぼ確定で良さそうね。属性は血に混じり伝承される。魔法使用とかの血統って属性や魔法の素質とかでも決められるのよ。マナで構成された命。血の濃さともイコールなら納得できなくもない話でしょう？」

「だんだん目の前がぼんやりする。思考回路が状況についていけない。僕は、一体……。」

「何よりこの手帳。お父上からもらったのでしょう？でも変ね。どうしてあなたの家では姓を変え、血を隠していたのかしら。」

「ここ最近、氷結の属性を持つ者は現れていないとテイセラは付け加えた。」

「家系ぐるみで魔法を隠していたということかしら？ジェイド君、これはもしかしたらすごく大変なことになってしまったかもしれない。」

「もう十分大変なことになってるよ！なんて大きな声では言えないが、僕の頭の中は相当な混乱に陥っていた。」

「しかし、そう言われてみると思い当たらない節が全然ないわけでもない。幼い頃父上に言われた言葉。学校に行かなかったこと。全寮制の学校に行った妹。意識しなくてもコントロールされる氷の魔法。」

「思い返してみれば父上は魔法を隠しながら、しかしこっそりと教えてくれたのかもしれない。妹は何という学校に行っていたんだっけ。もし妹が僕より先にマナをコントロールし、魔法を知っていたとしたら。」

でも考えれば考えるほどに分からなくなる。魔法、それが何だというのだろうか。まだ僕が、ランチエスター家が氷結を伝承する家系と決まったわけでもないのに。

「アイツ、気付いているのかしら。気付いてないわけないわね。そしてあなたを利用する気であるのかしら……。」

しんとした図書館にバタバタと足音が近づいてくる。息を切らせながら入ってきたのは少年だった。

「アーデイン？どうしたんだ？」

「やば、い、だ、ダブリスが、はあ、ダブリスが……はあっ、ヴィアトニクスとせんそう、戦争するって、っ！はあはあ。」

「どういうこと!?アーデイン、詳しく教えて頂戴！」

「お、おれだってわかんねえっ、よ、はあっただ、聞いた話ではこの学び舎とダクスを盾にして戦うんだって、ヴィアトニクスが、ダブリスと戦争を、だから……。」

「町を盾に!?そんなの無理よ、この町は武装してないわ！」

僕は自分でも嫌悪したくなる冷たい思考回路で考えていた。

戦争。

可能性を挙げるなら、

「いや、ある。ひとつ。」

僕に三人の視線が突き刺さった。緊張と不安で自分が何を言っているのかそれさえも分からなくなる。

「朝礼で儀式をやっているそうじゃないか。その碑にもしもエネルギーを蓄える役割があったとしたら。」

だが、ここで一つ疑問が上がる。本当に当てるのだろうか、

その碑は。もつと確かなものがないと、盾とするには心もとないんじゃないか？そんなこの町が戦うには、防衛するには。

「ごめん、やっぱり訂正。可能性は一つじゃなかった」

この学び舎にいる魔法使いたちが、魔法を使って戦うことだ。喋った声は、情けなく震えた。

*

大食堂という名だけあり、とてつもなく広いそこは、白を基調としたシンプルで綺麗な場所だった。そこには並べられたテーブルと椅子一杯に人が着席しており、ラグラジュさんは一番前で話していた。

テイセラの読み通り、ラグラジュさんの話はダブリスとの戦争についてだった。なんでも、こちらの攻撃を受けて、死者が十三名でたとかで怒り心頭らしい。どうせでっち上げだろうが。実際のところは海が欲しいんだろう。

「ルシエルともアクロークスとも対立中であるダブリスは、リベトロ越えを選択しました。よって、この町が最初の砦となること、皇帝の判断により決定されました」

更に、とラグラジュさんは続けた。

「皇帝は、我々魔法使い達に先陣をきって戦うよう仰いました」

先程まで顔を曇めながらも一応は静かに聞いていた者達がざわめき、息巻く言葉があちこちから上がった。どうして俺たちがそんなことをしなきゃいけないんだ！そんなこといわれたって……！私たちは人を傷つけるためにここで学んでいるんじゃないのよ！

大人たちは戦わないのか？何で僕らが！

その声はどんどん大きくなる。それに比例して、ラグラジュさんの纏う空気もどんどん冷たくなっていった。

「静かにしろ」

彼はらしからぬ口調で言った。空気だけでなく、声も冷たい。異変を感じて、全員静まりかえった。

「いいかい？君らがここで戦いを放棄すれば、今度は君達の大切な家族が犠牲になるだろう。それでもいいなら、さっさと逃げればいい」

大食堂内は依然静まり返っている。ラグラジュさんは少し間をおいて、目を伏せた。

「確かに、私達は誰かを傷つけない為に魔法を教えた。しかし、今回君達が戦うことは本当に誰かを傷つけるだけか？君達が戦うことによって、大切な人を傷つけずに済むんじゃないか？」

みな、ぐうの音も出なかった。その通りだと思った。僕らが戦わなければ、他の誰かが犠牲になっていく。

「ふざけないでッ!!よくもそんなこと言えたわね、この人殺し！」

静寂を切り裂いたのは、テイセラの悲鳴のような叫び声だった。

この場にいる全員が彼女を凝視していた。

「……どういふことかな？」

「とほけないで！あなた以外にいないのよ、姉さんを殺せた奴なんて！」

テイセラはラグラジュさんのところへとずかずか詰めよった。

「おい、逃げる！」

誰かがそう叫ぶのを合図に、全員がテイセラから離れるように

して大食堂の奥へと走りだした。僕はよくわからないままみんなに合わせて走る。

彼女はラグラジュさんの首へと手をかけた。

「馬鹿、急げ！」

リークに手を引つ掴まれて、だだっ広い大食堂の奥へと辿り着く。頭を押さえつけられてしゃがむ体勢になった。

瞬刻、ピカッと光ったかと同時に、発砲音にも似た大きな弾く音が食堂内に鳴り響いた。一瞬時が止まったような感覚がした。

「どうなったんだ……？」

なんだか焦げ臭い。しゃがんだ体をゆっくりと起き上がらせて、テイセラ達がいる位置を見た。どうやったのか、彼女の周りが広く焼け焦げている。ラグラジュさんというと服は焼け焦げて、ところどころ肌がむき出しになっていた。しかし、傷は負っていないようだ。

「はあ、こんなところで魔法を使つてはいけませんよ」

「黙れ!!」

テイセラの叫び声が、だんだん金切り声に近くなってきた。

一旦落ち着こうとしたのだろう、テイセラは深呼吸をした。

「私と同じ雷電属性の魔法による殺害だったんだから。雷電属性は当時私たち姉妹のみ。私は暴走するから、絶対に洞窟に行くことはないの。でも、あなたならできるものね。姉さんから魔法による攻撃さえ受ければ」

「私は殺してなどいない」

「じゃあ誰に殺されたのよ？なんで姉さんが死ぬのよ!?嘘つかないでー」

「……連れて行け」

「姉さんを、姉さんを返せ！ラグラジュウウウウウ!!」

ラグラジュさんが従者を呼ぶと、二人の従者が颯爽と現れた。暴れるテイセラは気絶し（従者の魔法によるものだろう）、テイセラはどこかへ連れ去られてしまった。

ラグラジュさんはいつもの調子で、全体に明日以降の指示を出してお聞き。そのままこの大食堂で朝食を取って各自部屋へと戻っていった——僕を除いて。

最初の頃は、それこそ頼っていたがあれだけの話を聞かされておいて、不信感を抱かないはずがなかった。そんななかで、マンツーマンとは。

「どうですか、調子の方は。来てばかりでこんなこと聞くのもおかしいかもしれませんが、これからやっていけそうですか？」

「ええ、まあなんとか」

「……なりそうって返事には聞こえませんか」

僕は隠すように笑って、はぐらかした。僕は早くこの一対一状態から抜け出したい。この不安から解放されたい。僕はラグラジュさんをせつついた。

「で、僕に何か用でしょうか」

「君はまだここにきて間もないでしょう？だから、魔法の扱い方が雑になってしまえますが、教えておかなければ君が困ってしまいますからね」

「それだけですか？」

「君からは何かありませんか？」

ありません、と答えるつもりでいたが、一つだけ。

「あなたはその、テイセラのお姉さんを……」

「あなたはどう思いますか？私が殺つたと思えますか？」

視線を合わせないように下を向けていた顔を上げた。不思議な表情だった。諦めているように見えるし、悲しそうにも見える。この人はどうしてかとても不安そうだった。数日しか時を共にしていない彼だが、とてもらしくないように感じた。テイセラにははつきりと殺していないと言っていたのに。何故僕にはこんな風に聞かせるのだろうか。

「どうとも。僕にはあなたがどんな答えを望んでいるのかもわかりません」

「……私は殺していませんよ」

「そうですか」

そんなそつけない返事しか返さなかった。

僕はふつと窓の外を見た。綺麗な青空である。

「で、私から教わる気はありますか？」

「まあ、できないと困りますから」

ま、何かあったら自分のマナが守ってくれるだろう。

「では、はじめに」

「ちょ、ちょっと待ってください。ここでやるんですか？」

実習場があるのに。

「ああ。テイセラ君が暴走したおかげで、改修工事をしなくてはならなくなりましたから。いいんですよ」

そういうものだろうか。駄目な気がするが、彼が言うのだからまあ、いいのだろう。

「ではまず、魔法を出すことから。まず目を瞑って、周囲にマナがあることをイメージしてください。それを自分の中へと集めてください。そうすると、自分の中に集めるような力を感じませんか？」

「集めるって、どうやって？」

「それもイメージですよ」

僕は言われた通り、目を瞑ってイメージしてみた。臉の裏は藍色に見えた。周囲に漂うマナ。それを自分の、えつと中に集める。本当にこんなことでいいのかよくわからないが、確かに溢れそうな力を感じることができたから正しいはずだ。

「右手を前に出して。イメージして、溢れそうな力の流れを右手に向かわせてください」

力の流れが命を得た水のように動きまわっている。それを、右手に。

周囲の温度がさつと冷たくなった。

恐る恐る目を開けると、水の波がラグラジュさんの前まで迫っていた。しかし、そこで波は止まっている。

「あれ？どうして止まってるんだ？」

「ああ、それは私の属性が遷移だからですよ。魔法を吸収したり、それを放出したりできるんです。限界はありますけど」

なるほど、だからこの人はテイセラの魔法を受けても平気だったのか。

「では次、魔法の解き方です」

「魔法って解けるんですか？」

こんな魔法なもんだから、てつきりやりっぱなしなのかと。

「種類にもよりますが、あなたの持つ水結は自らの生み出したもののみ解凍することができます」

今度は、魔法ではなく、マナそのものをぶつけるらしい。先ほどの要領で集めたマナを氷に向かつて放つと、氷がアジサイの模様を浮かべながら緑色に光り、赤、紫へと色を変えながら融けていった。融け切ると、アジサイの模様は消え、光ることもなくなつた。

これ、どこかで見たよな。

「本当はもっと細かく丁寧に教えたかったですかね」

「いえ。十分です」

なんだったか……

「これ、どこで見たんだっけ」

「え？」

——そうだ、手帳だ！

僕はポケットから手帳を取り出した。今朝まで赤だった手帳は今度は紫色になっている。模様はアジサイのままだ。

「失礼！」

僕が何かを言う前に、ラグラジュさんは僕の手から手帳をひっそりと取り、中身をペラペラと捲っていく。僕は、文句も言えず突っ立っていた。

中身は十分確認したのか、何も言わず僕に手帳を返しどこかへ行ってしまった。

僕は紫色になった手帳を捲った。最初の五ページくらい例の旧字体が延々と並んでいる。しかし、最後のページに見慣れた字があった。

「父上の、字？」

内容はこうであった。

【ジェイド、我が友人を止めてくれ。もし、止められそうになれば、せめて人の形であるうちに死なせてやってくれ。頼む】
「死なせてやれ……！父上は一体何を考えたんだ？」

僕は図書館に向かい、例の資料とにらめっこしながら旧字体の解読を進めた。

*

ラグラジュは急ぎ足で自室へと向かった。まさか、ランチェスターが渡した手帳があつたのだとは。それに、彼が初めて触れた時だつてあの手帳はなんの反応も示さなかつたじゃないか。まさか、魔法を進化させたのか？

途中すれ違った従者にジェイドの監視を命じる。ダブリスは未だに狙っているのだから。

自室からカンテラとマナ石を持てるだけ持ち、私は洞窟へと向かった。

*

今からどれだけ前になるのだろう。二十年も前だろうか。私の姓がヴィアトニクスからラグラジュへと変わった時であり、この字び舎へやってきた時でもある。

歴史なんかが好きだった私は、よく図書館に足繁く通っていた。

ある日、いつものように図書館に足を運び、本を借りようと歴史分野コーナーへと向かった。

「あれ、ない」

読みかけたのに、残念。「ヴェアトニクスと貴族の歴史」とか私以外に借りる人いたんだ。仕方がない、他のを借りよう。

私は未だに手をつけていない本教冊をもって、テーブルへと腰かけた——ら、目の前に座っている人が「ヴェアトニクスと貴族の歴史」を持っていた。何やら調べ物をしているらしかった。

「あー、その本次借りたいんですけど、返却はいつ頃になりませんか？」

知らない奴に突然声をかけられた青年は、さっと顔を上げ、開口一番にこういった。

「……上から二番目のその本、全然面白くないぞ。しかも、情報間違ってるから、それを借りることはお勧めしないな、皇帝子息」

「は？」

突然声掛けたこっちも失礼だったかもしれない。でも、この人の発言より失礼だったとは思わない。勘当されてさまあみろとでもいいたいのか、この人。こっちはなりたくて魔法使いになつたわけじゃないんだぞ！

「ランチェスター」

「はい？ランチェ、ランチェスター!?」

「図書館はお静かにご利用くださいませ、皇帝子息？」

いや、だってランチェスターって……。クレメンズ家に、危険因子だからって勘当をされた人じゃないか！

あ、私とある意味同じか。

「失礼。で、あなたはインクの出ないペンで一体何を書いているんですか？」

アジサイがあしらわれたカバーを、かけた手帳は白紙のまままだ。「未来の流れてこないものに何をしようとか変化がないのは当たり前だ」

彼が言うに、時の流れを水結止めてしまえば、いくら何をしようとその未来が流れてくることは時を止めている限りはあり得ない。すなわち変化しないのだそうだ。

「で、あなたの今していることは何か意味があるんですか？」
ちよいちよいと手で招かれ耳を近付ける。

危険因子が突然クレメンズについて調べだした、なんて知れたら何されるかわからないからな。証拠はない方がいいだろ？

「よし、今日からお前も共犯者だ。よろしくな、皇帝子息」
「……ラグラジュです。もう皇帝子息じゃありませんから」

その日以降、十歳近く年上の彼には、いいパシリ扱いを受けていた。あと、歴史の勉強を教えたり。

そんな彼が誘ったのは図書館ではなく、洞窟だった。そこらじゅうにマナ石が剥き出しになっている。奥に進むにつれて、青い光に襲われて意識をなくし、気付いたら、凍傷だらけのランチェスターがいた。どうやら何も吸収していない状態で軽い暴走を起こして、周りのマナ石が私の属性と同じ性質を持ってしまった……らしい。

記憶がないので何とも言えない。彼は僕にいくつかマナ石をくれた。身につけていろ、ということらしかった。

そして彼が、学び舎を発つ三カ月前のこと。

「なんですか、その巨大な石は」

「何って、お前が暴走してできた、魔法を吸収しちまう石だよ」
「で？」

「なんでゴイツ理解してないんだみたいな顔やめてください。」

「ダブリスが魔法使いを狙ってる」

「え？」

「こいつには俺が強力な魔法をかけておいた。ちよつとやそつとじゃ、時は流れない」

「お前ずつとここにいるんだらう？だったら、こいつに魔法のエネルギーを蓄えておけば、何かあった時に役に立つかもしれない」
「そういって、彼は現在の碑を残していった。」

しかし、のちにこの石の新たな性質によって、教え子が命を落とすこととなったのだから、今ではとても大変なことをしてしまつたと思つている。

そんなランチェスターから連絡が入つたのは、数日前。皇帝が魔法使い兵士化計画を打ち出してから十年たち、ランチェスター家の水結能力は非常に戦力になると睨んでいた皇帝は、私にジェイド君を学び舎に連れてくるよう命令した。

こちらから連絡しようと思つていたところだったので、驚きだつた。

「お久しぶりです、ランチェスター殿」

「ああ、そうだな」

時が流れたせいだろう、私も彼も別人のようだった。話し方もだいぶ変わつてしまつていた。

「で、ジェイド君がダブリスの使者によって誘拐されかけた、というわけですか」

「おかげで部屋が水漬けたがな」

「水漬け？」

ランチェスターの見解では、誰かがジェイド君の部屋にガス物を仕込んでいたせいで能力を発動させた結果あつた、とのことだ。

「使用人の中に使者がまぎれている可能性が高い。だから、学び舎で預かつてほしい」

「なるほど。こちらもお上からジェイド君を連れてくるよう言われていましたから」

「お上？どういふことだ」

魔法使い兵士化計画は彼が出ていった後に打ちだされた政策だつたから、彼が知っているはずがないのだ。計画について教えると、それはそれは激高した。

「ふざけるな！魔法を使えるものを兵士にするなど……！ましてや、学び舎にいるのは子供ばかりなんだぞ！いい加減にしろ！」

「そうはいっても、この計画を打ち出したのは皇帝。つまり、これはヴァイアトニクス皇帝の意向でもあるのですよ？」

思いつきり眉間に皺を寄せる姿は、酷く恐ろしかった。気持ちにはわかりませんが。

「心配なさらずとも、私が何とかします」

「勝手にすればいい」

*

家の者が怪しいとのことでしたから、万一を考え物は何も持たせずに出発する予定でした。まさかあの人が渡した手帳が、ね。

「いやあ、彼を洞窟に連れていったのは正解でしたね。案の定軽い暴走を起こし、おかげで、氷結の魔法を手に入れることができましたから。おまけに、一息に魔法を解く呪文も」

洞窟の奥にある青い光——マナの塊にマナ石を投げ込んだ。大量にマナが吸収され、石は星のように光り輝いている。

外に出ると、既に夜になっていた。奇襲をかけるにはびつたりだ。「大人は子供にとって、ヒーローのような存在であるべきかもしれません。しかし、子供にとって私という大人は悪役でしかないんですよ」

だからこそ、できることがあるわけなんです。あなたには結局お見通しでしたね、ランチェスター。

*

最初の三ページ余りはびつしりと例の、皇帝より上の地位の家について書かれていた。父上についても。少し皇帝家についても触れられていた。デルフィンウムをモチーフにした紋章は有名だ。花言葉は、あなたは幸福を振りまく、だったか。残り一ページには不思議な呪文が書かれていた。

「汝は冷酷であらねばならぬ、汝は常に変化しなければならぬ、

汝は高慢であるべきである、それが我々であるための必要である。アジサイに掲げよ、ひたむきな愛を。つてなにこれ」

言い終わった途端、手帳は元の黒い革のものへと戻っていた。時が、進んだのだろうか？

「あれ、最後のページが、破り取られてる？」

破った記憶はないし、破られた記憶も。

「あ、もしかして時が止まっている間に破ったら……!？」

でも、ラグラジュさんが何故？もしかして、友人って。

その時、外から昼間のような光がさしたかと思うと、ドカンというような轟音が聞こえた。外を見ると、リベロト山の中腹付近で何発も起きていた。まさか、ダブルス軍が？でもなんであんな位置から。

閃光はどんどん下降し——。

「な、民家が——」

遠くは閃光と焼けた木や建物からでる炎や煙で覆われている。

他の人たちもこの騒ぎに気付いたようで、学び舎内でガヤガヤと野次馬している。

僕はどうしても行かなくてはならない気がして、図書館を駆けだした。

僕以外の何人かも、外に向かって走っている。外に出た。地面に白い紙クズ。

「あれは、もしかして」

くしゃくしゃにされた紙は、父上の頼み事に加え、もう一つ。碑についてだった。

「エネルギーを吸収して放出、やっぱりあれは！」

すぐ近くで轟音が鳴った。その方向を見るが、土煙りが舞っていて見えない。一瞬光つたのに反応して、僕の目の前に水の壁ができた。他に外へ出ていた者は吹き飛ばされて、意識を失っている。僕なら多分、いける。

攻撃してきている人物は誰だ？

強い風が吹いて、土煙りが晴れる。

「ラグラジュさん、なのか？」

「……」

無視ですか。いや、答えられないのか。理性がなく、暴走しているようだ。肌は真っ黒になり、歯は剥き出し、白眼になっている。もはや、人間には見えない。

彼から幾つもの魔法が放たれる。炎を吹き、雷を放ち、風を巻き起こし、水を湧きあがらせ、最後に地面から奇怪な植物が生えだした。

もはや、この場所は、学び舎の原形をとどめていない。地獄だ。「ラグラジュ、ためえやつぱりダブルス側だったのか！おめえら、やっちまうぞ!!」

士気の高まった若い魔法使いたちは、ラグラジュに一斉攻撃を仕掛けた。しかし、どれだけくらくらおうとラグラジュは立ち続けた。しかし、その分隙が生まれた。僕は一気に距離を詰め、両手に力の流れを向かわせた。

「父上、すみません。頼みごと、果たすことができませんでした」
ラグラジュであった黒い化け物は、泣いているようにも笑っているようにも見えた。

翌日。ダブリス軍が侵攻してくることはなかった。昨夜の襲撃で、全滅してしまったらしい。山向こうに控えていた軍ですら、だ。結局この戦争は一年と半年続き、部が悪いと感じたダブリスは、停戦を申し込んできた。もちろん、こちらにとって好条件で取りつけた。ラグラジュがいなくなった今、新たな管理人がここにいる。僕は今、少しの休みをもらって、実家に帰ってきていた。今日は、妹のアンナと二人でのんびりお茶をしている。

「アンナ、学校の方は楽しい？」

「ええ、お兄様。私すごく楽しいわ。周りの方はすごく優しくしてくださいますし、興味深いことも多く学べます。私幸せよ、お兄様」

「そうか。アンナ」

「なんでしよう、お兄様」

一口お茶を飲んで、口内を潤す。

「僕の学校にはな、とても嫌われている大人がいてな。その人に、散々な目にあわされた人ばかりでさ。でもな、それが誤解だって知っちゃったんだ。結局その人は誤解されたまま、悪人として死んじやったんだよ。みんなを守ったのに。アンナ、お前にはわかるかい？誤解されながら、嫌われながらもそれを守ろうとする人の気持ち。：僕には残念だけど、その気持ちははかれななんだ」
「わかりませんわ。私はその人ではありませんか。ただ、お兄様はどこか後悔しているように思えます。時間は止めることはできません、避けることはできない。私達だからこそ、一刻一刻を大切に刻まねばなりません」

僕はもう一口、お茶を飲んだ。

「そうだな、後悔しないように生きなくてはね。ラグラジュは、今、僕の実家で作った墓地に眠っている。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

それは真に幸福を呼ぶか。

とある田舎にある山道の脇にクローバーが群生している。今は、白くて小さい花の球体がちらほらと咲いている。季節は夏でも、風がよく通り、ここは温度も心地よく温かい。

.....?

おい、そこのお前さん！

おお！ そう、あんただよあんた。ちよつとこつち来な。

俺が誰かって？

誰って言ったってねえ、俺に名はないよ。しいていうのであれば、クローバーの精霊さん、とでもいったところか。精霊と聞くと、可愛らしい羽が生えた小さい女の子だとか男の子だとかを想像するだろうが、俺はそんな可愛いもんじゃねえ。見た通り人間によくいるただのおっさんだ。普段やっっていることといえば、こちらに生えているクローバーの成長管理ぐらいのもんで、ほとんどぼーっとしている。人間見たく忙しい身じゃあない。

それに、さつきもいった通り、精霊みたいなもんだからよ、普通は人間なんかは俺の姿なんて見えやしねえんだよ。今までの俺の常識じゃあな。

飛騨高山高等学校

井 戸 千 菜 美

でよ、今日も今日とてヤマガラスと話したり、この前解ったばかりなクロアゲハの嬢ちゃんにほぼ一方的な話を聞かされていたりしたわけだ。若い子っていうのは、よく分らないね。そもそもにおいて、言葉がわからねえ。そして、テンションがものすごくたっかいんだよ。おっさん疲れちまうってえの。まあ、どの時代も若い子ってやつはそうなんだけどな。

まあ、それはいい。そうしたらよ、あんたが頭にはてなマーク浮かべながらこつちをみてるじゃねえか！ この俺を、だ！ おまけに、呼んだらこつちへ来たしよ。いやあ、驚いたね。こんなのは初めてだよ。

.....ああ、いや、悪いね、ずーつとこつちばっかりがしゃべつちまつて。

んー、不思議だねえ。あんたの顔はこらじゃ見ないし、他の連中もあんたみたいなのがあるなんて話はないんだが、どうしてか知っているような、知らないような...

あ、そうそう、あなたはここで何してんだい？ 散歩か？

四つ葉を探してる？ ……へえ、そうかい。

いやあ、時々そうやって人間が四つ葉を探しに来るんだよ。どれくらい前だったかな、あんたくらいの若い男が毎日毎日探しに来たもんだ。懐かしいね。

え？ どうしたんだい。その話を詳しく聞かせてくれ？ 別いいけどよ、どうしてそんな話を聞きたがるんだい。

……へいへい。全く、人間はせっかちななあ。そんな急かさなかつたってちやうんと話すよ。

俺にとつても、この話は思い出深いもんでね、良くも悪くも今でも鮮明に覚えてるんだ。

あの日も、今日みたいな心地いい温かさで、空も綺麗な青色だったのよ。

*

吹き渡る風が、山の木々や草花を揺らす。暑過ぎず、寒過ぎず。ここは本当に居心地がいい。

俺はいつものごとくぼーっとしていた。その日はクローバー群

の上に寝そべって——といっても、俺は実体がないからな。寝そべるといっても格好だけの話だ——いたわけなんだが、男がとほととこつちに向かつて歩いてきていてな。背格好も普通だったが、ずーっと下を見ながら歩いてた。こちらにいねえ男だったから、そいつのこと見てたらよ、俺の前で足を止めたんだ。その時ふつとそいつの顔を見たら、まるでこの世には絶望しかないみたいな顔しててな。こつちまで気分が下がっちゃうまいそうだった。そいつは屈んで何かを探し始めたから、俺は起き上がってそこをどいたんだ。

ぶつくさいいながら、クローバーのあたりをじつと見つめて、お目当てのものを見つけたのか少し顔が和らいでね。それでも、苦しそうな顔ではあったんだが。

そいつの手元を見てみると、俺のところの四つ葉があつてよ。それをそつと摘むとさつさとどこかにいっちまったのさ。

さつきも言ったとおり、人間はよく四つ葉のクローバーを探しにくるからよ。ほら、よくいうじゃねえか、四つ葉のクローバーは幸せを呼ぶつてよ。もつというつと、四つ葉のクローバーの小葉は、それぞれ希望・誠実・愛情・幸運の象徴なんだと。

幸せを呼ぶのがクローバーだつていうのに、こんな暗い顔をされちゃ、こつちも自信をなくしちまいそうだったよ。なんていつたつて、四つ葉のクローバーを見つけた人間つてのは、驚いたり、感心したりもするが、大抵が嬉しそうに笑うんだ。

おつと、話がそれたな、悪い悪い。

で、その日はそいつのことも別に気にしちやあいなかった。

次の日の夕方ごろだ。綺麗な夕日だったさ。雲もピンクや橙、茜色に塗られていて、俺はその夕焼けに見とれていたんだ。

ずーっと見ていたらよ、誰かがとぼとぼ近づいて来るんだよ。顔が陰になつていて、初めはよく分からなかったんだ。よーく目を凝らしてみようと、昨日来た男でさ、またこっちに向かっていたから、俺はまたクローバーを掴みに来たんだろなと思つて、その男を観察していたんだ。

案の定、その男は膝を地面につけて俺のクローバーから四つ葉を探し始めたのよ。また、切羽詰つたような、絶望感漂う顔をしてな。

十分ぐらいたつたかね、男は手に二つほど四つ葉を持って帰つていったさ。昨日と違うことといえば、昨日は歩いて帰つていったのに対して、その日は走つて帰つていったことだったな。

ま、おかげで途中で一つ落とすとしていったけど。すずめが拾つてどこかに持って行つちまったがな。

二日も連続で来るなんざちよつとおかしな男だな、これが二日目時点での男に対する認識だった。

*

あの日から男は毎日夕方になると、俺のところに来て四つ葉をつんでいくようになった。相も変わらず暗い顔をしたままよ。

ある日、成長管理の段階で俺が四つ葉を全然作ってなくて、一

つも生えてなかったのよ。

その日も男は来た。

聞こえやしねえとは分かつていたが、一応いつてやつたんだ。

「今日は四つ葉はねえぞ」

もちろん男は無反応。あんたみたいな希少なやつじゃなかったからなあ。ある意味で希少つちや希少だが。

男もいつくら探しても四つ葉が見つからなくて、ようやくないことに気付いたのさ。見る見るうちの顔が真っ青になって、さすがの俺も心配になるくらいだった。どうしよう、どうしよう」つてヒステリックになりかけたときだ。

あんたはこの男がどうしたと思う？

諦めて帰つた？ ヒステリックになつてる奴がかい？

残念だが、違う。

実はね、一つだけ五つ葉があつたのよ。

まさか？ そのまさかさ。

五つ葉を見つけた男は、五つある葉のうち、一つをちぎって持つて帰つたのよ。五つ葉ついたら不幸を呼ぶってジンクスがあるが、経済的繁栄とか財運とかかっていう意味があるんだぜ？ なかなかいい意味を持つてるだろう。

そのまま持つて帰つたつてよかつただろうに。

俺は思わず笑つちまいそうになったが、それと同時にある疑問が浮かんだのさ。

どうしてこの男は、こんな必死になつて四つ葉を探しに来るん

だろうか。

この時の俺にはまったく分からなかった。予想なんて立てられやしねえ。手掛りだって何一つないし、男を追いかけることも話しかけることも出来ないんだからな。

その答えを知るのもう少し先だ。

かんかん照りの暑い日も、叩きつけるような大雨の日も、毎日四つ葉をつんで帰っていった。

でよ、日に日にその男の暗い顔も、段々明るくなってきてな。三ヶ月ほどたった頃には少し笑うようになったのよ。

四つ葉のクローバーは幸せを呼ぶ、なんて人間が勝手に作った迷信だが、その頃の俺は人間の考えるクローバーらしく、この男を幸せにしてやれるような気がして嬉しかったのさ。

ようするに、少し気にかけるようになったのよ。

だからよ、少しだけ生やす四つ葉の数も増やしてやったりよ、でんとう虫に協力してもらって、四つ葉の位置を教えてやったりな。

その頃気付いたんだが、いつつもその男が来ると、一緒にすずめの嬢ちゃんが来てたっけな。男が走って帰ったとき、一本落としたのをすずめが拾っていったって話しただろう？ そのすずめさ。

「おい、すずめの嬢ちゃん。あんたも四つ葉が好きなのかい？」

「別に。それほどでもないわ」

「……へい、そうかい」

男のほうは気付いてなかったみたいだがな。

*

また数日、冬になって、さすがに男も来なくなつてよ。俺のほうも、一旦寝ててね。

春になった頃、また男が来るだろうな、と思つていくつかを四つ葉に成長するように管理して待つてたんだ。

でもよ、いくら待つても来ないんだよ。

放つて置けばいい話なんだが、俺もあいつが気にかかつてたからな。

「はあ、このままじゃあ四つ葉も五つ葉になつちまう」

仕方ない、諦めようと思つたんだが、タイミンクよくカミキリムシが通りかかつてね。

「おい、カミキリムシや。ちょうどいいところに通りかかった」

「ん？ どうしたんだい、クローバーのおやつさん。俺になにか用か？」

「そこらに四つ葉が映えてるだろう。アレを切つてどこかに保存しておいて欲しいんだが」

「お安い御用さ！ でもなんで、そんなことするんだ」

「なんでだろうな。俺もおかしくて仕方ねえや」

カミキリムシはそれ以上は聞かずに、あるだけの四つ葉を切つて、どこかに運んでいった。

そこから一ヶ月。どれだけ待っても、その男はもう現れなかった。それから俺は、いつか現れるんじゃないか、そう思って四つ葉を切ってもらっては保存し続けた。

*

そこからまた、何ヶ月ぐらいだろうな、二ヶ月と少しくらいか。俺のところに、あのすずめの嬢ちゃんがやってきたのよ。

俺はすぐに訊いたさ。

「なあ、嬢ちゃん。あの男はどうしてるんだい？」

「あなた、何も知らないの!？」

嬢ちゃんは、どこか悲痛そうな顔に驚きの色をのせていった。

「知らないね。何かあったのかい？」

嬢ちゃんは最初の頃の男みたいに、顔に影を落としながら教えてくれた。

その男には恋人がいたこと。

その男の恋人が病にかかって病院に入院していたこと。

そして、その恋人が死んだこと。

四つ葉のクローバーをつんでいくのは、ある種の願掛けのようなものであったこと。

今、男がすっかり憔悴しきっていること。

「彼女がかかった病って言うのがね、今の研究段階では治療方法がまったく分かっていないものだったの。それに身ごもっていた

から手術だって難しかった。入院したときの彼女の余命は三ヶ月」「三ヶ月？ それはおかしい。男が俺のところに来た日数はゆうに三ヶ月を超えていた」

「そうよ。だって、彼女は三ヶ月以上生きたんだもの。その頃になつてようやく、あの人も笑うようになったけど」

俺はただただ呆然としていた。

何も知らないのは当然だ。俺は男の名も知らない。男が何かを語ることは一度もなかったんだからな。

俺が何に一番絶望したって、俺はやっぱり所詮はただの植物・クローバーで、幸せなんて運んでやれない、ってことに気付いたことさ。ただの気休め程度のもんだってことだ。そりゃ、当然の話だ。人間が作ったただの迷信なんだからな。でもよ、そいつが顔を明るくして帰っていく様を見て、やっぱり俺は嬉しかったんだぜ？ ただの迷信じゃない、本当に俺は誰かを幸せにできるって。それが、これじゃあな。全く、笑っちゃおうよ。

それと、もう一つ。俺は別に、男の恋人の病気を治すことが出来なかったことに負い目は感じていなかった。だって、俺は医者でもその恋人でもないんだから、どうしようもない。

俺はさつき、男のことを気にかけている、なんていつたが、本当はこれっぽっちも気にかけてなんかいなかったんじゃないか。だってそうだろう？ そうしたら、あの時浮かんだ疑問について、もっと深く考えてみようとしたはずだ。

それは結局ただの建前で、俺は、自分が誰かを幸せにしていると

いうことに、勝手に満足していたんじゃないか。

はつきりそうだといいねえが、逆にはつきりそうではないと否定も出来ねえ。

そう思ったら、自分自身に吐き気すら感じられたね。引け目を感じているせいで、お嬢ちゃんの目なんてまともに見れそうになかったよ。

「ところで、この四つ葉貰っていいってもいい？」

「え？ 構わねえが、なんだってそんなもん持って行くんだい？」
ただ葉っぱが四つあるだけの、なんの意味もないもんを。

「人間の真似事」

「真似事って……嬢ちゃん泣いてるのかい」

「すずめの嬢ちゃんは何も言わずにそばを向いた。

「雀の涙なんてのはごく小さいもんだらうに。あんたが泣いたってこれっぽっちの影響も意味もないぜ」

「……これも人間の真似事だって、うるさい」

「そういうと、すずめの嬢ちゃんはどこかに飛んで行っちゃった。

「はあ、どうして俺のところに来るやつってのは、みんなして暗い顔してるのかね。帰る時だって」

「何が四つ葉のクローバーは幸せを呼ぶ、だ。馬鹿みたいじゃねえか」

「その日の夕焼けは、やけに色がないように感じられたさ。なん
でなのかね。」

*

こんなもんか。少し、いや、大分自分語りが入っちゃったけど、まあ許せ。

結局、迷信は迷信でしかない。仕方のねえことだ。

おまけに、本当にその他者のためだったのかも、な。本当に情けねえ。

……そんなことない、か。

「ありがとうな、にいちちゃん。でもいいんだよ。誰かに幸福を呼ぶなんてこと、どう考えても無理な話なんだからよ。」

「どうして、にいちちゃんにそんなことが分かるんだい？ 俺自身ですら分からなかったものを、どうしてあんたが分かるんだい。」

「そもそも、あんたは実際に、その男にあったわけでもないだらうに。なんてったって、何十年も前の話だからな。」

「……そういうことだったのかい。そうかい、そうかい。」

「で、そいつは今どうしてるんだい？」

「なんだって!?」

「ああ、通りで、お前さんが真つ黒な服なんか着てるわけだ。」

「……そうか、そんな前に。そりゃ、残念だ。なんか悪いこと
聞いちゃったな。」

え？

本当にそうか？根拠は？

なるほど。俺がこうして引きずっていることが、ね。まさか、そんなこといわれるとは思わなかったよ。ありがとう。

へえ、あんたユキトっていうのかい。

どんな字書くんか？

幸せに人、ね。幸せな人になりなさいってか。良い名だな。違う？　じゃあななだい。

——幸せを呼ぶ人、か。もつと良い名だ。

おいおい、ちよつと待ちな！

その四つ葉、持っていかなくていいのかい？

どこって、あんたの足元に生えてるやつだよ、よく見な。全く、お前さんなをここにこへ来たんだよ。

あー、良かったらなんだが、そいつの三十センチくらい離れたところにもう一つあるだろう？　そいつ、親父さんに持っていてくれ。情けない俺からの頼みだ。

ありがとう。

それからよ、聞きづらいことなんだが……。

俺はよ、本当に、少しでもあいつに幸せを呼べたと思うかい？

ははっ、確かにそうだ！「幸人」なんて正にだもんなあ。

そうか。もし本当にそうなら、俺はクローバーとして誇りに思うよ。これ以上、ありがたい話はねえな。

本当、ありがとうな、にいちゃん。

親父さんによろしくいっついてくれ。
じゃあな！

END

流星号奇譚

高山市片野町

大塚浩一

音楽。うっすら照明が入るとそこは公園。一本の樹の下にベンチが一脚置いてある。上手より男が現れる。片手にスーツケースを持ち、ゆっくりゆっくり、まるでスローモーションのように歩きながらベンチのそばまで来る。そしてスーツケースを開けて一冊の詩集を取り出し、朗読しはじめる。

男 小ちやい雀が

死んだのに、

芥子は眞紅に咲いてゐる。

知らないのです

知らせずに、

こつそりそばを通りましょ。

もしもお花が

きいたなら、

すぐにしぼんでしまふから。

(「雀と芥子」金子みすゞ)

読み終えると詩集をスーツケースへ戻し、今度は一本の長いロープを取り出す。男はそのロープの片方の端に輪を作り、もう片方の端を木の枝へと投げる。枝々の間を通って戻ってきたその端を、木の幹にしばりつける。そしてベンチの座面に立ち上がる。作った輪を両手で持ち、つま先立って、輪に顔をゆっくり近づける。

そこへ、古びた大きめのバッグを下げ、老婦人が下手から現れる。ベンチに立っている男の様子をじつと見つめる。しばらくして、男は老婦人に見つめられていることに気づき、ギョッとして体を硬直させる。見つめ合う2人。しばらくの間。

老婦人 …ネコだわ。

男 えっ？

老婦人 今、ネコが鳴かなかったかしら？

男 …いや、聞こえませんでした。

老婦人 あら、そう？

男 少なくとも私には聞こえませんでした。

老婦人 残念だわ。

男 えっ？

老婦人 いえね、ウチのネコが家出をしまして、戻って来ないのよ。

男 はあ。

老婦人 ひよっとしてウチのネコじゃないかと思って。

男 そうですか。

老婦人 探してください？

男 何をですか？

老婦人 今の鳴き声の主を。

男 なぜ？

老婦人 私のネコかもしれないわ。

男 なぜ？

老婦人 怪我をしているのかもしれないじゃない。

男 なぜ、私が探さなければならぬのですか？

老婦人 ；冷たいことをおっしゃるのね。

男 初対面の私に、私とは無関係の労働をせよとおっしゃるあなたの方が冷たい。

老婦人 冷たいのね。

男 理屈だと思えますが。

老婦人 冷たい言葉を使われるのね。

男 ；そういう仕事ですから。

老婦人 探してください？

男 ；私の話、聞いてました？

老婦人 ええ。「なぜ？」と尋ねられましたね。

男 だったら：

老婦人 でも「嫌だ」とはおっしゃらなかつた。

男 ；それも理屈だと？

老婦人 白い毛に黒のブチの模様なの。だから名前はブッチ。

男 まだ引き受けたつもりは：

音楽。老婦人、よよと泣き崩れる。

老婦人

ええ、ええ、いいんですよ。どうせ先行き短い人生ですからね。こんな年寄りの願いを受け入れたところ、あなたのような若い人には何のメリットもありませんもんね。いいの、いいのよ。世知辛い国になつたものね、日本も。こんな国はもう滅びていいんじゃないかしらね。

男

(諦めたように) 分かりましたよ。

老婦人

(ケロつとして) 白い毛に紫のブチの模様なの。だから名前はブッチ。

男

黒じゃないんですか。

老婦人

黒かも。

男

どつちですか。

老婦人

どどめ色かも。

男

ふざけないでください。私、数年前に転んで頭に怪我をし、その時の影響で色を判断する力を失ってしまったの。だから紫も茶色も同じなのよ。

男 さすがに黒は見分けがつくでしょう。

老婦人 それが障がい者に対する健常者の言葉かしら。

男 色が分らないくらいで、どうこう言わないでください。

老婦人 これだから世の中、良くならないんだわ。政治家や官僚の所業をとやかく言う前に、まず自分の行いを悔い改めなければ世界は変わらない。(だんだん盛り上がってくる)隣の席にご飯を食べている人がいるのに、平気でタバコを吸いながら、政治家の偽善をするどく追及するような人は抹殺するべきなのよ!

男 ……いなくなったのはいつ頃ですか?

老婦人 半年ほど経つかしら。

男 ……もう死んだんじゃないですか?

老婦人 なんですって!

男 ネコは死の間際、姿を消すと言います。人知れずそつと死にたいんでしょう。あなたのネコもきつとそつです。

老婦人 ひどい事をおっしゃるのね。

男 可能性の問題です。

老婦人 探して下さい、下さらないの?

男 ……十分だけですよ。

老婦人 お願ひね。

男、周囲を探しはじめる。老婦人はベンチに座ったまま、「あつ

ちを探して」「こつちを探して」と指図をするだけ。男、むっとするが、あきらめたように探し続ける。時計を見る。

老婦人 時計を見ない!

男 ……はい。

老婦人、またしても男に指図を始める。今度は「もっと早く」「腕立てをしなごら」など注文をつける。男、むっとするが、あきらめたように探す。やがて十分が経過する。

男 十分経ちました。やはり見当たりませんね。あきらめて下さい。

老婦人 そうね。じゃあ、お茶にしましょうか。

老婦人、いつの間にかお茶の準備をしている。バッグからガスコンロヤカップ、お茶缶などを取り出している。

男 いや、結構です。行かなければならない場所があるので。

老婦人 どちらへ?

男 ちよつと知人の所へ。

老婦人 その前にこれ(ロープを見上げ)、片付けていってくださるんでしょうね?

男 あつ…。

男、ロープを片付ける。

男 さあ、片付けました。では、私はこれで。

老婦人 ではお茶にしましょう。

男 だから私は……

老婦人 慌てることはないんでしょ？

男 しかし……

老婦人 探してもらったお礼もしたいのよ。さあ、どうぞ。

男、あきらめて老婦人の隣に座る。

老婦人 このお茶はね、

男 はあ。

老婦人 年間に二十キロしか採れないのよ。

男 はあ。

老婦人 で、お味はどう？

男 ええ、とてもおいしいです。普段飲んでいるお茶と

少し風味が違いますが、おいしいことには変わりはない

りません。なんだか、複雑な味わいがあります。

老婦人 そう。……ありがとう。

男 えっ？

男と老婦人、だまってお茶をすすする。しばらくの間。

老婦人 この木の枝で、首なんてくくれないわよ。

男

老婦人

……！
見かけは立派なのにね、中は虫食いだらけでスカスカなのよ。あなたみたいな元氣そうで立派な中年が体重をかけたなら、それだけで折れちゃうわ。

……立派ならこんなことしません。

誰が中身のこともなんか言いました？ 体格よ、体格

……どう見ても運動不足ね。体を動かして汗をかかないから、余計なことを考えちゃうのよ。運動なさい。

たまには汗、かいてるつもりなんですがね。

脂汗や冷や汗ばかりかいても意味ないのよ。たまには死ぬほど山歩きして来なさいな。首吊ろうなんて、

これっばつちも考えなくなるわ。

男

老婦人

男

老婦人

分かったなら立ち上がって。

？（男、立ち上がる）

ほら、私の手をとって立たせて。

男、言われるがままにする。

老婦人 はい。じゃあ、ちよっと踵ってみましょう。

男 ……何を言い出すんですか。

老婦人 体に良いのよ。

男 そういう問題ではなくて……

老婦人 ああ、音楽ならあるわよ。

老婦人が指をパチンと鳴らすと音楽、高鳴る。男、老婦人の強引さに押され、しぶしぶながらも、老婦人のステップを真似しはじめる。

老婦人　　そうそう。こうやって、そう。

男と老婦人、ひとしきり踊るとふたたびベンチに腰掛ける。

老婦人　　ふう、久しぶりに踊ると疲れるわ。：：どう？

男　　そう言われると、久しぶりに体を動かしたような気がします。汗をかきました。

老婦人　　若いんだから、もうちょっとリズム感が良いかと思ったのに。

男　　そう言わないで下さいよ。

老婦人　　誰にも見られなくて良かったわね。

男と老婦人、顔を見合せて、思わず吹き出してしまう。

男　　アハハ！

老婦人　　アハハ！ やっと笑ってくれたわね。

男、そう言われ、一瞬真顔に戻るが、思い直したようにふたたび笑う。

：：あなたには負けました。

老婦人　　そうよ。私、強い。

男　　すべてお見通しですか？

老婦人　　そんなことないわ。ただ、あなたより年を取っているだけ。こんなおばあちゃんになっても、分らないことは山ほどあるわ。

老婦人、遠い目をして少しぼんやりする。そして、少し考え込むような表情をする。しばらくの間、老婦人、ふと何かを思いついたように顔を上げ、男の顔を上げしげと見つめる。

老婦人　　そうだね。

男　　な、なんですか。

老婦人　　うん、そう。ちょうどいい。なんてタイミングが良いのかしら！

男　　いや、だから、何なんですか？

老婦人　　あなたにお願いがあるのよ。

男　　またですか？

老婦人　　今度は本当のお願い。

老婦人、ふたたびバッグを開くと、中から一通の封書を取り出す。

老婦人　　これよ、これ。

老婦人、いったん封の切つてある封書を男へ手渡す。

男 何です？ これ。

老婦人 まあ、お読みなさいな。

男 いいんですか？ 聞けて。

老婦人 よろしいことよ。

男、封書の中の手紙を取り出し、読み始める。

男 えっと、「前略、佐々木希様。」…おばあちゃん、佐々

木希っていう名前なの？

老婦人 じゃん！

男、無視して読み続ける。

男 「前略、佐々木希様。こんにちば。元気でですか？

（ここは猪木調で）。…猪木調で？ 「元気です

かー！元気元気、元気があれば戦争も終わる。

やべーっ！と前置きはこれくらいにして。最近、元

気がないように見えます。お腹が減っているのか

な？僕もお腹が減って元気が出ません。そういう時

はキビの粉を少なめの水で湿らせて固め、干した団

子を丸呑みし、水をがぶ飲みすると良いと聞いたこ

とがあります。お試しあれ！って平野レミか、俺！

…えっ？俺はどうかって？俺は元気だよ。心配し

ないでちよーだい。いかん。ここまで書いた文章

は全部、枕言葉だ。これから大事なことを書きま

す。…今日はいきなりこんな手紙を出して申し訳な

い。実は君にどうしても言わなければいけないこと

があるんだ。君と初めて会ったときから、僕は君の

ことが好きになってしまった。なぜかは分からない

音楽の時間、指揮棒を振っている君の、その長い髪

がまるでスロモーシヨンのようにゆっくりと揺れ

ていた。あの時から僕は君のことを好きになってし

まった。だからと言って、特別なにかをしてもらい

たいとか、そういう事はないんだ。ただ、ずっと僕

のそばにいてほしいだけなんだ。だから、そうして

ください。終わり」…これって、ひよっとしてラブ

レターなんじゃないですか？

ひよっとしなくてもそうよ。読めば分かるでしょ。

へえ、おばあちゃんの学生時代でもこんな情熱的で、

口語的な文体のラブレターを書く男の人がいたんで

すね。

情熱的というのかねえ。

なんだか小学生みたいですけどね。

ちよっど特殊な人だったんじゃないかしら。

…なんだか他人事のような話し方ですね。あなたが

もらったラブレターなのに。

そりゃ、そうよ。相手が誰か分からないんですから。

えっ？

誰かも分からない人からラブレターをもらっても、

素直に喜ばないでしょ。

まあ、そりゃ、そうですね。

そこでお願いなよ。

男
なんですか？

老婦人
このラブレターを書いてくれた人を捜してほしいの。

男
……えっ？

老婦人
聞こえなかった？（男の耳元で大きな声で）これを

書いてくれた人を！

男
いやいや、それは聞こえましたよ。そうじゃなくて、

このラブレターを誰がくれたものかぐらい分からない

んですか？！

老婦人
だって、もらった時から知らないのよ。仕方ないじゃ

ない。

男
どういうことですか？

老婦人
手渡されずに、学校の下駄箱にただ入っていただけ

だったのよ。それなのにね、差出人の名前すら書いて

ないの。

男
はあ。

老婦人
だから、いづれ誰かが何か言ってくるだろうと待つ

ていたんだけど、結局なんの音沙汰もなかったわ。

男
ひょっとしてラブレターを出した後、すぐに出征さ

れたんですか？

老婦人
まあ、そうかしら？でも、この文面、なんだか間が

抜けてて切迫した緊張感を感じないのよね。悲しい

別れって言う空気が漂ってない。

男

老婦人

男

男

男

男

老婦人

男

男

老婦人

男

男

老婦人

男

男

男

老婦人

男

男

老婦人

男

老婦人

男

男

それで、僕にその間が抜けた人が誰かを調べると？

男
そうそう。このラブレターを書いた人を捜してほしいのよ。

男
……まあ、時間がありますから少しは手伝いますが、

でも面倒なことは嫌ですよ。ところで、他に手がかり

はないんですか？

男
ない。

老婦人
そう簡単に言わないでくださいよ。この封書一通で

どうやって調べろというんですか。

男
まずはね、これをもったのは中学生のとき。文面

のだらしなさから見ても、差出人も同じくらいの年

だと思ふのよ。

男
はい。

老婦人
あと、字が汚い。字が下手というだけでなくて、短

すぎる鉛筆で書いているからこすれて読みにくくな

っているの。教養もないし、おそらく貧乏人ね。

男
いや、そういう言い方は……

男
あら、だってそう思うでしょ。

男
私に聞かないでください。

男
面白くない人ね。

男
よく言われます。

老婦人
まあいいわ。とりあえず手がかりはそのくらいしか

ないの。

男
たったそれだけの情報で何を調べるとおっしゃるん

ですか？

老婦人

難しいから頼んでいるんですよ。それとも年寄りの言うことなど真に受けてもらえないということかしら。

男

そんな事は言っていないでしょ。

老婦人

じゃあ、引き受けてくれるのね？

男

私、そういう強引な勧誘、嫌いなんですよね。

老婦人

NTT西日本代理店よりマシでしょ。

男

光回線は必要になったらこちらから申し込みますから、もう勧誘電話はしてこないでください。

老婦人

誰に言ってるのよ。

男

いや、なんとなく。どこかで聞き耳を立てていそう
な気がするから。

老婦人

とりあえず着手金として三千元を払っておくわ。

男

安！

老婦人

残りは成功報酬よ。

男

あのね、探偵がわりをさせるのなら、あまりにも安
すぎるんじゃないですか。

老婦人

あら、探偵がわりに雇われるつもりなの？

男

まっぴらごめんです。

男

男、自分の持っていたカバンから手帳を取り出す。

男

ほら、見てみてください。私にはね、たつぷり予定
が書き込まれているんですよ。…（男、黙り込む）。

老婦人

どうかなさったの？

男

そんなバカな。

老婦人

何か書いてあるの？

男

男、黙って婦人に手帳を渡す。

老婦人

あら！ 今日の日付に「佐々木希さんの依頼、引き
受ける」と書いてあるわね。

男

…どんなトリックを使ったんですか。

老婦人

内緒。やっぱり引き受ける運命だった…と考えれば
いいでしょ。

男

まいったなあ。

老婦人

ちよつと、どうせ引き受けるんなら、もつと明るい
表情で引き受けなさいよ。その方がいい仕事ができ
るわ。…これは私の人生経験から言えること。さあ、
時間はたつぷりあるんですよ。まずは…

男

まずはどうしましょうか？

老婦人

まずは楽しみましょう！

男

音楽、高鳴る。男と老婦人、ダンスを踊る。ひとしきり踊った後、
男は老婦人に話しかける。

男

このままでは、まるで雲をつかむようなものです。
どんな些細な事でもいいですから、手がかりが欲し
いですね。まずは佐々木さんの母校に行ってみま
しょう。アルバムくらいは残っているかもしれない。

男

男、黙って婦人に手帳を渡す。

老婦人

あら！ 今日の日付に「佐々木希さんの依頼、引き
受ける」と書いてあるわね。

男

…どんなトリックを使ったんですか。

老婦人

内緒。やっぱり引き受ける運命だった…と考えれば
いいでしょ。

男

まいったなあ。

老婦人

ちよつと、どうせ引き受けるんなら、もつと明るい
表情で引き受けなさいよ。その方がいい仕事ができ
るわ。…これは私の人生経験から言えること。さあ、
時間はたつぷりあるんですよ。まずは…

男

まずはどうしましょうか？

老婦人

まずは楽しみましょう！

男

音楽、高鳴る。男と老婦人、ダンスを踊る。ひとしきり踊った後、
男は老婦人に話しかける。

男

このままでは、まるで雲をつかむようなものです。
どんな些細な事でもいいですから、手がかりが欲し
いですね。まずは佐々木さんの母校に行ってみま
しょう。アルバムくらいは残っているかもしれない。

老婦人

あら！ 今日の日付に「佐々木希さんの依頼、引き
受ける」と書いてあるわね。

男

…どんなトリックを使ったんですか。

老婦人

内緒。やっぱり引き受ける運命だった…と考えれば
いいでしょ。

男

まいったなあ。

老婦人

ちよつと、どうせ引き受けるんなら、もつと明るい
表情で引き受けなさいよ。その方がいい仕事ができ
るわ。…これは私の人生経験から言えること。さあ、
時間はたつぷりあるんですよ。まずは…

老婦人 あら、やる気になったわね。

男 あずかり知らぬ事ですが、これも縁です。(手帳を見て)一度は引き受けてしまったようですしね。できるところまでご一緒しましょう。

男・老婦人 時間ならたっぷりあるんですから。

男と老婦人、顔を見合わせてから、吹き出す。たくさん笑う。目一杯笑う。音楽。

男 さあ、行きましょうか。

老婦人 はい！

男と老婦人、舞台から去る。暗転。

音楽止むと明転。そこは原っぱ。男と老婦人が立ち尽くしている。

老婦人 確かにここのはずなんだけど。

男 では……

老婦人 取り壊されたんだわね。……子どもが少なくなつたと聞いてましたからねえ。都会のど真ん中でも少子高齢化が進んでいるんですから世も末よね。

老婦人、原っぱをぼんやり歩きはじめる。男もつられて歩きはじめる。老婦人、何かを見つけて拾いあげる。

老婦人 ほら、これ。ポロポロだけど、黒板消しじゃないか

しら。

男 ……うん、そうらしいですね。

老婦人 こっちは……針の取れた画紙ね。

男 やっぱりここなんですな。ここ、学校があつたんだ。

老婦人 (ほほえみながら) なんだあ、無くすなら、もつときれいに一切を無くしてしまえばいいのに。小さな残骸がたくさん残ってる。人の営みを消し去ってしまふことなんて、そう簡単にはできないのね。

男 最近、取り壊されたんでしょう。落ちてる物が意外ときれいですから。

老婦人 ほら、チヨーク。

男 もう少し早く来られれば良かったのに。そしたら何か手がかりが残っていたかもしれませぬ。残念です。

老婦人 ……そう思ってくれるだけで嬉しいわ。ほら、ハーモニカ！

男 ……僕の故郷はあまりに田舎すぎて、母校は隣町の学校に統合されてしまいました。その後は公民館として使われていましたが、耐震基準を満たしていません。

老婦人 ……あまりにも古すぎるし、新築するにしても財源がないってことで、結局更地になっちゃいました。耐震基準なんてものがなければ、まだ残って使われていたでしょうに。……僕がこっちへ来て働き始めた矢先に両親が死にました。田舎に戻ろうにも仕事がありませんでしたので、結局、実家を処分しました。古

民家というほど立派ではなく、資産価値もほとんどゼロでしたから潰すしかなかった。放置するという手もあったんですが、近所の人から釘をさされて……「空き家にするとおかしな連中が入り込むから、ちゃんと手を入れるか潰すか、はっきりしてくれ」とね。そんなこともあって潰したんです。「はっきりしてくれ」と言い出したその人自身、今ではもう都会に出てしまってますからバカな話ですよ。どこかの誰かの大きなお世話が、僕の懐かしい物を奪っていったしまったんだ。まったく冗談じゃ……。

老婦人

あら？これは何かしら。

老婦人、何やら紙を拾いあげた。よく見ると封書のような。かなりの年代物のようで黄ばみ、すすけ、一部分は破れている。老婦人、開けようとする。

男

いけません。他人の封書を開けるなんていけませんよ。

老婦人

こんな空き地に捨ててある手紙なんだから。大丈夫よ。

男

大丈夫とか、そういう問題じゃありません。とにかく警察に届けましょう。

老婦人

警察だって、こんな薄汚れた手紙を持っていっても迷惑するだけです。おまけに言っておくけど、郵便局に持っていっても無理よ。宛先も消えてるし、

男

差出人の名前も書いてないんだから。それにね……なんだか見覚えが……
そう。なんだか見覚えがある封書ですね。

結局、封書を開ける老婦人の手元を男ものぞき込む。老婦人、中の紙を取り出して開く。

老婦人・男 あっ!?

それは老婦人が持っていたラブレターとまったく同じ内容の文章が書かれていた。しかし、こちらはペンではなく鉛筆書きた。

男

どうして同じ手紙があるんですか？

老婦人

私に聞かれても困るわよ。

男

しかも、こんな野ざらしの場所でよくも無事で……

老婦人

神様って、やっぱりみえるのね。

男

やはり同じ中学校の生徒だった可能性が高まりましたね。

老婦人

でも、どうして同じ手紙があるのかしら？

男

私に聞かれても困ります。

老婦人

しかも、こんな野ざらしの場所でよくも無事で……

男

神様って、やっぱりみえるんですね。

老婦人

やっぱり同じ中学校の生徒だった可能性が高くなっ
たわね。

男・老婦人

……(顔を見合わせ)おやあ？

音楽「恋のぼんちシート」。男と老婦人、踊る。踊りながら

男 とにかく最後に校長を務めた人物に会ってみましよう。

老婦人 会ってどうするの？

男 聞くんですよ。

老婦人 何を？

男 分かりませんよ、そんなこと。でも、世間話でもしているうちに、手がかりになりそうな事でも聞き出せるかもしれません。

老婦人 気の長い話ね。

男 あなたのためにやってるんですよ！

老婦人 怒らない怒らない。スマイル、スマイル！

男 でも、その人物の住所、どこで知ればいいんだろう。

老婦人 役所に行けば教えてくれるでしょ。

男 今どきは個人情報保護とかで、何にも教えてくれな

老婦人 いんですよ。

男 やーねー、小役人って、そうやってラクしようとするんだから。

老婦人 僕に言われても困りますよ。

男 あなたに言ってるんじゃないですよ。

老婦人

男

老婦人

男

老婦人

男と老婦人、走る。暗転。
男と老婦人、息を切らしながら歩いている。

男 調子に乗って走るんじゃないか。

老婦人 年寄りを急がせるものじゃありませんよ。

男 あなたも喜んで走ったじゃありませんか！

老婦人 若い気になって、つい。

男 ああ、ここじゃないですか。教育委員会で教えてくれた元校長の家は。

老婦人 今どきの公務員って賄賂は受け取らないかと思っ

たら、あっさり受け取ったわね。すぐ調べてくれたし。

老婦人 あれでも公務員なのね。

男 囑託職員ですからね。正職員よりは、はるかに使え

ます。危機感があるから。そんなことより、さ、行

きますよ。

男、その家の呼び鈴を押す。中から女性が一人出て来る。

女 お忙しいところ失礼します。

男 はい？

女 今日うかがったのは他でもありませんが：

男 じゃんけん、はい！

女 えっ？ あっ、はい（と応じて、出してしまふ）

男 あっちむいてほい。

女

男

女

男

女、負ける。女、そのまま家へ入り、ドアを閉める。

男 いや、だから、その、ごめんください！

女、出てきて「あっちむいてはい」をし、確実に勝って家へ引込む。これを3回繰り返す。

老婦人 あんた、なんでそんなに弱いだよ。

男 いやあ、昔から苦手。

老婦人 ちょっと、あたしと代わりなさい。ごめんください！

い！

女、出てきて老婦人と「あっちむいてはい」をする。女、負けるがそのまま家へ引込んで扉を閉める。

男 勝ち負け、関係ないんじゃないですか！ ちょっと、すみません。セールスじゃないんです。校長先生に

お話が…。

老婦人 ふざけんじやないわよ！（ドアをガンガン叩く）

男 や、やめて下さい。会えるものも会えなくなりますよ。私たちは校長先生に少しだけお話をうかがえればいだけなんです。ほんとに。十分だけでいいんです。いや、五分でもいい。会わせてください！

男、ドアを叩いていると女、ドアを開けて出てくる。男、ドアにとつかれ飛ばされる。

女 セールスならお断りよ。…ほんとに主人に用があるの？

老婦人 はい。どうしてもお尋ねしたいことがあります。決死の思いでうかがいました。旦那様はご在宅ですか。

女 残念ですが、主人は昨年の秋、他界いたしました。

男 (起き上がりながら) な、亡くなられたんですか！

老婦人 いつ？

女・男 昨年の秋！

男・老婦人 えー？

老婦人 (男へ) あんた器用ねえ。

男 ご主人は桜ヶ丘中学校の、最後の校長先生だったんですよね。

女 はい。

男 実はその中学校での出来事についてなんですが、何かおっしゃってみえませんでしたか？

女 何か、とおっしゃると？

男 そ、そうですねえ。たとえば手紙についてとか。

女 手紙？

男 はい、手紙とか、封書とか。

女 何も言っておりませんでした。私に残された封書はただ一通。

男 はい。

女 遺書です。

男 ……はい？

女 遺書です。

男 遺書。

老婦人 何度も遺書、遺書って言わせないの！

女 あ、はい、ごめんさい。

主人は、教師という仕事に誇りをもっておりまして。子どもたちは、愛情をたっぷり注がれれば、必ず愛情豊かな大人へと育つんだと常々言っておりました。小さいうちに与えられなければ、大きくなってから与えればいいのだと。でも、大きくなってからだと、体が大い分、欲しがる愛情も大きくなる。だから小さいうちになっぷり与えておく方がラクなんだと。職業として、その愛情を注げるのは教師だけなんだと。裏切られたら裏切られた分の二倍、愛情を注ぐのだと。そう言っつて、いつも学校と繁華街を走りまわっておりました。家にはほとんどおりませんでした。私、寂しさのあまり言っつてしまっつたんです。「その愛情、私にも少し与えていただけないかしら」って。そしたら主人は悲しそうな笑いを浮かべて「さうだな。すまない」って言っつたんです。いつもは大声で笑っつて抱きしめてくれる主人でしたが、あの日はなぜか違いました。そして、その2時間後、自分の部屋で首を吊っつておりました。後から分かつたんですが、どうやら鬱病の傾向があつたようです。上着の内ポケットには、なんだかよく分らない錠剤がいくつか入っつていました。病院へ問い合わせたと

ころ、向精神薬だつたようです。私に心配をかけないよう、黙っつて病院へ通っつていたのです。そんな主人に、私はわがままを言っつてしまいました。そして追いつめてしまいました。：私は、本当に主人に申し訳ないことをしました。せめてもの償いに、私、もう決して笑うまいと誓っつたんです。私だけが笑いながら生きていくことはできない。主人の思い出と一緒に、悲しみを抱えて生きていきます。でも、他人とふれあううちに、何かの拍子で笑っつてしまふかもしれない。だから、あまり他の人と会いたくないのです。：さあ、もういいでしょう？ 帰っつていただけますか？

男、老婦人をうながして帰ろうとするが、老婦人は女を見つめて動かない。

男 どうしたんですか？

老婦人 音楽！

音楽流れる。老婦人、女の手をとり、ゆつたりと踊り出す。女、驚くが老婦人の優しい笑顔とゆつたりとした動きにつられ、思わず一緒に踊り出す。老婦人、ささやくように女に語りかける。その言葉は男には聞こえない。

老婦人 あなた、こうして踊っつてるときも笑わないのね。

女 ……主人に申し訳ないですから。

老婦人 ご主人、厳しい方だったの？

女 いいえ、むしろ優しいすぎて、こちらが戸惑うくらいでした。

老婦人 そう。

女 あの人が私に向かって怒ったことなど一度もありませんでした。

老婦人 そう。

女 私にはつらかった。本当は怒ってるんでしょ？

老婦人 私には罵倒したいんでしょって、いつも思ってた。でも、今は分かる。あの人は、あの時、心底私を心配してくれていたんだって。自分を責め続ける私を見て、逆に責められなくなったのかもしれないけど。

女 あの人は、優しい人。

老婦人 じゃあ、ご主人はやっぱり、あなたの笑顔を見たいんじゃないの？

女 えっ？

老婦人 「主人に申し訳ない」と言って笑顔を無くした今のあなたに、ご主人が生きてみえたら、なんと言葉をかけてくるかしら？

老婦人 ……

老婦人 あなたの笑顔がご主人を救うのではないですか？

女 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

女 ……そうかもしれませんね。だけど…

老婦人、ふと踊りを止め、自分のバッグのそばへ行き、中からスリッパを取り出す。スリッパを手に女の元へ戻ってけると、いきなりスリッパで女の頭を叩く。

女 な、な…

老婦人 意外と楽しいのよ。他人を叩くのは。特にスリッパで叩くのは。

女 な、何してるんですか？ 暴力はダメです、暴力は。

老婦人 あなたもおやんなさい。(と女へスリッパを渡す)

女、そのスリッパで男の頭を思いつきり叩く。

男 な、な…

老婦人 ね、楽しいでしょ？

女 はあ。

老婦人 あんたもおやんなさい。(と、女の手からスリッパを受け取り、男へ手渡す)

男、そのスリッパで女の頭を叩く。

男、そのスリッパで叩く音って、おかしいんでしょね。

老婦人 知らないわ。考えないの、感じればいいのよ。

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

老婦人 ……

男、そのスリッパで老婦人の頭を叩く。一瞬、空気が凍りつく。

老婦人 あんた！ 何すんのよ！私を叩いてどうすんのよ！

男 いや、いいのかなって思ってた。

老婦人 この人を元気づけようとしてただけなんだから、私を叩く必要はないでしょ。

男 でも、それを言ったら僕も関係ないでしょ。

老婦人 あんたは若いんだからとやかく言わないの！

男 そんなむちゃくちゃな。

老婦人 あんたって人は何にも分かっちゃいないんだから。

この！ この！

老婦人 男の手からスリッパを奪い取り、男の頭を叩き続ける。女、その様子をしばらく見ているうちに次第に表情が緩んでくる。

老婦人 (男へ) あんた、そこへ座んなさい。

男 分かりました、分かりましたよ。

男、正座する。老婦人、カバンからもう一つスリッパを取り出し、男の顔にあてて一発芸をする。女、吹き出す。それを見て、男も老婦人も思わず、笑い出す。たくさん笑う。

女 ……(笑いを押さえながら、ようやく) 分かりました。少しづつ笑うようになります。一気に笑うとしんどい

老婦人

わ。

まあ、ゆっくりね。また、新しい男ができれば教えてちょうだい。これ、私の名刺。連絡方法が書いてあるから。

老婦人、女に名刺を渡す。女、その名刺をじっと見る。

女 あの…これって？

老婦人 いいの、いいの。気にしないで。思い出したら、ものは試して寄ってみて。

女 ……はい。

男 ちよつと、僕にも下さいよ。

老婦人 ダメよ。あんたには後で直接教えてあげるから。

男 いろんな事が書いてあるんですか。(女に) 見せてください。

老婦人 (男を引っぱり) さあさ、行くんだよ。

男 行くとどこへ行くんですか？ 手がかりが途切れ

女 お役に立てずすみませんでした。

老婦人 あなたが気にすることないのよ。私の道楽でやっていることなんだから。じゃあね。

男 お邪魔しました。

男と老婦人、歩き始める。女、去る。

男

でも、本当に次はどこへ行きますか？ 手がかりらしい手がかりはまだ何もつかめていないんですよ。やっとやる気になったようね。

老婦人

そういう訳じゃありませんけど、引き受けた限りはある程度の結果を出したいじゃないですか。まだ、何にも分かかってないんですよ。これじゃ途中で止められない。

老婦人

あなた、意外に粘っこいあなたなのね。そういう事、言わないでもらえますか？

と、その前方に一人の男が立ちふさがる。

男2

あんたたち、秋元校長の家へ行っただろ？

男

あなたは誰ですか？

男2

そんなことはどうでもいい。質問に答えろ。

老婦人

まあ、藪から棒に。失礼な人ね。

男2

なんだと、このばばあ。

老婦人

ばばあつつた！ ばばあつつたよ、この人！

男

まあ、それくらいのは取つてますからね。(老婦人に殴られる)

老婦人

あっ痛っ！

男2

世の中、言っでいい真実と、言っではいけない真実があるの。よく覚えておきなさい、坊や。

男

俺を無視するな！ その世界観に俺も混ぜろや！

世界観つつたつて、こんな一畳分くらいしかありま

老婦人

せんけど。

男2

良かったらどうぞ。お、悪いな。つて違うんだよ。俺の質問に答えろつて言つてんだ！

男

お前ら、校長の家で何を調べていた？

老婦人

何つて、ただ廃校になった校舎に落ちてたラブレターの手がかりを探そうとして、とりあえず立ち寄つただけで……

男2

特になにも成果はなかつたわ。

老婦人

嘘つけ！ ほんとは土地転がしの実態を調べているマスコミかなんかだろう。

老婦人

まあ、土地転がしをしていたの？

男

ひどい話ですね。……それで？

男2

とぼけるな！ 立ち退かせようと仕組んだ俺たちのあれこれを調べているんだらう。

老婦人

まあ、あれこれしていたの？

男

ひどい話ですね。……それで？

男2

とぼけるな！ 俺たちが仕組んだ校長の金銭問題のスキャンダルを調べているんだらう。

老婦人

まあ、スキャンダルを仕組んだの？

男

あんた、わざと告白してんの？

男2

うるさい、うるさい！

男2、ナイフを取り出す。

老婦人

仕方ありません。格さん、やっっておしまいなさい！

男

えっ？ ええ？！

男2

このやろお。

男2、ナイフをかざして走りよる。男、慌ててよける。老婦人は、飛び込んできた男2の手首をつかみ、ひねってナイフを落とすと、そのまま男2を押さえ込む。

男

おおう。(パチパチと手を叩く)

老婦人

喜んでる場合じゃないのよ。早く警察呼んで！

男

ああ、そうですね。(男、携帯電話で警察に電話をかける)

男2

ううう。

老婦人

もう観念しなさいね。

男2

ばばあ、ただ者じゃねえな。

老婦人

ばばあは余計なのよ！

老婦人、男2の腕をひねる。

男2

痛ててっ！ なんだよ、手加減しろよ。

老婦人

だったら口を慎みなさいね、おじさん。

男2

ったくよ、ついてねえなあ。こんなばば：いや、ばあさんに当っちゃまうとはな。俺もこれで引退だ。

老婦人

何よ、引退って。

男2

ふん。：この仕事で最後にしようと思っていたっ

男

つーことだ。無事に終われば、大金持って悠々自適の田舎暮らしだったのによ。

他人の不幸で悠々自適の暮らしをして満足なんですか？

男2

知った口たたくんじゃねえ！ 俺だって好きでこんな仕事してるわけじゃねえんだ。：まあ、こんな話をあんたらにしても仕方がねえよな。

老婦人

あんたも苦労してきたんだろうねえ。

男

ちよっと、この人の味方をするんですか？

老婦人

いや、そうじゃないんだけど、生きていくのもいろいろあるのよ。いやいやながらも嘘をつきながら生きていくしかないこともあるのよ。一生、自分の心に正直に生きられる人が本当に恵まれた人だと思えますよ。

男2

そうだよなあ。

老婦人

金なんか稼がずに、さっさと田舎へ行っちゃえばいいのよ。今はどこも過疎でさ。あんたぐらいの年の人が行けば、喜んで迎えてくれるわよ。農業でも林業でも。

男2

まあなあ、ちったあ蓄えはあるんだし、最後のひと儲けなんて考えなきや良かったなあ。

老婦人

本当かい？

男2

ああ。

老婦人

分かった。(男2を起こす)行きな。もう変な気持ち、起こすんじゃないよ。

男 ちよつと！

男2 ；悪かったな。助かったよ。

老婦人 最後にさ、都会でなんか良いことしてから田舎へ行

きなさいよ。気分よく向かえると思いますよ。

男2 良いことねえ。ちよつと考えてみるよ。銭がかか

らねえことをな。ちよつとやってから向かうことに

するよ。

老婦人 ああ、お行き。

男 ちよつと、もう警察よんじやったんですよ！

老婦人 (男へ) あんた、甲斐性出してなんか言い訳しなさ

いよ。

男 そんなあ、困ります。

男2 じゃあな。

老婦人 はい、さようなら。

男 ；まいったなあ。

男2、去っていく。その姿を見送る老婦人と男。男2、交差点に
さしかかると、なぜか急に暴走してきた車にはねられる。急ブレー
キの音。何かがぶつかり合う激しい音。

男 ああ！

老婦人 あんたー！！

男と老婦人、倒れた男2に走りよる。

男 だ、大丈夫ですか！ しっかりしてください！

老婦人 なんだってこんな事に。

男2 ；さ、最後までツイてなかったなあ。；なあ、ばあ

さん。

老婦人 しやべるんじゃないよ！

男2 結局、良いことなんて出来なかつたよお。；しまつ

たなあ。；もつと早くやつとくんだった。そしたら

生きて田舎へ行けたかもしんねえ。

老婦人 何を言ってるの！とりあえず病院へ行くんだよ。

男2 ；はは、無駄だなあ。；分かるよ。；素人でもね。

男 もうすぐ救急車が来ますからね。気をしっかり持っ

ててくださいよ！

男2 なんか、お前には言われたくねえなあ。

男 なんだと！このやろ！

老婦人 およしなさいな！こんなときに。

男2 ；ああ、眠い。；良いこと、したかつたなあ。

突然、音楽が高鳴り、現れる男3。

男3 良いことがしたい！ですって？！そんなあなたにピッ

タンコ！この書類にサインするだけで、たつた今か

らあなたもヒーロー。

男 誰？あんた。

男3 私？私は通りすがりのZBスタッフ。たくさんの
困っている方々へプレゼントを仲介する者です。

男 何をプレゼントするって？

男3 いろんなモノです。

男 だから具体的に何？

男3 それは：贈る相手によって違いますから一概には…。

男 例えは？

男3 例え話は嫌いです。

男 はあ？

男3 いくら例えたって、例えは例え。例え、例えの例え

に例えられたって、こちらとしては所詮、例えの例

えの例えですから、そんな例え話にはまともに例え

られません！

男 んで、なんだっつーの？

男3 (男2にさっと歩み寄り) この書類にサインを！

男、その書類をひったくって読む。

男 なんだこれ。「臓器提供への承諾書」っておい。お前、

臓器コーディネーターか?!

男3 違いますよ。

男 じゃあ、なんなんだ。

男3 ZBスタッフ。臓器売買スタッフ。体のいろんな部

位を売ったり買ったりするの！そういう会社の係長。

男 偉そうに言うな！ お前、こいつは今死にかけてる

んだぞ。そんな人間に、死んだ後のことを決めろっ

男3

いや、死にそうなのだからこそ聞いてんですよ。ど

うせ要らなくなるモノなんですから有効活用したい

んですよ。だけど、勝手にさばく訳にはいかないじゃ

ないですか。だから、まだ生きてる今、本人に聞いて

んですよ。早く結論もらわないと死んじゃうじゃ

ないですか！邪魔しないでください。

男 言いたいこと言いやがって。ちよつと、おばあさん。

何とか言ってやってくださいよ。

一理ある。

男 ……えー?!

老婦人 (男2に) あんた、どうするかね？

男2 ……そうだなあ。もう時間もねえ事だし、頼んじまう

かな。

男 何言ってるんですか！

男2 まあ、そう怒るな。…俺にはもう時間がねえ。たと

え相手がクソ野郎でも、最後の俺の望みをかなえて

くれるなら、こんなガタのきてる体ぐれえ、くれて

やるさ。(男3へ) おい、あんた。書類をくれよ。

男3、男2へ書類とペンを渡す。男2、サラサラとサインして、

男3へ書類を返す。

男3

(満面の笑みを浮かべ) ありがとうございますー。

男3 ラッキー！

男 (男2へ) これで良かったのかい？

男2

ああ、売られていくと言っても、どっかの誰かは欲しいがってんだらう？ だったら良いや。良いことなんじゃねえの？ なあ、ばあさん。

そうだねえ。

というわけだ。これで良かったんだ。

男2

なんで、死にたがってる俺が生き残って、新しく生きようとしていたあんたが死ぬんだ。そんなの、おかしいだろ。死んじやダメだ。生きろ！

男2

無理言わない。世の中そんなもんだ。必要のないヤツのところに、大事なもんが転がりこんだりするんだ。そういうもんだからよ、あんまり悩まない方がいいぜ。：みんな、いつかは死ぬんだしよ。(痛みがうすれてきたようだ)：ははは、おい、痛くなくなってきたよ。こりや楽でいいや…とうとう最後が来たかな。面白いもんだな。なんとなく分かるよ。じゃあな、あばよ。(男2、崩れ落ちる)

おい、しっかりしろ！
：無駄だよ。逝っちまったよ。

男と老婦人、

男2の遺体へそつと手を合わせる。

男3

さつ、もういいかな。これ、運ばなきゃいけないからスタッフ呼ぶよ。(携帯電話をかける) あ、もしもし！ 今ね、交通事故の現場に偶然居合わせちゃって。うん、中年だけど、そこそこ頑丈そうな

のが手に入った。：そう、ラッキーなんだよ。だからさ、うん。取りに来て。急いでね。分かってるだろうけど、ダメになる前にね。そこそこの値段になると思うよ。俺、これでノルマ達成だ。あはは、じゃ

ねー。(電話切る)

鬼か、お前は。

男

男3、電話をポケットに入れ、男へ向き直る。

男3

さつき、あんたがこの男に言ってた言葉、聞いたよ。死ぬつもりだったんだってな。だったらよ、あんたもさ、最後に役に立ってくれないかな。死ぬ前にこの書類にサインしてさ、登録してくれるだけで良いんだけど。

男

：お前、本気で言ってるの？

男3

どうせ死ぬんだろ。だったら、死んだ後のその体を無料でくれよ。そんな体でも必要としている人はいるんだよ。体くれよ。いらねえんだろ。体くれよ。いやだよ。

男3

なんでだよ。死ぬんだろ？ だったら体、いらねえだろ？ 体くれよ。

男

いやだつて言ってるだろ！

男3

ふん！ どうせ本気で死ぬつもりなんかないんだろ。ただ、口先だけで死ぬ、死ぬ言ってるだけなんだ。多いんだよ、そういうヤツ。そういうヤツらの頭ん

中、おれ、分かつちやうんだなあ。ふん！

男3、ポーズをとって右手をかざし、力を込める。その手のひらには目がついている。

男3 あはは、よく見えるよ！ お前はまったく死ぬつもり

りなんか。その高慢ちきなプライドが、ほんの少し傷ついただけで、死ぬ死ぬと大騒ぎしているだけだ。だから、ドナー登録もできないんだ。恥をしろ！

男 何を！

男、男3から書類を奪い取ると、さらさらとサインする。

男 これでいいんだろ！

男、男3へ書類を荒っぽく返す。男3、ニヤリと笑うと

男3 ありがとうございます。これで多くの方が喜びますよ。

男 さあ、行きましょう！

男、老婦人をうながし、先を急ぐ。すると、ふたたび男3が声をかける。

男3 あいや、待たれい！

男 なんだよ！

男3 お連れさんもいらしたんですよねえ。あなたもこちらの書類にサインしてもらえませんかえ？

老婦人 私かい？

男3 はい！ お見かけしたところ、もうそろそろお迎えが来る時期ではないでしょうか。最後の最後に徳を積んでおけば、地獄の閻魔様の覚えもよろしゅうございましょう。いかがですか。この書類にサインをば。

老婦人

：サインをして欲しければしてあげるけどね、あなたのその手のひらの目で、私の頭の中を覗いてもらいたいもんだ。もし、本当に私の頭んなかを見たら、その書類にサインしたげるよ。

男3 本当ですか？

老婦人 二言はないよ。

男3 では早速。ふん！

男3、ポーズをとって老婦人に右手をかざし、力を込める。

男3 ん？

男3、表情をゆがませる。

男3 これは…どういうことだ？…まさか！いや、そんな！

男3、右手をかざすのを止め、目を見開いて老婦人を見る。

男3 あ、あんた、あんたは……う、うわ、うわあああ。

男3、叫びながらその場を去る。

男 どうしたんですか、一体。

老婦人 ふん、どうせ己の醜さでも見てしまったんでしょよ。

男 あなたは一体……

男2 うう……

老婦人 大丈夫かい？

男2 ああ……。なんだ、あの男、どっかへ行つちまったのか？早くしねえと俺、死んじまうぞ……

老婦人 死んだ後のあんたに用があるんだから、今はいなくなつていいんだよ。

男2 ふん。なら、まあいいか。……ところでよ。

老婦人 なんだい？

男2 あんたに聞きたいことがあるんだ。こんな体になつたからこそ分かるんだが、あんたはどうしてこんなとこにいるんだ？

老婦人 さあ、どうしてなんだらうねえ。

男2 あんたを見ていると、死ぬのも悪くねえなあ、つて。

老婦人 (男に)ちよいと。どこかで水を汲んできておくれよ。

男 死に水だ。
は、はい！

男、慌てて水を探しに行く。それを見届ける老婦人。

老婦人

あたしやねえ、あの子に頼みごとをしたのさ。特に意味はなかつたんだけどね。たまたま持つてたカバンの中に面白いもんが入つていてね。

男2 ほう。

老婦人 手紙なんだけどね。その差出人を捜してくれとね。

男2 面白半分、訳あり半分でさ。

老婦人 そうかい。

男2 でもまあ、あの子にはまだ愛嬌があるよ。大丈夫さ。

老婦人 そろそろ終わりにしたらどうだい。

男2 そうだね。

男2 そこへ男、空き缶に水を入れて戻ってくる。

男 さあ、水ですよ。

老婦人 もうちよつときれいな入れ物はなかつたのかい！

男2 あればそつちを使つてますよ。(男2へ)さあ、どうぞ。

男2 ありがとうよ。(水を少し飲む)兄ちゃん、一つ良

男2 いこと教えてやるよ。

男2 えっ？な、なんですか？

男2 この道を東へずつと歩いていくとさ、そこに農道空

港があるんだよ。空港って名前だが、広場みたいなもんだがね。大赤字をこいて、もう年に2、3回しか飛行機が飛ばねえんだ。だから、滅多に人もいなくてよ、すぐに入れるんだ。

男

はあ。

雲の無え、満天に星が輝く日によ。夜中の1時すぎだ。そこへ行ってみなよ。懐かしい人に会えるんだとよ。

男2

男

はあ。

そんな日は銀色に輝く「流星号」が懐かしい人を載せて帰ってくるって話があるんだ。いや、それなら、そのばあさんの方が（老婦人を見て、にやりと笑う）：用があるかもしれねえなあ。

男2

老婦人

大きなお世話だよ。

男

（老婦人に）何か話したんですか？

老婦人

世間話だよ。

男2

だまされたと思って行ってみな。

老婦人

さあ、もういいだろ！あんたは十分良いことをしてよ。さつさとあつちの世界へ行きな。

男2

（力なく笑うと）ああ……またな。

男2、崩れ落ちる。

男

しっかり！しっかりしてください。（老婦人へ）ちよっと、なんてこと言うんですか！死にそんな人

を前にして。かわいそうじゃないですか！

老婦人、男のいきり立った表情を見て、思わずふきだす。

男

何かおかしいんですか？！

老婦人

くくく。いやいや、悪いねえ。悪いんだけどさ、こりやまた立派なことをおっしゃるおぼっちゃんだねえ。な、なんですか？！

男

その男なら放っておいて大丈夫。さつきの男が拾いに来るから。

老婦人

そんな。

男

さつき書類にサインしたんだから大丈夫。向こうもみすみす獲物を逃したりしないよ。ハイエナのような連中なんだから。

男

そんな奴らに渡していいんですか？！

老婦人

死んじまったら、ただの入れ物なんか意味はないんだよ。

男

その考え方には僕は付いていきません。

老婦人

付いてこなくていいよ。さあさ、その男が言っていたじゃないか。農道空港とやらに行こうじゃないか。

男

本気にしてらんですか？

老婦人

死に際の男の残した言葉を信じない方が、よっぽど罰当たりだと私は思うがね。

男

ま、まあ、そう言われてしまうと……

老婦人

ぐずぐずしてないで、行くよ！ ほら、今日はちやうと満天に星が輝きそうな雰囲気じゃないか。ゆっくり回り道して歩いて行つたつて十分間に合うよ。

男

…そんなに近いんですか？
そうだよ。

男

どこか場所、知ってるんですか？

老婦人

さ、さあね。

男

行つたこと、あるんですか？

老婦人

うるさいね。男は細かいことを気にしないの！ さ、行つた行つた。

老婦人、男の背中を無理矢理押して歩き始める。暗転。

明転。そこは小さな飛行場。夜空には満天の星が輝いている。周りには誰もいない。

男

へえ、滑走路なんて初めて入りましたよ。

老婦人

飛行機が飛んでれば入れないからね。まあ、飛行機のほとんど飛ばない場所を空港と呼んでいいもんだか。ひよつとしたら、ここは空港じゃないのかもしれないね。

男

じゃあ、なんなんですか？

老婦人

プラネタリウム。

男

あはは、言えます。

老婦人

(空を見上げて) 今日に来るかねえ。

男

何がですか？

老婦人

流星号。

男

やつぱり本気にしてるんですか？

老婦人

当たり前だろ。

男

どうしてそこまで他人を信じることができるんですか？ 死ぬ間際にだって、他人をだます人間もいるんじゃないですか？

老婦人

欲がからめばね。

男

欲がからまなくなつて、だます人はいるかもしれないよ。

老婦人

そういう時はただ黙つてだまされてあげればいいのさ。

男

僕は嫌ですよ。

老婦人

…なんだか、肌寒いねえ。

男

そうですか？ 僕はそれほど寒くないですよ。

老婦人

若いうちやいいんだよ。年寄りにや寒さはこたえるんだ。

男

暑いのもこたえるでしょ。

老婦人

だから夏と冬に年寄りにはバタバタ死ぬのさ。…ああ、寒い。体を動かさなきゃ。ちよつと、あんたもおいで。

男

な、なんですか？

老婦人

男の手をとつて滑走路の真ん中へ歩いていく。

老婦人

さあ、ジェスチャーゲームでもやろうかね。

男　なんでジェスチャーなんですか。

老婦人　体を動かすだろ？暖まるためだよ。

男　一人でやってくださいよ。

老婦人　一人じゃつまないだろ。ほれ、何をしているか当てるんだよ。

老婦人が演じるジェスチャーを見て、男が答える。(客席を巻き込んでよい)

老婦人　ちょっと疲れてきたねえ。体も暖まったし、これで最後にするかね。

男　まだやるんですか。

老婦人　最後だよ、最後。

老婦人、動き始める。

男　…耳…を…何ですかあ?! じゃなくって…耳を…すます…こ…らんらん…こらん、ですか? 続けて…耳をすまして、こらん、ですか。…上…上じゃない。…天…違う? 指?…違うの? ええ、分かんないですよ。…空? ああ、空ね。はい、それから? はてな? なに? 何か? はいはい、「何か」ね。…耳? 違う? なんてすかあ?! じゃなくって…聞く? はい。次は…エル? はいはい。エルね。…続けて? 空…から…何か…聞く…エル。「空、から、何か、聞く、エル」…「空

から何か聞こえる」だ! 分かった分かった。…何してんです? えっ? 聞けばいいんですか?

男、耳に手を当て、黙って耳をすまします。どこからかブーンという音が聞こえる。

男　…これって、何の音ですか?

老婦人　黙って聞いてなさいな。じきに分かるよ。

男と老婦人、耳をすまします。その音がだんだん大きくなってくる。

男　…これ、飛行機の…飛んでる音。プロペラの飛んでる音じゃないですか?

老婦人　そうみたいだねえ。

老婦人、男へ向かってにっこり微笑む。

男　…まさか。

老婦人　これだね。

男　…これが?

老婦人　間違いないよ。

男　流星号?

プロペラの機音が一気に二人に近づき、すぐ真上を飛び去る。

男

すごい！ほんとに流星号？

老婦人

そう。暗いけど、この音ではっきり分かる。このプロペラの音は間違いないく流星号だよ。

男

：知ってるんですか？

老婦人

（男の言葉を無視して、機体に向かって）おーい。
：おーい！

老婦人、手を振る。男、呆然としながら老婦人と空を舞う流星号の両方を見ている。やがて、流星号が着陸に入る。男と老婦人、流星号のために少し場所をあける。そこへ着陸する流星号。ゆっくりと止まる機体。その動きを黙ってみている二人。そして、エンジン音も止み、機体についた扉が開く。中から一人の男が現れる。

老婦人

：久しぶりね。

男4

ああ。：手紙は読んでくれた？

老婦人

読んだわよ。でも、あなた、差出人の名前書かなかったでしょ。だから、誰がくれた手紙だったのか分からなかったわ。

男4

そっかー！すっかり忘れてたよ。

老婦人

あなた、昔からそっかしかつたからねえ。

男

：あの、ひよつとして、この方が手紙の主？

老婦人

そうみたいね。

男4

誰だい？この人。

老婦人

この人はね、私をここへ連れて来てくれた人だよ。

男4

（老婦人へ）君、この場所、知らなかつたっけ？

老婦人

いいえ。そういう意味じゃなくて、手紙の主が誰かを探したために、いろいろ骨を折ってくれたのよ。私とあなたを会わせてくれた。：いわば恩人よ。

男4

そりゃ、大変だ。これはこれは、大変失礼しました。知らぬこととはいえ無礼でした。

男

いや、そんな、気にしないでください。

老婦人

そうよ。気にする必要なんか無いのよ。

男

あなたに言われる筋合いはありませんよ。

老婦人

あら、だってそうじゃない？　そもそも後は死ぬだけだったあなたの人生に、ほんの少しだけ新しい物語が加わったってだけでしょ。結構、楽しんだんじゃない？　それに、

男

それに？

老婦人

もう死ぬ気、ないんじゃないの？

男

そんなことないですよ！ただ、あんまりドタバタして忘れてただけです。そもそも時間があつたからほんの少し付き合っただけじゃないですか。もうこれで用は済んだから死にますよ。まったく！僕の死ぬ作業を中断させるとして、よくそういう事が言えますね！

男4

君、本当に死ぬつもりなの？

男

ええ！

男4

なぜ？

男

なぜって。：。僕はその問いに答えなければいけないんですか？！

男4

いや、そんなことはないんだけど。僕はこれまで自分から死にたいと思ったことがないから、なんだかそう思える人の気持ちを知りたくて。僕はまた違った立場で時間がたっぷりあるからさ。ヒマだからいろんな事に首を突っ込みたくなるんだよ。

男

大きなお世話ですよ！

老婦人

(男を見ながら男4へ) この人はこういう人ですかね、あんまり深入りして、なんやかんや尋ねない方がいいのよ。放っておけば自分から話したすわきつと。

男

話しませんよ！ほんとに失礼だな。もう、僕は失礼しますよ。

男4・老婦人

じゃあ、さようなら。えっ？

2人の言葉に男、驚いて振り返る。しかし、2人は振り返りもせず、何やら乗しげに話しながら流星号へ向かっていく。

男

ちよ、ちよっとどこ行くんですか？

老婦人

どこって？流星号よ。

男4

つもの話もあるからね。

男

だけど、流星号って誰でも乗れるんですか？

男4

誰でも、って訳にはいかないね。

老婦人

やっぱり乗れる人は決まっているんじゃないの？

男 どういう人が乗れるんですか？

老婦人

素直な人じゃないかしら。

男4

いやあ、それだけでは……

老婦人

ああ、そうかもね。機内ではコミュニケーションが必要だから、やっぱり人の話を聞いてくれる人がいいのかしら。

男4

それは必須条件だね。

男

……それは僕のことを暗に批判しているんですか？

老婦人

そんな批判だなんて。やあねえ。

男4

そう。僕らは君にとやかく言うつもりはない。ただ、この飛行機に乗るには条件があるんだという話をしているだけであつて……

老婦人

素直で、人の話を聞く人じゃないと乗せないって言ってるのよ。

男4

それだけじゃダメなんだつてば。

男

じゃあ、他にどんな条件を満たせば乗れるんですか？

男4

僕はその問いに答える義務はない。

男4、歩いて流星号に乗り込む。老婦人が乗り込もうとした瞬間、

男は流星号に強引に乗り込む。険しい表情で男をにらむ男4

男4

……降りなさい。

男

嫌です。

男4

君はこの流星号に乗る条件を満たしていない。

男

その条件とはなんですか？

男 4 :まだ分からないか。察しの悪いやつだ。

男 ?!

男 4 この流星号は死者のための乗り物だ。死んだ後、誰かを見守るとか、誰かを呪うとか、好きな場所にじっとたたずむとか、そういうやるべき事がない人が娯楽を求めて乗り込む乗り物だ。君は生きている。だから資格はない。

男 僕はこれから死ぬんです。ちよつとぐらい先に乗った方がいいでしょう？

男 4 まずは死んでから出直しなさい！……ちと変か？そんな事はどうでもいいんだ。死なないのにこの機体に乗ろうとするのは死者への冒とくだ。降りなさい！

男 :もう、めんどくさいなあ。仕方ない。おばあさん、帰りましたよ。

男 4 この人は良いんだ。

男 4 そりゃ、老い先短いのは分かってますけど、それなら僕と一緒にやらないですか。

男 4 この人は……良いんだ。

男、しばらく絶句し、老婦人を見つめ続ける。

老婦人 :私は何にも言ってませんよ。

男 4 だって……だって……

男 4 もういいだろう。降りなさい。

男 :ええー?!

男、ゆっくり後ずさるようにして流星号を降りる。プロペラの回転が始まり、その回転音がだんだん大きくなる。

男 4 さよならだ。

老婦人 バイバイ。こんな夜にここへ来れば、きつとまた会えるからね。

男 4 と老婦人、男に向かって手を振る。しかし、それを見た男は急に走り出し、飛行機の中へ飛び込む。倒れ込む3人。機体はゆっくりと動き始めてしまった。

男 4 な、何をするんだ！乗っちゃいかんと言ったろう！

男 へへへ。

老婦人 あんた、降りなさい。

男 へへへ。降りたら死んじやいますよ。

老婦人 都合がいいじやないの！早く飛び降りなさいよ。

男 嫌ですよ。どうせ死ぬなら少しくらい面白い体験がしたいじやないですか。少しだけでいいんですから、遊覧飛行を味わわせてください。

男 4 生きてるくせに、ぜいたくなんだよ。

男 4 死んだのに、こんな面白いことしてるのもぜいたくなんじやないですか？そもそもこの飛行機、どうやって買ったんですか？まさか国民の血税じやないですよ。

男 4

どこに売ってんだよ、こんな飛行機をよ！高齢者介護にすらヒイヒイ言ってるのに、死人に税金なんか遣うか、小役人が。昔っからあるんだよ。生きてるもんが「金だ金だ」って騒ぎ出すよりずっと前から。死者のためにな。

男

なんでそんな事知ってるんですか。天国マニュアルでもあるんですか？

男 4

死にヤ分かるよ。

3人、しばらく沈黙。飛行機はもう完全に空中へ。男4、下を眺めながら

男 4

死ぬ気がないのなら、もう降りられないぞ。次に着陸するまではな。

男

死にますよ。死ぬけど、今は降りませんよ。フライトを満喫するまではね。

老婦人

死ぬ気があるんなら突き落とすよ。満喫するまでもなくね。

しばらく沈黙。

男

くくつ。

老婦人

うふふ。

男 4

くくつ。

3人

あははは！

3人とも吹き出す。

男 4

バカなヤツだ。仕方がない。どうしても乗っていたいなら、これを背負うのが義務だ。

男 4、花柄のリュックを男へ渡す。

男

な、なんですか。

男 4

バラシユートだ。ほれ、みんな背負ってるんだ。

男 4と老婦人、背中を見せる。花柄のリュックを背負っている。

男

何のためにバラシユートを背負うんですか。

男 4

安全のためだ。

男

…

3人、ふたたび笑う。

老婦人

何があるか分からないでしょ。戦争体験者はね、用心がいいのよ。

男

(釈然としないが)はあ。そうですか。

男、花柄のリュックを背負う。

老婦人 似合ってるわ。

男4 うん、あつらえたように似合ってる。

老婦人 まあ、うまいことほめるのね。

男4 てへ！

男4・老婦人 あはははは。

男 …元気ですねえ。

老婦人 だからあ、死んだんだから、深刻ぶるのもう嫌なのよ。せつかくだから楽しく生きましようよ。あつ！

死んでるか！てへつ！！

男4 てへつ！

老婦人・男4 あはははは。

男 楽しそうですね。

老婦人 あんたこそまだ生きてんだからさ。楽しく生きなさいよ。いいこと。生きるってのは死ぬまで生きるってことなの。分かる？

男 バカにしないでください。

老婦人 まあ聞きなさいよ。どう生きようが死ぬまでの時間は有限なの。時間はだいたい決まってるの。だったら、楽しく生きる時間を多く作れば、つらく生きる時間は相対的に少なくなると思わない？

男4 思う思う！

男 ああ。

老婦人 これから残された時間、九割を楽しく過ごせば、つらい気持ちで過ごすのは一割で済むでしょ。だったらさ、遊びでも仕事でもやりたい事やって過ごした

男4 方がトクじゃん。

男4 そうそう。

老婦人 だけど子どもを大学へやんなくちゃいけないし、家も建てなきゃ。

男4 そうしたきゃそうしなさいよ。だけど、それが楽しくないんだったら止めればいいんじゃないの？

男4 おばあちゃん、良いこと言うねえ。

老婦人 てへつ！（男に）あんたが前向きに遊んで楽しく生きてりや、子どもだって楽しく生きるわよ。子どもはね、親の背中を見て過ごすの。目の前に見本がいれば、同じように生きるの。まず間違いないわ。

子どもに人生を楽しく生きてほしいなら、まずあんたがそうすべきね。年寄りの言うことは意外と間違っていないのよ。ちゃんと聞いた方がいいわよ。

男4 そうだよ。

老婦人 なんか、だらしのないような気もするんですがね。

男4 勝手に死のうとしてるあんたが言う言葉とは思えないね。

老婦人 死ぬ気ないな、こりや。

男4 うるさい！好き勝手言いやがって。あんたらが言うような生き方ができりや死のうなんて思いつめるはずないじゃないか！働いても働いてもちっとも金は貯まらなくて、使う金ばかりが増えて。働くのに疲れてきて少し休んだら「辞める」ときたもんだ。こんな世の中でどうやって生きろって言うんだよ！

老婦人

もうそろそろ潮時ね。

男4

うん、こんだけ怒るパワーがあれば十分だ。

老婦人、とことと男の後ろへ回ると流星号の扉から男を蹴り落とす。

男

! : : は、はあああ???

男、落ちていく。

老婦人

ばいばい。

男4

あばよー。

老婦人

体に気をつけてねえ。

男4

パラシュート背負ってんだから大丈夫。なんとかなるって。

男

うわああ、だからちやんと自分で死ぬって言ったでしょ! 余計なことすんな!!

男4

生きたきやパラシュート開きやいいし、死にたきやパラシュート開かなきやいいんだから簡単。自分で

老婦人

決めな。

男4

そうよ。

老婦人

これは、死人が乗る飛行機だからさ。やつぱり生きてる人が乗るとよろしくないんだよね。死んだらまた迎えに来てやるよ。

老婦人

覚えてる? 満天に星が輝いている日にあの飛行場へ

行けば、また会えるんだからね。困ったらいつでも会いにおいで。

男4

死んでから来りや、喜んで乗せてやるから。

老婦人

ああ、そうそう。あの時だけどさ。やつぱりあんたが芥子の花だよな?

男

なんのことですかあ?!

老婦人

まあいいや。じゃあねえ。

男、どんどん落ちていく。流星号、ものすごい勢いで飛び去ってしまう。

男

ばかやろおおお。パラシュートの : : 開き方 : : 教えてろー! ! ! ! !

男、パラシュートを開けず、どんどん落ちていく。地面が間近に迫る。

男

うわああああ。

空気を切り裂く音が次第に大きくなってくる。暗転。

明転。男、公園のベンチから転げ落ちる。どうやら眠っていたようだ。しばらく呆然とした後、辺りを見回す。誰もいない。

男

: : おい。まさか夢だなんていうんじゃないだろうな。

と、つぶやく男の背中には花柄のリュックサック。たたずむ男のそばを一陣の風が吹きすぎる。そこへ突然、低空を飛ぶプロペラ機の轟音。驚く男。音楽。

男

…バ…バーロー！俺はちゃんと死ぬんだからなあ！
な、なめんじゃねえぞお！死ぬ前に！やりたい事
だけ！やるだけなんだからなあ！ボケエ！！

飛び去っていく機体をいつまでも見つめる男。暗転。

明転。音楽。男、下手なダンスを踊りはじめる。ひとしきり踊ると、疲れ果てたように無様にへたりこむ。男、息を切らしながらも笑顔を見せる。

男

…ばあさん…だめだ…こんなんじゃ…まだまだ…流
星号には…乗れそうにないよ…はあ、はあ…ダメだ
…

男、ダウンする。音楽。そのまま暗転。

選 後 評

俳句の部

本年度の俳句の部には三十名の応募があった。全般にその無い句が多く、それだけに迫力のようなものを感じられづらかった。中でも清水佳代子さんの作品十句にはそうした面で意欲の片鱗が覗いているのが感じられた。例えば「六月は酸性の嘘で固める」「無邪気とは蛸の尻尾のことをいふ」「感性に筋肉つけたし屋敷する」「そこそこの魔法かけられ水中花」「こぜはしく蠅も乗り込む高山線」「台風の日の中にみて少し暇」等に見られる発想の面白さ、表現の新しさを買って高山市議会議長賞に推した。願わくは更に研鑽を積まれ、感性に隆々たる筋肉のみでなく、人間の奥処に有る力みないなものが表現できれば好ましい。

高山市文化協会賞に推した上田眞穂子さんの作品「夜濯の月に届きし水の音」「露天湯に涼しき月を引き寄せり」「亡き母と語り合ひたし秋桜」「兔跳ねる帯を遥みし初写真」「日脚伸ぶを言ひて相席高山線」「雪しんしん孫授りしこんな夜」の各句にみられるような瑞瑞しい日本語の取り合せが目についたが、更に一歩踏み込んできめくような感性が表現されることが一層好ましい。

同じく高山市文化協会賞の小林高子さんの作品「誰も居ぬ離の節句の灯かな」「筆洗に残りしまゝの花の色」「ヨーグルトの出来滑らかや夏に入る」「旅の宿みな大盛の夏料理」「雪囲待つ問の

木々の吐息かな」などの句に見られる日常を詠ったものの中に細やかな心配りがうかがえ好感が持てた。中でも「雪囲」の句における省畧と問の境地は高く評価できるが惜しむらくは、応募全句が掲句の境地に有る自選力が望まれる。

更に高山市文化協会賞に推した小泉孝子さんの「筆あとの笑みて哀しき良寛忌」「葦立やいちねんせいを通る怪」「ひとつ鳴り絶ゆる電話や五月闇」「抜き菜はや蕪のふくらみ持ちてをり」「すぐり菜の白き根を切るひとつひとつ」等の各句に見られる繊細な配慮が句のすみずみまで行き渡っている点を高く買った。更に言えば句全体に鋭さのようなものが見られないのは、それが個性として処理されることが望ましいか、一つの課題として残る。

高校生の部には、百三十三人の応募があったが、飛騨神岡高校・上垣佳可さんの「蝸牛うるはしの人参ります」「あひなしに空中ブランコ扇風機」などの句に共鳴した。同校・中林静花さんの「背くらべゴールはまちか麦の秋」「片恋の線香花火のバトルかな」などの句に、この世代の観念的な作句態度と異なる片鱗を認めた。更に本格的な精進を重ねられることを希望し期待する。

高山西高校・小瀬裕季奈さんの作品、「戦場に蝶がはばたく春の空」「雷は寂しさ故に音を出す」に見られる感覚の自由さを買ったが、全体にこの学校を通じて鉛筆書きで、小豆粒より小さいマール字が読みづらくこの点作品内容以前の課題として考慮されることが望ましい。

(小島 幸男 記)

短歌の部

巨大地震。巨大津波。原発事故。三月十一日は、わが日本にとつて、最悪の日であった。応募作品にも、そのことが詠われている作品が多かった。全ての日本人にとつて、最大の関心事であるその悲劇を、どう詠むか、それはとても難しいことだ。テレビで見た映像は自分だけが見たものではないということを考えて欲しいと思つた。

本年も、他部門の諸先生方と協議し、最終審査会を経て、一般四名、高校生二名の作品を選ぶことが出来た。

市長賞の和田操さんの作品について

中尉として身に付きしもの染み込みて「氣をつけ」と一言父は逝きたり

父の遺骨抱きて帰る村の道新しき校舎の槌音響く
山見ても酒瓶見ても椅子見ても思ひは何でも亡き父へ続く

一連十首は亡き父に捧げる鎮魂歌である。右に上げた三首でもわかるように、この作者は、具体的な名称、具体的な物の名、具体的な情景など、余り深刻に考える様子も無くさつと取り込んで表現するのが得意である。それ故、観念的でなく分かりやすくすくすくである。

一首目の「中尉」「氣をつけ」、二首目の「父の遺骨」「村の道」

「新しき校舎の槌音」、三首目の「山」「酒瓶」「椅子」などがそれぞれである。

十首の中には、字余りで滑りの悪さが感じられる歌もあり、「の頃」や「見ても」など、三十一音の中に、同じ言葉を三度も繰り返す歌もあり、定型からはみ出しそうな歌もあるが、不思議なことに、その器用にも不器用にも思われる間のようなものが、この作者の命であり、魅力であり、新しい短歌世界を構築する気配さえ感じさせるのである。

文化協会長賞の田口千津子さんの作品について

機織を体験しつつ吾が手元じんじん伝う亡母の面影
杆の糸をシヤランシヤランと右左箴トントンのリズム危うし
ガラガラとしじまを破る早朝は手押し車の蠟が通る

一連十首に通底する心地よいリズムに惹かれた。それは、「じんじん」「シヤランシヤラン」「トントン」「ガラガラ」というオノマトペの効用かも知れず、作者の生来の性格に起因するものかも知れない。奥飛騨に遊び、グランドゴルフに興じる老の姿が、生き生きと描かれている。

文化協会長賞の橋原よしゑさんの作品について

国策に軍歌に心絆されしわが若き日の疎ましきかな
満州連れ少なくなりしと僧侶の君にこやかに我が畑訪い給う
ようやくに生え揃いたる馬鈴薯をいとおしみつつ土寄せてやる

国策に翻弄されて生きた若き日が疎ましいと言いつつも、そうした運命を素直に受け止め、高齡となった今も飛驒の地で黙々と田畑を耕している。

その畑に来て「満州連れ」も少なくなつたと語る僧侶の君も満州連れなのだろうか。

馬鈴薯、薯、大根などの生長を見守り、いとおしみながら、一畝一畝、土を打ち返す作者の静かな姿に、また、その境涯に心惹かれた。

文化協会長賞の稲泉真記さんの作品について

げざやかな帰化植物のにおい持つおとこに逢ひし夜のしずけさひとつ百合ひらく気配す。しばらくは誰のものでもなきわたくしの肌

白夜ならこのままふたり淡色の静物画のごとねむる 朝まで

一連十首はどれもこれも、頗る観念的である。「げざやかな帰化植物のにおい持つおとこ」という具象も、それはどんな……と問いつ返したくなるほど観念的である。二首目のひとつ百合の歌であるが、梅内美華子に、「百合ひらき卵巣ひらき雷雲の沸くを見ているおみなのからだ」というのがあり、「わたくしの肌」と「おみなのからだ」との類似を感じた。三首目は、「白夜なら」と「仮定から始まっているが、よく判る歌である。稲泉さんの歌は、何か思わせぶりの言葉巧みに組み合わせ、独特の雰囲気漂わせているだけのようにも思われるが、飛驒では、誰も挑戦しないエロスの分野に切り込んでおられる辺りに、文学性が感じられる。

今までの飛驒には無い新しいものを生み出してくださいような気配を感じるのである。

高校生の部

高山西高校二年 林 良孝さんの作品について

父と母背中が丸くなつたよねありがとうつて言えない自分今の僕正義が何か悩んでいつになつたら分かるのですか先生は強い器を持っている苦痛に耐えて僕らをしかる

素直で真っ直ぐな歌だ。父母の背中に注ぐ優しい目、正義とは何かと悩む自分に向かう厳しい目、先生の強い器に感じて感謝する心……愛らしいなあと思つた。

飛驒神岡高校二年 川上 まなみさんの作品について

カーテンのふくらむ夏の教室で恋の終わりを話してゐたり純粋な心を持つていたいから黙ってかじる大根の白君のため流れる星を見つけては折ってます「勝ちますように」

高校生の応募作品には、恋の歌が多かった。川上さんも二首が恋の歌であつた。風が来てカーテンがふくらむ夏の教室で恋の終わりを告げている少女、うなずきながら聞く少女。その情景が鮮やかに浮かぶ作品である。二首目は、「大根の白」をかじれば純粋な心を保つ効用があるのだろうかと思わせる面白い歌である。ただし、一首目で「あたり」としているのだから、二首目

現代詩の部

も、「ふたいから」と、統一すべきではないかと思った。三百目は、流れ星に折る少女の純情がしのばれる歌である。流れ星に折れば願ひ事が叶うという俗説を信じていること自体、すでに、純粹である。可愛いなあ、こんな頃はいいなあ、と思った。

以上。思いついたことを記したが、どんなに下手でもいいから、代筆で無く、自分の字で、応募して欲しいと思った。また、飾らなくてもいいから、素直に詠んで欲しいと思った。

最後に、一般の応募作品の中から、選者が惹かれた数首を記して、拙い感想に代えたいと思う。

- オウム飼いまえの名付け呼んでいと亡父の葉書の軍事郵便
- この歳となりてはじめて聞く単位、原発事故のミリシーベルト
- 会津産の起き上がり小法師を購いて被災の子等にエールを送る
- 横書きの短歌、俳句は読みたくなし草木も人も垂直に立つ
- 三日月の近くに光る星ひとつ大震災を思うこの宵

(大下 宜子 記)

「現代詩の部」は今年度から、応募作品の数が一人三編ずつ、という規定に変わりました。

小説が原稿用紙一〇〇枚以内、短歌・俳句は一〇首(句)ずつ、というのに比べて現代詩が一編ではバランスがとれない(軽い)という理由からです。

規定が急に変ったので、応募数が減るかもしれないと心配しましたが、昨年度とほぼ同数、一般が九人、高校生が三人、作品の数からみると、総数で三十六編、大変なボリュームになりました。そのうえ、応募される方々も応募規定が変わったので、かえって気を引きしめて作品を書いてくださったのか、「今までより優れた作品が多くなった」というのが審査委員の方々の声でした。

その甲斐あって、本年度は久しぶりに「現代詩の部」から、後藤さんの作品が名誉ある文芸祭賞に選ばれました。

後藤さんの作品は、まだまだ不安定な要素を残していますが、三編とも、家族愛や人間の歴史を一応そつなく、美しく素直な言葉によってまとめられています。

お一人ずつの作品については後で短評を書かせていただきますが、三編の詩を同じ高さのレベルで揃えると言うことは、なかなか難しいことのようにです。

一編だけならば上位入賞に値するけれども後が続かない。二編はいいがあと一編が急に落ちるといった例が多かったように思います。

それは、現代詩では「よいテーマ（たね）」を見つけることが

難しいということになるのでしょうか、詩の「たね探し」はまず身の廻りから始めたらい、と私は思っています。

なお、作品集には、文芸祭賞の後藤さんの作品は二編、他の入賞者の作品は一編ずつ掲載させていただきましたので、ご了承ください。

「中尾峠の賦」ほか

坂口 比斗詩

今年度の作品は、昨年度の作品「長い手紙」に比べると、表現が少し冗漫じゆんまんに流れていると思います。

たとえば、「中尾峠の賦」は、亡き友を偲しのぶなかなかの力作ですが、「ヒサヤスさん」が亡くなった時の状況がよくわかりません。また、「愛すべき男でもあった」とか、「一人の何倍も人生を五十年で駆け抜け」といった表現はありきたりに過ぎます。

こうした、人間の生死を見つめる大切な詩は、二度、三度と書き直して、亡き友に涙とともに捧げて悔いなき大作に仕上げていると思います。

作品「秋」は美しくでき上がっていて、「私はこういう詩が好きだ」といわれる方も多いと思います。しかし、この詩からは、作者の存在がよく見えてきません。たとえば「去年逝った命」とか「かつて終えた人生」とはなんでしょうか。文学のリアリズムという視点から考えてみたいと思いますが、いかがでしょうか。

「夏のサブライズ」ほか

山附 純 一

「野鳥は」上位にランクされてよい、優れた作品です。

飛べない野鳥のひなをじっと見つめ、時のたつのを忘れて追いかけていく作者。鳥の表情と作者の温かい心とが自然に融け合っており、よい作品となっています。

長い詩ながら構成もうまくいっていると思いますが、ただ、

そこは 壁で囲まれた穴のような

無慈悲で無機質な人工の空間

隣接する緑の住処は、

飛べない雛にとって遙か彼方

緑の楽園から地獄へ

となると、それこそ「無機質」な表現で、作品全体に流れている温かい情感をこわしてしまっています。

「雛は思いがけない頑強さを示し」という表現も一考を要します。

「夏のサブライズ」では、夕立の止むのを待って別れていく少年達の初々しさが、最終連で「夕立は少年はどこへ」と暗転します。この暗転は、私には、「作者の逃げ」のような気がしますがいかがでしょうか。「少年達は」が「少年は」と、一人になるのも気になります。

「欠片ひとつ」は、文化ホルルの展示にも問題があると思いますが、亀塚の歴史はもつと大きく、もつと重いものだと思います。

「月の海」ほか

稲泉 真 紀

「春の雪」と「春の雪2」は、学研の「短歌年鑑」に掲載されたと断り書きがありますが、私はこの二作品を詩として読むことができませんでした。学研の先生のコメントを参考にして下さい。作品「月の海」は、シャガールの絵が一つのポイントになっているような気がしますが、私のシャガールに対する理解は、「不思議な絵を描く画家だなあ」といった程度なので、作品「月の海」を読む力はありません。

稲泉さんが「短歌の部」へ出品された作品も読ませていただきましたが、新しい感覚の優れた作品がそろっていると感じました。詩については、外部の先生（例えば学研の）のご意見をお聞きになって下さい。

「始まりのはじまり」ほか

谷 口 茂 雄

三編ともかなり荒っぽい作品ですが、「牛」・「レンゲツツジとバチリン」の二編では、自分の心の中に生起する熱い想いを身体ごと詩にぶつけている、その意気込みに心を引かれました。

作品「牛」は、とある青年教師が、卒業の饞として生徒たちに贈った高村光太郎の有名な詩「牛」をめぐる師弟愛の物語ですが、表現も構成も荒っぽく、これからの詩人という感じです。特に

夢とはあこがれ 生きぬく力

想像とは努力 生きる知恵と技

感動とはきずな 生きる喜び

といった、教訓とも概念ともとれる言葉を並べるという方法は捨てるべきでしょう。このことは、どなたの作品に対しても忠告申し上げているところです。

作品「レンゲツツジとバチリン」には、物事をリアルにみつめる作者の目が輝いています。対象をうんと自分の方へ引き寄せてから詩に書いている。この詩は一人暮らしの隣のおばあちゃんのおかげで成立しています。第四連、六連、七連のごたごたはなんとかしたいところです。

作品「詩のはじまり」は、論外でしょう。

「記憶」ほか

中 村 博 子

三編ともよくまとまっていて、すっきりした詩風から、まじめな人柄がしのべれます。たぶん年輩の方だと思えますが、ペンを手に持って、ノートに真剣に向かってみえる姿が目には浮かびます。

しかし、これからは、中村さんの心の中に違っている、ふるさとの山、野の花、湧き出る清水、木洩れ日、そしてありし日の父と母など。その一つ一つを題材にして、あの時の、あの場所で見えた情景を、思い出にそって、日記を書くように書いてみて下さい。そうすると、その時は、もっと深く読み手に感動を与えるに違いありません。

「震災前・震災後」ほか

細 江 隆 一

細江さんには、昨年・一昨年に書いた「選後評」を、今年もそのままお伝えします。

三編のうち、「震災前・震災後」は比較的よかったと思いますが、

この詩に描こうとされた「親友」・「知人」はどうなったのか、不安が残ったまま、「合掌」だけで終わってしまつてよいのか。言葉というものは、もっと強い力を持っているのではないかと、思っています。

「君へのエール」、「希望の火」についてのコメントは、昨年、一昨年のそれとほとんど変わりません。

「石楠花」ほか

永田和子

「石楠花」の発想は、応募作品三十六編の中で、一位、二位を争える優れたものを持っています。

しかし、永田さんの頭の中には、たとえば「下はドーナツのド、レはレモンのレ……」などといった、音律的に調子のよい詩を書こうというような「邪念」が果食ついているようです。しかし、ああいう類の詩は簡単そうで難しく、とても専門詩人たちの真似ができません。

しかし、逆に、かれらには「石楠花」のような詩は書けません。なぜなら、かれらは「石楠花」のことをよく知らないし、今住んでいる一之宮町から御岳は見えないのに、日和田生まれの「亡夫」が「石楠花が咲くとおんたけ山が見える」と言つたという事実を知らないからです。

御岳の麓の村日和田では土葬の墓に一本一本、石楠花を刺して歩いたという話、これもとても感動的な話です。

「水仙は帰らない」ほか

後藤 順

まだ、表現や行の転換などに不自然さが残っており、全体に思

いきりの悪さが見られますが、三編とも手慣れた手法によって大きな破綻もなく、人間味の漂う、温かい情感につつまれた作品にまとめあげてみえます。

少しくらい常識をはずれていても自我を主張しようとする社会的思潮の中、こうした心情は大切にしたいものです。

作品「水仙は帰らない」は、息子の名前さえ忘れてしまった母が、亡き夫のことを忘れないでいる、その哀れとも言える母の姿を、「水仙」という媒体を通して、心優しい作品にまとめあげている秀作です。

ただ、この詩で不満なことは、老いたる母の姿や息づかいがじかに伝わってこないことです。もっと、母の顔や、髪の毛や、老いたる手や、よろめく足などが、もっと見えてきてもよいのではないかと。

また、「薄明りに忍ぶ水仙がいる」とか、「母と父との逢瀬をつくる」（水仙）、などという表現はあいまいで生きていない。これは、私を含めてどなたにも言えることですが、なにかものを書こうと思うほどの人は、もっとリアルにも見える感覚を育てていきたいものです。

「いもうと」も感動的なよい作品だと思えます。ただ、最終連はいただけない。こういう思わせぶりの表現は、かえって、妹に対する作者本人の気持ち弱めてしまうと、私は思います。

「追分」は、言葉が空廻りしていて、よい作品とは思えません。もし後藤さんがこの世界にとどまっておられるとしたら、とても危険だと私は思います。

「夢のはなし」ほか

佐藤 睦 美

こま草

時間が止まらない、優しい情報の分だけ

私は生き存えている

私は花のことはよく知りませんが、この詩が「こま草」の性質をよくとらえているとしたら、作品「野の花通信」はなかなか優れた作品といえると思います。

それに比べて、他の二作品は、詩としては表現が冗漫に流れてしまっています。もう少し、詩に緊張感が出るように工夫してみてください。

ここから高校生

「NOTHINGNESS」ほか

黒内 香理

三編とも、時に大きく、時に小刻みに、揺れ動く青春時代の心象風景を、とても美しく、とても優しい言葉で、少しの破綻も感じさせないで、素直に詠いあげています。

淀みなく、次から次へと移り流れていく表現はとても新鮮で、最近はまだあまりお目にかかれなかった作品、という思いです。

今後、どういう方向に向かって詩を書いていかれるか、とても楽しみです。

「箱庭の空」ほか

日下部 友香

昨年に続く出品です。昨年の作品「虚無」と比べてみると、「箱庭の空」は表現がかなり具象的になってきました。

宇宙に比べたら、私たちが住んでいる世界は箱庭に等しい。しかしその箱庭の中で、大空を仰ぎながら懸命に生きている若者達の姿が、見えてきます。

しかし、日下部さんには、詩に向いている言葉を並べる、というあまりよくない癖があります。ひとつひとつの言葉がどんなに深い意味を持っているか、言葉は責任を持って遣わなければならない、ということから少しづつ勉強していつてほしいと思います。

「本棚の部屋」はもつと長く、「刹那」はとても難しい主題で、このままでは未消化です。

「夏の雨」ほか

小鳥 春葉

三編とも短い詩ですが、作者の素直な人柄がそのまま作品に表れていると思います。その中で、「夏の雨」と「満月」は、作者自身が今どこにいるのか、その存在がはつきります。特に「満月」は、場所だけではなく時刻まで、読む人に伝えることができ、「まるで自身が光っているかの様に」という表現は、個性的で、とてもよい。

「太陽」は、とても大きな題材で、今後、なんども書いてみる時がくることでしょう。

(林 格男 記)

随筆・評論の部

本年度は随筆に六作品、評論に一作品、計七作品の応募があった。評論は飛騨文芸祭としては久々の応募である。

〔随筆の部〕

1 「嬢にかまれて」

約25枚

大矢 義 廣

高山市清見町

荷車に嬢に咬まれた父を乗せ、小鳥川沿いの未舗装の乾いた街道をひた走りに走るシーンは、古きモノクロ映画のワンシーンを想起する。同じ村内の見識者の治療によって治療する話は、過疎化した現代と比較し、地域社会がネットワークされていた時代の証言である。

2 「夜のカレンダー」

3枚

中村 和 子

高山市神明町

家族の幸せを何より大切に思うことは、あらゆる他者への思いやりの第一歩である。素直な人の素直な感情がたくむこととなく表現されていて、家族愛は人類愛の源であるとしみじみ思わされる。

3 「忘れられない恩師」

12枚

大坪 たず子

高山市国府町

日本が太平洋戦争に突入して行く頃、飛騨の分教場の生徒だった筆者から見た先生ご夫妻の半生は、直接の戦争批判ではないも

の、無情に人の運命を変えてしまった時代のリアルな思い出がある。

4 「合唱がクラスを作る」

10枚

細江 隆 一

加茂郡八百津町

学校社会は自分個人と自分が属す社会との関係を学ぶ場所であり、クラスの合唱体験はその人間存在の自覚の場所であるのだから。集団の中にも個人として自由であり、個人として自由でありながらも、集団の中で異邦人ではない、そんな個人と社会という永遠のテーマへのアプローチである。

5 「桜」

14枚

青山 英 彦

高山市一之宮町

自分を取り巻く日常の生きとし生けるものへの愛おしさ、自分が生きていられることへの無償の感謝。不平や批判に満ちた現代社会の中の豊かな家族愛の物語。そんなこの作品は昨年度作品からの継続、死の宣告後奇跡の治癒、であろう。

6 「東山魁夷の天生、幽玄環境へのいざない」

20枚

橋渡 香 織

高山市石浦町

筆者の河合町天生に対する思いの深さに感動を覚える。天生と筆者の現実の関係はこの随筆で明らかにされている。その関係は偶然ではなく、成るべくして成った筆者の意志の結果である。若き日の筆者の学問追求の姿勢は、筆者の現在の人生そのものと寸分違わず重なって爽やかである。

〔評論の部〕

1 「福田夕咲 詩形による一考察」 20枚

坂口 比斗詩 高山市七日町

西洋詩をモデルとしてスタートした日本の近代詩は、歌や句でなく漢詩でもないが、それでも定型韻律詩の範疇にあり、福田夕咲の詩もその定型韻律詩である。そうである以上、福田の詩を論ずるためには韻律論は避けて通れない。しかし戦後から今に至る現代詩では韻律より個人的イメージ重視へと変化した。そんな今、福田の詩を研究論文ではなく、評論として仕立て上げるには、字数制限は引用もままならなかったのだろうと推測する。

(田之本 克己 記)

児童文学の部

児童文学部門

―続 あもうのくろめ―

橋 渡 香 織

この作品は、昨年度の入賞作品「あもうのくろめ」の続編ですが、副題に「―のちのくろめ/いまわのくろめ/きざみにて―」とあるように、夫に続いて成人した止利仏師を都へ送り出した「天生のくろめ」（止利仏師の母）が、いまわのきわに、過ぎし日を回想する形で作品が構成されています。

しかし、昨年度のそれと読み比べてみると、作品全体にみられた詩的緊張感が薄れ、表現も冗漫に流れている感じがします。そのうえ、こんどの作品は、児童向けというより、大人向きの、と

いうより自分自身向けの作品に終わっている感じがします。

私が思うに、この連作は、舞台で背景に絵を流しながら、詩劇として、あるいは一人芝居として誰かに語ってもらうと、なかなかの作品になるかもしれません。

稀に見る橋渡さんの文学的感性にまた出会える日を楽しみにしています。

(林 格男 記)

小説・戯曲の部

応募作品十二編を拝読した。

小説が十編（うち四編は高校生） 戯曲が二編。

審査員五人が下読みをし、後日最終審査を行った。

今年の作品は、すべて質が高く、歴史ある飛騨文芸祭の今後の発展に繋がるものと確信を持った。

特に高校生の作品には、力強さと輝きがあり、目を見張る思いで審査に臨んだ。

江夏美好賞に「八月の七夕」 青竜大賞に「ゆりかご」と、満場一致で決まった。

高校生の「あなたは冷たい」も、優秀であるとの審査員の判断により、今年も、青竜準大賞を設けた。

故人の出品が一編あった。出品するつもりで書かれていた故人の意を汲み、友人による提出である。

選者には初めての経験である。

ここに、私の感想を述べてみる

江夏美好賞 小説 八月の七夕 大整間 典子

九十枚の力作である。

作者の年齢が記されていないが、明らかに若い世代であろうと思われる。

作品の冒頭から、ネット、ブログ、チャット、つぶやき、等が出て、今時の若者の生活スタイルが、読み取れる。主人公は、ほぼ毎日、顔のない相手との交信にのめり込むが、本人自体、その生活状況に、決して満足していないのである。

機械的な交流に日常を縛られ、疲れた主人公は、「幽霊」の姿を借りて、ネットから逃避しようとして行く。そこに、作者の本音が、かい間見られる。

ネット関連を無くしては、語れない今日の社会にあって、因縁や、生身の人間とのかかわりも、いかに大切であるか！を、この作品は教えている。

読み進むにつれ、現実離れをした、おとぎ話のような中に読者は引き込まれるが、元来、おとぎ話の「七夕」を題材にした点、自然な流れを作り出している。

ネットと七夕では、とても重なることのない次元のようであるが、文中での巧みなコントロールが行き届いているせいか、ネットだからこそ七夕なのだ、と妙に選者は納得させられた気分である。

作者の手慣れた力量が無かったら、この作品は、薄っぺらなもので終わっていたであろう。

賞に輝いただけの、価値ある作品である。

高山市長賞 小説 空っぽの幸せ 宮本清則

百枚調度の作品である。

作者は男性だが、女心の捉え方が見事である。作者の年齢は不明だが、若者だと察しがつく。何もかもが今風なのである。

物語は、墓地从ら始まる。出会う男女が織りなす行動は、一気に読ませる面白さを有し、不思議な世界観に読者を導く。

文章には、話すようなリズム感を持たせてある。解りやすい言葉運びなのに、読み手には、飽くことのない緊張感を与える。

「宿命」「運命」をテーマにした作品だけに、書き方によると絵空事になったり、説教がましくなりがちだが、そういう感触を持たせない。作者は、上手く巧みなまでに綿密に、物語を組み立てている。

題が示すように、無の心に不幸は入らず、不幸でなければ、幸せである、との結びだが、まさに「空っぽの幸せ」が百枚全体から伝わる。力作である。

高山市教育委員長賞 戯曲 流星号奇譚

大塚浩一

「流星号」とは、死者が乗る飛行機だと、読者は最後に知る。物語の始まりは、自殺しようとする男と、乙女のような感覚を持つ老婦人の出会いからである。

老婦人の視点からの会話は鋭いが、時折ユーモア混じりの会話

や行動に、選者は女優 吉行和子氏を想像した。戯曲では、登場人物像がはっきり姿を成していることが、それだけで、ほぼ成功しているのである。

軽やかに進む展開に「人間の死」と言う重い空気が漂うが、音楽効果や、人物に踊りを踊らせることで、調和を保たせている。

作品全体が、非現実的な中、老婦人の遠慮した会話で現実味を持たせようとする作者の意図が見える。この現実味が、作者の言おうとする主題だと思われる。

終盤、この物語は、主役の男が死に切れない途中に見た夢の話と解る。しかし、読み手には、あからさまに夢と解らせない進行に作者の質の高いテクニクを見る。

この作品は原稿用紙換算の枚数の記載がなかった。明らかに百枚を超えているのでは！と思われた。が、余りにも不必要な行間が目立った。選者は行間を詰め、字数を調べた結果、応募作品の枠内と判断し、選考にあたった。今後、枚数他の再検討をしていただきたい。

高山市文化協会会長賞

小説

祖母とプリン

野口喜代男

昭和四十二年の話である。当時二十七歳の孫が、卒寿を過ぎた祖母に寄せる、愛情、憐憫が、手に取るようにストレートに書かれてある。

現在の老人福祉、ケアは、社会的に、ある程度充実してきているが、当時は切実だったと思われる。

青年の祖母を思う正義感や、理想が、品性ある文章に、ていね

いに表現されている。しかし、現実には、思ったようには運ばない。祖母を取り巻く各々の家族にも、それぞれの立場や言い分がある。また、二十七歳で出来る限度を知り、作者は青年の抱く、想いと現実の狭間で苦悩を率直に描いている。

長男の嫁である伯母が、職を辞めて祖母の面倒を見る、との結末で、この作品は終わっているためか、読後感に、後味の悪さはないが、小説としての物足りなさが残る。それは伯母の視点だけからの、職を辞するさみしさ、また長男の嫁の物事への諦め、愚痴等の本音を書き込まれていないからである。

これは、作品としての出来栄も良いのだが、すべての読者に理解を得られ、身につまされる物に仕上がったところが賞に輝いたゆえんである。

「祖母とプリン」との題が、主人公の深い想いを代弁している、と改めて思う。

青竜大賞

小説

ゆりかご Lily's Cage

熊崎菜穂

百枚調度の作品である。

作者は高校二年生であるにもかかわらず、余りの博学多才に驚かされる。とても十七歳での知識とは思えない。供わった天賦の才能が感じられる。

若さ、と言うより、あふれ出す情熱が筆を運ばせている。豊さを越えた感性が光る。

作品は、序章、一、二、三、断章、四、五、六、終章に組み立てられている。

時代背景は、こんべいとうが「忘れられない味」との表現で解る。読み進むにつれ、これは幻想なのか、錯覚なのか？との疑問がわく。しかし、終章で、理解出来た。

水に溺れた女の子(玉梓)を助けようと、早瀬に飛び込んだ男(ゆすら)が二年間生死をさまよいながら、見続けた夢の物語である。選者は、終章を読み終えて、もう一度、序章から読み直した。三章と四章の間に断章のある必要性も納得出来た。作者の巧みな計算された構成と解る。

ひらがな重視の昨今に、珍しく、難しい漢字を使い、作者独特の世界を作りあげている。加えて、日本の文化を際立たせる役目も果たしている。深い存在感を現わす作風である。

作品全体は情緒的かつ詩的であるが、作者が何を訴えたいのか、何を主張したいのかが、明快でない。その点の不十分さは残念である。

高校二年生にして、これだけの作品が仕上がることから、作者の今後に期待が膨らむ。

選者の全てが称賛した作品である。

青竜準大賞

小説

あなたは冷たい

錦野史織

新井天音

井戸千菜美

黒内香理

九十一枚の作品である。

応募は四人連名 高校文芸部となっている。

選者は、この四人が、いったいどのような話し合いをし、どの

ような役割で、一作品を仕上げたのか？と、まずは、その点に興味を抱いた。小説で、こういう形態は、初めての経験である。

文体もしっかりとしていて、起承転結も守られている。

「氷結」の魔法が出来る男の子が主人公で、話のスケールが大きい？のか、摩訶不思議な世界？なのか、到底、現実にはあり得ないフィクションである。

確かに、科学で割り切れない現実がある。しかし、余りにも現実からかけ離れた状況現象を物語にしてしまうのも、若者の持つ冒険心や野心であるのかもしれない。

最近にはパワースポットと呼ばれる場所が多く存在し、若者に人気と聞く。はたして世にも不思議な現実はあるのかも知れない。そういう力を信じたいと思ったり、借りたいと感ずるのも現代の若者の気質なのだろう。未知なる若者力のよく表われた作品であるため、準大賞に輝いた。

青竜賞

小説

それは真に幸福を呼ぶか

井戸千菜美

二十三枚の短編である。

一気に読ませる筆力がある。

冒頭の四行で、状況説明をしている。

主人公はクローバーの精霊で、文中全部が、精霊の独白である。形体としては、珍しい作品である。

細かい情景描写も、精霊の言葉で表わされている。

題が示すように、四つ葉のクローバーが、幸せを呼ぶか？と、作者自身の心の問いと答えが、描かれていると判断する。

短編ゆえに、中だるみのない、しつかりした物に仕上がっている点は認められるが、読後に不満が残る。それは、一方的な思いで始まり、一方的な思いで終わっているためである。

選者は、コマーションシャル映像を思い描いた。「幸福本舗〇〇」と言うような！

会話が自然体で、これだけ書き込める作者の筆力なら、戯曲に挑戦されることも期待する。

小説 熊丹の森 飛驒の狼師の物語²

中屋 栄一郎(故人)

小冊子の応募である。

作者は故人(23、7、4享年63歳)であると、協会から知らされた。作品が23年5月に仕上がっている。

この作品を拝読する限り、作品作りへの力量、観察力の鋭さを持つ作者だけに、若い死が惜しまれる。

主人公は熊である。

熊の習性と自然の関係を丹念に調べた上で、物語が組み立てられている。

熊は人間の匂いを感じ取り、熊も人間を恐れている事がよく解る。その「恐れ」を知りながらも、自然には無い魅力的な匂いにつられて、人間界に出没し、殺される様が臨場感あふれる筆力で書かれてある。

作者は「またぎ」職の経験を生かし、この作品を書き遺したわけだが、魅力的な匂いに惑わされるのは、人間も熊も同じだと、伝えたかったであろう。

小説としては、仕上がりに甘さが残る点と、ドラマ性に欠けるところが、實には届かなかったゆえんである。

小説 雪の色

下畑 七三

老いをテーマにした私小説である。

作品は、上可だった人の死亡欄を見たところから、昔を回想する組み立てになっている。

戦後の国鉄の田舎駅を舞台に、自身の体験が基本である。

軍隊掃りの上司の人間性には、一貫したものがあつた、それを主人公の客観的な目線で捉え、主人公も育てられて行く様子が、そつなく、ていねいに描かれている。

田舎の雪の重さは、まさに生きる重さであつて、作者はその雪で国鉄時代に、一度生死をさまよう。

そのことが、知らない間に長年、自分の人生を縛つて来ているのである。文章の表現は、美しく情感も豊かで自然の描写には思はず引き込まれる。

起承転結の転の部分から、今年起きた3、11災害の話となる。そのことに乗じて、自身の老いへの不安や弱さが、切実に伝わる。

この作品は私小説仕立てだから、この災害部分も生きて来るが、この部分があることによって、自叙伝に変わってしまうくらいがある。難しい選択だと思われる。

小説 無縁仏

青山 英彦

時代小説である。

作者は冒頭に注意書きか？と思われる文を八行書いている。

それによると、今回の作品は、先回22年度(32回)に出品した作品の続きである、と認めてあるが、この部分は蛇足である。

応募作品は一回一回が勝負である。

読者には初めて読む人が多いだろうし、選者も変わる可能性がある。その場合の想定をし、出品をされたいと願う。

32回に続く作品だけに、随所で、意味不明と受け取られかねない内容につきあたる。

盗賊同士の探り合いや、殺陣場面には、生々しいまでの臨場感がある。また、文章に一定のリズム感が保持されているが、筆の急ぎとも思われる点が惜しい。

推敲を重ねて頂きたい。

時代小説には、考証や言い回しなど苦労が付きまとう大変さを知る。今年の出品数は、この一作だけであった。作者の今後の熱意に期待する。

小説 天文学的苦悩

新井 天音

三十一枚の短編である。

「僕」と言う主人公の独白から始まる。作者自身が、自分を分析し、自分との対峙を小説と言う形にあらわそうとしている。

文体は、語るように進み、たとえ話が、若さ故の特権であるかのように、キラッと輝きを見せる。

筆に勢いがあり、走るためか、細かい誤字が随所に見られる。推敲の足りなさが目立つ。

高校二年生の部活の様子から、現代をかい間見る。各自が勝手な思考に入りやすく、決して真の同調はなく、上滑りの付き合い

が伺われる。

最終章に向かって「僕」は宇宙人だったとの展開に、はたして読者は納得するだろうか。

一人よがりて終わっていることがもったいない。客観的な角度から、物語を組み立てないと、小説としては認めにくい。

戯曲 神は愛なり：信仰の真理

橋 渡 香織

百枚調度の作品である。

副題に、放送戯曲と記されている。意識した「音」を背景に綿密に計算されている。

携帯電話、オルガン、空港アナウンス他、効果を引きたす役目をしてる。

九十四歳の医師が戦争体験後、長年インドネシアで医療奉仕をし帰国していたが、再度インドネシアのある貧しい島へボランティアに出向く。その一行に作者も加わる内容である。

異国の風景や、人の様子が細かく会話に表われているが、それは、旅の説明である。

他人の旅行記を聞いても、興味は湧かない。終盤にメンバーにアクシデントが起きるが、残念ながら、さほどのドラマ性を有するものではない。

最後に作者は「メモリアルな2010年聖夜」と示しているが、まさに、この作品が作者の記念になるだろう。

力量のある作者だけに、客観的物語性に欠けたこと、インパクトある展開が見られなかったことが残念である。

(大坪 裕子 記)